

驅逐艦しかいない鎮守  
府

鼠返し

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある鎮守府に着任予定だった、名無しの新米提督。

護衛艦付きで鎮守府へ送られていたが、途中で深海棲艦に襲撃され、波の中へ飲まれてしまう。

一方、単冠湾泊地鎮守府に所属していた第六駆逐隊の四人は、どこかの鎮守府跡へ流れ着く。

そこで同じ島へたどり着いた新米提督は、一時的な協力として、駆逐艦四人の臨時司令官となる。

これは、名無しの新米提督と駆逐艦たちが送る、明るく楽しく、

しかしどこか残酷なお話である。

※この作品は、作者が暇潰しで書いているものです。

不定期更新・誤字脱字・急展開等にご注意ください。

# 目次

第1話	漂着先は鎮守府跡	1
第2話	鎮守府跡 船渠にて	23
第3話	響と重要な話	42
第4話	工廠に着くまで	51
第5話	妖精さんはお爺さん	62
第6話	犠牲と共に補給完了	70
第7話	一日の終わり	78
第8話	就寝場所は司令室	86
第9話	暗い夢と包容な心と涙	97
第10話	二日目の朝	109
第11話	工廠長との会話	121
第12話	二日目の予定	135

第13話	響の決意と電との過去	144
第14話	無人島で食料探し	158
第15話	食料探しの進展状況	176
第16話	響の混乱と強い思い	197
第17話	電の傷の手当て	210
第18話	倉庫探しと資材確保	222
第19話	鎮守府海域にて単艦戦闘開始	227
第20話	新米提督の悩み	245
第21話	入渠と響の思惑	255
第22話	報告と暁の気持ち	262
第23話	工廠長と雷の葛藤	279

第24話	艦載機製作と入渠終了	290	第35話	偶然か必然か	484
第25話	私情 そして工廠で	303	第36話	下っ端体験	497
第26話	対話と再会	326	第37話	垣間見た考え方	509
第27話	違うようで似ている者	340			
第28話	艦装の扱い方	363			
第29話	島風と連装砲ちゃん	381			
第30話	三日目の朝	392			
第31話	最後の工廠	417			
第32話	旧鎮守府との別れ	429			
第33話	輸送船護衛艦隊	442			
第34話	一難去つてまた一難	464			



## 第1話 漂着先は鎮守府跡

「緊張、してるのか？」

唐突に、隣から声がかかる。

「ええ。 まだ、提督になったばかりですから」

少しの不安を抱えながら、話しかけてきた教官に返事を返す。

「気負うことはない。 着任先で、お前は必ずうまくやれる。」

今までお前を新たな提督として育ててきた私が保証しよう」

「ありがとうございます」

今この世界では、突如海から現れた恐るべき敵、通称『深海棲艦』しんかいせいかんと呼ばれる生物の恐怖に怯えている。

その深海棲艦に対抗できるのは、様々な艦艇の魂を引き継いだ少女たちのみ。

人々は、彼女らを『艦娘』かんむすと呼ぶ。

艦装ぎそうと呼ばれる、彼女らにしか使えない武器を駆使し、

通常兵器では傷一つ付けられない深海棲艦を撃退していく。

そんな何かと物騒な世界に生まれた自分は、物心ついた時から提督になるための教育を受け、本日晴れてとある鎮守府に着任となった。

歳は18で男、名前は——無い。

今まで『新米』、『提督見習い』、またはそれぞれ与えられた番号のみで呼ばれていたため、

名前など必要なかったし欲しいと思つたこともなかった。

「なに暗い顔をしてる」

今までの自分を振り返っていると、教官にして同時に提督でもある人の声が聞こえてきた。

「そんな顔してましたか？」

「ああ。お前はいつも表情が固いから分かりづらいが。

どうせ、今までの自分でも振り返っていたのだから？」

この教官は、何年も一緒にいるだけあってよく自分のことを知っている。

名前は未だ聞いていない。

「教官の言葉はよく当たりますね」

「教官はよせ。今日からお前も、位は違うが同じ提督同士だ」



「わかりました、元帥殿」

「……そこは名前で呼ぶところだろう」

二人して、少しだけ笑いあう。

敵しい所もあるが、根はとても優しい提督なのだ。

「ですが、まだ名前を教えてもらってません」

「ん、そういえばそうだったな」

「今まで、そのような余裕はありませんでしたから」

勉強勉強と毎日が忙しく、激しい筋トレも気が遠くなるほどさせられていたため、休める時間は就寝時と食事のみだった。

「この際だから教えておこう。私の名は——」

最後まで言い切る前に、ウウウー!!!とアラームが艦内に響き渡る。

それと同時に、とてつもなく大きい揺れが自分達を襲う。

「何事だ!」

揺れが収まった瞬間、引き締められた表情で提督が叫んだ。

そして、すぐに提督の秘書艦、『金剛』<sup>こんごう</sup>の声が近くのスピーカーから聞こえてくる。

『いつの間にか敵が近づいていたのネ!』

「敵の数と種類は!」

『敵空母……4！ 敵……戦艦！？ 多すぎて数えきれないネ！？

他にも潜水艦が何隻か潜つてるのネ！』

「くそっ！ なぜ戦艦まで……！」

今自分に乗せている艦船は、新たな着任先に自分を運んでいる。

確実に着任させるため、護衛艦もつけて深海棲艦の少ない海域を運航していたはずだ。

「輪形陣をとり、反撃しつつ後退して現在の海域を抜ける！

何かあったらすぐに知らせろ！」

『分かったのネ！ 撃ちます、Fire！』

スピーカーの向こうから金剛が放つ砲撃音が聞こえ始め、やがて通信が切れたのか  
プツツ、という音と共ににも聞こえなくなる。

すごい……これが提督……

的確、かつ迅速な指示を出した提督に対して啞然としていると、  
いきなり腕を掴まれる。

「今から私は艦隊全体の指令を出しに行く！」

お前もついてこい！」

「は、はい！」

腕を引かれるまま部屋を出て10秒ほど走ると、様々な通信機器が備えてある部屋へとたどり着く。

「お前には、その窓から目視による警戒をしてほしい。出来るか」

「はい！ 出来ます！」

「よし、頼んだぞ！」

敬礼しながら返事を返すと、提督は部屋の中にへ入っていった。

提督に言われた通り、そばにある窓から外の様子を窺う。

窓の外では、この艦から出ている黒い煙が少しだけ視界を遮っているが、敵艦隊の視認ぐらいはできる。

警戒し続けること約30秒後、思わぬ出来事が起こる。

瞬時にまじいと感じ、提督のいる部屋にノックもせずに入って叫ぶ。

「提督！ 敵潜水艦がこちらに向かって魚雷発射！」

着弾までおよそ10秒！」

こちらが叫び終わると、提督は手に持っていた通信機を素早く置き、近くの別の通信機に向かって叫ぶ。

「魚雷接近中！ 至急回避行動を取れ！」

『駄目です！ 舵がききません！』

「ツ!? 総員、衝撃に備えろ!!!」

提督が通信機を持ち替えて叫んだ直後、ほんの数分前の時より大きな揺れが起き、思わず右膝と右肘を床につく。

すぐそばで爆発音が聞こえたのでそちらへ向くと、そこは先程まで自分がいた窓が周囲3メートルに渡って木っ端微塵に吹き飛んでいた。

その大穴から海水が流れ込み、波が自分の体を攫おうとする。

「ぐっ……くそっ……!」

流されてなるものかと必死に扉にしがみつくが、波の力に対抗できる人間はそうそういない。

艦船の揺れと波の大きさも相まって、手が滑りそのまま流される。

「……………」

流されながらも何かにしがみつこうとするが、生憎何も掴むものがない。

このまま、深海棲艦一つ沈められずに死ぬのか……

今まで、何のために学んできたのか。

何のために生まれ、何のために生きてきたのか。

長くて辛くて苦しかった日々は、全て無駄だったのか。

そんな思いを抱きながら、暗く冷たい海へ放り出された。

「う……………いつ……………」

周囲から漂う焦げ臭い匂いと左腕の痛み、特Ⅲ型駆逐艦1番艦、『あかつき暁』の意識が戻る。

「暁、大丈夫？」

落ち着いた声色と特徴的な白い髪の毛は、自分の妹、『響』ひびきのものだ。

「な、なんとか……」

痛む左腕を押さえながら、ゆっくりと立ち上がる。

「痛っ!？」

しかし、右足首に激痛が走り、うまく立ち上がることができない。

「足、足が……」

「無理、しないで」

響に体を支えられてなんとか横になると、自然に口が開いて響に問いかける。

「い、雷いかずちと……電いなづま、は……?」

「大丈夫。それより、説明させて」

「う、うん……」

ちらりと響の体を見るが、自分ほどではないが大破寸前の状態だ。

体の節々が痛いはずなのに、いつもの表情を崩さずに説明を始める。

「私たちは、出撃中に深海棲艦の攻撃を受けてこの島に漂着。

雷と電が中破、私と暁が大破でまともに動けない。

島の調査に、動ける雷と電が島の探索中。ここまではわかる?」

「……うん。ここつて、無人島……？」

「今のところ、その可能性が高い」

今日は提督に命じられて、自分と響、雷と電、それに島風の五人で出撃していた。

島風を旗艦に艦隊を組んでまさかの自分達駆逐艦だけで敵戦艦と戦わされ、

もちろん勝てる筈もなく、島風を除く全員が攻撃を受けてしまった。

確かあの時、島風だけ逃げていたような――

「し、島風……島風は？」

改めて今までの経緯を思い出していると、島風のこと気がなった。

「少なくとも、この島に流れ着いてることはないと思う。」

大丈夫だよ。島風、皆より速いし、きっともう鎮守府に帰ってるよ」

「そうだといけど……」

少しだけだが、嫌な予感がするのを抑えられない。

なんで、逃げたの……？

自分が被弾したときは、まだ響達がまだ被弾することもなく戦っていたのに、

どうして見捨てられるような真似をしたのだろうか。

「暁！ 体、大丈夫なの？」

「暁ちゃん、痛そうなのです……大丈夫なのですか？」

左方向から雷と電の音が聞こえてきて、考えが一瞬で途切れてしまう。

「もちろん、大丈夫……っ……っ！」

安心させるために軽く答えようとしたのだが、左腕が痛み出して言葉が途中で切れる。

「暁、無理しないで」

「もう、暁ったら……痛いなら見栄なんて張らなければいいのに」

「暁ちゃん、大丈夫そうじゃないのです……」

妹達全員から心配され、少し情けない気持ちになってしまう。

これじゃ、一番艦の名折れじゃない……

そんな落ち込んだ気持ちなど知らない響は、自分そっちのけで話を始める。

「それで、この島はどうだった？」

「どうやら、昔に使われていた鎮守府のようで、あつちに母港としての施設は揃っていたのです。」

でも……寒いせいか、所々凍っていて入渠できるのは一人が限界なのです……」

「……わかった。先に暁を入渠させる」

そういつて、響は自分を抱き抱えようとする。

だが、響もさつき自分で言ったとおり、大破でまともに動けないはずだ。



「待つて、入渠するのは響が先よ」

「どうして? 艀装の損傷も、暁のほうがひどい」

「艀、装が……?」

響の言葉に疑問を感じ、自分がつけている艀装を確かめる。

主砲は根元から折れ、魚雷は残り一発、しかもその一発も半分に折れ曲がついて使用不可。

いたるところから黒い煙が上がっており、確かに自分の損傷が一番激しいだろう。

姉として先に響を入渠させたかったが、大人しく言うことに従う。

「……ごめん。悪いけど、頼むわね」

響は一つ頷き、自分の体を両手で優しく抱いて立ち上がる。

だが、響は苦悶に満ちた表情を浮かべ、非常に苦しそうにしている。

「響、無理しないで……」

「X o p p o Ⅲ o (大丈夫) ……暁に比べれば、この程度何でもない」

搾り出すように響が声を出して歩き出そうとすると、雷と電から声がかかる。

「暁は私達が運ぶわ。響は休んでて」

「響ちゃんもぼろぼろなのです。電達に任せておくのです!」

二人共、中破して心身ともに疲れているのに、そのような素振りを一切見せず

自分を運ぶと申し出てくれることに心が温められる。

「……わかった。少し、休ませてもらうよ」

響が、抱えている自分を雷達に優しく渡そうとすると、視界に入った海面に何か浮かんでいるのを見つける。

「ねえ、あれ何かしら?」

右手で示しながら問うと、全員がそちらへ向く。

「あれって……ひ、人が浮かんでるのです!」

電の言葉に驚いて目を凝らすと、白い軍服を着た人だということがわかる。

「軍服、つてことは……提督さん、なのです……?」

「何はともあれ、このまま放つてはおけないな。」

二人共、艀装はまだ使える?」

「私のは壊れてるから、電しか使えないわ」

「い、行つてくるのです!」

電が海へと向かい、艀装を使つて海面を滑るように移動して、

浮かんでいた人を抱えて戻つてくる。

見た目は年の若い青年、さしずめどこかの鎮守府に着任したての新米提督だろう。

ぐつたりとした彼を抱えている電は、どこか慌てた表情をしている。

「電、どうしたの?」

「この人、まだ生きてるのです!」

電の発言に、自分を含めた全員が驚く。

うつ伏せで漂っていたため、てつきり死んでいると思っていたのだ。

「……電、その人を仰向けに寝かせて。 暁、悪いけど降ろすよ」

響は自分をゆつくりと横に寝かせ、電が仰向けに降ろした彼に近づいてしやがみこむ。

「多分、肺に海水が入ってる……仕方ない……」

頭を両手で抑えて顎を上げさせ、その状態で口元へと顔を近づけていく。

じ、人口呼吸……!?

行為自体は知っていたのだが、見ず知らずの人に人命救助のためとはいえ、

何の躊躇もなくしてしまう響に驚きを隠せない。

息を吸い込み、口をつけて鼻を摘みながらゆつくりと息を吹き込む。

少し長い時間の後に口を離すと、直後に水が噴水のように彼の口から吐き出される。

「がっ! げほっ、げほっ!」

ひとしきり水を履き終えたあと、荒い息をしながらも気絶したのかぐったりとしてしまふ。

「響……その人、大丈夫なの？」

「水は吐いたから、後は安静にしていれば大丈夫だと思う」

立ち上がりながら響が答えると、こちらに振り返って口を開く。

「この島の鎮守府、寝かせられる部屋はある？」

「は、はいなのです。一通り、施設だけは揃ってるのです」

電の言葉に頷き、さらに響は話しかける。

「わかった。雷か電、どっちかこの人を運んでほしい」

「電が助けたから、電が運ぶのです」

響の言葉に従い、電が彼の体を持ち上げる。

自分たち艦娘は普通の人間と比べて数十倍数百倍と力があるため、簡単に彼の体が浮き上がる。

「上げるわよ、暁」

自分は雷に抱き抱えられ、鎮守府がある方へと向いて歩き出す。

これから、どうなるのかしら……

司令官の元へ帰れるのか、はたまたこの島でずっと暮らしていくのか。

これから先の未来が予想できずに不安を募らせながら、雷に運ばれていった。

意識が戻る。

まず感じたのは、背中に何か固いものがあたっていることと、体に何かがかかけられていることだ。

目を開けて、体を起こす。

体には少しボロボロになっているシートがかかけられており、自分が寝ていたのは木の

床

だったことがわかる。

「ここは、一体……?」

あの時船から波にさらわれて死を覚悟していたのだが、一体どうしてここにいて、ここはどこなのか推測できない。

そんなことを考えながら周りを見渡すと、黒い帽子を被った白髪の少女の姿が見える。

「やつと起きたのか」

彼女から聞こえてきた声は、幼いながらも大人びた印象を持たせる不思議な声だった。

見た目とは違う声の印象に戸惑いながら、とりあえず名前を聞いてみる。

「君、名前は……?」

「特III型駆逐艦2番艦、及び暁型駆逐艦2番艦の響」

「艦娘、か?」

「そう。よろしく」

表情一つ変えずに淡々と自己紹介を終えた響は、

「こちらが更なる質問をする前に話しかけてくる。」

「あなた、誰?」

「……とある鎮守府に着任予定だった、新米提督だよ。」

「一つ聞くけど、ここは？」

響に聞いた瞬間、少しだけ表情が暗くなるが、すぐに返事が返ってくる。

「……どこかの鎮守府跡。所々施設が凍ってるから、多分かなり北の方だと思う」

「どこか、つてことは……もしかして、無人島とかに漂着したのか？」

肯定の証に首を縦に振られ、補足の説明をしてくる。

「ここに漂着したのは、あなたと私を含む第六駆逐隊全員の五人だけ。

他には誰もいない」

駆逐艦だけとなると、艦載機を飛ばして周りの地形の把握ができない。

次の策が思いつかずに焦るものの、あることに気づいて口を開く。

「そういえば誰が私を運んでくれたか教えてくれないか？」

会って一言礼を言いたい」

そう聞くと、響はなぜか少し間を置いて返事を返す。

「……運んだのは、私」

「そうだったのか。ありがとう、響」

「……礼には及ばないよ」

首を横に振りながら響きが答えると、部屋の扉がコンコンとノックされる。

『響、入るわよ』

一言扉の外から聞こえると、内側に開いて三人ほど入ってくる。

一人は響と同じ帽子をかぶったセミロングの黒髪の少女、もう二人はよく似ていて、同じ綺麗な茶髪が肩のあたりまで伸びている。

「あ、その人起きたのね」

「さつき目が覚めた。やはり、どこかに着任予定の新米提督だった」

響が三人に短い説明をし終わると、こちららに向き直って話し始める。

「紹介する。左から、私と同じ特Ⅲ型駆逐艦1番艦の暁。

同じく3番艦の雷と、4番艦の電」

「暁よ。これでもレディーなんだから、その所よろしくね」

「雷よ。電と間違えやすいから、気をつけてよね」

「電なのです。よろしくなのです」

「暁、雷、電だな。よろしく頼む」

確認を取って挨拶したあと、三人がまとめて困ったような顔をする。

何かおかしかっただろうか、と頭をひねっていると、電が話しかけてくる。

「あの、名前を教えて欲しいのです……」

「あ、いや、その……」

頭を掻きながら、場を濁すように言葉を詰まらせる。



「あー！　べ、別に嫌だったら言わなくても大丈夫なのです！」

電は本当に申し訳なきような声を出しながら、両手を慌ただしく振る。

その気遣いに嬉しく感じつつ返事を返す。

「ごめん、別に嫌って訳じゃないんだ。ただ……名前っていうのがないんだ。

今までずっと、別の呼び方で呼ばれてたから。　呼び方は好きにしてもらって構わな

いよ」

「わかつたのです」

「そういえば……」

あることが気になったので、電達全員に問いかける。

「一応聞くけど、皆はどここの鎮守府に所属しているんだ？」

「確か……『単冠湾泊地鎮守府』だった気がするわ」

首を傾げながら暁が答える。

単冠湾泊地といえ、国の中でもかなり北の方の島だったと記憶している。

「じゃあ、皆はこの近くの海域で戦闘して漂着した、ということか？」

「……近くかどうか、わからないわ」

「わからない……」

暁の否定的な返事に疑問を感じる。

通常、艦隊を出撃させる時には、出現すると予想される深海棲艦の種類と陣形などの対策、

その海域についての詳しい地形など、入念にブリーフィングを行ってから出撃させるはずなのだ。

「暁達は、出撃前に司令官から何か説明されてなかったのか？」

「……ええ。突然、私たちともう一人で艦隊を組んで適当な海域に行つてこい、つて……」

「なっ……!?!」

暁の説明を聞いて、適當すぎる指示に驚きを隠せない。

事前のブリーフィングなしで出撃させれば、情報不足によつて臨機応変に立ち回りにくくなり、

大破はもちろん轟沈すら有り得るからだ。

「くそっ……どうなつてんだその提督は……!」

艦娘はいくら兵器とはいえ、こうして話したり動いたり考えたりする、人間と同じ生きている存在なのだ。

その命を軽視するなど、到底許される行為ではない。

「私たちの司令官のこと、悪く言わないで欲しい」

頭を両手で抱えながら、暁たちの提督の事をを脳内で指摘していると、響から少し強めの口調で

話しかけられた。

「それでも、私たちの……たった一人の、司令官だから……」

「……………」

表情を暗くして語る響の言葉に、場の空気が静まり返る。

ほかの三人を見てみれば、暁は何かに耐えているかのような表情を浮かべ、雷は拳を握り締め、

電は今にも泣き出しそうな顔をしている。

「……………変なことを言つて、悪かつたよ……………」

「いや、こつちも悪かつた……………それで、鎮守府に帰る算段はついているのか?」

場の空気を変えるため、話を進めることにした。

ある程度効果はあつたようで、全員から張り詰めた雰囲気は消えたことに安堵する。

「詳しい場所がわからないから、どの方向に鎮守府があるのかわからない」

「つまり、打つ手なしか……………」

顎に手を当てて策を練る。

暁たちの目標は、鎮守府に帰還すること。

対して自分の目標は、どうにかして自分が元いた『横須賀鎮守府』と連絡を取り、本来の鎮守府に着任することだ。

つまり、暁たちが鎮守府に戻ればそこには当然通信機器があるはずであり、自分の目標も達成できる。

「……なら、一緒に行動しようか。」

嫌じゃなかったら、皆が帰れるまで臨時で司令官をやらせてほしい」

「……私は構わない。暁、どうする？」

響に話をふられた暁が腕を組んで考え始め、全員の視線がそちらへ向く。数秒ほど考え込んでいたが、首を縦に振って肯定の意を示す。

「……私もいいわ。これからよろしくね、司令官」

「ああ。新米だけど、よろしく頼むよ」

自分の言葉に、それぞれが小さく笑みを浮かべて頷く。

これから、どうなるかな……

暁たちと一緒に行動しても、戻れるという確証はまだない。

だが、同じ島に漂着した者同士、協力したほうがいいのは確かだろう。

全く予想もつかない未来に不安を覚えながら、新米提督は駆逐艦4人の臨時司令官となった。

## 第2話 鎮守府跡 船渠にて

先ほど駆逐艦四名の臨時司令官となった新米提督は、とりあえず鎮守府内の構造を知っておくことにした。

自分が、偶然とはいえ着任してしまった鎮守府の事をよく知らないというのは、提督としての恥だからだ。

「とりあえず、この鎮守府の構造を覚えておきたいと思う。」

皆で母港の中を見て回ろうと思っているんだが、どうだ？」

「わかった」

響が短く答えると、未だに座ったままの自分に手を伸ばしてくる。

「立てる、司令官？」

「あ、ああ。ありがとう……」

無意識に手を伸ばし、差し出された右手を掴んで立ち上がる。

だが、掴んだ右手には火傷のような傷があり、自分を引っ張りあげるように力を込めると苦悶の表情を浮かべていた。

「響、その手……」

「あ……」

さつ、と手を引き、右手を胸に抱え込んで扉の方まで歩き出す。

「なんでもない。……行こう、司令官」

「ま、待つて響ちゃん！」

電が、部屋の外に出ようとする響を呼び止める。

その声に反応して立ち止まったのを確認すると、呆然と立っている自分に向かって話し始める。

「響ちゃん、実は大破したまま入渠してなくて……」

その……見て回る前に、入渠させてあげて……ほ、ほしいのです……」

電は、何故か震える声でお願いしてきた。

懇願しているとも見えるし、はたまた何かに怯えているようにも見える。

今まで教官の傍で仕事の見学を何回もしてきたが、入渠するのに許可を得る艦娘はほとんどいなかったし、いたとしても怯えることはなかった。

それどころか、教官は例え小破以下の傷でも「早く入渠して治してこい」と、誰がどう断ろうと

問答無用で船渠<sup>ドック</sup>へ連れていっていた。

何があつたんだ……？

一番考えられるのは提督からの体罰なのだが、そんな事をしてしまえば艦娘自身  
主申告して

強制退職させられてしまう。

「……だめ、なのですか……」

無言で考えていると、電は俯きながら小さな声を漏らした。

「いやいや、そんなことはないよ。ちよつと考え事をな」

自分の返答を聞いた瞬間、電だけでなく暁や雷も笑顔を浮かべる。

だが響だけは違い、ほんの少しだけ震える声で話し始める。

「……入渠ならいつでもできる。」

今は、司令官の言う通り鎮守府内を見て回った方がいい」

「響……大破してて辛いんだろ？」

「大破したまま一日を過ぐすなんて、もう慣れた。」

私一人が入渠して時間をとるより、皆で行動した方が効率的」

「慣れた……効率的……？」

今まで聞いたことのないような台詞に驚き、繰り返すその言葉を呟く。

教官の傍にいた時でも、出撃時や遠征時に襲撃されて、大破して戻ってくる艦娘は

決して少ないとは言い難かった。

大破した痛みというのは、程度の差こそあれど全員が苦痛に表情を歪ませ、戦艦の金剛も「こんなに痛いのには耐えられないデース！」と泣き言を言うほどだ。

その痛み慣れることなど不可能に近く、さらに自分の事を差し置いて入渠しない方が効率的

などという考えは、並大抵の艦娘では出来ない。

「……見て回るのは後回しにして、先に響を入渠させる」

「どうして、司令官？」

さっきも言った通り、私が入渠しないほうが……」

「響」

更なる反論をし続ける響を短く呼び掛けて無理矢理中断させ、耳を傾けてくれるのを確認してから口を開く。

「早速だが命令をだす。入渠して傷を癒してこい。」

他のことは全部後回しだ」

「でも、私が司令官の足を引っ張ることに……」

「聞こえなかったのか？ 命令だ、入渠してこい」

頭ごなしの言い方をされて少し戸惑ったようだが、響はゆっくりと頷いた。

「……わかった。入渠してくる」



「よし、ついでだ。皆も一緒にいこう」

そう言いながら扉まで歩き、ドアノブへ手をかける。

「待って、司令——」

響が言い終わらない内に、扉を外側へ開いていた。

「いいっ!?!」

感じたのは、自分の体に突如あつた突風と——全てが凍りつくような寒さだった。堪らず反射的に勢いよく扉を閉め、最も寒さを感じた両腕を擦る。

だが、普通感じるはずのない肌の感触を感じ、おかしいと感じながら腕を見る。着ていたのは白い軍服ではなく、その下に着ていた薄いシャツ一枚のみだった。

「ふ、服どこだ……?」

体全体をガクブル震わせながら部屋を見渡すと、壁に設置してあるハンガーに、先日もらったばかりの軍服が掛けられているのを見つける。

歩み寄って取ろうとすると、ハンガーの近くにいた電が渡してくる。

「ど、どうぞなのです!」

「あ、ありがとう……」

未だに震えが止まらない体を抑えつつ、電から受け取り即座に羽織る。

ほんの少しだけ湿っており微かな不快感を与えてくるが、この程度なら体温を奪わ

れる

こともなく、また寒いよりは良いので我慢する。

「そ、それじゃ、気を取り直して船渠に行こうか……」

少しばかり情けない姿を見せてしまったためか、響以外の呆けている三人に愛想笑いを

浮かべながら再び扉まで歩いて開け放つ。

「うう、寒い……」

今まで寒さとはあまり縁のない横須賀にいたためか、覚悟していたのにも関わらず鳥肌が全身に立ってしまう。

「なあ、皆はこういうのは慣れてるのか？」

「もちろん。」

これぐらい、耐えられなかったら仕事にならない」

「……ま、まあ、そうだよな……」

響から冷ややかな言葉を返されて少し凹んでしまうが、言ってることは正しいので反論しようにも出来ない。

本来の言う立場と言われる立場が逆転していることにも情けなく感じ、それを紛らわせるために廊下へと出て手招きで全員を呼ぶ。

最後に出てきた電が扉を閉めたのを確認して、全員に話しかける。

「船渠はどこにあるか知ってるか？」

「こつちよ、司令官。案内してあげるわ」

そう言うのと雷が先頭を歩き、その後ろに電と暁、更に後ろに自分と響という並びで歩き始める。

歩き始めて10秒位が経過した頃、唐突に響が口を開く。

「……Мне жалко, 司令官」

響が言った言葉は聞き取れたが、最初の方にロシア語らしき言語が混じっていたため、

理解できずに聞き返す。

「ごめん、あんまり外国語は詳しくないんだ。日本語で頼めるかな？」

「ごめんなさい、って言ったんだ……」

「……どうして謝るんだ？ 別に謝られるようなことはされてない筈なんだけど……」

「……嘘、ついてたから」

うくん、嘘なんてついてたかな……

今までの響の台詞を思い出そうと頭を捻っていると、響が言葉を繋げる。

「私が、司令官を部屋まで運んだこと。本当は電が運んだ。」

……すまない、やはり不快な思いをさせてしまったな……」

「いや、別に……ただ、なんで嘘をついたのか説明してほしい」

「……今は、まだ……今後は嘘なんてつかないから、その……殴ったりしないでくれ……」

「ひ、響……？」

一瞬、聞き間違えかと思った。

普通の人間でもよほど酷い仕打ちをされている人にしか、殴らないでくれと相手に言うはずがないからだ。

そんな自分の考えが当たっているのかどうか分からないが、響はとてつもなく暗い表情で

黙々と床を見つめながら歩いている。

「殴ったり、つてどういうことだ？」

まさか、響達の提督はそんなこともしてるのか？」

「いや、だから……なんでもない。忘れてくれ……頼む……」

段々と声が小さくなつていき、服の裾を掴みながら拳を握りこんでいた。

今まで見たことが無いような痛々しい姿を見たくなくて、響の頭を帽子越しに撫でながら口を開く。

「……わかった。響から言い出すまで、無理矢理には聞きださない。

それにな、これから協力していくんだ。相手が誰だろうと殴ったりしないよ」

「c n a……ありがとう……」

「礼なんか必要ない。当たり前のことだからな」

「ここまで言ったところで手を離すと、いつの間にか電と暁が歩きながらこちらのほうを見て話を聞いていた。

話を聞いていた。

響の暗い表情を読み取ったのか、暁が優しく話しかける。

「響、大丈夫……?」

「……司令官のおかげで、なんとか」

暁の問いかけに答えた言葉通り、いつしか顔が上がって先程までの暗い表情は消えていた。

そのことに安堵しつつ、電へ話しかける。

「電、部屋まで運んでくれてありがとう」

「え? あ、いや……どういたしまして、なのです……」

別に怒っているわけでもないのに、間が空きすぎている返事に少しばかり違和感を覚える。

今までの皆の言動は、それぞれの性格にもよるのだろうが、普通の艦娘とはどこか違っている。

やっぱり、単冠湾泊地の所の提督が……？

「司令官、着いたわよ」

顎に手を当てて考えていると、雷の声が聞こえてくるのでやむなく中断する。

先ほどの部屋からは、そう遠くはないようだ。

「え？……ここが、船渠……？」

目の前の光景に、言葉を詰まらざるを得ない。

船渠とはいっても名ばかりで、艦娘たちが入る船渠とは人間で言う風呂のようなものだ。

艦娘たちの浸かる湯には燃料や鋼材が溶け込まされており、どんな傷を負ったとしても

時間をかけて入りさえすれば必ず完治する。

出撃・演習・遠征の後、または汗を流すためだけに入ることもあるため、疲れを残さないように

司令室や艦娘が寝泊りする艦種別に別れている寮の次に見栄えの良い場所、それが船渠。

だが――

「なんで……扉が凍ってるんだ……?」

横須賀鎮守府に居た頃に見た、『当鎮守府所属の艦娘が選ぶ鎮守府内で好きな場所ランキング』

で一位だった、リゾートホテル顔負けのような船渠とは程遠かった。

一言で表すなら、『忘れ去られた田舎の温泉』といった感じだろう。

ちなみに、リゾートホテルというものは知る機会がなかったので休みの日の外出時にもらった

旅行パンフレット等で知った。

「私たちが見つけた時には、扉は全部凍ってて開かなかったわ」

「……雷、それ本当か?」

「もちろん。嘘ついてどうするのよ」

確かにそうだと思い、反射的とは言え当たり前のことを聞いたことに情けなく感じる。

「少し気になるところがあるの。ついてきてくれる?」

「ついていくって……中にか?」

「ええ、そうよ」

「いやいや、船渠つて艦娘専用だろ？」

女ならともかく、男の私が入るわけにはいかないよ……」

13歳位の頃に一度、教官の秘書官である金剛に「一緒にお風呂に入るデース！」と無理矢理に脱衣所へ押し込まれたことがある。

その時にバツチリと金剛の妹である比叡<sup>ひえい</sup>、榛名<sup>はるな</sup>、霧島<sup>きりしま</sup>全員の裸を見てしまい、榛名には気絶するまで往復ビンタをくらわされ、霧島からは艦内マイクでこの事を洗いざらい暴露され、

おまけに教官に見つかるまで金剛共々正座で説教させられたのは忘れられない。

その時の比叡が「私の体、榛名たちと比べてどうだった？　なんてね」とノリノリだったのは、

未だに理由がわからない。

「……ねえ、司令官？」

「……え？」

昔の恥ずかしい体験を思い出していると、雷が首を傾けながら話しかけてきた。

とりあえず思い出漁りを中断して、話を聞く姿勢を作る。

「なんで男なのに『私』っていうの？」

「まあ、こういう風に育てられたから……かな？」



横須賀で過ごした日々は、自由時間は文字通り言葉遣いも自由だったのだが、それ以外は規律正しく言葉遣いも正されていた。

もう、自分のことを「私」というのは口癖のようなものだ。

「……ま、いいわ。それより、今は誰も入ってないんだからいいでしょ」

雷はそう言いながら、小さな氷の粒を落としながらガラガラと扉を開く。

まったく、無理矢理かよ……

追加で理不尽だとも思いながら、皆で中に入って最後の自分が扉を閉める。

「脱衣所は……まあまあだな」

意外と狭い部屋の中を見渡すと、各々のロッカーはないが、服を入れるカゴや故障した艀装を

工廠へと送るための装置もちゃんとある。

一体どこが気になるのだろうか、更に注意して見渡すが変なところなどは無かった。

「雷、どこも変なところなんかないけど」

「違うわ。私が言いたいのは浴槽の方よ」

「わかった。回れ右して他のところを見てくる」

「し、司令官!! 待って、重要なことなのよ!」

雷が言葉で止めてくるが、お構いなしで出口へ歩み始める。女子の園とも呼ばれる船渠の脱衣所のみならず、その本質である浴場の方まで歩を進めるなど

男としてやってはならないことだ。

そう考えていたのだが、雷に左腕を掴まれて歩みを止められる。

「司令官、大切なことなのよ！」

服をきゅつと握り、甘えるようにして止めてくる。

数秒ほど抗っていたが一向に離す気配がなかったので、諦めて振り返りながら問いかける。

「はあ……なんだ、雷」

いつも通り普通に発した、何気ない一言。

だが、それを聞いた瞬間に雷が変な反応を起こす。

「……あ、いや……いや……！」

目はほぼ限界まで見開かれ、瞳孔は狭められ、服を握っている両手が震え始める。

やがて何秒もしないうちに、足から力が抜けたのか急に体が前に倒れそうになる。

「おっと。……雷、少しおかしいぞ。大丈夫か？」

倒れそうになる雷の体を右腕で支えながら、目を合わせてしつかり聞こえるように話

す。

何秒か返答も無く小刻みに震えていたが、やがて落ち着いたのか顔からおびえた表情が消える。

「……………ごめんなさい、司令官……………」

目じりに涙を浮かべてポツリと呟く雷。

響だけでなく雷もこのような反応を見せたということは、他の二人も同じであると考えられる。

理由は響と同様に向こうから話してくれるまで分からないが、できるかぎり気をつけながら

話そうと心に決める。

「別に謝らなくていいよ。それで、何が大切なんだ？」

「……………こっちきて」

雷は目元をごしごしと右手で拭きながら、浴場へ扉を開けて入っていく。

あまり気は進まないが、自分も中に入って扉を閉めてから見渡してみる。

「やっぱりこも凍ってるんだな……………」

普通なら10人が同時に入れそうなほどの大きさだが、複数人用の浴槽は全部霜が降りていたり

何やらで使い物にならない。

他の個人用のほうも、ほぼ全てが同じ状況でまともに使えるのは一人分だけだ。

……ん？　　まてよ……

とある事が引つかかり、皆に質問してみる。

「皆は、ここに漂着したときは怪我はしてなかったのか？」

「暁と響が大破、私と電が中破だったわ。もう入渠して治したけど」

「だったら、湯に溶かしてる燃料や鋼材はどうしたんだ？」

「それは——」「それは大丈夫よ」

雷の声を暁が上書きする。

その前に答えようとしていた雷が少し落ち込んでいるが、そんなことはお構いなしに話を続けてくる。

「燃料なら皆の残りを分けて、鋼材は魚雷を解体して作ったわ」

「なるほどな。　　響の分もまだ残ってるか？」

「もちろん。　　いつでも入れるわ」

「だそうだ。　　響、私が出るから入ってきていいぞ……つてあれ？」

話の流れに乗ったまま響に話しかけたが、他の三人はいるのに響だけの姿が見当たらない。

置いてきたかなと思ひ、脱衣所へつながる扉まで歩く。

引き戸になつてゐるので、手をかけて横に開く——その前に勝手に開いた。そしてそこにいたのは、バスタオル一枚しか身に着けていない響だった。

「おおい!？」

驚いて一歩後ずさりながら、響を視界に入れないようにしながら口を開く。

「響、何してるんだ!？」

「何つて、入つてきてもいいつて言つたのは司令官」

「いやいや、私が言つたのは入渠してもいいつて意味だつたんだが……」

目を閉じ、頭を押さえながら瞬時の考えの後に行動を起こす。

「わかつた。響が出てくるまで他のところを見てくる」

響の横を通つて早歩きで脱衣所から離脱しようとするが、腕を掴まれてしまつて

それ以上進めない。

「一緒に入ろう、司令官」

「あのな、響。普通、男女は一緒に風呂に入らないんだが」

「わかつてる。でも、漂着したときに海水を浴びていて少し不潔。

洗い流して清潔にしたほうがいい。それに、話したいこともある」

響にそう言われて自分の右腕の匂いを嗅いでみると、確かに潮の匂いがした。

「まあ、そうなんだが……」

「一緒に入ろう、司令官」

「いや、だからな……」

「一緒に入ろう、司令官」

「こちらがどれほど言葉につまろうと、響は依然として言葉を受け入れてくれない。

何回か繰り返しているうちに、結局折れてしまった。

「はあ……わかったよ。 入ればいいんだろ？」

「そう。 司令官、話がわかる」

わかってないしわかりたくないけどな……

言っても無駄なのはわかってるので脳内でそう返答し、まだ浴場内にいるであろう

三人を出て行かせるようにする。

「というわけで、上がるまで外で待ってて——」

「司令官、私たちが話してる間にみんな外に行った」

「……そ、そうか……」

カッコ悪さに少し冷や汗を流しながら、響に指示を出す。

「先に入ってくれ。 脱いだら私も入るから……」

「わかった」

はあ、気が進まない……

そう思いながらも、一度言ってしまったものは仕方なく、服を脱ぎ始める提督だった。

### 第3話 響と重要な話

一緒に風呂とかないだろ普通……

そんなことを思いつつ、服を脱いではカゴの中へ押し込んでいく新米提督。

実は、艦娘と一緒に風呂に入るのは初めてではなく、これが3回目だ。

1回目と2回目の時に金剛と、2回目と3回目の時に金剛と比叡とだ。

折角久しぶりにのんびりできる休みだと思っていたら金剛がいきなりやってきて、

「提督の student、一緒にお風呂に入るデース！」と言われて一緒に入ってしまった。  
た。

しばらく内緒にしていたがその事が比叡にバレてしまい、

「お姉さまと私が一緒に入ったら反応が面白そう！」という理由で入ってしまったのが  
二回目だ。

未だに隠し通しているが、榛名や霧島にこの事がバレたら、その記憶が劣化するまで  
説教タイム突入待ったなしだろう。

金剛と比叡には、こちらの心情をもっと考えてほしいものだ。

榛名と霧島には自分の姉が何をしているのかをしっかりと把握してもらい、



叱るべき相手を見極めてほしい。

そんな事を考えながら服を全て脱ぎ、少し薄いバスタオルを腰に巻いてカゴを持つ。シャツがあまりにも潮の独特な匂いを放出しているので、ついでに洗うためだ。

駆逐艦の大破時の入渠時間は大体長くても25分、短くて20分くらいだと記憶している。

そのくらいの時間があれば、薄いシャツ一枚ぐらい乾くだろう。

それにしても、なんでこんなことに……

今更な疑問にため息をつきながら、浴場へ繋がる扉をノックする。

「……響、入るぞ?」

『わかった。いつでもいい』

響からの返答を聞き、十分な心構えをしてから扉を開いて中へ入る。

響は、先に湯船に浸かっているようだ。

「司令官、そのカゴは?」

「汚れたシャツを洗おうと。薄いから、上がる頃には乾くだろうって思ってた」

そう言いながら、そばにあるシャワーをおおうと蛇口を捻る。

そして真上から、暖かいお湯——ではなく冷水が降ってきた。

「キーシヨツホー!?!」

今まで上げたことのない珍妙な悲鳴を響かせながら、急いで蛇口を閉める。

「司令官、シャワーは冷たい水しか出ないから気をつけて」

「響、それをもっと先に言ってくれ……」

「言う前に蛇口を捻ったのは司令官」

「そうだった、ごめん……」

響にさりげなく叱られながらも、今度はシャワーを手に取ってから蛇口を捻る。

冷水が前方に放射状に噴出されるので、シャツにそれを当てながら揉んで汚れを落とす。

一旦水を止めてからシャツを振って余分な水を飛ばし、持って入ったハンガーにかけて

入り口へ引つ搔けておいて再度シャワーの水を出す。

体の汚れを落とすため、歯を食い縛って思いつきり冷水の雨を浴びる。

「ツ~~~~!!!!」

もはや『冷たい』ではなく『痛い』だったが、汚れを落とすために我慢する。

一通り流しカゴから出したタオルに冷水を染み込ませて体を擦り、

もう一度全身に冷水を浴びる。

今度は慣れてきたためか、そこまで冷たくは感じなかった。

「響、話ってなんだ？」

「その前に、司令官もお湯に浸かったほうがいい」

「響が入ってるところにしかお湯はない。」

というより、響のところの湯は冷たくなきそうだな。湯気出てるし」

シャワーは水風呂やプールでもないのに冷水しか出てこないが、響が浸かっている

個人用の浴槽からはしつかりと湯気が出ている。

「なぜかわからないけど、暖かい……一緒に浸かろう、司令官」

「恋仲でも夫婦でもないのに、そんなことはできないよ」

そう口では断ってみるも、体が寒さに耐えかねて本能的に暖かい湯を欲しているのが

わかる。

「ここまで入ってきたら、一緒に湯船に浸かっても一緒に気がする」

「……………」

響の発言に、頭の中に「正論だ」という言葉が浮かび上がってしまった。

普段ならきつぱりと断っているところだが、寒さに耐えられず体が勝手にフラフラと

響のいる

浴槽の方へ動いてしまう。

「は、入るぞ……？」

一応断りを入れてから、まず足先を湯につける。

燃料や鋼材が溶けていてドロドロとしているが温度はちょうど良く、浸かれないというより

むしろ浸かりたいという欲求が出てくる。

その欲求に抗わず、ゆっくりとだが肩まで全身を湯に浸からせる。

個人用といっても、大人が二人ぐらい入れそうなほどスペースはあるので、窮屈ということは全くない。

艦娘たちの使う燃料というのは、どういうわけか油臭さというのはほとんどない。

おかげで泥風呂のような感じになった湯を顔以外の全身で堪能しつつ、響の方を見ながら

先ほど聞きそびれた話の本題を聞き出す。

「……それで、話ってなんだ？」

「……私たちのことについて、知ってもらいたいんだ」

独り言をつぶやくように話し始めるので、聞いているという雰囲気を作って話の続きを促す。

「私たちは、他の人との付き合いが苦手なんだ。　単冠湾にいた時だって、ほとんどずっと

四人だけで過ごしてきた。そのせいで、他人に洩々といった反応や返事をされる  
と、

怖くなってさっきの雷みたいに怯えることしかできなくなるんだ……」

艦娘は、兵器であるが故に人間と関わることはあまりない。

仲間同士でも馬が合わなかつたりして士気が落ちることもあり、大抵の鎮守府では

艦娘専用のカウンセラー室などを設けている。

しかし、いくら人との付き合いが苦手でも、雷の怯え方は尋常ではなかつた。

何かもつと別の理由が……？

内心でそう考えている内も、響の話は続いていく。

「私は堅い言い方してるけど、誰よりも……電よりも弱虫なんだ。 眺みたい

デ---

気取つてたり、雷みたいに無理矢理にでも前向きに気を強く持つてる方が立派だよ

……」

「レディー気取つてる、なんて言ったら眺が怒るんじゃないか？」

いきなりこちらが口を挟んだことに少し驚いたのか、啞然として固まる。

だがそれも一瞬で、すぐに響は自嘲的な笑みを浮かべて話を続ける。

「……そうだね。 眺、自分が一番お姉ちゃんだから、つて一人前のレディー目指してる

んだ。

おかげで、レディーかどうかわからないけど、今でも私たち全員を守ってくれてる。それに比べて、私は暁の次にお姉ちゃんなのに、守れるのは自分が精一杯。

……雷にも劣つてる駄目なお姉ちゃんだよ、私は……」

「……でも、私には響が一番お姉さんに見えるけどな」

素直な意見を口から出すと、響が少し驚いたような表情をして聞き返してくる。

「私が、お姉ちゃんに見える……？」

「四人の中でも一番落ち着きがあつて、自覚してないかもだけど、ちゃんと皆を引っ張つてる。」

とても立派なお姉さんだよ」

「あ……私が、立派な……」

照れてしまったのか、顔を赤くしてそっぽを向いてしまう。

そして数秒後、響にそっぽを向かれたまま話しかけられる。

「……спасибо」

「ん？ なんだ？」

「……ありがとう、つて意味。覚えておいてほしい……」

「わかった。覚えておこう」

それから、無言の時間が訪れた。

こちらから話しかけることもなく、向こうから話しかけられることもなく、一つの湯船の中で

お互いの存在を感じ取っているかのような不思議な感覚とともに時間が過ぎていく。何分経ったかわからなくなりそろそろ上がろうかと思ひ始めた頃、湯の中で響に右手を握られる。

「響？」

「……こんな私たちだけど改めてよろしく頼むよ、司令官」

「……もちろん。こちらこそよろしく」

少しだけ手を握ると、向こうも弱いがしっかりと握り返してくれる。

湯の中で上下に振ってから手を離し、下半身をなるべく見られないようにしながら立ち上がる。

「後どのくらいで治りそうか？」

「もう少ししたら」

「そうか。私は先にながっておくよ」

傍に置いたかごを片手に体からぼたぼたと水滴を落としながら出口まで歩き、かけておいたシャツを取ってカゴの中に入れる。

次は工場に行こうかな……

今後の予定を立てながら、カゴの中からタオルを取り出して体を拭き始めた。



## 第4話 工廠に着くまで

体を完璧に拭き終えて服を着終えた後、船渠前の廊下まで出てきた。

外で待つてもらった三人を探そうとするが、右を見ても左を見ても姿が見当たらない。

どこに行ったのだろうかと周りを見渡していると、どこからか焦げ臭い匂いがしてくる。

どうしたものかと道を覚えながら臭いの元へとたどっていくと、案外すぐ傍だった。暁たちが、固まって座って何かを見ている。

「みんな、座って何してるんだ？」

そう話しかけた瞬間全員の肩がビクツと震え、一斉にこちらへと怯えた表情を

浮かべた顔を向けてくる。

ああ、響に言われたんだった……

先ほど聞いて了承したばかりだというのに早速過ちを犯してしまう自分に情けなく思いながら、

驚かせてしまった皆をなだめる。

「私だよ。驚かせてしまつて悪かつた」

両手を頭の横に掲げて何もしないことをアピールし、全員がこちらを認識してから近づく。

「し、司令官……驚かさないでよもう……」

「ごめんごめん。それで、暁たちは何やつてるんだ？」

なんか焦げ臭い匂いがするけど……」

「ああ、それはね……」

言葉を途中で切り、暁が手招きをするので近づいて指を差す場所を覗く。

「これは……壊れた艀装か？」

「そうよ。さつき響とお風呂に入ってきたならわかると思うけど、

響のところだけお湯があつたでしょ？」

「確かに……他は凍つてたのにな……」

「そこで、浴槽の水を壊れた艀装の熱を使って暖めたのよ」

なるほどな、と思わず合点を打つ。

艀装が破損した場合、内部機関がオーバーヒートして熱を持つことがある。

まさかこの熱を風呂の薪代わりに使つてしまうとは、自分が思っていたより

暁たちは賢いようだ。

「……ん？ 暖められるってことは、この先には響が浸かつてる浴槽があるのか？」

「当然よ。 じゃないと暖められないじゃない」

「なんだこの前時代的な船渠は……」

頭に手を当て、盛大なため息をつく。

今時、こんな方法で入る船渠はこの鎮守府くらいだろう。

機械のボタンひとつで湯の温度を0. 1℃単位で設定できる、我が教官がいる横須賀鎮守府とは

確定的な差ではないか。

しかし、元々無人島にこのような設備が揃っていること自体が奇跡に近いため、

今以上の高望みはしてはいけないだろう。

「……まあ、とりあえずだ皆、聞いてくれ」

これ以上考えていても仕方がないので、無理矢理口を開いて呼び掛けることにした。

全員が声に反応し、耳を傾けてくれるのを待つてから言葉が続ける。

「響が入渠し終えたら、その艀装の修理もかねて工廠こうしようへいこうと思うんだがどうだ？」

「わかったわ。 響ならあと少しで治るわね」

そう暁が言うと、ブスブスと黒い煙を出し続けている艀装を取り出し、そのまま装備する。

「え？ それつけて工廠まで行くのか？」

「手に持つてたら不便だし、こっちのほうが運びやすいわ」

暁にそう言われて納得し、船渠前の廊下まで三人を連れて戻る。

その後、数分と経たないうちに響が船渠から出てきた。

「待たせたね、司令官」

「いや、全然待つてないよ。次は工廠に行こうと思つてるんだが、響もいいか？」

「わかった。異論はない」

響の了承も得ることができ工廠の方へと足を進めようとするが、場所がわからない。

少しキョロキョロと周りを見渡していると、壁にうつすらとだが『↑工廠』と書いて

あった。

あとで濃く書き直しておこうと思いつつ、矢印に従つて歩き始める。

暁の艤装から漂う焦げ臭い匂いを嗅ぎながら歩いていると、電が話しかけてくる。

「司令官さんは、どこの鎮守府にいたのですか？」

「私か？ 私は横須賀鎮守府だよ。そこで今まで立派な提督になるための勉強をな」

自分の話を耳を傾けていたらしい全員から、へえ〜と感嘆の声が聞こえてくる。

「横須賀と言えば、国の中でも最前線の場所なのです……」

「そうだ。電の言う通り、国の中で最も重要で激しい戦闘が繰り広げられている。

ひどい時は、一日に一回は深海棲艦に母艦が襲撃されることもある」

「一日に、なのです……!?!」

ここで、電だけでなく全員が驚いたような声をあげる。

普通の鎮守府では母艦が襲われるという事はあまりなく、単冠湾泊地ともなれば襲われることはまずほとんどないだろう。

これは、向こうがこちらの戦力が横須賀に集中していると理解しているということになる。

最近では、自分がまだ横須賀にいた頃の話だが、段々と襲撃される頻度も増え、

出撃時の勝率も幾分か下がってきて戦術的な敗北回数が増えてきている。

「確かに、皆にはあまりないことだろうな」

「横須賀鎮守府には、どのくらい艦娘がいるのですか?」

電に質問され、顎に手を当てながら次々に思い出していく。

「……戦艦の金剛さんと比叡さんと榛名さんと霧島さん、正規空母の赤城さんと加賀さん、

軽空母の鳳翔さんに軽巡洋艦の天龍さんと龍田さんと夕張さん、重雷装巡洋艦の木曾

さん。

あとは駆逐艦の吹雪さんの……計12人つてところかな」

何とか全員思い出せたことに安堵しながら四人のほうを向くと、皆が唾然としてこちらを見ていた。

「戦艦が四人もいるのです……！」

「重巡洋艦がない……意外だ」

「駆逐艦がいるっていうのも意外よね」

「司令官、たった12人で横須賀なんて守れるの？」

全員が全員驚いた顔をして感想を述べ、暁は当然の質問をしてきた。

「確かに、暁の言うとおり12人ではなかなか守りづらいと思う。だが、それは他の

鎮守府での場合だ。横須賀鎮守府では一人一人が私の教官の下で凄まじい実力を

つけ、

たとえ駆逐艦の吹雪さんでも、何度か主砲で一撃で戦艦クラスを沈めている」

「「しゅ、主砲で一撃（なのです）!?!」」

こちらがさも当然のように放った内容に、響は目を見開き、他の三人は口を揃えて感嘆の

言葉を漏らした。

基本的に駆逐艦というのは、潜水艦の撃破、昼夜戦の魚雷による壊滅的打撃を与える

（と）

などが主な役割とされている。

自分たちも同じ駆逐艦であるがゆえに、その凄さがよくわかるのだろう。

「司令官、あとでいいからさっきの駆逐艦の話を詳しく教えて欲しい」

一方の響は、今まで見た中で一番真剣な顔をしてお願いしてきた。

興味がある、の一言では片付けられないと思わされるような真剣さ。

それに対し、言葉では言い表せない気持ちを抱きながら答える。

「あ、ああ。時間ができたらゆっくり話そう。

みんな、そろそろ工廠に着くぞ」

響と話しているうちに、『この先工廠』と書かれたところまでやってきた。

重々しい扉をしているが、やはりこの扉も船渠と同じく凍っている。

取っ手を握り、思いつきり左右に開けてみる。

「ぐっ……ぐ、ぐおぉー……」

だが、まるで溶接された鉄のような硬さで1mmたりとも動かない。

それでも教官の下で毎日毎日激しい筋力トレーニングを続けてきた身として、扉一枚ごときに負けてしまうわけにはいかない。

「ふんっ……こんの、く、そっ……」

取っ手が壊れてしまうのでは、と思うほどにさらに力を込めるが動かない。

それを見かねたであろう響が、静かに口を開く。

「司令官、私がやる」

「はあ、はあ、はあ……頼む、響……」

取っ手から手を離し、響を場所を変える。

そして取っ手を握り、バキバキ！と氷を無理矢理割るような音を出しながらも、

片手で何事もなかったかのように開いた。

「……………え？」

軍服の右袖で両目をごしごし擦ってもう一度見るが、やはり開いている。

やはり響が、片手で、普通の扉と同じように開いたのだ。

その事実が受け入れられず、返答の中身が分かっている質問をする。

「な、なあ響……扉、重くなかったか？」

「いや、普通の扉だった。司令官、何に力をいれてたんだい？」

「ウグツ！」

グサツ、と音がするほど心が痛んだ。

確かに、艦娘は人間とは違って何十倍も何百倍も力を出せる。

その尋常ならざる力があるからこそ、何百kgもある艦装を軽々と片手で扱えたりす

るのだ。



だからといって、見た目が少女の娘に単純な力で負けるといふのは、男として死にたいほど恥ずかしくなってくる。

「……行こう、工廠へ」

これ以上考えても、地面に倒れ込んで何もする気がおこらなくなる気がするので、さっさと要件を済ませることにした。

「司令官、艦娘と人間の力は違う」

「グフツ！」

響のフォローしてくれたであろう言葉に、さらに心が傷つく。

「わかってる、わかってるよ響……工廠は目の前だ、早く行こう」

「だから、気に留める必要はない」

「ゴハツ！」

執拗なまでに、響は言葉でこちらの心を痛めつけてくる。

本人はフォローのつもりだろうが、こちらとしては全くそんなことはない。

「司令官、こればかりは仕方がない」

「グツ……！ ……響」

心の中でひどく落ち込みながらも、顔を無理矢理笑顔にして響に歩み寄り、黒い帽子の上に手を当てて撫でながら口を開く。

「……ありがとうな、気を遣ってくれて。私は嬉しいよ」

「……司令官、どうして泣いてるんだい？」

いつの間にか、両目からはとめどなく涙が溢れてきていた。

「気にしないでくれ。決して響の言葉に心が折れたとか、そういうのではないから」

後半に少し本音を混ぜて返答すると、響が撫でている右手を両手で押さえながら口を開く。

「……フオローの、つもりだったんだ……ムネ ニエ ジャ ルン（ごめんなさい）、司令官」

「いいんだ、響。こういうのは、仕方ないことだから……」

途中にロシア語が入ってきたが、自然と理解して涙をこぼしながら響の頭から手を離れた。

そのまま右袖で頬を流れている涙を拭き取り、工廠の方へ向いて歩き出す。

後ろの響を除く三人が、「司令官泣いてたわよね」とか「司令官、可哀想なのです……」とか

「やっぱ力が違うのね……レディーとしてどうしたら……」とかが聞こえてきたが、

極力無視して前を向き続ける。

ほどなくして、工廠らしき建物へたどり着いた。

だがしかし、この工廠は――

「……なんだ、この『馬鹿でかい』工廠は……」

天井が霞むほどに高く奥行は横須賀鎮守府の三倍はあろうかという、とてつもなく大きすぎる工廠だった。

## 第5話 妖精さんはお爺さん

しばらく、巨大な工場の内部を眺めていた。

近くに積んである大量の木箱、それからはみだすほど押し込まれているペンギン人形、

動くかどうかも怪しい錆び付いた艦積機の数々。

天井にへばりつくように設置されているクレーンに、そこから垂れ下がっている  
どう見ても人間が乗るような巨大な飛行機の翼のようなもの。

「……どういう、鎮守府だったんだ……？」

自然と口から感想が出てきたが、それを無視するかのように響が歩き始める。

「とりあえず、妖精さんが居るかどうか。それが重要」

そういえばそうだ、と頭の中を切り替える。

の  
艦装と呼ばれる艦娘にしか扱えない武器は、現在では妖精さんとよばれる二等身ほど

小さな生物、または特別な工作艦や十分な知識を得ている艦娘にしか修理・改修などはできない。

だが、今まで鎮守府内を歩いてきて分かったが、人間一人どころか妖精さん一人すらいない。

妖精さんがいてくれることを願いながら、自然と全員がバラバラになって散策を始める。

雷と電が入り付近、暁と響と自分が奥の方だ。

奥の方へ進むにつれて、ペンギン人形やさび付いている艦載機から、段々と新しい普通に動くような艦載機へと変わっていく。

「しかし、艦載機が多いな……烈風に瑞雲、おまけに流星や震電改まであるな……」  
そう、先ほどまで目に入ってくるものは艦載機の類のものばかりで、12cm単装砲やら

12.7cm連装砲などの主砲が見当たらない。

本当は形だけの鎮守府で運営はしてなかったのでは、と思わされる有様だ。

そんなことを考えていると、どこからか異質な声が聞こえてきた。

「ぐがぐ……ぐがぐ……」

強引ないびきのように聞こえ、不思議に思っただけで聞こえてきたほうへ途中で合流した暁と響と共に向かう。

しばらく進むと、何やら小さなものが転がっているのを発見する。

「ぐがく……ぐるむむむむ……」

何ともおっさんがしそうないびきをかきながら寝ている、片手にレンチを持って寝ている

妖精さんだった。

「……一応、妖精さんはいたな」

「でも、この妖精さんは頼りなさそう」

「確かにね。レディーの私とは正反対だわ」

響と暁のコメントに苦笑いしながらも、とりあえず寝ている妖精さんを起こしてみる。

「妖精さん、起きてください」

右手で体を揺らしながら、少し大きめの声で呼びかけた。

「……んむ？ 誰かいの、騒々しい……」

その結果として、頑固なお爺さんを思わせるような声を出しながら体を起こす。

その姿は、今まで見てきた妖精さんと全く変わらない、至って普通の姿だった。

だが、レンチを使って頭をポリポリ掻いていたりだるそうに頭を傾げている姿は自分の知っている妖精さんとは違う印象を持たせていた。

「お前さん、誰かいの？ 10年ぶりの客さん、というわけでもあるまい」

「あ、はい。 私は……ちよつと遭難してこの島に流れ着いたものでして。

そこで今いる両隣の娘とあともう二人の臨時司令官となりまして、

この工廠の中を見て回っていたらあなたを見つけたのです」

少々改まった言葉遣いをしながら説明する。

妖精さんとは、人間では不可能な『物理的な艦娘の強化』ができる唯一の存在だ。

そのため、人間の中でも妖精さんに対して敬意をもつて接する人も多く、

自分もその人たちの中に入っている。

「そりゃあまた詳しい説明をどうも。 ワシは、この鎮守府の元工廠長じゃ。

10年前にここの提督が異動しちまって、妖精はワシ一人だけが残つとる。

ま、一人でも有意義な時間を過ごしとったがな。 がつはつは!」

膝をレンチで叩きながら豪快に笑う、今まで見たことのない妖精さんがそこにいた。

中年のおっさん、という言葉がしっくりくる、そんな感じだった。

「……本当に妖精さん?」

「私、妖精さんがこんなのだったなんて知らなかったわ……」

響と暁がごもつともな反応をしていると、後ろからコツコツと音を出しながら

小走りで他の二人が駆け寄ってきた。

「さっきの笑い声は何なの?」

「ああ、雷と電か。こちら、この鎮守府の元工廠長さんだ」

「おお。こんな老いぼれじゃが、よろしく頼むわい」

仕草は片腕を突き上げて子供らしく、しかし声はお爺さんという違和感全開な妖精さんを見て

二人共が困ったような表情を浮かべる。

「妖精さん、なのです……？」

「それにしても、お爺さんみたいな妖精さんね……」

二人の反応に、暁と響と自分は苦笑し、妖精さんは再び大きな声で笑い始めた。

「お爺さんか！ かわいらしい表現もあったもんじゃのう！」

昔は『頑固じじい』とか言われとったわい！ がっはっは！

非常にマイペースに話し始めるお爺さん妖精は、再び笑いながら膝を叩き始めた。

レンチで膝をガツンガツンと殴っているが、痛くないのだろうかと心配になる。

「あの、ちよつとご相談が……」

少し控えめに話しかけると、笑い声を抑えて返事を返してくる。

「おう、そうか。なんじゃ若造、言ってみい。

できる範囲なら何でも手伝っちゃるぞ！」

「私たち全員、単冠湾泊地鎮守府に向かいたいのですが、資材や装備等も不足していまし



て。

そこで、妖精であるあなたの力をお借りしたいのですが、よろしいでしょうか？」  
「なんじゃ、そんなことか。いいぞいいぞ、ワシにできることなら何でもしちやる。」

装備の開発から艦載機の搭乗、おまけに入渠の手伝いもできるぞ」

「ほ、ほぼ全部ですか!？」

妖精さんからでてきた言葉は、自分を非常に驚かせた。

いくら妖精さんが人間に不可能なことができるとはいえ、それは大体が一つに限られている。

例えば、建造なら建造しかできない妖精さん、開発なら開発、艦載機の搭乗もそれに準じ、

二つ以上こなす妖精さんは非常に稀とされる。

それを全部一人だけでこなすとは、性格と同じでいろんなところがかなりずば抜けている。

「……この妖精さん、只者じゃない」

「そうだな。まあとりあえずは元工廠長がいるから大丈夫だな」

「そうじゃろ！ 伊達に10年遊んでおらんわ！」

おおそうじゃ、ワシの事は気楽に工廠長とでも呼んでくれ！」

片手で器用にレンチをくるくると回しながら得意げに言い放つ。

その言動は、普段ならあり得ないはずなのに安心感をもたらしてくれる。

「ところで皆、燃料とかの補給ってまだだよな?」

「もちろん。この島に着いてからはまだ何も」

響の答えを聞き、そのままの流れで工廠長にも問いかける。

「すみません、燃料とかの資材保管庫みたいなのってありますか?」

「ん? ああ、資材か、資材のお……」

今まで威勢が良かった工廠長だが、何故か声の調子を落として口ごもってしまう。

「あの、どうかしましたか?」

「ああ、いや、別に……ただ、の?」

そして一言おいて、とても軽そうに、だが物凄い重みをもった言葉を聞く。

「資材は……ワシが全部使い果たしてしもうたんじゃ……いやはや、面目ない……」

「ぜ、全部って、燃料とか弾薬とか鋼材とかボーキサイトとかですか!」

「う、うむ……全部、じゃ……確か一つ残らず艦載機の開発に、のお……?」

「そうか……それで、か……」

入口に置いてあったペンギン人形は今までの開発の失敗作、さび付いていたのは

この鎮守府で10年前に使われていた艦載機。

新しいのは、全部目の前にいる工場長が資材を『無駄遣いして』作った、いわば趣味の産物。

確かに、10年間一人で生きてきたら趣味に突っ走ってしまうのも分からなくはない。

だが――

「この状況で全部かよお……………どうすりゃいいんだよもう……………」

「いやあ、すまんのお……………」

広い工場の中に、悲嘆と申し訳なさが混じった声が、静かに響き渡った。

## 第6話 犠牲と共に補給完了

「……はあ、そういう事だったんですね……」

「まあ、10年も一人でおったもんじゃから……」

最大級に落ち込んだ後、情報交換として工廠長から話を聞き終えた。

元々艦娘の建造と装備の開発をこなしていた工廠長は、他の妖精さんが異動していった提督に

付いていく中で、愛着あるこの工廠から離れられずに一人だけ残った。

その後、残された膨大な量の建築資材などを使い、様々な艦載機を作っては憧れていた

艦載機の搭乗を何度も何度も繰り返ししていた。

最近になって建築資材も燃料なども少なくなつたので最後に一つ大きなものを作ろうと、

残りを全部つぎ込んで誰も作つたことの無い人間でも乗れる巨大な艦載機を開発し始めた。

開発を始めて10日後が今に至る、というのが工廠長の語つた全てだった。

天井のクレーンにぶら下がっている翼は、どうやら開発途中の機体の右翼らしい。

「え〜……とりあえず、使わないやつだけでいいので何かを解体して資材に戻せませんか？

いずれにしろ、暁たちの補給が出来ないと困りますし……」

このままでは一人の補給もできないので、何かを解体して資材にしようとお願ひしたのだが、

工廠長はあからさまではないものの困ったような顔をして答える。

「あ、いや……全部、ワシが今まで乗ってきたものばかり……宝物なんじゃ……」  
「すみません……でも、補給ができないとこちらとしても……」

二人して黙り込んでしまう。

補給ができなければ、深海棲艦の撃退どころか海上の移動すらままならない。

現在の資材は一つもないため、必然的に何か装備を解体して手に入れる必要がある。

工廠長の手放したくないという気持ちはよくわかるが、こればかりは了承してもらえない。  
他ない。

「何とか、お願いできませんか……？」

「……ならば、一つ約束してくれんかの？」

工廠長の言葉に、下げていた頭を上げて続きを聞く。

「ワシを、お前さんの下で働かせてくれんか？ 見ての通り、10年間人つ子一人おらんかった

この鎮守府で一人、ずっと暮らしてきた。暇だったんじや、とてものお……」

それからは言葉を発することなく、ただ工廠長は沈黙を続ける。

周りにいるであろう四人からも、こちらに判断を委ねるようですつと黙っている。

少し緊迫した時間が過ぎたが、とつくに答えは決まっていた。

「……いいですよ、工廠長さん。むしろ、こちらから頼みたいと思つていたところで  
す」

工廠長は、驚いたような表情を浮かべて聞き返して来る。

「こ、こんな老いぼれでもいいのか……？」

「もちろんです。願つたり叶つたりですよ」

当たり前のように返答すると、工廠長は大きなため息を吐いて体の力を抜いた。

「そうかそうか。 てつきり断られるとばかり……良かったわい……」

「……それで、資材の事なんですが……」

話を本題に戻すと、工廠長は真面目な顔をして考え始める。

「うゝむ……おおそうじや！ まだ余つとる戦艦用の主砲があつたはずじや！」

「では、それをお願いできますか？」

「おお、任せてくれ！ 行くぞ、お嬢さんら……う？」

元氣よく返事をして歩き始めようとした工廠長だが、途端に声の調子を落とし首を傾げて考え始める。

「いち、に、さん……四人目はどこに行ったんじや？」

「四人目、ですか……？」

不思議に思い、後ろを振り返って人数を確認する。

暁と響と雷はいるが、電がどこにもいない。

「雷、電はどこにいるかわかるか？」

「電はここに……ってあれ？ さっきまで一緒にいたのに……」

雷は周囲を見渡して探す、電がいないとわかると声を出し始める。

「電……！ どこにいるの……！」

「電はここにいます！」

声のした方を向くと、満面の笑みを浮かべて電が立っていた。

何故か、ボーキサイトを両手に限界まで抱えて。

「電、その手に抱えてるものはどうした？」

「司令官さん！ ちょっと我慢できなくて、先に補給してきたのです！」

「補給？ どこにそんな資材が……？」

独り言のように呟くと、律儀に電は答えてきた。

「入り口に置いてあつた艦載機を解体してきたのです！」

ボーキサイトが出てきたり燃料や弾薬も補給できて、一石二鳥なのです！」

意気揚々と話す電だったが、場の空気が少し違うことに気づいたようで

戸惑いながらも言葉を続ける。

「あ、あのく、どうしたのです？」

電の問いに自分が答えようとしたが、それより早く工廠長が口を開く。

「お嬢さん……あんた、何を解体したんじゃ……？」

「いや、その……こ、これと同じものを、なのです」

そういつて電が床へ大量のボーキサイトを置き、いつの間にか持ってきていた荷台の

上から

何かを持って全員に見せた。

「……零式水上偵察機？」

それは入り口付近に置いてあつた、さび付いていた艦載機だった。

無意識に機体の名前を判別して口に出したが、直後に金属質な何かが床に落ちる音が

聞こえた。

「ワ、ワシの……ワシの宝物が……」



振り返ると、手に持っていたレンチを床に落として両手をつき、ぼつぼつと涙を落としている

工場長の姿があつた。

小走りで駆け寄り、しゃがんで肩をつかんで話しかける。

「しつかりしてください。まだ全部解体された訳じゃありませんよ」

「でも、ワシの……ワシの零式水上偵察機が……」

こちらの慰めは意味がなかつたらしく、さらに床に落とす涙の量が増えただけだつた。

「資材が支給されたら、開発用にちゃんとあげますから」

その言葉を言い終わった途端、工場長はガバツ！と顔を上げて自分を見つめてくる。

「お前さん、それは本当か!」

「え?……あ、はい」

「ワシに資材、くれるんじゃない?」

「え、ええ。支給されたら、ですけど……」

少しの驚愕と共に質問に答えると、工場長は床へ両膝立ちで天井に向かって

ガツポーズを決める。

「これで、これでまた開発ができるぞお!」

何となく仕草が子供らしいのに声は相変わらずお爺さん全開な工廠長に苦笑し、とりあえず皆に声をかけてみる。

「他にも解体するものがあるから、そっちの方で補給を——」

「できたのです！　しっかりと補給してほしいのです！」

話しかけている途中で、電が言葉を上書きしてきた。

「補給……？」

疑問に感じ、全員の様子を見る。

電だけでなく、他の三人とも先ほどより元氣そうな顔をして色の黒い何かを手を持っており、

それを口へと運んでガリゴリと硬質な音を立てながら咀嚼を始めた。

「なあ……何食べてるんだ……？」

啞然としたまま半ば無意識に問いかけると、暁は咀嚼のスピードを上げて何かを噛み砕き、

勢いよく嚙下してから口を開く。

「何って、弾薬に決まってるじゃない。ちゃんとした補給はレディーの嗜みよ」

「その弾薬はどうやって……？」

更なる問いかけに、可愛らしく喉を鳴らして何かを飲み込んだ響が答える。

「電が解体して渡してくれた。おかげで補給ができた」

「ちなみに聞くが電、何を解体した？」

「入り口付近にあった、さび付いていた艦載機なのです」

それを聞き終えるとまた同時に、床ヘッドサツ、と何かが倒れこむ音がした。

「ワシの……宝、が………」

再度振り返ると、床へうつぶせに倒れこんで意気消沈とした工廠長の姿が見えた。

「……工廠長さん……気持ちわかりますが、元気出してくださいよ……」

資材、いつかあげますから……」

「ワシの、ぐすつ……ワシのだから……」

男として、工廠長にとつての宝を失うという辛い気持ちは痛いほどわかった。

その気持ちに共感しながら、肩に手を置いて、工廠長が泣き止むまで静かに励まし続けた。

## 第7話 一日の終わり

「落ち着きましたか？」

「……なんとか、の。 面目ない……」

工場長が床へくずれ落ちて五分後、なんとか涙が止まるまで落ち着かせた。

今は、落としたレンチを片手に目をごしごしとぬぐっている。

「それにしても、お嬢さんらが艀装の解体をのお……」

「普通は必要ありませんが、できる艦娘もいますから」

工場長の独り言に補足を付け加える。

解体は普通妖精さんが行うものだが、ちょっとした勉強や努力次第で艦娘にも

艀装の解体はできるようになる。

現に横須賀鎮守府では、やり方はそれぞれ違うものの、着任している全員が解体作業を

一人だけで行える。

金剛と比叡は素手で豪快に、天龍と龍田は艀装の一種である刀や薙刀でスパスパと、赤城と加賀は何故か弓で射抜いたりしたりと訳が分からないができたりする。

余談だが、人間には艤装一つ一つが重過ぎて普通はしない。

しようとする、艦娘がするのに比べて何十倍も時間がかかってしまう。

「まあ、そのことはもういいわい。お嬢さんら、ワシの話を聞いてくれ」

工廠長が一言かけると、周りで様子を見ていた四人の視線が集まる。

「言っておくが、これからは無闇矢鱈むやみやたらに解体せんでくれ。ワシに言ってくれば

大抵のことはしちやる。特にそこの一番小さいお嬢さん！」

「は、はいなのですう……」

電が、今にも泣き出しそうな声で返事をする。

理由は工廠長が倒れてぶつぶつ放っていた独り言の中に、「あのお嬢さんめ」とか

「ワシの宝を勝手に解体しおつて」などを混ぜていたからだ。

そして、先ほどの強めな言い方と睨みが効いてしまったのか、電の両目の目尻には

涙の粒が浮かんできていた。

「ごめんなさい、ごめんなさいなのです、ぐすつ……」

しばらく工廠長が睨みを効かせていたためか、ついには本格的に泣き始めてしまった。

しかし、半ばそれを無視するようにして工廠長は話し始める。

「他のお嬢さんらもわかったかの？」

暁と雷はその言葉にゆっくりと頷くが、響だけは少し工廠長を睨んでそっぽを向き、電の方へ歩いて肩に手を置く。

「……電、大丈夫？」

「その白いお嬢さん！　ちつとはワシの話を聞かんかい！」

「電を泣かせたあなたの言うことを聞く筋合いはない。……大丈夫？」

「うえつ、ぐすつ……ごめんさい、なのです、なのです……」

とめどなくあふれ出ている涙を、響が拭き取りながら電の頭をなでる。

「よしよし。大丈夫、私がついてる」

「ひ、響ちゃん、響ちゃん……！」

さらに涙の量を増やし響の胸元へすがりつき、なでられるままにされている。

電をなでている響は、行動は優しいもののかかなり冷たい目をして工廠長を睨んでいる。

「ワ、ワシがなんかしたかのお……？」

「ええ。　独り言で思いつきり罵倒してました」

自覚していない隣の妖精さんのために説明し、続けざまに話し続ける。

「謝ったほうがいいですよ。　でないと、いつまでもこのままだと思えますけど」

「う、うゝむ……しかし……」

泣かせた自覚がないために謝りづらい様子だが、首を傾げて唸っている工廠長に響が追い打ちをかける。

「謝って。 でないと、私はあなたを許せない」

「……いや、じゃがのお……ワシは何も……」

「そうよ！ レディーを泣かせたら謝らないといけないのよ！」

「ほんと、電に謝りなさいよね！」

響の追い打ちに従って、今まで傍観していた暁や雷にまで言われ、工廠長は正しく四面楚歌な状態に陥った。

そのまましばらく、暁と響と雷から無言での威圧が続く。

おろおろとしたり傍に立っている自分にすがったりしてきたが、態度で「謝ったほうがいい」

的な雰囲気を出して無言を貫いた。

そして数分が経過した頃、ようやく工廠長が折れる。

未だに泣いている電ところまで歩いていき、首を垂れて独り言のように口を開く。

「……その、じゃな………すまんかった、お嬢さん……」

精一杯振り絞ったような声に暁と雷はなんとか納得したようだが、響は姉妹とは違っ

て

冷たい視線を工廠長にぶつけながら話しかける。

「こんなに泣かせて、それだけで足りると思う？」

「す、すまん……ワシが、悪かった……」

もう工廠長は、叫び声をあげて泣き出す寸前のような声しか出せなくなっていた。

もしかすると精神面はあまり強くないのかもしれないと思ったので、仕方なくではあるが

助け舟を出すことにする。

「響、一応謝ったんだ。許してやったらどうだ？」

「……司令官がそういうなら……」

渋々といった様子だったが納得したようで小さく頷き、未だに泣き続けている電に話しかける。

「ほら、謝ってくれたんだ。泣き止んで」

「ぐすつ、えぐつ……はい、なのです……」

目元を赤く腫れさせてはいるが、響の一言でなんとか涙は止まった。

「……よし、もうこの件は終わりだ。お互い気まづくならないよう、水に流してくれ」

「……了解」

他の三人が頷き響が返答したところで、工廠に来た二番目の目的を果たすことにす



る。

「工廠長さん。早速お願いしたいのですが、艀装の修理を頼めますか？」

「……ああ。そこらへんにでも置いといてくれ……」

まだ完全には立ち直っていないのか暗い声を出して指示を出し、それに従って暁がつけていた

艀装を取り外して文字通りそこらへんに置いた。

続いて外を確認しようと工廠の天窓を見ると、もう日が落ちて暗くなっていた。

「もう夜だし、今日はもう休んで明日また今後の計画を立てよう。」

工廠長さん、艀装の修理お願いします」

「……わかったわい。艦娘の宿舎ならここを出て左側の階段。」

司令室は船渠の正面の廊下を真っ直ぐ行つて右側じゃ」

「ありがとうございます。それではまた明日に。皆、そろそろ行こう」

そう呼びかけると全員領き、自分を先頭にして工廠の出入り口に歩き始める。

腹減つたな……明日は食料の調達だな。

そんなことを思いながら、意外と遠い出入り口へ向かつて歩き続けた。

……ワシも、弱くなったもんじゃのお……

10年間自分しかなかつた鎮守府へ流れ着いた若者を無言で見送り、未だ残る涙をふき取つてため息をつきながら思った。

この鎮守府がまだ機能していた頃は、こんなことでは泣きそうになつたりは絶対に無く、

誰が相手だろうと言い返して自分の主張を前面に出していた。

10年も一人でいるとこんなにも違うものか、と思いつつ、髪の毛の黒い艦娘の艦装を修理しようとレンチを片手に近づく。

昔は他の妖精に教えてもらつたりしてなんとかできたが、今は自分ひとりだけで見ただけでかなり損傷しているこの艦装を直せるかどうかわからない。

「……みんな、どこに行つたんじゃろうか……」

気が付けば、昔のことを思い出し出していた。

一緒にいた他の妖精や、工廠へと頻繁に訪れていた艦娘たち。思い出そうとすれば、全員外見も性格も声も全部思い出せる。

今はどこで戦っているのか、今まで自分に見せていたような笑顔を浮かべているのか。

忘れたくない思い出が、脳裏に浮かんでもう一度脳に刻まれて消えてゆく。

できることなら、昔に戻りたい。

……そんなこと、考えても仕方ないわい……

今は今、昔は昔だ。

そう思いなおし、久しぶりに触る艦載機以外の艀装の修理を始めた。  
ぶすぶすと黒い煙を吐き出し続けている艀装には、少し手間取りそうだ。

## 第8話 就寝場所は司令室

……疲れた……

かなり遠い出入り口へ歩いている最中、無意識に口から放たれた。

空腹のせいで足には少しづつ力が入らなくなっているのがわかり、早く休ませろと体全体から訴えられている。

工廠の出口はもうすぐで見えており、あと少しで休めることに心の中で安堵する。

「あの……司令官、さん……」

「ん……？」

呼びかけられたので後ろを振り返ると、電がまだ目元を赤くしたままの顔で

話しかけてきていた。

足を止め、怖がらせないよう態度に気を付けながら話しかける。

「どうした？」

「……さつきは、ありがとうございます……」

「私は何もしてないよ。お礼なら響に言ったらどうだ？」

「響、ちゃんに……？」

電が横にいる響を見つめると、かぶっている帽子を深くかぶりながら小さく言い返してくる。

「……私だって何もしてない。あの場を収めたのは司令官」

「でも、電が泣き止むまで頭を撫でてたじゃないか」

「……それは、そうだけど……」

口ごもる響に、暁と雷が自分に続くように話しかける。

「電を慰めたのは、他でもない響じゃない」

「そうそう。間違いない、一番電の為にしてあげられたのは響よ」

「……………」

二人の言葉を聞いて響は黙ってしまいが、それを意に介さない様子で電が近づく。

「……ありがとうなのです、響ちゃん。優しいお姉ちゃん、なのです！」

横からでもしつかりと分かる笑顔を浮かべ、響が横にたらしていた左手を握りながら言った。

お姉ちゃん、と言われた瞬間に少しだけ顔が赤くなったようだが、すぐにいつもの表情に戻り

電の手を握り返しながら口を開く。

「……………He<sub>ネ</sub> Sa<sub>サ</sub> a<sub>ジュ</sub> c<sub>ト</sub>to (どういたしまして)」

「こちらこそ、なのです！」

相変わらず響の言葉が分からないが、会話の流れからして話が一段落ついたことがわかり、

会話が長引かないうちに話しかける。

「ここに立つてても仕方ないし、そろそろ行こうか」

全員が一樣にして頷いたので、体の向きを変えてもう見えている出口まで歩き始める。

そして数分もしないうちに工廠を抜け、工廠長に言われた宿舎へ向かう階段の前まで来た。

「それじゃ、今日はここで解散だな。何か寝る前におきたいことはあるか？」

「……特にないわ」

「暁と同じ」

暁と響の言葉に他の二人も頷く。

「そうか。私は工廠長が言つてた司令室で寝るから、用があつたら来てくれ」

「わかつたわ」

暁がそういうと全員階段を上っていくので、自分は司令室へ向かうことにした。

先ほどまでの記憶をたどって船渠前の廊下までたどり着く。

まっすぐだったよな……

言われたことを思い出しながら歩いて一分ぐらいすると、工場に行くときに見た『↑  
工場』の

文字より薄く『司令室』と書かれている部屋が見えてきた。

ドアノブへ手を掛け、ガチャリと音を立てながら部屋に入り後ろ手に閉める。

なんだ、さっきの部屋か……

入った部屋は、自分が目覚めた部屋だった。

部屋の奥の方にある窓から、少し眩しいくらいに月からの光が入り込んでいる。

窓の前に立ち、外の風景を眺める。

正面と右側には海が見え左側にはこの島の緑が見えるのだが、日が沈んでいることも

あつて

ほとんど海しか見えない。

『海の方こうには、陸に住む全ての敵が潜んでいる』

物心ついて初めて覚えたのが、教官のその一言だった。

人類はもちろん動植物を含めたすべての敵、それが深海棲艦。

そう教わってきたが、果たして本当にそうかと思いつけている。

そう思い始めたのは、敵の情報を手に入れるために、人語を話せると言われていた空

母ヲ級を

鹵獲して尋問した時の事。

た。　　こういうこともあると教官より立場が上の上司に言われ、尋問の一部始終を見学した。

た。　　そしてそれは、思わず目を押さえなくなる様な、『残虐』の一言では表せない光景だった。

を　　赤くなるまで熱くなった鉄の棒を押し当てられ、電流を流され、何人もの大人に刃物を

突き立てたりされ、ヲ級は悲鳴を上げていた。

た。　　結局ヲ級から得られた情報は何もなく、書類には最後に残された一言だけが綴られた。

「キエタクナイ……シニタクナイ……！」

ている。　　その言葉は当時12歳だった自分の耳にもしつかりと届き、忘れられない記憶となっている。

あの言葉に交じていた悲しみは、自分たち人間となんら変わるものはなかった。

尋問が終わってヲ級の死骸を焼却処分した後、教官に「本当に深海棲艦は自分たちの敵なのか」



と悲しみに流した涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら問いただした。

返ってきた答えは「わからない」だった。

だが、その後にも付け加えた。

奴らは見境無く襲ってくる我々の敵だ、たとえ人間のような感情があらうと人類の平和を脅かす

究極的な敵だと、何度も何度も繰り返して。

横顔に、一筋の涙を流しながら。

「教官……奴らは、敵なんでしょうか……」

無意識に呟いてみるが、当然返ってくる答えはない。

……敵、だよな。

教官も言った通り、深海棲艦は自分たちを襲ってくる。

それを迎え撃ち陸に住む全てを守る、それが自分たち提督の使命だ。

そのために今まで必死に教官からいろんなことを学び、今あるものを守ろうと決心した。

今さら悩んでも仕方が無いことだ。

そろそろ、寝ようかな……

何分考えていたか分からない時間の後にそう思い、自分がかけていた少しぼろぼろな

布を

床から拾い上げて寝る場所を探す。

提督の机の椅子では寝にくいと思うし、部屋にあるのはいかにも堅そうな木でできた長椅子も

体が痛くなりそうで、床で寝るのは論外だ。

早速寝る場所に困って部屋をうろうろしていると、コンコンと音が部屋に響いた。

『司令官、入ってもいいかしら?』

「暁か。いいぞ」

答えて数秒後、ガチャリという音と共に他の三人も連れて全員が入ってくる。

「どうした? みんな宿舎の方に行ったんじゃない?」

「扉が歪んで開かなかったのよ。壊して入るのもどうかと思って……」

司令官、この部屋で寝かせてもらえないかしら?」

「まあ、別にいいんだが……」

言葉に詰まりながら先ほどと同じように部屋を見渡すが、見えたのはお世辞にも寝やすい  
すい

とは言えない椅子や床のみだ。

「……この部屋、寝るところがあんまりないぞ?」

「別に、寝られればそれでいい」

「そうか。 なら……」

響の一言を聞き、手に持っている布と自分の着ている軍服の上着を脱いで机の上に置く。

「寒いだろうから、嫌じゃなかったらこれらを使ってくれ。」

私は、部屋の隅で寝るとするよ」

そう言つて暁たちから一番遠い部屋の隅へ行き、壁に背を預けて座る。

薄いシャツ一枚しかないため壁から物凄い冷たさが襲い、部屋の冷気もむき出しの腕の肌から

着実に体温を奪っていく。

だが、この状態で寝て風邪を引くほど、教官に鍛えられたこの体は弱くない。

冷たさに身を震わせながら目を閉じようとすると、暁から声がかかる。

「……ねえ、司令官」

「どうした、寝ないのか？ ……やっぱり私の上着は嫌だったかな」

「いや、そうじゃなくて……えつと……」

暁が言葉に詰まっておろおろとしていると、響が言葉を繋げてくる。

「なんで、私たちにここまで優しくするんだい？」

「なんで、つて言われてもなあ……」

「私たちは、いくら人間に似ていても兵器は兵器。寒くても私たちは風邪を引かないし、

司令官が使う方が明らかに合理的。……どうして、私たちにここまで優しくするん

だい？」

響の問いかけにおかしく感じ、苦笑しながら答える。

「私はな、教官から教わったんだ。艦娘は人間と同等に扱え、つて。それだけじゃない、つて、

教官の下で人間と同じかそれ以上に生き生きとしている艦娘たちを見てきた。

とても、物と同じようには扱えないし扱いたくない……というのが私の考えだ」

口から出るのに任せて話し終わると、暁たちはお互いの顔を見合わせていた。

その中で響一人が抜け出して布と上着を手にとってこちらに歩みより、自分ごとかけて

自分と同じようにして左に座り込んで密着してきた。

「ひ、響……!?!」

「……知ってるかい、司令官？ お互いは、離れるより密着してるほうがより暖かくなるんだ」

「ま、まあ、それはそうだが……」

響に言われたことで暖かさを意識してしまい、続く言葉が出ずに固まってしまふ。知らずのうちに緊張している自分をよそに、響は静かに他の三人へ話しかける。

「私たちはどうやら、司令官のことを間違えて認識していたみたいだね。

暁、これでも信用できないかい？」

「……そうね。私が間違ってたわ」

言い終わると同時にこちらに歩みより、暁も響と同様に右側へ腰を降ろす。

「あ、暁まで……」

「……私、司令官のことを誤解してたわ。今日は、こうさせて……」

誤解してたから何故密着なんだとか何を誤解してたのかなど疑問に思うが、それを口に出す前に

響が残りの二人へ話し始める。

「ほら、二人も早く」

「……わかったわ」

「……なのです」

響が同じようにしろと手招きするのに二人は従って布と上着へ潜り込み、雷は右側、電は左側へ覆い被さるようになってきた。

自分がどう反応していいかわからずあたふたしていると、響が二人へ問いかける。

「どうだい、二人とも」

「……悪く、ないわね……」

「暖かいのです……」

問いかけに答えた二人を見て一つ頷いた響は、頭をこちらの左肩に乗せてくる。

「……明日は早いよ、司令官」

「……わかってるよ」

響の質問に答えた時には、響を除く全員が寝息をたて始めていた。

「……おやすみ、司令官……」

「…………おやすみ、響」

少しの沈黙の後に答え終わった頃には、響も皆と同じように寝始めていた。

この状態で寝るのか……

布と軍服の上着は五人全員を被せるのには小さく、現に自分の両足首までがはみ出ている。

しかし、周りで寝ている四人のおかげで全く寒くない。

久しぶりに感じる他人の体温を感じながら、自分は背後の壁に頭を預けて目を閉じた。

## 第9話 暗い夢と包容な心と涙

……ここは、どこだ……？

気が付くと、自分はどこかに立っていた。

周りを見渡すと、どこかの広い倉庫のようなところにいるのが分かる。

そして、白や黒の服を着た様々な人が立っており、どこか一点を見つめている。

『それではこれより、空母ヲ級への尋問を開始する』

水中で聞いたような変な声が聞こえ、その場にいた自分以外の全員が敬礼をする。

一体どうなっているのかわからず、人の間を抜けて全員が見ているものを目の当たりにする。

「……あの時の、ヲ級……？」

体全体を鎖で何重にも巻かれ、艦載機を出すであろう部分は原型を留めておらず、人間なら

確実に死んでいるであろう傷を負った姿が見える。

それは紛れもなく、あの時悲痛な叫びをあげていたヲ級だった。

これから起こるであろうことを否が応でも思い出してしまい、言葉遣いなど気にもせ

ずに

周りの人に向かって叫ぶ。

「やめろよ！　こんな、こんなことなんてやめろよ！」

だが、聞こえていないのか誰一人と反応せずにヲ級を見つめ続ける。クリップボードとペンを持った誰かが、ヲ級へ近づいて話しかける。

『単刀直入に問う。　貴様らは、なぜ我々を襲う？』

その問いかけにヲ級は垂れている顔を微動だにせずに沈黙を続け、そのまま時間が流れる。

答えないことを悟ったのか問いかけた人が手で合図を出すと、誰かがコツコツと音を立てながら

赤く灼けた鉄の棒を持ってきて、おもむろにヲ級の腹へと突き立てる。

「アアアアアア!!」

あまりにも生々しい、人間とまったく変わらない悲鳴が自分の耳に届く。

……いやだ。

心の中で強く思うが、どうすることもできない。

『まだ、話す気は無いのか』

続けて聞こえた声の後に、コードに繋がっている棒を持ってきて、ヲ級の体に当てる。



バチバチ！ という機械がショートしたような音と共に、再びヲ級の絶叫が響く。

こんなもの、見たくない。

そう思うが、目が離せない。

体が、言うことを聞かない。

『さっさと話したらどうだ』

更なる合図と共に、今度は一振りの刀を何人もが抱えて持つてくる。

焼け焦げたヲ級の腹に突き立て、段々と押し込んでいく。

「グツ、ア、アア！」

脳に直接響いた、苦痛の叫び声。

「ハア、ハア……」

ここまでされてもヲ級は顔を上げず、時折うめきながら荒い呼吸を繰り返すだけ。

腹から刀が抜かれ、今度は機械で固定された主砲らしき艀装が出てくる。

こんなの、おかしいだろ……！

その考えと共に艀装が火を噴き、ヲ級の右足を根元から吹き飛ばす。

もう、周りの音は何も聞こえなくなっていた。

痛々しく響くヲ級の叫び声も、無慈悲にヲ級を死に追いやる艀装の砲撃音まで、何もかも。

次々に、左足、右腕、左腕を撃ち抜かれ、残ったのは胴体と頭だけになった。どす黒い血が辺りを赤く染め、周りに転がる見たことが無いような形の四肢。それらを意識した瞬間、悲しみが胸を埋め尽くし、両目から涙が零れ落ちる。敵だからといって、こんなことをするのは――

「……あんまり、じゃないか……!」

流れる涙は、いくら服で拭おうと目を閉じようと止まらない。

そんな中、始めてヲ級が顔を上げて自分を見つめる。

「キエタクナイ……シニタクナイ……!」

頭の中で直接響いた、思い出したくもない、恐怖で震える声。

記憶の中ではここで終わっていたが、ヲ級の口からさらに言葉が出てくる。

「シニタクナイ……タスケテ……」

涙で揺れる視界の中で、口がそのようなように動くのを見て、そしてはつきりと聞こえた。

……人間だとか人間じゃないとか、そういう問題じゃない……

無意識にヲ級の方へ歩み寄りながら、頭の中で考えがあふれ出てくる。

大切なのは、大切なのは――

「……心の、在り方なんだ……!」

傷だらけのヲ級の体と首へ腕を回し、鎖ごと抱き寄せる。

自分の体がヲ級の血で赤く染まっていくが、意識せずに泣きながら腕に力を込める。ほんのりと温もりを感じたが、流れ出る血の量に比例するように、死人のように冷たくなっていく。

そして、ヲ級の呼吸が完全に止まり、死んだことを悟った。

もう必要性もないのに、涙を流しながら亡骸を抱きしめ続ける。

これしか、自分に来ることはないから。

時間が過ぎ、何分も何十分も何時間も抱きしめ続けた。

理不尽に殺された、ヲ級の魂が少しでも報われるように、心の底から祈りながら――

……あれ、朝……？

近くにある窓から差し込む日差しの中、雷はゆっくりとうつつ伏せの状態から体を起こした。

いつもと空気が違い、明らかに自分のだけではない暖かさを感じている。

不思議に思いつつ目を開けると、何故か正面には臨時の司令官が、左右には暁たちがあどけない

顔をしながら寝ていた。

どうしてこうなっているかをすぐに思い出し、少し顔が熱くなるのを感じた。

私、なにやっていたんだろ……

見ず知らずでしかも会ったばかりの人にこんなことをするのは、普段の自分ではあり得ない。

それにも関わらず大胆にも一緒に寝るようなことをしたのは、全部響に言われたからだ。

昨日気絶した司令官を部屋まで運んで集まり、響が「信頼できるかどうか試す」と言うてきた。

それに対して、暁たちと否定した。

気難しい人だったなら、自分のことしか考えない人だったら、怒られたら、殴られたら、蹴られたら等、考えられる全てを話して止めようとした。

艦娘だって怒られれば心が痛むし、暴力を振るわれたら怪我だってすることもある。

それを知っている筈だったが、「皆に試せる？ いつかは、誰かが知ることになる」と

いう

大人びた一言を言い切られてしまい、暁ですら黙りこんでしまった。

全てを響に任せた昨日の夜、信頼に値する人だとわかってとてつもなく安堵した。

……この司令官なら、私は……

目の前で寝ている会ったばかりの人に心を完全に許しかけたが、直前で考えを改める。

期待するだけ、事実裏切られた時の悲しさは大きい。

その事を知って以来、基本的に暁たち以外は信用しないことにしたのだ。

それに、自分は——自分達は、単冠湾泊地から逃げられない。どれだけ望もうと、あの司令官から離れることができないことを、とつくの昔に痛感した。

だとしても、私は……

どれだけ辛くても、明るく強く振る舞い、家族も同然の暁たちを不安にさせず、頼るだけでなく頼られる存在になろうとしている。

その決意を、これぐらいで崩してはいけない。

そう改めて思った、その時だった。

「……つく……うっ……」

寝ているはずの司令官が、突然泣き始めた。

な、なによ……

自分が何かしたのかと今までの行動を振り返るが、泣かせてしまうようなことはしていないと断言できる。

何があつたのかと心配になって起こそうとするが、自分が動くより早く司令官の両腕が動き、

自分の体を抱いてくる。

「ちよ、ちよっ……っ！」

寝ている人だから簡単にできると思ってた腕から抜けようとするが、寝ているのにしては

あり得ないぐらいの力で抱き締めてくる。

自分の胸元に額をあてて涙を零す司令官は、頼もしく優しくかった昨日とは違い、別人ではないか

と思わされるほど弱々しい印象を与えてくる。

どうしてこんなに弱くなるのか、どうしてこんなに泣くのが気がなくなって、気が付けば

両手で司令官の体を揺さぶっていた。

「……起きて、司令官」

何回か揺さぶると腕の力が少し抜け、司令官が涙で濡れた顔を上げる。

「……いか、ずち……?」

抱きついたまま寝ぼけているように口を開いた後、少しだけ時間をおいて話しかける。

「……ねえ、司令官。なんで、泣いてるの?」

「泣い、てる……?」

自分に言われて初めて気付いたらしい司令官は、目元を指の腹で拭って泣いているこ

とを

自覚すると、途端にまた涙が流れ始める。

「あの時、私は、私は……！」

声になっていないような音を口から漏らしながら、自分の体から離れて頭を抱え込んでしまう。

「敵じゃ、敵じゃないのに、なんで……どうして……！」

司令官の言っている意味が、全くわからない。

だが、とても辛く、そして悲しい何かが、今の司令官を泣かせていることは容易に理解できた。

私も、昔は……

泣き続ける司令官を見て、いつしか昔の自分の姿と重ねていた。

単冠湾泊地鎮守府に着任してからしばらくの間、馬が合わない艦娘やちよつとした失敗で

怒られたりして、毎日静かに部屋でうずくまって泣いていた。

なんでこんなに辛いのか理解できず、電よりも泣いていた。

だがある時、暁に抱きしめられ、「私がついてる。大丈夫、辛くても大丈夫」と

励ましてくれて、それからは泣かないように心の中で自分を戒めた。



正直、見ず知らずの場所で見ず知らずの艦娘に囲まれ、理不尽と思うほどに怒られることが、

心の底から怖かった。

暁にあの言葉を言ってもらえてなければ、今も電より泣き虫のままだった。たったあの一言で、自分の心は壊れずにすんだ。

もしかしたら、今日の前で泣いている司令官にも同じことが言えるのだろうか。

……私、なに考えて……

頭の隅で否定的な考えを持つ一方で、司令官のために何かできるのではないかと、思い始めていた。

あの時、暁が私にやったようにすれば……

両手を伸ばして司令官の頭を両手で抱きしめようとするが、直前で止める。

これをする事で自分の心が変わるのではないかと、確信は持てずとも感じたからだ。

一回、一回だけよ……

頭を軽く横に振って先程までの考えを振り落とし、覚悟を決める。

悲しみで流す涙の辛さは、自分も知っているから。

ゆつくりと両腕で司令官の頭を包み込み、少しだけ力を込める。

「……司令官、私がついてるわ。大丈夫、大丈夫」

頭を撫でながら赤子をあやすように言うと、堰を切ったように嗚咽交じりの濡れた声に変わる。

「……うつ、ああ、ああっ！ あああ！」

胸元を掴んで、声を上げながら泣きはじめた。

司令官の中に渦巻いている辛さや悲しみを消してあげられるように、頭をなで続ける。

「そうそう……もつと、私に頼ってもいいのよ、司令官……」

「あああ！ うつ、あ、つく、あああ！」

かなり大きな声で泣いているが、疲れているのか周りの誰も起きない。

泣きじやくる司令官を、窓から差し込んできた朝日の中、優しく撫で続けた。

## 第10話 二日目の朝

……すごく恥ずかしいことをしたな……

雷に起こされてひとしきり胸元にすがって泣いたあと、自虐的な笑みを浮かべて思った。

もう18になった大人な男が、自分が指揮するはずの艦娘にすがって、それこそ子供のように

泣き喚いてしまったのだ。

恥ずかしいやら何やらで一刻も早く離れたいと思うのだが、何とか落ち着いたあとも雷が自分を

抱きしめていて、離す気配を一向に見せない。

「……司令官、落ち着いた？」

「……何とか、な。 ありがとう、雷」

「また何かあったら、私に頼ってよね」

「恥ずかしいから、二度目がないように気を付けるよ」

雷と会話しながら少しずつ離れようとするが、背中と後頭部に回されている腕に力を

込められて

胸元へと引き寄せられてしまう。

離れたい、という自分の意思は全く通じていないようだ。

「……雷、そろそろ離してくれないか？　暁たちが起きたらどうするんだ？」

「あ……」

少し遠まわしに言ってみると、やっと通じたのか雷の両腕から開放されて背中を伸ばすことができるようになる。

「さてと、これからどうするかな……」

腕を組んで独り言を呟いてみると、腹の辺りが空腹に耐えかねたのか音を鳴らし始めた。

「……食料調達、だな」

「そうみたいね。でも、食べ物なんてあるのかしら？」

「確かに……こんな寒いところになあ……」

雷の言葉で自分が今いる場所を思い出して、頭をひねりつつ考え始める。

自分が流れ着いた島は、それこそ水が凍るか凍らないかという寒い気候の島だ。

そんな寒い、しかも人間の手が10年もかかっていない島に食物があるかどうかわか

らない。

鎮守府内に食べ物は残っていないだろうし、残っていたとしても10年も放置されて熟成しすぎているようなものは、食べないほうがずっとまだ。

何はともあれ、今日はこれから先のことも予定を立てていこうと考えた。

「とりあえず、この話は工廠長も交えて話をしよう。呼んでくるから少し待っていてくれ」

「わかったわ」

雷の返事を聞いて立ち上がり、布の下に隠れている上着を取り出し、布をまだ寝ている曉たちに

かけなおして扉まで歩く。

上着もまだ曉たちに使わせてやりたかったのだが、この寒さの中で薄いシャツ一枚のみで

隙間風が入り放題な鎮守府内を闊歩する、という大胆な行動はできないので断念した。

上着をゆつくりと着て、ボタンを上からとめていく。

残っている自分以外の温もりを少し意識して鼓動が速まるが、なるべく気にしないようにして

扉を開けて廊下へと出る。

「うう……やっぱ寒いな……」

冷気が上着越しにも肌へ伝わってきて、全身に鳥肌を立てながらも工廠のほうへ歩き始めた。

……行っちゃった……

司令官が後ろ手に閉めた扉の音を聞いた後、なんとなく寂しい気持ちになる。

つい先程まで腕の中にあつたぬくもりが、急にいなくなってしまったからだ。

離したくないと思っていたのに、暁たちに見られるかもしれない、と思った瞬間に

恥ずかしくなってしまった自分が分からない。

ただ暁にしてもらったことをしていただけなのに、どうして恥ずかしくなったりしたのか、

気持ちを落ち着かせた今でも分からない。

自分で自分を抱きながら、残っている熱を感じ取る。

どうして、あつたかいのかしら……

物理的な暖かさとともに、別の意味合いを持つであろう何かも感じた。

そのままの姿勢で目を瞑って考えても、やはり答えは出てこない。

「……なに、してるんだい……?」

「わひゃ!」

唐突に声がかかってきたので驚いてしまい、座っているのにもかかわらず数cmほど後ろへ下がってしまう。

「……声が大きいよ、雷」

「ご、ごめん響……」

しかめつ面をしながら響が小さく言うと、やはり自分の声が大きかったのか、他の二人も

ゆつくりと体を起こし始める。

「もう、朝……?」

「おはよう、なのですう……」

二人が目を覚ましたのを見て、響がため息をつきながら話しかけてくる。

「やっぱり起きてしまったね。朝だし、ちようどいいんだろうけど」

「……そういつてもらえて助かるわ」

少し苦笑しながら答えると、暁から寝ぼけているような声がかかってくる。

「あれ、司令官は……?」

「今後の予定をたてるって言って、あのお爺さんを呼びに行ったわ」  
「……わかったわ」

「暁は朝に弱いことを知っているので、分かっているような分かっていないような返事に」

響も自分も突つ込まない。

その代わりだろうか、響からつい先程聞いたような質問をしてくる。

「そういえば、さつき雷は何をしてたんだい？」

「え？ さつき、つて？」

「ほら、腕を掴んで目を閉じて、すごく嬉しそうな顔をしてたじゃないか」

「う、嬉しそう……？」

響の言葉を聞いて、先程の自分を思い出してみる。

確かに、あまり自覚はなかったが、頬がっぴあがっていたような気がする。

それを思い出した途端に顔が熱くなって、勝手に言葉が口から出てくる。

「ち、違うわ！ 全然、少しも嬉しそうになんかしてないわ！」

「雷ちゃん、何してたのです？」

自分の必死な反論を無視するかのよう、完全には目が覚めていない様子の電が問いかける。



響がこちらを見て少し笑った後、なんともわざとらしい口調で答え始める。

「こう自分を抱きしめながら、とても嬉しそうにしていたね。 見ているこっちも、

段々と嬉しくなるようなとびっきりの笑顔で——」

「違う、違うわ！ そんなこと、私はしてないわよ！」

「雷ちゃん、可愛いのです！」

「電、違うわよ！ 私がそんなことするわけないじゃない！」

自分は顔を真っ赤にして反論していることを自覚しながら叫び、それを見て響と電が笑い、

寝ぼけている暁はぼーっとしている。

単冠湾にいた頃には滅多になかった、誰も気にせず怒鳴ったり笑ったりするこの時間だけ、

胸の中には幸せで溢れていた。

いつかこういう毎日が送れたらな、と無意識に思うほどに、幸せだった。

「……やっぱり広いな……」

工廠長を呼びに来た自分は、再び工廠の大きさに感心していた。

どうして、国内でも最大と言われている横須賀鎮守府の工廠の倍以上あるのか、と不思議に思えてならない。

その事は後々工廠長に聞くことにして、当初の目的を果たすために中に入る。

昨日と変わらずペンギン人形や錆びた艦載機などが散らばっているが、それらを見つめて

初めて工廠長とあった場所へ向かう。

そして、途中で少し悩みはしたものの、何とかその場所へついた。

そこでは、工廠長が金槌を振ってカンカンと金属質な音を出しながら、何かを叩いて

いた。

「これで、最後じゃー！」

その一言と共に金槌が大きく降り下ろされ、一際大きな音を響かせた。

「ふう、久しぶりで疲れたわい……」

肩を金槌でドスンドスンと叩いている工場長だったが、こちらに振り向いて空いている。  
左手を上げて挨拶をしてくる。

「おお、お前さんか」

「ああ、すみません。」

「お邪魔だったでしようか」

「いやなに、ついさつき終わったところじゃ。ほれ、新品同様にしてやったわい」

そう言つて工場長が体をずらし、直したばかりだと言う艀装を見せてくる。

だが、その艀装はどう見ても普通ではなかった。

「あの……これ、昨日修理を頼んだ艀装ですよね？」

「もちろんじゃ。見てわからんかの？」

「あ、いえ、わかるんですが……」

どうしても目の前のものに対して納得できず、頭をポリポリと搔いてから話を続ける。

「……どうしてこんなに『真っ黒』なんですか？ 色がもう艦装じゃありませんよ」  
今自分が見ている艦装は、どこから見ても『黒』以外の色が見当たらないのだ。

普通の艦装というのは多くが灰色で、あつたとしても暗い藍色ぐらいだ。

なのに、どれだけ目を凝らしてもその藍色以上、いつそのこと闇といつてもいいぐらいに黒い。

「何言つとるんじや。一緒に直した小さい主砲を見るに、あのお嬢さんらは駆逐艦。

駆逐艦は、夜戦で活躍してなんぼの艦種じや。そうじやろ？」

「え、ええ、そうですが……」

「夜の闇にまぎれて奇襲をかける。そのためには、見つからないように行動するのはもちろん、

身に着けている物の色も重要になる。艦装の色だって含まれておる。こういう

色のほうが

実際分かりにくいのは見ての通りじや」

何年も前に習ったことのなかにはなかった情報に対し、工廠長が納得できるような説明を

してくれるので、案外素直に理解できた。

「……なるほど。確かにそうですね」

「そうじゃろそうじゃろ。それで、ワシに何の用じゃ?」

「あ……」

工廠長に言われて忘れていた本題を思い出し、少々間拔けな声を聞いて呆れたような声色で

話しかけてくる。

「なんじゃ、忘れておったのか」

「……お恥ずかしながら……」

雷に抱きしめられた時とはまた違う恥ずかしさを感じ、右手で頭を掻きながら答えた。

それを聞いて、工廠長は肩を落としながら話し始める。

「はあ……もう一度聞くが、何の用じゃ?」

「これからのことについて少し話し合いたいと思ひまして。司令室まで来てもらえませんか?」

「よし、わかった。それじゃ、いこうかの」

金槌を腰に吊られているポケットの中に入れ、賛同の意を示してくる。

それを確認したところでしゃがみ、右手のひらを上にして工廠長の目の前へ差し出す。

背が人間より極端に低く、司令室までは遠いだろうと考えたからだ。

「乗りますか、工廠長？」

「気が利くの。それじゃ、失礼して」

そう言つて工廠長は中指の先からよじ登り、登つたのを確認してからゆっくり立ち上がる。

「では、行きましようか」

「おお。よろしく頼む」

工廠長が返事をしたのを聞いて、右手をなるべく動かさないようにしながら歩き始めた。

## 第11話 工場長との会話

工場長を手のひらに乗せて歩き始め、工場を出たあたりで話しかけてきた。

「そうじゃ。お嬢さんらは呼ばんのか?」

「そのことなんですが、扉が歪んでいて開かないと言っていました。

後でなんとかかしていただけませんか?」

「おお、任せてくれ。ところで、昨日お嬢さんらはどこで寝たんじゃ?」

「仕方なかったので、私と一緒に司令室で寝ました」

ほんと、どうしてこうなったんだろうな……

表情に出さずに心の中で落ち込んでいると、工場長がにやにやと笑みを浮かべており、

わざとらしい口調で口を開く。

「一緒に寝た……ほお、なるほどのお……」

「な、なんですか……?」

「いや、別に何でもないわい。ただ、『若い』のお……とな?」

工場長が言ったことの意味がわからず、空いている左手を顎にあてながら考えるが、

全然理解できない。

「若いつて……どういうことですか？」

「ここまでいつてわからんのか？ まったく、汚れない綺麗な心を持つてるのお。

いいか？ ワシが言いたいのは、夜伽じやよ。よとぎ。してもらつたんじやろ？

いやはや、若いとは素晴らしいものじやおく」

本当に10年間一人でいたとは思えないほどペラペラと話す工廠長の言葉に、

否応なく唾然としてしまう。

夜伽、つまり男女が寄り添って寝るということであり、厳密に言えば夫婦の夜の営みである。

そう意識した瞬間、顔は一瞬で熱くなり、足の回転を速めながら言い返す。

「ちつ、ちち違いますよなに言ってるんですか!?! しかも暁たちは艦娘ですよ!?!」

「ほお、違うのか。これはまた意外じゃのお」

「当たり前ですよ！ 海軍規定条約第9条第1項『提督、艦娘卜性的ナ関係ヲ持ツベカラズ』、

及び第3項『第1項、又ハ第2項ニ違反スル者、強制退職、及び海軍永久追放ニ処ス』とあります！ これをわかつていながら手を出したりしませんよ!?!」

顔を真っ赤にしていることを自覚しながらも、必死で頭の中から条項を思い出して怒



鳴った。

海軍規定条約とは、艦娘という存在が認知されて間もない頃に発表されたものだ。

この条約は、艦娘は兵器、すなわち『物』だと認識していた提督に物理的・性的暴力を

振るわれた艦娘が数多く、それを規制するために発表された。

艦娘にも基本的人権を与える、ということから始まり、先ほどの怒鳴った言葉の中身は

その中の第9条というわけだ。

「じゃが、その条約にはこうも書いてあったはずじゃ。 第9条第4項、『第3項二オイ

テ、艦娘

自身ノ承諾ヲ得ラレル場合、上項ノ内容ヲ全テ無効トスル』じゃったかの？ そうい

うのが

確かあったはずじゃぞ？」

「昨日初めて会った暁たちが、簡単に承諾するわけないじゃないですか！」

「若者よ、一つ言っておくぞ？ 艦娘じゃろうと、心は人間と変わらん。

一目惚れという言葉があるように、一瞬で恋に落ちたりするんじゃないぞ？」

「深海棲艦が攻めこんできているこの時期、恋なんかしている暇はありませんし、それは

暁たちも

重々承知の上なはずです！」

気がつけば、恥ずかしさで怒鳴っているというより、工廠長の物事を軽く見ている態度が

理解できずに怒っていた。

そんな自分の僅かな怒鳴り方の違いを感じ取ったらしく、工廠長はきよとんとした目をして

啞然としながら自分を見つめていた。

「……すみません。少し感情的になつてしまいました……」

自分の行動に対して反省しながら謝ると、工廠長は真剣な表情に戻り、先ほどのからかうような

口調から一転して落ち着いた声色で話し始める。

「……いや、別に謝らんでもいいわい。仕事に対して責任を抱きながら務める。素晴らしい……誇つてもいいぐらいじゃ。ちと、お前さんを見直したわい」

「そう、ですか……ありがとうございます」

「礼には及ばんわい。それとなんじゃが——目の前壁じゃぞ？」

「へ？」

工場長の言葉に驚いて下げていた視線を上げると、本当にすぐ目の前に壁があった。目視で壁まで5cm、回避不可能だ。

「ガハッ！」

したたかに額と工場長を乗せていた右手を壁にぶつけ、仰け反りながら後退する。途中でこけそうになるが、右足を思いつき後ろに下げて回避する。

「うあ……頭が……」

咄嗟に振り上げていた右手をぶつけた額にあてがうが、あることに気がついた。

先ほどまで話していた相手——工場長がいないのだ。

「い、工場長!？」

慌てて辺りの床を見渡すが、どこにも手のひらサイズの生物は見当たらない。

どこに飛ばしてしまったのかと焦りが生まれてくるが、遠くを探していると不意に視界の

上の方に見慣れない影があった。

「シユ〜ワッチー！」

それは、謎の言葉をお爺さんボイスでかましながら、見事に両手を斜め上に広げた状態。宙に

舞っている工場長の姿だった。

………は？

激しく頭の中で先ほどの台詞に対する疑問が湧いてきて、段々と落ちていく工場長の姿を

ただ目で追うことしかできない。

半秒後、気づいたときには工場長の目の前はもう床だった。

「——ッ！」

間に合え、と強く願いながらヘッドスライディングの要領で両手を工場長の方へ投げ出す。

身長が人間の足首に達するかどうかの妖精さんでは、この高さから落ちれば怪我どころではなく

本当に死んでしまうかもしれない。

そう思つて手を伸ばす——が、反応が遅かったためか届かない。

せめて怪我で済むように、という自分の考えと同時に工場長が床と触れる。

「ふんっ！」

気合のこもつた声と共に、工場長が前方へごろごろと転がり始める。

………は？

今度は工場長の行動に再び啞然とし、地面に倒れこみながら目で追うことしかできな

い。

そのまま五回転ぐらい転がり続け、最後は受身を取って六回転目で立ち上がる。「ふう、綺麗に決まったわい」

……………なにが、どうなったんだ……………?

自分が床に倒れていることも忘れ、しばらく腰に手を当てて自画自賛している

工場長を眺めていた。

工場長はひとしきり何かに対して頷いた後、こちらに向いて近づきながら話しかけてくる。

「お前さん、大丈夫かの？」

「……………ええ、大丈夫です。そちらは？」

「もちろん、見ての通りの無傷じゃ。それで、いつまで寝そべっておるんじゃ？」

「あ……………」

工場長に言われて自分が未だに床へ倒れこんでいることに気づき、工場長に右手に乗るように

催促しながら立ち上がる。

「悪いの。いよつと」

「……………いろいろと聞きたいんですが、なぜ傷一つ無いんですか？」

「ま、少し時間もかかるし歩きながら話そうかの」

その言葉を聞いて、行き過ぎた廊下を戻るために歩き始める。

「なぜワシが無傷なのかというところじゃな、この10年間のおかげなんじゃ」

「……どういことですか？」

「艦載機乗りには憧れていたワシは、初めて艦載機を開発したとき、試し乗りをしたんじゃ」

「でもそれって……」

工廠長の話す内容に、首を傾げずにはいられなかった。

妖精さんの向き不向きというのは、人間で言うような『上手にできない』ではなく、『やっても絶対にできない』というものなのだ。

開発ができて艦載機に搭乗させれば起動すらままならず、逆ならば失敗作であるペンギン人形以外何も手に入らない。

「ワシも最初の頃は、エンジンの始動すらできんかった。じゃが、いろいろいじっておったら

急に動き出して、そのまま乗って空中へ発艦じゃ」

「……それでどうしたんです？」

「……案の定、工廠の床に激突して鉄屑になったわい。一ヶ月間、まともに動けんかつ

たかの」

「ははは……」

生きてるのがすごい……

脳裏でそんなことを思ってた乾いた笑いが口から出たが、それを気にせず工場長は話続ける。

「それから、作っては乗ってぶつかっての繰り返しで、いつの間にか墜落時に無傷での脱出法を

自分で編み出したんじや。あ、ここを右じや」

言葉に従い、右に曲がりつつ口を開く。

「編み出した、ってすごいですね……今まで何回墜落したんですか？」

「ん〜そうじやのお……軽く2000回は越えておるかの」

「そ、そんなにですか!? よく今まで生きてこれましたね!？」

「ワシもびつくりじや。ほれ、その壁に跡がついとるじやろ」

唾然としながらも足を止めて指差された方を見ると、確かに黒く傷んでいる壁が見えた。

この工場長はいろんな意味で妖精さんの域を越している、と思わざるを得ない。

「……ほんとですね。もしかして鎮守府中にこんな跡が？」

「部屋の中以外はほぼ全てかの。一応消そうとはしておるんじやが、多すぎて手に負えんわい」

その言葉を聞いて周りを見渡すと、壁や床、おまけに天井まで同じような跡があった。横須賀に帰る前に掃除して綺麗にしよう、と心に決めて再度足を動かし始める。

「そうですか……：そういえば、さっきのあの『シューワッチ』ってなんですか?」

「あれか? いや、宙を舞っておるとなんか言いたくなつてのお。どうじや?」

ワシのシューワッチ! かっこよかつたじやろ?」

動きを再現しながら手のひらでごろごろ転がる工廠長の姿に、苦笑い以外の反応がで  
きず、

頬を引きつらせながら会話を続ける。

「い、いや、あの時は心配で聞こえませんでした……」

「なんじやと? なら何回でも聞かせちやる! シューワッチ! シューワッチ!」  
自分の手のひらで、倒れては起きてまた倒れての繰り返しを始めた。

……なんか、疲れるな……

今まで関わることのなかったタイプとの会話に疲労を感じつつ、その様子を  
横目に見ながら歩き続ける。

「シューワッチ! どうじやお前さん、かっこいいじやろ!」



「……え、ええ。とても、かつこいいです……」

「それは本気で言つとるのか？」

「……もちろんですよ。すごくかつこいいです」

「……なんか納得いかんのお……」

渋々返事を返されたことに不満らしく、工場長は大人しくなって座り直した。

それから数十秒ほど、工場長の唸り声を聞きながら歩いていると、雷が待っている司令室の

扉が視界に入ってきた。

「そろそろ着きますよ」

「ん？ おお、そうか」

唸り声を上げ続ける置物と化していた工場長に話しかけ、しっかりと座り直すのを確認してから

司令室の前まで歩いて扉をノックする。

「私だ。入ってもいいか？」

『し、司令官!?! 今すぐ開けるか——きやつ!』

部屋の中から雷と思しき声が聞こえ、その後何か物が落ちたような音が聞こえてきた。

『まったく、何驚いてるんだい？ 電、司令官を中に入れてあげて』  
『わ、わかつたのです！』

ドタドタ、という小走りする音が聞こえ、数秒後には内側へと扉が開いていた。  
「ど、どうぞなのです！」

「ありがとうございます。ところで、さっきの音は……」

部屋の中を見渡してみると、暁は眠たそうな顔で呆けていて、雷は座って腰をさすり、響は雷に話しかけていた。

「どうしたんだい？ 驚いてこけるなんて、雷らしくもない」

「わ、わかってるわよそれぐらい！ いったら……」

「……電、どうしてこうなったか説明してくれるかな？」

「司令官さんのノックに驚いて立ち上がろうとして、布で足を滑らせてこけてしまったのです」

私のせいだったのか……

自分が原因だったことに少し心を痛め、謝っておこうと腰をさすっている雷に近づく。

「驚かせてごめんな、雷。立てるか？」

「だ、だいじょうぶ！ 自分で立てるわ！」

雷へ手を伸ばしたが、それを掴むことなく雷は立ち上がり、何故かそっぽを向いてしまふ。

理由が分からず首を傾げ、考えている間に響が雷の前へ回り込む。

「大丈夫かい？ 顔、赤いようだけど」

「つ!? いや、これは……その……」

後姿だけでも、雷がかなりあたふたとしているのがよくわかる。

その姿にさらに疑問が浮かんできてるが、工場長から話しかけられて考えを中断する。

「お前さん……この様子、脈ありじゃぞ」

「脈？ 何のことですか？」

「はあ……なんでもないわい」

がつくりと肩を落とし、本気で残念がつているように思える工場長の態度にさらに疑問が湧き、

何が何やらわからず混乱してきた。

だが、ここで立ち尽くしていても時間の無駄なので、とりあえず机に工場長を降ろして

両手を打ち鳴らすことで全員の注目を集める。

「みんな、聞いてくれ」

音と自分の声に全員が反応してこちらを向いたことを確認し、遠くにいた暁を手招きで近くまで

呼んで言葉が続ける。

「工場長も呼んだことだし、話し始めていくけどいいかな？」

自分の問いかけに、全員がこくりと頷いてくれる。

暁は少し眠たそうだったが、目はちゃんと開いているので大丈夫だろう。

「それじゃ、今後の予定を立てていこう」

## 第12話 二日目の予定

「まず最初に予定をたてていくんだが、何か聞いておきたいことや優先すべきだと思ふことがあつたらここで言つて欲しい」

全員の顔を一通り見ながら言うと、響が拳手をしてから口を開く。

「鎮守府付近に深海棲艦が出現した場合の対処を聞いておきたい」

「わかつた。まずはそのことから話していこう。」

皆の中で一番実戦経験、または実力のあるのは誰だ？」

そう問いかけると全員が一斉に響を指差し、対する響は電を指差す。

「わ、私……？」

響にとつて予想外だつたようで、視線を泳がせながら困惑し始める。

「電たちは、数えられないほど響ちゃんに助けてもらったのです。」

そもそも、響ちゃんはなんで電だと思つたのですか？」

「……対潜攻撃が上手だから」

「いっぱい練習したからなのです！ 響ちゃんは、対空射撃や砲撃や雷撃も全部練習してて、

本当は響ちゃんが一番すごいのです！」

「そんなことは……」

納得できないように響が首を傾げるが、この調子だといつまでたつても終わりそうに無いので、

勝手に話を進めることにする。

「それじゃ、一番が響、二番が電ということでもいいな？　このままだと話が進まないから、

無理矢理だが勝手に決めさせてもらおうぞ」

話を中断された響と電が少し不満そうな顔をするが、渋々と頷いた。

「響と電には、万が一のためにこの鎮守府付近の海域で哨戒をしてもらう。もし深海

棲艦と

遭遇したら、一人は気づかれないように待機、発見されたら無理の無いように応戦、もう一人は

鎮守府に戻って私に知らせるということでどうかな？」

「……待つて、司令官」

一通り話し終えると、響が小さく手を上げて口を開いた。

こちらが聞く雰囲気を作ると、響は話を続ける。

「私も電も、簡単に沈むつもりはない。 だけど、向こうが複数の場合には？」

単艦で挑むのはリスクが大きい。 せめて暁か雷のどちらかを加えて欲しい」

「……私ももう一人をつけたいとは思うんだが、昨日分かったとおり燃料も弾薬も無いに等しく、

消費は出来る限り抑えたい。 それに暁と雷にはやってほしいこともある」

「……やってほしいこと？」

暁と雷が見事に声を重ねて質問し、お互いが顔を見合わせて少し笑ってこちらに顔を向けたのを

確認して話を続ける。

「それは後で説明する。 だったら、駆逐2隻までなら耐えて欲しい。 相手に軽巡以

上が

まぎれていたら二人とも帰ってくる。 ……これならどうだ？」

響と電はお互いの顔を見合わせ、二人同時に頷く。

「ならさつきの方針で頼むな。 で、次のことなんだが……工廠長さん、この鎮守府付近の

地図ってあたりしますか？」

「地図は……ないの。 前の提督は、ワシに資材を残してみんな持って行ってしまった

わい」

「なら、艦載機に搭乗してこの付近の海域の地形を把握してしてもらえますか？」

「どの方角の何海里先に何がある、みたいな感じで」

「うむ、任せとくれ。 ついでにお嬢さんらを空からばっちり見ておくわい。」

一応爆撃機で出て、可能なら援護しちやる」

工場長が当たり前にのように言った内容に対し、響も電も安心したように笑顔を零した。

心の中で一息つき、話を続けるために口を開く。

「それじゃ、さっきのやつてほしいことについてだ。 まあ分かってると思うが、食料調

達だ。

いつ帰れるかわからないし、私としては——」

話している最中に、空気を読まない胃袋が講義の唸りを上げ、全員が自分のお腹へと注目する。

「……と、空腹であと2日もつかわからない。 協力してくれるか？」

少々情けなく感じながら二人に問いかけると、少し顔を引きたせながら頷き、その反応を見て

さらに情けなく思えてしまう。



この島に漂着したのが昨日、朝ごはんを食べてからは水すら口にせず、正直にいつて喉が渇くし

お腹は減るしでたまったものではない。

「それじゃ、今日の動きの再確認だ。響と電は近海の哨戒。工場長さんは近海の地形の把握、

及び響たちと警戒、可能ならば援護。私と暁と雷は、この島で食料調達。他に何

か意見や

質問はあるかな？」

明確にするために再確認を取ると、口を開くことなく頷いてくれた——響以外は。

「今思ったことだけど……私の機装は？ 電のはまだ使えるけど、あと一つ足りない」

「大丈夫だよ。さつき工場長を呼びに行つたけど、暁のが直つてたからそれを使うといい」

「あ……そ、そうだったね……なんで忘れてたんだろう……う？」

帽子を目深にかぶりながら俯く響に、姉妹たちが口を開き始める。

「昨日目の前で修理を頼んだでしょ？ ほんと、なんで忘れてたのかしら」

「響って、頼れるところあるけど……どこか抜けてるわよね」

「おつちよこちよい、なのです」

暁、雷、電の順に追い打ちをかけられ、響はさらに恥ずかしそうに帽子をかぶりなおります。

「……気にしてるんだから、言わないで……」

そう言いながらそっぽを向き、「私だって、好きでおつちよこちよいなんか……」と壁に向かって念仏を唱えるようにし始めてしまう。

暁がさらに口を開こうとし、これ以上は響が可愛そうだと思い、両手を叩いて話を切り替える。

「ほら、その辺にしておいて、そろそろ動き始めようか。響と電は、工場長さんと一緒に」

工場長に行つて、準備が出来次第出撃。工場長さんも二人の準備が終わり次第、お願

いします」

「おう、任せとくれ！」

工場長の返事とそっぽを向いている響を含めた全員が頷くのを確認して、部屋を出るべく

扉へ歩き、後ろからついてくる四人の足音を聞きながら開く。

廊下に全員が出て、少し遅れて工場長を手のひらに乗せた電が片手で扉を閉める。

ほんの少し困ったような顔をしているので、工場長がねだつてきて仕方なく乗せた、

といった

感じであることが想像でき、無意識に苦笑してしまふ。

電が自分が苦笑を浮かべた理由を悟ったのか、顔を見合せて同じく苦笑を浮かべる。

このまま電と頬を引きつらせあつていても仕方がないので、次の行動に移ることにする。

外に出ようと思つて足をだそうとするが、左右のどちらが外につながっているのかわからない。

「外つてどつちかわかるか？」

「あつちに行つて、突き当たりを右に行つたら外が見えてくるはずよ」

暁が、工場へ行く道とは反対方向を指さしながら説明してくれる。

「ありがとう。なら、ここで分かれるか。そつち、頼んだよ」

「了解なのです。司令官さんも、気をつけて欲しいのです」

何気なく話しかけた一言に、工場長は頷き電は返事を返してくれるが、響は未だに俯いたままで

頷きもしない。

だが、昨日一緒に行動して響はしつかり者だとわかつたので、大して心配はしなかつ

た。

「じゃあね、響、電。無茶しないように気をつけるのよ?」

「そうそう。敵と戦うことになっても、絶対無茶したらダメよ」

「暁ちゃんと雷ちゃんも、食べ物いっぱい取ってくるのです!」

最後に響を除く三人が話し合い、電の言葉を境に別々に歩き始めた。

暁と雷の後に続こうと歩き始めるのだが、裾を誰かに引つ張られて後ろを向く。

「響?」

「し、司令官、その……」

裾を掴んだまま、響は口を開いたり閉じたりし始めた。

俯いてはいるが、帽子の影から覗いている響の顔は、少し赤く染まっていた。

「……спасибо、司令官」

「さっきのことか? 礼なんか必要ないよ。……それより、そろそろ行かないと

置いていかれるぞ?」

工廠へ続く方の廊下を工廠長と話しながら歩く電の姿を見ながら言うと、響は後ろを

確認して

すぐに自分に向き直る。

「……食料調達、頑張って」

「そつちこそ……哨戒、頑張ってくれよ」

なんとなく、響と昔鎮守府前に捨てられていた犬と姿が重なり、思わず頭を撫でてしまふ。

「……うん」

帽子越しに撫でている頭はこくりと頷き、どことなく名残惜しそうに裾から手を離して

電と工廠長の元へと走り出した。

「……さて、私も行こうかな」

真後ろを染み付いた回れ右の動きで向くと、二人が角を曲がるどころだった。

置いていかれないように、なおかつ二人を驚かさないように気をつけながら早歩きで近づいた。

## 第13話 響の決意と電との過去

……恥ずかしかったな……

誰も見ていないとわかつているのに、帽子を深くかぶって足元を見ながら電と工廠長の元へ早歩きで近づく。

左手で帽子の鈔を持ち、右手で先ほど司令官に撫でられた所を押さえる。

撫でられるって、こんなに暖かいんだ……

そして、撫でられるという初めてのことに惚けていた。

今まで、自分は撫でられるということはなく、昨日の電の時のように撫でる側だった。

艦娘としてこの世に生を受けた時、不思議と自分が『駆逐艦 響』と『駆逐艦 ヴェーブルヌイ』

であつた頃の記憶が存在していた。

自分は歴代の艦長に操られるのではなく、自分の意識そのもので動く体があることに何度も驚かされた。

そして、自分と同じようにしている暁を始めとする、あの第六駆逐隊が全員揃っていることに

互い喜びあい、そして自分は泣きじゃくる姉や妹を撫で続けたものだ。

暁はガダルカナル島沖で集中砲火を受け、雷は人知れず単艦行動中に潜水艦の魚雷で、

電は護衛任務中に自分と持ち場を交代した直後に目の前で、それぞれ沈まされた。

暁と雷は仕方ないと無理矢理に理解したが、目の前で沈んだ電のことは、ソ連へ引き渡された

後ですら、乗り越えられなかった。

大切な妹を沈めた敵を、約6400m、たった三海里半という短い距離にいたのにも関わらず、

みすみす逃してしまったのだ。

後部が二つに折れてゆっくりと沈んで様を、何もできずに見ていただけだった。

だから、だからこそ、私は……！

当時何もできなかった分、艦娘となつて生まれ変わった今、電と同じ事を繰り返さないよう

自分自身を奮立たせた。

もう二度と、目の前で大切な存在が消えていくのを見たくないから。

と、その時――

「ぐっ!?!」

突然、頭に衝撃が走った。

上下左右に不規則に視界が揺れ、バランスがとれずに後ろへ倒れて尻餅をついてしま  
う。

「痛たた……」

痛む腰と額を同時にさすりながら前を見ると、点々と黒いしみが付いている壁があつ  
た。

どうやら、考え事をしながら歩いていたために、壁に気づかず激突してしまったよう  
だ。

「だ、大丈夫なのですか!?!」

右から声が聞こえたので顔を向けると、ドタドタと足音を立てながら電が走ってきて  
いた。

その顔は今にも泣き出しそうな表情をして焦っているようで、自分の身を案じてくれ  
ているのが

誰が見ても良く分かりそうだ。

そんな妹の表情をやわらげたくて、未だぐらぐらと揺れる視界の中、壁に縋るように  
して



なんとか立ち上がる。

「へ、平気だよ……ちよつと考え事をしてただけ」

「で、でも、すごい音がしたのです……」

「これくらい、どうつてことないさ。それより、早く工場に行こう」

余計な心配をかけないように歩き出すと、安心したのか電はほつと息を吐き、

横に並ぶようにしてついてくる。

ほぼそれと同時に、前方から声が聞こえてくる。

「小さいお嬢さん！ ワシになんてことをするんじや！」

真つ直ぐには誰もいなかったのので下に視線を移すと、腰に手を当てて頬を膨らませな

がら

怒っている工場の姿があった。

ふんすかという表現がびったり合っているような怒り方だったが、右隣にいる電は弱

気な

性格のため、大げさではないかというぐらいに身を震わせる。

「は、はわわわ……つい、投げちゃったの、です……」

「つい、とはなんじや、ついとは！」

「あの、あの……響ちゃん、怖いよお……」

工場長に再び怒られた電は、今にも泣き出しそうな顔をしながら自分の服の袖を掴んできた。

言葉では少し言い表せない感情を抱きながら、無意識に冷ややかな目で工場長を見つめる。

「な、なんじやい、白いお嬢さん……」

工場長は少し言葉に詰まって顔に少し冷や汗を流しながらも、態度そのものはあまり変えずに

話しかけてくる。

「とりあえず説明。なんで投げられたの？」

「いや、その……何かぶつかる音が聞こえて、振り向いたと思ったら投げられて、小さいお嬢さんはお前さんに向かって走って……と、ともかく、ワシは何も悪くない!……はずじゃ」

最後に言い切ろうとしたようだが、偉そうに話すので視線の冷たさを増してやると、最後に少しだけ自信なさげな言葉を付け加えた。

自分の頭の中で状況整理をして、二人が自分に注目している中で口を開く。

「はあ……今回は電が悪いよ。ほら、いつまでも私にしがみついでないで、ちゃんと謝って」

できるだけ優しく声をかけると、電は自分の背中に隠れながら口を開く。

「あ、あの……ごめんなさい、なのです……」

「……うむ、まあ、許してやらんこともないかの」

「偉そうな態度は嫌いだな。特に電を泣かせるような態度は」

「……すまんかった」

「またもや大きな口を叩いてきたので、途中で努めて冷ややかに言葉を放つと、工場長は」

冷や汗の量を増やしながら肩を落とした。

「これぐらいにして、そろそろ工場に行かないといけないな」

二人に言い聞かせるようにして歩き出すと、工場長が電に近づいて手のひらに乗り、工場までの

道のりを歩き始めた。

そして、数分もかかることなく工場へとたどり着き、工場長の案内で奥まで案内された。

「よし、それじゃあ早速機装の調整からいこうかの。白いお嬢さん、それを背負ってくれ」

そう言って、工場長は『黒い何か』を指差して指示してくる。

「……あれは何かな？」

「ん？ 艦装じゃが」

「い、色が艦装じゃないのです……」

「がっはっはっは！ お前さんらの提督にも言われたわい！ さあ、早くつけとくれ」

豪快に笑いながら軽く流され、促されるままに艦装だという物を背負い、足にも水上浮遊の為の

艦装を装着する。

通常は様々な装置などを使って半自動的に装着するのだが、こうやって手作業で装着することも

調整などでたまにある。

暁であろう艦装を背負うと、多少は違和感があるだろうと覚悟していたのだが、さすが同型艦

というべきか違和感はほとんどなく、足の方は自分のものとまったく変わりなかった。

「意外とこのままでもいけるかも」

「さすが姉妹艦じゃな。ま、一応微調整はしとくぞ」

レンチを片手に艦装の装着具合を見てもらい、肩のベルトを少し伸ばしたこと以外

は、

主砲の位置を少し高くしただけですぐに終わった。

「さて、次は小さいお嬢さんじゃな」

「あの……お嬢さん、つて言いにくくないですか？ 名前で呼んだほうが……」

おずおずとした様子で電が話しかけると、工廠長は少し首を傾げて考えた後口を開く。

「うむ、まあそうじゃろうな。 そういやまだ名前を聞いとらんかったの」

「私は響で、こつちが電。 司令官と一緒にいる、黒髪のほうが暁、電と良く似てるのが雷」

「響に電、暁に雷じゃな。 よし、覚えたぞ！」

自信ありげな表情で腰に両手をあてながら大きく頷き、それを何度も繰り返してから顔を上げて

話を続けてくる。

「おおそうじゃ。 電の機装は外に転がったから勝手に回収させてもらったぞ」

「はわわ！ も、申し訳ないのです……」

「ま、壊れとつたから直したんじゃが、時間の都合上で黒くはできんかった。 すまんの」

「黒くする必要はないと思うのです……」

もつともな意見を電が口にするよ、工廠長は落胆するようにため息を一つ吐いた。

「まったく、電も提督と同じようなことを……そういえば、提督の名前はなんじゃ？」

「名前はないそうだよ。私達にも理由がわからない」

「……ま、名前が分からんでも不自由はせんし、大丈夫じゃろ。それじゃ、修理した

ばかり

じゃから、調整をしとこうかの」

自分と同じように指示されて電は艤装を装着し、問題がなかったのかどこも調整する

ことなく

点検だけで終了した。

「よし、これでいつでも出撃できるぞ。ハッチは左にずっと進んだら見えてくるはず

じゃ」

「ありがとう、工廠長。電、行くよ」

「はい、なのです！」

「ワシも空から見とる。何か用があつたら、手でも振つてくれたら着水して話を聞い

ちやるぞ」

「悪いけど頼んだよ」

返事を返し、工場長が頷いたのを確認してから電と共にハッチへと向かう。

そして言われた通りに進んでいくと、小さいながらもちゃんとしたハッチが見えてきた。

「それにしても、無駄に広い工場だね」

「少し疲れたのです……」

工場長と別れてから1分ほどかかり、歩いた距離は体感で100mぐらいだ。

しかし、今は司令官に言われた通りに哨戒するのが先決である。

「さて、そろそろ……響、出撃する」

「行くのです！ 出撃です！」

ハッチの坂を滑るように下り、両足同時に海水へと着水させると同時に艦装を起動させ、慣れた

浮遊感が両足から伝わってくる。

そのまま感覚を確かめるようにゆっくりと前進し、工場から出た辺りで止まる。

「お待たせしたのです」

自分に少し遅れて電がやってきて、自分と向き合うように前に回り込み旋回して停止する。

「調子はどう？」





交代した直後に米の潜水艦『ボーンフィッシュ』の魚雷が命中し、見る見るうちに後部が

二つに折れて沈んでいった。

もしあの時に交代していなかったら、代わりに自分が沈み、電は助かっていたかもしれない。

ソ連に引き渡された後でも、一日に何回も後悔の念でいっぱいになったのだ。

「……仕方ないのです。いくら気に入らない結果でも、そうして沈んだのが運命だったのです。」

響ちゃんは、何も悪くないのです」

「でも、私は仇を取れなかった！」

いつの間にか感情が荒ぶっていて、言い訳をするように叫んだ。

いきなりの自分の変化に驚いた電の次の反応を待たず、口から言葉が溢れ出てくる。

「たつた、たつた三海里先にいたんだ！ それなのに、反撃も何もできずに電が沈んでいくのを

ただ見てるだけで、何もできなくて……！」

「ひ、響ちゃん、落ち着くのです！ だから、何も悪くないのです！」

「目の前にいたのに助けられなくて何がお姉ちゃんなんだろう、って今でも思ってる

……

ほんと、お姉ちゃん失格だよ……」

自分自身に嫌気がさして吐き捨てるように言うと、電は両手で左手を握ってきた。

「そんなに後悔してるなら……今度は、ちゃんと守ってほしいのです。それで十分なのです」

「あ……………」

弱々しいと思っていた妹が、自分の死を乗り越えてこんなにも強くなっていることに、感慨と

ともに息を飲まざるを得なかった。

本人が乗り越えているのに、他人がそれを引きずっていは笑い話にもならない。

そう思い、握られた手を握り返しながら返事を返す。

「……………わかった。もう、電を沈ませない」

「頼りにしてるのです、お姉ちゃん！」

「……………うん」

お姉ちゃんと言われた瞬間、妙に照れくさくなつて声が小さくなつてしまった。

少しの間手を握り合つたまま沈黙が訪れるが、それを不意に破る音が響いてきた。

その音は鎮守府から飛び立つ艦載機のエンジン音で、すぐ自分たちの真上を通つて大

きく旋回を

始め、姿が段々と小さくなっていく。

「……そろそろ、哨戒に戻ろうか」

「……さぼったらだめなのです」

お互いの手を握りあつたまま苦笑いを交換し合い、どちらともなく手を離す。

「……今度は、必ず守ってみせる」

「何か言つたのですか？」

「いや、なんでもないよ」

艦娘として生まれ変わった今、二度と大切な姉や妹を沈めさせない。

そう改めて決意しながら、電と哨戒を再開し始めた。

## 第14話 無人島で食料探し

響と別れた後、驚かせないよう故意に音を出しながら、暁と雷の元へと近づいていく。角を曲がると、暁が言っていた通りに出口が見えており、二人はそこに向かって話し合いながら歩いている。

細心の注意を払いながら近づいていき、残り10mのところまで二人が外に出て立ち止まった。

これで自分が早歩きをする必要がなくなったので、音は出しながら普通の歩きに変える。

残りが5mにまで差し掛かったとき、あることに気づいて足を止める。

……どうやったらおどろかせずに済むんだ……？

今更な疑問だと自分でも思ったのだが、生憎頭の中には何の答えも出てこない。

後ろから話しかけて駄目なのは学習済み、後ろから肩を叩くのはもつと駄目なのは学習する

までもなく、横から何事もなく現れるのは論外だ。

うくん……どうすれば……

「……司令官、なにしてるの?」

いろいろと考え込んでいると、二人が振り向いてきて雷から話しかけられていた。考えてきたことや時間が無駄となってしまうが、結局驚かせてしまうことはなかった。

きつぱりと忘れることにして返事をする。

「いや、ちよつと考え事をな。大したことじゃない」

そう離しながら歩き、終わる頃には二人と並ぶような形になり、揃って外を眺める。

「ここが外か……ほんと、無人島って感じだな……」

昨日は暗くてよく見えなかったが、今視界に映っているのは、ほとんど手をつけられていない

自然の姿だ。

前の提督がいなくなつてから時間が経つてはいるが、その時に使われたであろう形跡は

一切残っていない。

砂浜は波に撫でられて足跡一つなく、左に見える木々は寒い気候の中でも青々と茂っている。

横須賀にいた頃は見る事のなかつた光景に圧倒されてしまうが、このまま眺めていても食料が

手に入るわけではないので、当初の予定通りに動くことにする。

「さて、食料探しか……とりあえず、森……いや、山に入ろう。ついてきてくれ」  
自分が選考する形で山へ向かつて歩き出し、二人は後をついてくる。

傾斜はそれほどなく、足場も底まで悪くはないので、食べられそうな草や木の実などを

探しながらでも十分に歩ける。

時折後ろを振り返って様子を見ると、ちゃんと二人も探しながら歩いている。

そして、二人に気を配りながら歩き続け、10分ほどが経過する。

見つかったのは、毒々しい色をした木の実数十個と、形からして『これはヤバイ』と思わされる

ような、数え切れないほどの量の奇妙な草だけだった。

もちろん、全部見かけても手すら触れずにスルーした。

「……何か、食べられそうなものは見つかったか？」

「……ダメね、何も見つからないわ。 暁はどう？」

10分という短い時間ではあるが、獣道を歩いているせいかな雷の声からは元気が少

し

失われていた。

暁の様子が心配になり、後ろへ振り返って返事を待つ——のだが。

「もくむりく、やってらんないわよ……」

綺麗な黒髪を気にすることなく地面へ垂らし、うつ伏せに倒れこんでいる暁の姿があつた。

予想以上に疲れている様子の暁に、自分は啞然とし、雷はため息を大きく吐いて暁に近寄る。

「こんなところで倒れこんで……レディーなんでしょ？ 頑張つて」

「レディーは山になんか入ったりしないわよ……私、体力ないのよ……」

暁が反論するが、意にも介さず雷は無理矢理暁を引っ張り上げて立ち上がらせる。

「今だって、海では響や電が頑張つてるのよ？ お姉ちゃんが妹に負けてどうするの？」

「私は艦娘よ！ 船が陸で行動するっていうのがそもそも間違いのよ！」

「はあ……司令官だって頑張ってるんだし、10分くらいで音なんか上げないですよ」

「だって、今までこんなところ歩いたことないし……今だって、疲れて足が震えて……」

暁が耐えかねたように、声を震わせながら少し涙目になつてしまう。

言葉につられて暁の足を見てみると、左右に細かくガクガクと揺れているのが一目で

分かる。

自分はいろいろと鍛えているので疲れてはいないが、暁たちのことを考えたら、休憩したほうが

よさそうだと判断する。

「わかった。少し休憩しようか」

そういつて近くの木に背を預けながら座り込み、雷は自分の真似をしながら座るが、暁は

崩れ落ち、俗に言う女の子座りで地面にべたりと座り込んだ。

久しぶりの運動に一息つくと、水すら与えていない胃が『早く飯よこせ』と音と共に訴えてくる。

何気なく後頭部を木に当て、頭上を仰いでみる。

寒い中で生命力を感じさせる無数の葉と、その間から見える青い空。

数日前に新たな鎮守府に着任予定だったのが、襲撃を受けて無人島に漂着して、偶然にも

駆逐艦四隻の臨時司令官になって。

ここ数日の間にいろんなことがありすぎて、少し目が回りそうだ。

別に暁たちの司令官が嫌というわけではないが、ちゃんと予定していた鎮守府に着任



できていれば、こうやって食料探しに山へ入るといふことはなかつただろう。

それにしても、襲撃を受けた後の艦隊が心配だ。

あの船には教官も乗っていて、必死に反撃したであろう金剛の様子も気になる。

沈んでなければいいな、と思う傍ら、どうして横須賀鎮守府の主力艦隊の索敵から

逃れられたのだろうという疑問がわいてくる。

あの時は、赤城と加賀が索敵機を全方位に展開していて、隙などどこにもなかつたはずだ。

それを掻い潜って接近してきたのは、敵艦隊の戦法が変化してきている、又は考えたくないが

赤城たちの慢心が起こしたのかもしれない。

いやいや、疑ってどうする……

そこまで考えて、自分がとてつもなく失礼なことを考えていることに気づき、頭を振って

先程までの考えを払い落とす。

赤城と加賀は、あの大战での慢心をなくすべく日々演習に明け暮れていたのは、教官と同じか

それ以上に自分がよく知っていることだからだ。

一生懸命な二人の姿を見たものとしては、そんなことは考えたくない。

それに、赤城と加賀だけでなく、護衛していた金剛と比叡、そして木曾と吹雪による目視の

索敵もしていたため、余計に二人の慢心とは考えにくい。

いきなり近場に敵が現れて、皆は無事なのだろうかと心配になる。

今まで二十年近く戦ってきた戦艦の金剛と比叡もそうだが、着任して数年しかたつておらず、

錬度の低い吹雪が特に心配だ。

吹雪は、詳しいことは聞かされていないが、様々な事情があつて横須賀鎮守府へと着任した、

建造直後の艦娘だった。

自分が十六歳の時にやってきて、勉強する傍ら吹雪を育て上げていった。

そのせいか錬度がまだ低く、沈まずに済んでいてくれと祈るしかない。

などなど、いろいろと頭の中で話を何度も脱線させていると、ふと木のある一点が気になり、

視界に捉えた瞬間に目を見開いた。

それは、見た目は赤く丸く、それでいてずっしりとしていそうで、とある話では『禁

断の果実』

とも呼ばれた——りんごだった。

「きゃっ!? し、司令官、驚かさないですよ!」

すぐ隣で、コンマー秒で立ち上がった自分に驚いた雷が声を上げるが、頭の中にあるのは、

視線の先でゆれているりんごらしき果実のみだ。

だが、立つてりんごを見上げたところで、絶望感と共に口から思考が流れ出る。

「りんご……どうやって取れば……」

目標物までの距離は15mほどで、木に登ろうにも一番低い枝でも地面から3mは離れており、

木登りの経験は皆無だ。

「え? どい?」

独り言に反応した雷が立ち上がり、自分と同じくほぼ真上を向いて言葉を失った。

「……どうやって取ろうかしら……」

「肩車したら、ギリギリ……かな……?」

顔を横に向け、二人の身長を分量で測りながらポツリと呟いた。

二人だけなら無理だが、自分が二人を肩車すれば、3m離れている枝までなんとか届

くだろう

と推測しての考えだ。

「それいい考えね！ 暁、手伝って！」

また自分の独り言に反応して、雷が疲れて座り込んでいる暁を引つ張りあげる。

嫌々立たされた暁だが、話を聞いていなかっただけで、自分と雷の顔を交互に見て考え始める。

「え〜つと……手伝うって、何をどうするの？」

「肩車よ、かたぐるま！ あそこのりんごを登って取るのよ！」

「……あそこまで登るの？ 誰が？」

「う〜ん……暁とか？」

「何だよ！ レディーは木登りなんかしないわよ！」

姉妹喧嘩を聞きながら、どうやってりんごを取るのかを細かく考えていく。

最善なのは自分ひとり木に登って取ることなのだが、生憎海しか知らずに育ってきたため、

木登りスキルは0だ。

かといつて暁と雷に肩車してもらおうとしても、それでは枝まで届きそうもなく、それ以前に

男としてのプライドが許さないし許せない。

「……かん。 司令官！ ねえ、聞いてる？」

「は、はい！ もちろん聞いています！」

——空気が止まった。

突然敬礼と共に返事をするという奇行に驚く暁と雷と、何をやっているだと自己嫌

悪に陥り

冷や汗を流す自分。

そのままひゅうひゅうと、風が鳴るばかりの静寂が訪れた。

「……………」

何場違いな返事してるんだ私の馬鹿者！ 自分の部下になんでもないのに敬礼し

て返事とか、

唯のアホじゃないか！

頭の中で自分を最大限に罵っている間も、二人からは珍しいものを見るような目で自

分を

見つめ続ける。

そのまま誰も動かさず話さずで、無駄な時間だけが過ぎていく。

二人の可愛そうな人を見るような目が、自分の心を大きく削っていき、そろそろ耐え

切れなく

なりそうになった時、やっと雷が口を重々しく開いてくれた。

「あゝ、えゝつと……癡、なの？」

「……まあ、癡だな、うん……」

かろうじて声を捻り出し、とりあえず敬礼を止めて言葉を続ける。

「そ、そんなことよりりんごを取らないか？　こんなところで時間使つても仕方ないし……」

この気まずい空気をどうにかしたい一心で話を変えると、なんとか二人は頷いてくれた。

「わかったわ……それで肩車だけど、どうするのよ？　私が登るなんて嫌よ！」

「別に私が決めたわけじゃないんだが……ともかく、私が一番下になるから、二人のどちらが

登るか決めてくれ」

「一番下って、どういうこと？」

暁が質問してきて、雷も訳が分からないといったような表情をしてしまう。

「そうだな……まあ、仮に暁が木に登る役目だとしよう」

人差し指を立てながら説明を始めるが、仮だとしても登り担当が嫌なようで、暁が

少しすねてしまう。

いちいち構っていいは話が進まないの、暁の反応はできるだけ無視して説明を続ける。

「枝の位置が高いから、私が暁を持ち上げただけでは届かない。そこで、雷が暁を肩車して、

暁を肩車した雷を私が肩車する、というわけだ」

自分で説明していながら『肩車』という単語が何回も出てきて混乱してきて、雷も同様に

頭をひねらせながら考え始める。

「ちよつとまって、え〜つと……つまり、私達で三段重ねになるのね！」

「肩車も木登りもレディーのすることじゃないわ！」

暁が必死に食いついてくるが無視し、雷と会話を続ける。

「飲み込みいいな。それで役割なんだが、さつき言ったとおり私が一番下、真ん中と一番上は

二人で相談して決めてくれ」

手を動かし、二人で話をするように促すと、近づいて何やら自分に聞こえないようにひそひそと

話し始める。

暁が驚いたり顔を真っ赤にして両手を振ったり、雷が両手を合わせてお願いしたりして、

30秒ほど言い争いを続ける。

ようやく話がまとまったようで、暁はしやがんだ雷の両肩に足をかけ、ゆつくりと雷が

立ち上がった。

暁が渋々といった表情をしているため、どうやら雷に押しきられてしまったようだ。

「よし。次は私に乗る番だな。暁を落とすなよ。」

「わかってるわよ、それぐらい」

「え？ お、落ちるの、これ？」

暁から少々上ずった声が聞こえてくるが、気のせず木に手をつけてしやがむ。

雷は慎重に右肩に足をかけるが、ぴたりと動きを止めて話しかけてくる。

「司令官……上、見ないでよね」

「見るわけがないだろう。私がそんなことをする人に見えるか？」

「人は見かけによらないし……響と一緒に風呂入ったくせに……」

「あ、あれは重要な話もあったし、不可抗力というものだ……見ないから早く乗ってく



れ」

「……わかったわ」

雷は渋々了承して左の方にも足をかけ、しっかりと乗ったことを確認して声をかける。

「木に手をついてくれ。 ゆっくり立ち上がるからな」

一言声をかけて忠告してから雷の足を持ち、十分にバランスがとれるように亀の歩みのような

速さで立ち上がる。

ちなみに、艦娘の体重は人間と同じように見た目で判断でき、成人男性ならばたとえ

戦艦でも

持ち上げることができる。

個人的に、なぜ人間離れしている力を持っているのに体重は人間と変わらないのか、不思議でたまらない。

完全に足が伸びきったところで、今度は暁に話しかける。

「どうだ、暁？ 登れそうか？」

「あともうちよつと木に近づいてくれるかしら？」

暁の指示に従い、木に当たるぎりぎりまで近寄る。

「これでどうだ？」

「うーん！ よい……しよ！ 登れたわ！」

その返事と同時に肩から重みが半分ほど消え、少し楽になる。

「降ろすぞ、雷」

一言声をかけてからしやがみ、左右に垂れている足を地面につけ、雷が肩から降りる。

暁の様子が気になるので、雷が降りた瞬間に頭を上げる——が、それは間違いだと気づいたのは

とうに遅かった。

早く頭を上げすぎたため、後頭部がスカートを思いつきりめくり上げ、視界に雷の下着が

とんでもない大きさに映し出されてしまう。

「きやあ!」

それもまた一瞬のことで、すぐにスカートを抑えて雷が自分から残像が見えるほどのスピードで

離れていった。

「み、みみみ、見ないって言ったじゃない！」

「い、いやいや違うんだ！ 今のは事故というか私のミスで……」

「ミスってわざとやったってことじゃないもう！」

「それは断じて違う！ わざとじゃないんだ！ 別に白い何かが見え………あ」

お互いに顔を真つ赤にしながら言い訳を繰り返していたが、最後に失言をしてしま  
い、

真つ赤だった顔から血の気が引いていくのが怖いほどに分かった。

横須賀にいた時、はずみで転んで吹雪のスカートを掴んでずり降ろしてしまい、反射  
で体を

蹴られて肋骨を4〜5本折り、全治3ヶ月の重傷を負った。

人間の女性でも艦娘でも、恥ずかしさによる反射や怒りはどの男よりも強いのだ。

もう二度とあんな痛い思いはしたくないため、すでに羞恥から怒りへと心情を変えて  
いる雷に

向かって、全力で地面に額を押し付けながら土下座する。

「すまなかつた！ もう思い出さないと許してくれ！」

頭を下げているために雷の表情は分からないが、なんとか怒りを静めてくれることを  
信じるしかない。

どこからか聞こえる葉擦れの音を聞きながら、微動だにせずに雷の返事を待つ。

「……わかつたわ、もういいわよ」

「そ、そうか。 すまなかった……」

何とか雷の許しが得られたので、恐る恐るに頭を上げて立ち上がって表情を見る。

まだ見られたことが恥ずかしいのか、スカートを両手で押さえ顔を赤くしたままだ。

「司令官ー！ りんご取れたわよー！」

頭上から声が降ってきたので上を向くと、りんごを片手に枝に立っている暁の姿が見えた。

「だったら、真下に落としてくれ！」

「わかったわー！」

暁に指示を出しながら自分は移動し、落ちてくるりんごを受け止める準備をする。

暁は慎重に落とす位置を調整し、自分の真上に落ちるようにして手を離してりんごを落下させた。

音もなく重力に引かれて落ちていき、お椀のように広がっている自分の手にすっぽりと収まる。

「よし……ありがとう！ 降りてきてくれ！」

暁は一つ頷き、一步一步確かめるように木の枝を降り始める。

最初に登った枝から抱え降ろす必要があると考え、反時計回りに少しだけ移動する。

「よい、しよ……つて、きやつ!？」

ズルツ、と音が聞こえ、枝で動いていた物体が下方方向へ掻き消えていき——  
「きやあああああ!!!」

長い悲鳴の後に、『グキツ!』と異質な音と共に地面が少しだけ振動した。

## 第15話 食料探しの進展状況

「ちよつ、曉!？」

落ちた事と異質な音に驚き、りんごを軍服にしまいつつ木の反対側へとこけない程度の速さで

駆けつける。

艦娘の人間と違う点についての1つに、異常なまでの耐久力がある。

深海棲艦と同じく通常兵器では核でもない限り傷はつけられず、数m地点から落ちたくらいでは

びくともしない。

だが、そんな艦娘でも人間と同じ柔肌に変わり、人間と同じように怪我をすることもある。

それは、気を抜いていたり、戦闘で傷を負ったりして『力を入れていない』時だ。

意識して力を入れていないと艦娘としての本来の力は出せないらしく、何年か前に金剛聞いた

ところ、「燃料が体に染み渡りませんネー!」と人間には一生理解できない答えが返つ

てきた。

すなわち、気を抜いているときは、艦娘は基本的には人間と同じになるのだ。

そして今の状況では少しまずく、足でも折れていようなものなら、今すぐ戻って入渠させなければ

いけない。

「暁、大丈夫か!？」

いそいで駆け付けると、暁は右足首を押しえてうずくまっていた。

患部の様子を見るため、しゃがんで暁の手を掴んで指示を出す。

「少し手を離してくれ」

痛がってはいるがちゃんと指示は届いたようで、言われた通りに手を離してくれる。

くるぶしのあたりが赤くなっているだけで外傷はほとんどないが、念のために右足全体を  
触診しておこうと手を伸ばす。

これでも横須賀にいたときは応急処置等の知識が一番豊富だったため、日常生活での

艦娘の

怪我の手当てを何年もしてきた経験がある。

「悪いが少し触るぞ。痛かったらちゃんとやってくれ」

「う、うん……」

暁の少し濡れた返事を聞き、大腿部から足首のあたりまでを内側へ弱く押ししながら状態を確かめていく。

続いてつま先からも同じようにしていくが、全く痛がる様子をみせないことから、単に

足をくじいたただけなのだとわかり安心する。

「足首をひねっただけだな。動かさずにしてれば直に治る」

素晴らしいながら軍服を脱いでシャツの短い両袖を引きちぎり、動かないように足首に巻いて

固定する。

「これでよし。きつくないか？」

「うん……あ、ありがとう……」

まだ痛いのか、暁は何かに耐えるような顔をしながら返事をした。

これからどうしようか、と軍服を着直しながら考えていると、雷が暁に手を伸ばして話しかける。

「立てる、暁？」

暁は無言で雷の手をつかみ、左足のみを使ってなんとか立ち上がる。



「ぐすつ……もう山なんていやよ……帰りたいわよ……」

半泣き状態で泣き言を言い始め、泣き出す寸前の表情を浮かべる。

「ああもう……何が1人前のレディーよ、まったく」

「やれやれ、仕方がないな……」

雷の呆れたようなセリフを聞きながら暁の元へ歩き、目の前で背中を向けてしまがむ。

「ほら、乗って」

「れ、レディーだから、1人で歩けるわよ！」

「そんな足じゃ歩けないだろう。雷が肩を貸すにしても、山の中じゃ危ない」

「ほら、意地張ってないで早く司令官に乗りなさいよ」

泣きながら反論する暁を、雷と一緒に同じく言葉で押さえつけると、観念したのか上体を

背中に預けてくる。

「しっかり掴まってくれよ」

その言葉の後に自分の両肩をつかむのを確認し、暁の両膝の裏を抱えるようにしながら

立ち上がる。

「ちよ、ちよつと！ お尻さわらないでよ！」

「肘がどうしてもあたるとんだ。我慢してくれ」

じたばたと背中の上で暴れる暁を言葉で制し、雷のほうへ目を向けて口を開く。

「まだ探し始めて間もないんだが、これからどうする？ 私は探し続けてもいいと思っ  
ているが」

「私はいいけど……暁は？」

「……別に、どっちでも……」

「なら、もう少し探すか」

独り言のように二人に話し、再度先行して獣道を歩き始める。

そこら辺に生えている草や、先ほどりんごがなっていた木と同じような木を見つけて  
頭上を

仰いでみたりして探索していく。

しばらく探しながら歩いていると、雷から声がかかってくる。

「ねえ司令官……りんご、食べないの？」

そう質問してきた雷の視線は、自分の着ている軍服のポケットに収まっている赤い果  
実へと

向いていた。

「今ここで食べたなら、頑張ってくれてる響たちや工廠長に失礼だろ？ みんなで食べるように、」

できるだけ多く見つけておきたいから頑張ってくれ」

「もし見つからなかったら？」

「……そこら辺の葉っぱを煎じて飲むことになるかな」

頭の中で寂しく緑色の液体をすする姿をイメージしてしまい、テンションを下げながら言う

残念そうに「え〜……」と不満の声を漏らした。

「まあそう言わないでくれ。いざとなったら私だけが飲むから」

「……やさしいのね、司令官は」

「軍人としてはどうかと思うけどな……それを言ったら、雷の方が優しいよ。今日の

朝だつて、

私を——」

「ま、待って言わないで！」

いきなり雷が大声を出して自分の声を遮ってきた。

少し驚きながら足を止めて雷の方を向くと、両手を慌ただしく振りながら顔を真っ赤に

していた。

「朝のことはひみつ！ だから話さないで！」

「朝に何かあったの？」

「暁は関係ないわよ！ とにかく、恥ずかしいから言わないで！」

雷が暁に言い返している間、数秒前に自分が失言していたことに気づいた。

それをきっかけに雷の暖かさやその他もろもろを全て思い出してしまい、雷の気持ちが一瞬で

理解できた。

「あ、ああ、わかったよ……」

恥ずかしさで少し熱くなった顔を隠すように、再び前へ歩き始める。

「司令官、ひみつって何なの？」

「話したら秘密にならないだろう。そんなことより、早く食料を探そう」

何とかポーカーフエイスを貫きながら話の流れをやや強引に切り替え、再び食材を探し始める。

答えてくれなかったことが不満だったのか、暁はため息を吐きながらも指示に従い、すでに

探し始めている雷と同様に探し始めた。

一応先程と同じ木を探してはみるが、いかんせん植物には関心がなく、どの木も同じように

見えてしまい、全ての木を見上げながらゆっくりと歩き続ける。

そして見つけはするものの、とてつもなく遠かったりまだ食べられる状態ではなかったりで、

まともに食べられそうなのはポケットに入っている1個だけだ。

そうして獣道を歩き続け、体感で約30分ほどが経過。

成果——なし。

「……ほんとに葉っぱ飲むしかないのか……」

雷の体力を回復するための休憩中、そんな言葉が勝手に口から漏れた。

見つかるものが全て『取れない』『食べられない』の連続で、そろそろ自分の精神と胃  
が

限界を迎えそうだ。

胃の中が空になりすぎて、すでに腹の虫は暴れることさえやめてしまっている。

「私達はいいけど、司令官がねえ……」

「雷たちだつてよくないだろう。生きていけるとはいえ、艦娘もおなかが空くのは知っている」

確かに艦娘は兵器であるためか、何も食はずとも生きていくことは可能である。

だが生きれるというだけで本的には人間と変わらず、空腹を感じるのは当然のこと、栄養不足で

体の様々な器官が傷つきやすくなったり、食を楽しみと感じている艦娘ほど精神が崩壊しやすい。

横須賀にいた頃「一時期に出撃が重なったから当然」と調子に乗って食料庫の約半分を赤城一人

で食い尽くしてしまい、罰として半月ほど教官から軽巡程度の量しか食べさせてもらえず、

発狂して加賀の艦載機を全て食べつくしてしまうという悲惨な事件があった。

すなわち、食を断たれてしまうと人間と同様に苦しい思いをしてしまうのだ。

「ま、たくさん見つけられればそれに越したことはないけどな。雷、疲れは取れたか？」

「もう大丈夫よ。十分休めたわ」

自分にそういいながら、休む前とは違う疲れを感じさせない動きで立ち上がった。

「なら、休憩は終わりだな。暁、そろそろ行くぞ」

暁は差し出した自分の手を掴んで立ち上がり、少しためらいながらもしやがんだ自分

の背中に

身を預けてくる。

「やっぱりレディーのしてもらうことじゃないわよ……」

「歩けないなら仕方ないだろう。立つぞ」

一言断りを入れてから立ち上がり、暁を落とさないように腕に力を込めつつ歩き出す。

同時に周りを探してみるが、食べられそうなものは相変わらず見つからない。

さらに数分が経過し、暁を背負ったままで肩を落として最大限に落胆する。

「はあ……ないなあ、食い物……」

泣き言にも近い独り言の後に、目で探しつつ口で重いため息を吐く。

りんごが1つ見つかったから他のところにもあるだろう、という甘い考えをしていた  
反動で

心が沈みそうになる。

だがこんなところで諦めるものか、と心の中で自分を奮い立たせる。

まだ1日の半分以上もあるし、雷が疲れて動けなくなったら鎮守府で待つてもらって  
自分一人で

捜せばいいだけの話だ。

声を出さず決意をしていると、暁がつかまっている自分の肩を叩いてくる。

「どうした？」

「向こうに小屋みたいな建物が見えるんだけど……」

「小屋……？」

おうむ返しで聞き返しながら、足を止めて暁が指を向けた先へと目をむける。

遠いせいかぼやけて見えるものの、斜めに傾いているが確かに小屋らしきものがあった。

「少し遠いな……雷、疲れてないか？」

「さっき休んだばかりだから、まだ歩けるわ」

「そうか。話を聞いてたから分かると思うけど、小屋まで少し歩くことになる。遠

いし、

疲れたらすぐに休憩を取るから遠慮なく言ってくれ」

「わかったわ」

雷の返事を聞き終え、小屋に向かって止めていた足を動かす。

もちろん、食料を探すことも忘れずに進んでいく。

首を上下左右に忙しく動かしながらしばらく歩き、小屋まで残りが200mほどになつた頃、



不意に暁が話しかけてくる。

「司令官……やっぱり、横須賀に帰りたい？」

「帰りたい、というのもそうだけど……帰らないといけない、という気持ちが強いかな」  
思ったことをそのまま口にする、暁は呼吸すら止めて固まり、隣で歩いている雷はわずかだが

歩くペースが乱れるのが分かる。

少し疲れたのかと思つて話しかけようとすると、その前に再び暁から声がかかる。

「理由はあるの？」

「ああ、もちろんだ。昨日、私は横須賀からとある鎮守府へ護衛艦付きで輸送されていたんだ。

そこで深海棲艦に襲われ、海へ放り投げだされてこの島へ漂着した。……私が赤子のときから

ずっと一緒に暮らしてきたんだ。教官たちに、必要以上の心配をさせるわけにはい

かない」

「心配、ね……仲がいいのね」

「生まれた頃からの付き合いだからな。私にとって、教官も艦娘も家族だ」

そう言い切つたのを皮切りに、何故か少し居心地の悪い沈黙が訪れる。

雷は無気力にただ足を前へと動かし、暁は何をするでもなく、自分に背負われながら呼吸をしているだけだ。

30秒ほど歩き、小屋までの道のりもそろそろ終わりを告げようとしていたが、黙っていた

暁から再度話しかけられる。

「さっきの、とある鎮守府ってどこなの……う？」

「それが、教官が『着いてからののお楽しみだ』としか教えてくれなくてな。どこに行くつもり

だったのか私にも分からないんだ。……と、こんなこと話しているうちに着いたぞ」

話している間にたどり着いたため、話を中断して足を止める。

先程まで少しふらついていた雷だったが、隣に立ち止まる頃には今までの雷に戻っていた。

その様子を横目に安心しながら、目の前の小屋へと目線を合わせる。

「小屋、というより倉庫だな。扉の錆び具合がひどいな……十年どころじゃないな、これは」

小屋改め倉庫の扉は、見た感じで十年以上、下手をすると二十年ほど経過しているの

ではと

思わされるほどの状態だった。

全体を見てみると壁代わりのトタンは錆びにより無数の穴が開き、崩れずに残っていることが

不思議なほどの損傷具合だ。

「見ただけで何年とかわかるの?」

「横須賀で使われてない装備とかを山ほど見てきたからな。錆び付き具合で大体分かるんだ。

雷、悪いけど扉開けてくれないか?」

無言で頷き、雷は左の扉の取っ手を掴んで横へスライドさせようとする。

「……あれ?」

首を傾げながら何回も試すが開かず、埒が明かないと悟ったのか全身に力を込め始める。

「せく……のっ!」

両足を地面にめり込ませながらも扉を引き、そのまま数秒ほど拮抗状態が続く。

微動だにしない時間が続き、開かない雰囲気を感じ取ったので雷にやめさせようと口を開く。

「開かないならもういいけ——」

「——やあつ！」

言い終わる前に雷が気合の入った声を出し、自分のセリフは中断された。

だが、そんなことを嘆いている余裕は瞬きする時間すらなかった。

ベキバキツ！ という鉄を力任せにへし折るような音と、何かが残像すら霞んでしま  
うほどの

速さで飛んでいく音がしたからだ。

驚いて何かが飛んでいった方向を向くと、やはりとんでもない速さで飛んでおり、進  
路上の木が

当たったところから上が跳ね飛ばされ、瞬く間に10本ほどが犠牲となっていく。

啞然としながら見ていると、通ったところのみがまるで整地されたかのように木が伐  
採され、

遠くで鉄の板を落としたかのような音がした。

回転が鈍くなった頭で考え、まさかと思いつつ倉庫の方へ目を向ける。

「……綺麗にもげてる……」

左の扉のみが取り外されたかのようになくなっており、ハンマー投げ直後のような姿  
勢で

固まってしまっている雷がこちらを見ていた。

やっぱり、艦娘って怖い……

改めて艦娘に畏怖の感情を覚えていると、暁が呆れたような口調で雷に話しかける。

「……派手にやったわね」

「……ごめん、なさい……」

「……ま、まあ、開けろって言ったのは私だしな。 気にしなくていいよ。

開けられたことだし、中を見てみようか」

俯きながら謝ってくる雷に話しかけながら、久しぶりに日差しを取り込んだ倉庫へ入っていく。

中の様子は壁にあいた無数の穴からの風のおかげかほこりは少なく、外観ほどひどくなかった。

「え〜つと、これは……油!? あれは弾薬か! 鋼材とボーキも古いけどちゃんとある!

よかったら、これで当分の資材は賄える!」

「油……見たところかなり古いみたいだけど、使えるの?」

「……そうか、そこが問題だった……」

一人だけで勝手に盛り上がってしまい、少し恥ずかしさを覚えながらテンションを下

げる。

確かに普通なら10年以上も前からある油など使おうと思う人はいないだろうが、今は状況が

状況なため、使えるなら使って欲しいというのが本音だ。

「使えるかどうかやって調べようか？ 人間のと艦娘のとは違うだろうし……」

「……舐めるとか？」

「暁、私は人間だぞ……？」

「司令官じゃなくて、私か雷が試すのよ。そうすれば、使えるかどうかかわかると思うの」

なるほど、と思いつつ横須賀での出来事を思い出す。

金剛がたまたま補給を忘れてしまい、代わりに鎮守府外のガソリンスタンドを強襲しガソリンを

飲んで演習をしようとした結果、艦装が起動せずに沈みかけたことがあったのだ。

本人にいろいろと聞いてみたところ、「……使えない感じはしてたデース」とひどく落ち込みながら答えてくれた。

ちなみにその時に35・6cm連装砲を二基、15・5三連装副砲を一基、零式水上

偵察機を

三機も失うという多大な損害を鎮守府へ与えたため、罰として1ヶ月の紅茶禁止令を出されて

うつになりかけたり、事後処理と書類の山に埋もれていた教官の胃に穴が開きかけた

りした。  
懐かしい思い出に耽っていると、暁が体を振じり入り口付近にいる雷に向かって話しかける。

「雷、ちよつと試してみてくれる?」

「こんな古いのを飲むの? まあいいけど……」

気が進まないのか少し不機嫌になりつつも、言われたとおりにドラム缶の栓を抜き、少し

人差し指にとってなめてくれる。

「ん〜……大丈夫、使えるわ」

「そうか……とりあえず、資源不足はこれで何とかなるな」

「弾薬とかは? 風化したら使えなくなるんじゃないの?」

「いくら風化しても弾薬とかは大丈夫だ。横須賀で吹雪さんが10年ものを食べて

何ともなかったからな」

蛇足となるが、吹雪は横須賀に着任して1ヶ月の頃にまだ鎮守府の構造を覚えておら

ず、迷った

拳句に物置へ迷い込んで風化した弾薬で補給するということがあり、ここが保管庫だ  
と思ひ込んで

しまったらしく、たった2ヶ月で空にして教官を驚かせたことがあった。

「……吹雪つて駆逐艦はそんなことしてたの？」

「しつかり者だが、間が抜けてるというかおつちよこちよいというか、そんな感じの艦娘  
だ。

まあその話は一旦置いて、とりあえず食料探しは中止だ。 持てるだけでもって鎮守府  
に戻ろう。

これだけあれば当分は持つからな」

こくりと首を縦に振り、雷はドラム缶を両手いっぱい抱え持つ。

ドラム缶は一つ一つが缶コーヒーほどの大きさで、体の小さい雷でも12〜13個は  
持てる。

自分もできるだけ持つて行こうと、前かがみになりつつ腕一本で暁を支え、銃弾にも  
似た弾薬を

軍服のりんごが入っていないポケットへと20個ほど押し込む。

「よし、それじゃあ戻ろうか」



雷に話しかけながら倉庫を出ようとする——が、どこか遠くから『ガキンツ!』と金  
属同士が

ぶつかり合うような音がした。

この音は聞き覚えのあるどころではない音だった。

被弾音……!?!?

この音は、艦装に直撃を受けた際に発生する『被弾音』だとすぐに気づいた。

「——くそっ!」

そう意識した瞬間に、いても立ってもいられずに倉庫から飛び出す。

「し、司令官!? どうしたのよ!?!」

「待ってよ司令官! いきなり——」

「響たちが危ない! 今の音は被弾音だ!」

雷の言葉を途中で遮りながら、暁を落とさないように獣道を音の聞こえたほうへ全力  
で

駆けていく。

すぐに平坦な道から下りへと変わり、滑り落ちるように駆け下りて砂浜へ出る。

どこだ、どこだ……!!

両目を限界まで見開き、水平線をなぞるように二人を探す。

ものの2秒ほどで二人は見つかった——が、電は艀装から黒煙を大量に吐き出させながら響に

もたれかかり、響は電をゆすぶるばかりで周りを見ていなかった。

状況を整理しようと深呼吸しながら考えていると、響たちの周りに水柱が立つ。

そしてそれに、響は全く反応していない。

……まずい、このままじゃ沈む！

「はあ、はあ……司令官、響たちが危ないってどういう——」

「暁を頼む！」

「え、あ、ちよつと!?!」

背負っていた暁を優しくも振り払うように砂の上を降ろし、戦闘が起こっている海へと

駆け出した。

## 第16話 響の混乱と強い思い

「ふわあ〜……わふっ」

電が、女である自分から見ても可愛らしい仕草と声であくびをした。

哨戒を始めてから30分、何事もない現状に欠伸が出てくるのは仕方がないとは思  
うが、

こうして気を抜いた時に限って敵はやってくる。

「電、油断は禁物だよ」

「わかってるのです。でも……」

電は途中で言葉を切って周りを見渡し始め、脚部艤装を操作して島を背にして同じよ  
うに

見渡してみる。

空は雲一つない快晴、海は穏やかな波を立てるのみで、敵の襲撃などあるはずがない  
ような

雰囲気か辺りに漂っている。

だが先程自分でも思ったとおり、こういうときに限って襲撃してくるのが深海棲艦

で、一瞬でも

気を抜こうものなら襲われる可能性が高まる。

「言いたいことはわかるよ。だけど、さぼったり油断するのは良くない」

「もちろんわかっているのです。でも日差しが気持ちよくて……ふわあ……」

またしてもあくびをする電に苦笑いし、再び意識を哨戒任務へと戻す。

鎮守府近くにはなかったのだが、いつの間にか敵艦が1〜2隻隠れるには十分なほどの岩陰が

見えてきており、そのため移動して裏側まで確認しなければならない。

更には隠れていた時の事も考慮して距離を置きながら偵察する必要があるが、岩の数  
が多く

撃沈の可能性も考えるとまともに偵察する度胸はない。

相手がたとえ駆逐艦であろうと、目の前まで接近されれば戦艦も駆逐艦も関係なく、  
燃料を

流し込んだ皮膚を砲弾は貫いてくるからだ。

こういう時に軽巡や重巡が装備できる水上偵察機が羨ましくなるが、無いものをね  
だつても

仕方がないので断念する。

そんなことを考えながら目に見える範囲で耳も使いながら警戒しつつ、島を半周したところで

砂浜が見えてくる。

今まで島中が無数の気で覆いつくされていたために、少し意外だった。

「響ちゃん、待ってなのです……」

後ろから声が聞こえて振り返ると、電が少し息を切らせながら追ってきていた。

「どうしたんだい？」

「ちよつと疲れて休憩してたのです」

「呼び止めてくれれば一緒に休んだのに。これじゃあ二人で警戒してる意味がない

よ」

「でも、いくら呼んでも聞いてくれなかったのです……響ちゃんの悪い癖なのです！」

電に少しきつく言われ、何も言い返せずに口ごもる。

集中力は姉妹の中で一番あると自負しているが、逆に集中しすぎて周りが一切見えなくなる

ことがあり、直そうとしても直せないでいる。

「……なんとか直してみるよ。それより、砂浜があるけど休んでいくかい？」

まだ哨戒を始めて1時間も経っていないが、電に休憩をするかどうかを聞いてみる。

艦娘は脚部艤装、すなわち主機があるおかげで海上に立っていられるが、逆にそれなしでは

浮くことすらままならない。

それ故に海上にいる時はずっとバランスを取りながら立たなければならず、どうしても足に

負担がかかって疲れがたまる。

それが原因で注意が散漫になったり士気の低下につながるため、大体1時間に5分ほど

岩などに身を隠して休憩するのが常とされる。

現に注意不足による被弾率が高いのは、岩も何もない広い海域だったりする。

「お言葉に甘えて、少し休ませてもらうのです」

自分の問いかけに答えた電は、砂浜へと体を向けてゆっくりと進み始める。

そろそろ足も疲れてきた頃だったので、電と同様に休もうと自分も砂浜へと向かう。

特別急ぐこともなく休めるということもあり、体の力を抜いて徐行する。

またすることもないため、自分の体の様子を確認しながら航行していく。

哨戒中は別に脚部艤装の出力を上げるようなことはなかったために燃料はあまり消費して

おらず、弾薬にいたっては一発も放っていないので補給する必要もない。

使用不能と思っていた暁の艦装も、やはり工廠長の腕がよかつたのか新品同然に動いており、

脚部艦装にいたっては自分の使い慣れたものよりも使いやすい。

気になって右肩付近にある主砲の砲角を変えてみる。

とりあえず海面に向かって下げてみると、見る見るうちに主砲は揺れる海面を捉え、ついに

海面とほぼ垂直になるまで下がってきた。

自分の主砲も電の主砲も、体をかがめてもここまで下がったりはしない。

そのことに少々驚きつつも、今度は角度を上げてみる。

主砲は機銃ほどではないが対空砲火のためにも設計されており、戦艦でも駆逐艦でも  
ほぼ  
真上まで跳ね上がる。

この艦装なら直角までいける、と思ったのだが。

「え!? う、うそ……」

予想を裏切り——砲口は真後ろを通り越して背後の海面へほぼ垂直に向いた。

これには隣で見ていた電も驚いたようで、いつの間にか興味深々と言った様子で主砲

を

見ていた。

「これは……もう主砲じゃない気がするのです……」

「工廠長……なんというか……」

あまりの出来事に言葉がつけず、二人して口をパクパクとさせ続ける。

二人して呆気にとられているとどこからか鉄を力任せに叩き割ったような音がし、その音がした方向を向く。

続いてベキ！ とかバキ！ などの少々物騒な音が聞こえ、最後に金属特有の歪んだ音を

響かせてうるさかった音が止まる。

「一体何が……?」

「多分雷がなにかしてるんじゃないかな。ほら、雷って活発だから」

「……ありえるかも、なのです」

お互いに見合って苦笑しつつ、いつの間にか前進をやめていた艦装を動かして砂浜を目指す。

つま先立ちのようにかかたを浮かせて推進力を後方へ逃がして進むが、この姿勢は見かけよりも



足に負担がかかる。

そのためか、つい先ほどまであまり感じられなかった足首の痛みやふくらはぎなどの疲れが

強くなる。

早く休みたくないな、という思いが強くなり、艦装の推進力を少し上げて電より前に出る。電も自分と同じように推進力を上げたのか、ぴたりと後ろについてきてそのまま砂浜へと

向かう。

少しの間進み、砂浜へ上がるために艦装の推進力を弱めて徐行する——と同時に、甲高い

金属音が聞こえてきた。

「っ!? 電、一体何……が……!?!」

問いかけようと電のほうへ振り返るが、言葉を詰まらせざるを得なくなってしまう。いきなり自分へともたれかかってきて——

「いな……ずま……」

背部艦装は黒煙を大量に吐き出していて——

「うそ……だって、そんな……」

口からは血が出て、自分の服を赤く染めていた。

そう意識した瞬間に、黒煙が昔の記憶に一部と結びつく。

自分がまだ船だった頃、間近で今のような光景を見たことがあった。

乗員を救出している傍らで、煙を吹き上げながら二つに折れて沈んでいく妹——電の姿を。

二度と見たくないと思っていた光景が、目の前にある。

それだけで手は震え、足から力が抜け、頭の中が真っ白になる。

守って欲しいといわれたのに、守ると誓ったばかりなのに。

そんな言葉が頭の中で反響し、目からは熱い液体が零れてくる。

「嫌だ、嫌だよ、電……」

姉妹の中でただ一人生き残った自分、一人取り残された自分が勝手に口を動かす。

「嫌だ、もう一人は嫌なんだ……」

電の体を揺するが、ただただ口からは溜まった血が流れ出るだけ。

また、目の前で失ってしまうのか——

「起きて、起きてよ……起きてよ電……!」

何度揺するうと、全く反応がない。

「死なないで、死なないで……一人にしないで……」

海に涙を落としつつ、動かない電の体を揺すり続ける。

一人になる苦しみは知っている、一人になるのは嫌だ――

「起きてよ、なんで……起きてよ、電あ！」

いくら揺すつてもいくら呼びかけても、動く気配はない。

今起こさなければ、今呼びかけなければ、二度と会えないかもしれない。

「電、起きてよ！ 起きてよ！ 起きて――」

言葉を途中で遮られ、肩を無理やり引つ張られて。

それと同時に、パチン！ という音が響き、左頬に痛みが走った。

「響――」

たった一言だけだが、はつきりと聞こえた。

この声……司令、官……？

ここにいるはずのない人の声がして、声がした方を見つめる。

白い見慣れた軍服を着て、右腕は何故か振り切っていて、左腕には電を抱えていた。

いつの間にか電の艤装は外されており、口から血を流しながら司令官の腕の中でぐつ

たりと

している。

何がどうなっているのか分からず辺りを見渡そうとするが、すぐ近くで轟音が発生し

て両耳を

押さえる。

「何、何……!?!」

慌てながらも、水平線をなぞるようにしてやりかけたことを再開する。

そして、岩礁の近くには深海棲艦を見つけた。

少し遠くにいるためによく分からないが、シルエットから駆逐口級だと推測し、空っぽになった

頭で司令官へと向き直る。

「響ー！ 戦闘中だ、しっかりしろ！ 電はまだ生きてる！」

「戦、闘……生きてる……?」

ぼんやりとした頭で、司令官の言った言葉を理解していく。

電は口を下にするように抱えられて血を垂らしているが、よく見れば小さくだが息をしている。

電が死んでいないことに安堵しながらも、周りの状況を確かめていく。

水柱が立つなら砲撃があり、この状況なら必ず敵がいる。

そして、その敵は……

振り返り、つい先ほど見た『敵』をもう一度捉える。

口らしき器官を開け、覗かせている砲身から小さいながらも死を運ぶ弾を何発も撃ち、自分の周りに着弾する。

小さいシルエツトだったが、時間が経つにつれて段々と大きくなってくる。

そうか……いま、戦闘中なんだ……

考えがあまり定まらないが、これだけは考えられた。

電が被弾したからといって、取り乱してしまった自分が情けなく思ってしまう。

「響、避ける！」

考えをまとめていると、ついに自分をしっかりと捉えた弾が向かって飛んでくる。

だが、もうあわてたりはしない。

司令官に避けるように言われたが、ここで避けてしまうわけにはいかない。

ここで避けてしまえば、近くににいる司令官が着弾の余波を受けて無事で済む保証はな

く、傷を

負っている電の体に響いてしまうのは避けられない。

二人を助ける最善の手は——自分が防ぐこと。

瞬間的に感じ、背部艦装の下下手を伸ばし錨を掴んで一気に引き抜く。

繋がっている鎖がじゃらじゃらと音を立てるが、意識する暇もなく弾は迫ってくる。

錨を持つ手に力を込め、少し腰を落として構える。

本当に電を助けたいなら――

「Ураааааааааааааааа!」

――Fight（戦え）！ Победа（勝て）！

左手に持った錨を、横から弾へ全力で叩きつける。

錨を握っている左手に衝撃と激痛が走るが、気合で押さえつけてさらに力を入れる。

一瞬の出来事のはずだが、主観では何秒にも感じられた。

弾とぶつかった瞬間に火花が散り、じわじわと増していく痛みに耐えつつ力を加えて弾の軌道を変えていく。

そして軌道を変えた弾は、右斜め後ろへと抜けて着弾して波を起こす。

「はあ、はあ……」

感情に任せてこんなことをしてしまったが、錨で敵弾を弾くというのは初めてだった。

燃料はたった数秒にしてはあり得ないほど減り、体の力も抜けそうでも何とか立ち続けて荒い呼吸を繰り返す。

だが、いつまでもこうしているわけにもいかず、不思議と砲撃を止めている口級を見ながら

司令官へ話しかける。

「……はっ……私が何とかするから、電と逃げて……！」

「……響、戦えるか？」

「……КОНЕЧНО（もちろん）！」

司令官からの問いかけに、自分の気持ちも固めるように力強く返事を返す。

「その様子だと大丈夫そうだな。頼んだぞ、響！」

ロシア語が分からないことを忘れていたが、自分の意思は伝わったのか司令官はそんな言葉を

自分に返して水を切りつつ遠ざかっていくのが音で分かる。

電の安全は司令官が保証してくれるし、自分はほとんど傷ついていない。海にいるのは自分と敵、一対一だ。

勝つ……勝って、皆を守るんだ……！

「負けない！ 私は、もう負けるわけにはいかない！」

相手にではなく、自分を奮い立たせるために叫ぶ。

その声に反応したのか、先程まで止めていた砲撃を再開してきた。

回避行動を取りつつ、自分の全てを戦闘状態へ切り替えて応戦を始めた。

## 第17話 電の傷の手当て

『負けない！ 私は、もう負けるわけにはいかない！』

電を抱えて暁と雷の元へ駆けていると、後ろから響の力強い声が聞こえてきた。

最初は戦意が一欠片も無かったが、今の響になら安心して任せられる。

頑張ってくれよ……！

最後に心の中で励まし、意識を電の方へ向ける。

背部艤装の熱による背中の火傷もそうだが、口から垂れ落ちている血のほう心配だ。

口から血が出るというのは、口内や喉、肺などが傷ついている証拠であり、もし肺が傷ついて

いた場合、程度にもよるが艦娘でも死ぬ可能性がある。

「電!? ねえ、大丈夫なの!？」

「心配するのは後だ！ 暁を連れて離れるぞ！」

流れ弾に襲われたりこちらが狙われるのを避けるため、駆け寄ってきた雷を言葉で制す。



一瞬訳がわからなかないような顔をしたが、自分の考えがわかったのかすぐに頷き、暁を抱えて

一緒に森の中へとはいる。

斜面を振動が電の体に響かないように登っていくが、約10歩ごとに血を吐き出し、軍服の左側

を赤く濡らしていく。

そうして一分が経とうとしていた時、電が腕の中で身じろぐ感覚がした。

「電、大丈夫か？」

「し、れ……っ!？」

言葉は切って口に手を当てたかと思うと、血が溢れてぼたぼたと地面へ落ちる。

「うぐっ!?! ぐっ、げぼっ!」

「我慢するな、全部吐け!」

すぐに電を地面に降ろし、耳に届くように話しかける。

血を吐くときは嘔吐とは違うため、背中をさすらずに自然と収まるのを待つ。

口から出てくるのは多少胃液も混じっているがほとんどが血で、落ちたところは鮮やかな赤へと

変わっていく。

横で暁と雷が心配そうに見つめる中10秒ほどが経ち、何とか電は落ち着いた。

「電、大丈夫？」

「いか、ずち……ちゃん……？」

雷の声に反応して顔を上げ、周りを見渡し始める。

血で塗れて分かりにくかったが、訳が分からないといった表情をしていることに気付いた。

「自分がどうなったか覚えてるか？」

「しれ、か——ぐぶっ!？」

自分に向かって話そうとして口を開いたようだが、すぐに口を押さえてまた吐血してしまう。

「うぶっ! ぶぐっ! はあ、はあ……」

「無理して話そうとするな。身振り手振りで教えてくれればいい」

吐血が治まったところで出来るだけ優しく話しかけると、言われた通りに電は頷いて返事を返した。

返した。

「どこが痛いか教えてくれるか？」

「……………、こが……………」

集中しないと聞き取れないほどの声を出しながら、電は右手で右胸を押さえるようにして

言葉を続ける。

「おく、が………いたい、ので………す………」

くそっ、やっぱり肺か………!

予想が的中してしまい心の中で悪態をつくが、他の重要なことに気づき更に問いかける。

「左胸やのどは大丈夫か?」

その問いに電はゆっくりと頷き、少しだけ安堵する。

片方でも肺が動けばすぐに死ぬことはないが、それでも危険な状態であることに変わりはない。

ない。

改めて命の危機を感じて焦りそうになるが、それを心に押し込めて雷へ話しかける。

「雷、さっきの倉庫の場所は分かるか?」

「えっと………なんとか」

「なら、戻って燃料と鋼材をありったけ持って鎮守府まで戻ってくれ。私は電を運んで戻る」

「ちよ、ちよつと待つて！」

頭ごなしの指示を出しながら電を抱えようとしたが、寸前で雷に呼び止められた。

「暁はどうすればいいの？ 背負ったままだと、多分入渠に必要な量が持てないかも

……」

「……………」

雷の言葉に、口を閉じざるを得ない。

足をくじいてから時間は経っているが、一人で歩くにはまだつらいはずだ。

ここで待つてもらおう手もあるにはあるが、この寒い気候の中で待たせてしまうのも忍びなく、

流れ弾が飛んでくる可能性も低いとはいえ0ではない。

くそ、どうする、どうする……………！

電の体を考えるとあまり悩んでいる余裕はなく、そのせいで自分を更に黙らせる。

「……………私も、雷と一緒に運ぶわ」

頭を高速回転させて策を考えていると、暁からそんな言葉が聞こえてきた。

「足は大丈夫なのか？」

「ゆつくりだったら山ぐらい歩けるわ。それに……………私のせいで、電が死ぬなんて嫌だから」

言い終わる前にもがき始め、雷は背負っていた暁を足から降ろす。

大丈夫というだけはあったのか、暁は少しもふらつかずに自分の力だけで立つ。

それを見て少しだけ安堵し、時間短縮のため電をゆつくりと背負いながら二人に任せ  
る

ことにする。

「必要な量が分らないから、出来るだけ多めに持つてきてくれ。頼んだぞ」

「分かったわ……電、頑張るのよ!」

前に抱きかかえた電が頷き、暁と雷は倉庫の方へと向かい始める。

それと同時に自分は鎮守府があるであろう方へ向き、腕の中で苦しそうに縮こまっ  
ている電へ

話しかける。

「これから少し走るから、血は我慢せずに吐いてくれ。いいか?」

「はい……なのです……」

電のかすれた声を聞き、山の斜面を登り始める。

遠くで聞こえる砲撃音を聞きながら、しっかりと土を踏んで登る。

ここに来るまでにかなり時間を使ってしまったため、鎮守府に戻るまでに電の症状が

悪化

しないか心配だが、そこは本人の気力と生命力に頼るしかない。

大方収まっているが電の吐血は続いており、軍服が真紅に染まって血の生暖かさが伝わって

くる。

せめて吐血だけでも収まればとできるだけ振動を抑えながら、足の回転速度を上げる。

今の時点でかなり血を失っているため、出血性ショックなどを起こしてしまつては、食料や

医療器具の無いこの状況では治療が困難だ。

早く入渠させなければ、と思いつめながら駆けていると、土で埋まっていた視界が一気に広く

なる。

どうやら、この島で一番高い場所に着いたようだ。

少し荒くなつた息を整えながら、自分が向かっている方向が正しいのか確認する。

何処を見ても山の緑と海の青しかないが、海岸線沿いに建造物を見つけた。

念のためと思つて他の場所も見てもあの倉庫しかないので、あれが鎮守府だと断定する。

「……よしー」

呼吸が落ち着いたところで自分に気合を入れ、鎮守府に向かって山を下る。

2〜3分ほどで降りきり5分ほどかけてもう一度登ると、鎮守府のすぐ近くに出た。

「もう少しだからな、頑張れよ……!」

腕の中でまだ苦しんでいる電を、頭を撫でながら励まして鎮守府へ向かつて最後の下り坂を駆け下りる。

主発前に自分たちがつけた砂浜の足跡をもみ消すように強く踏みしめ、横須賀鎮守府とは違う扉を乱暴に開き、船渠に向かって全力で走る。

たてつけの悪い入口を開いて中には入り、ゆっくりと電を脱衣所の床へ横にする。

「はあ、はあ、はあ……っはあ……」

約10分間の全力疾走のせいで息が荒れてしまい、それを10秒ほどかけて深呼吸で整える。

息を整えられたところで、次は雷が戻るまでの間で電の体の様子を調べていく。

「電、少し触るぞ」

とりあえず患部を直接見なければ何もできないため、服を脱がせようと縦になってい

る体を

背中を床につけるように倒す。

「——っ！」

それと同時に、言葉にし難い声を上げてうつぶせになってしまう。

無理やり体を押さえようかと腕に力を入れようとするが、電の背中を見た瞬間に驚愕する。

「くそっ……焦げてる……っ！」

肩甲骨の間から脇腹にかけて、服はポロポロとこぼれ落ち、肉は表面が完全に炭化していた。

抱き抱えている時は腰と首に腕を回していたため、全く気が付けなかった。

入渠すれば治るどうこうの話ではなく、今すぐにでも治療しなければ後遺症が残り、

最悪の場合

死も考えなければならぬ。

通常は背部艤装の熱で火傷した場合、脚部艤装の排水機能を使い、直接海水を当てて

艤装の熱を

抑えつつ皮膚を冷やしていく。

だが、あの状況では被弾した瞬間に気絶してしまったと考えられる。



気を抜いたときに被弾したのだろうが、今は叱ることより治療が優先だ。

艀装の火傷を無視して吐血ばかりに気を取られてしまったことを、後で謝っておかなければと

考えながら上の軍服を脱衣所に脱ぎ捨て、電の体を抱えて風呂場へと入る。

服を脱がせてしまうとかくつついた皮膚が剥がれてしまうため、あえて脱がさずに冷たくなった

浴槽に自分が先に入り、電を少しずつ入れていく。

足をつけた瞬間に少し震えたが、抵抗せず自分にされるがままにして段々沈んでいく。

腰まで浸かった所で一旦止め、腕に力を入れ心の準備をして再度沈めていく。

力を入れた理由と心の準備をした理由は——激痛で暴れるのを押さえるためだ。

「——ああああ！ ああああああ！」

炭化した所に水が触れた瞬間、苦痛による叫びを上げながら暴れだした。

それと同時に電の口から血があふれ出し、落ちた大量の血が袖の無くなったシャツと浴槽内を

染めていく。

振り回されている手足が体に当たるが、燃料を流してなければどうということはない

い。

脇を持って支えていた両手を、無事だった場所を掴んで自分の体に引き寄せて抱きしめる。

「電……電、耐えろ……！」

頭も手で押さえながら、あばれる体を浴槽へ浸けていく。

半分ほど浸けると、電は自分の体に手を回し、痛みに耐えるように抱きついてくる。

「ああ、つああああ……！」

「痛いよな、痛いよな……大丈夫、耐えたら治るからな。もう少しだけ頑張れ」

涙を流しながら痛みを訴えてくる電を、頭を撫でつつ励ます。

何回か撫でると落ち着いてきたので、静かな船渠に響き渡る電の悲痛な声を聞きなが

ら少しづつ

体を沈めていく。

何分かかけてなんとか肩まで浸からせ、浴槽内に電を座らせる。

「頑張った、よく頑張ったな……」

電の頭を撫でながら、ねぎらいの言葉をかける。

「……し、れいか……さ……」

だが、出血量が多いのか痛みが強かったのか、電の意識は朦朧としていた。

聞こえたがどうかわからないため、もう一度抱きしめながら頭を撫でる。

撫でつつ炭化した背中を見ると、時間が経っていたためか出血はしていなかった。

吐血の方もほとんど収まっているため、後は雷たちが早く資材を持つてくるのを待つだけだ。

意識が朦朧としている電が溺れないように体を支えながら、資材が届くのを待ち続けた。

## 第18話 倉庫探しと資材確保

ズキズキと、一歩ごとに足首が痛む。

雷の背中から降りた後から、痛みは増していくばかりだ。

「暁……まだ足が痛いんじゃない？」

「へ、平気よ！ 歩けないほどじゃないわ！」

雷へ言い返ししながら、痛む足の回転を上げる。

司令官と別行動を始めて5分ぐらい経ったが、目的の倉庫が見つからない。

こうして自分達が迷っている間に電が死んでしまうかもしれないと考えると、足の痛みに負けて

いる余裕はない。

「ねえ、こつちで合ってるの？」

「……多分」

雷の曖昧な答えに不満を抱きながら、森の中を進んでいく。

焦りがでてきているのか、足の痛い自分も雷も普段の歩きより速くなっている。

会話もせずを探していると、変な板らしき物を見つけた。

「雷……あれ何なのかしら？」

板のある方を指差しながら、雷に話しかける。

疲れがにじみ出ている表情をしながら顔を上げるが、自分が指差している物を見ると

雷の表情

から疲れが消え、何かを確信したような顔に変わる。

「あれって……もしかして……」

ぼそぼそと何かを言いながら、雷は板に向かって走り出す。

少し遅れながら後についていくと、板の正体が分かってくる。

「倉庫の、扉……？」

今にも朽ち果てて風で飛んでしまいそうなそれは、雷が強引に吹っ飛ばした倉庫の扉だった。

これがあるなら、と周りを見渡すと無残に切り倒された木々の道があり、その先に目的の倉庫が見えた。

あの時には普通に開ければ良いじゃないかと思っただが、今となつては正解だったのかも  
しれない。

そんな事を考えている内に雷は倉庫に駆け出してしまい、転ばないようにしながら後を追う。

左の扉がない入り口から入り、雷が燃料をポケットに入れている最中のため自分は鋼材を探す。

「鋼材、鋼材……あ、あった」

隅にあった台形の特殊な鉄を見つけ雷と同じようにポケットに入れようとするが、自分のいる

場所より奥に何か変なものがあることに気づいた。

不思議に思っ近づいてみると、その正体が分かった。

「高速修復材……そうよ、これを持って行けば……い」

自然とはにかみながら、緑色で『修復』と古めかしいフォントで書かれたバケツを持つ。

中には特殊な液が入っていると思いい力を入れて持ち上げるが、異常に軽く肩透かしをくらって

よろけてしまう。

まさかと思いつつ中を覗くと、案の定中には何も入ってなかった。

まだ他にも残っているため見てみるが、やはり全て空だった。

「う〜ん……」

少し悩み、司令官に言われた通りにありったけ持って行こうと、空バケツに鋼材をゴロゴロと入れていく。

「暁、何してるの?」

音に反応したのか、雷が燃料を抱えて近寄ってきた。

「これで一気に持つていけないかしら? 響も無事に帰ってくるとは限らないし……」

「……それって、バケツじゃないの? 中身は?」

当たり前のことを聞いてきたように思えて一瞬訳が分からなくなるが、すぐに高速修復材の事

だと理解した。

「あそこにあるのも全部無かったわ。ほら、雷も燃料入れて」

「う、うん……」

下半分に鋼材、上半分に燃料を入れて再度持ち上げる。

元々のバケツが大きかったためかなりの量があり、体感で7〜8kgほどはあった。ポケットに入っている分も合わせれば、響も入渠するのにも十分だろう。

「私が持つから、暁は無理しないで」

雷がそう言い、自分からバケツをひったくるようにして持つ。

姉として自分が持つと言いたかったが、足場の悪い山道で転んでは逆に迷惑をかけてしまう

ため、出掛かった言葉を飲み込んで雷に任せる。

「さて、と……暁、出来るだけ早く戻るわよ」

「分かっているわ。雷も転ばないでよね」

電、頑張って……あと少しだから……！

まだどこにいるかも分からない妹を心の中で励まし、鎮守府があるであろう方向へ雷と足を

踏み出した。



## 第19話 鎮守府海域にて単艦戦闘開始

「はあ、はあ……」

息を切らせながら、主砲から砲弾を放つ。

未だ収めず錨を握っている左手は、すべって落としそうなほど手汗をかいている。

艦娘となつてから一人で戦つたことがないせいか、それとも緊張のせいか、いつも以

上に息が

上がる。

戦闘を始めてどのくらい経つたが分からないが、自分も向こうも攻撃は一つも当たつていない。

魚雷はすでに、何回撃つて何回再装填したか覚えていない。

たまに近づいては錨で殴りかかるが、すぐに距離をとられ鉛弾をお見舞いしてくる。

だが、どちらも駆逐艦なために回避性能が高く、弾はかすりもしない。

逆に言う、最初にかすらせたほうが今回の戦闘を有利に運べる。

とにかく当てようと、動き回るイ級に向かつて撃つ、撃つ、撃つ。

全弾が外れるのに構わず両舷6門の三連装魚雷を放ち、雷跡の後をたどる様にして接

近する。

近づく間、いつ撃たれてもかわせるようにイ級の主砲を見つめ続ける。

魚雷を回避した先に砲撃を叩き込み、それでもだめなら錨で殴る。

成功率は低くても、自分の今まで培ってきた回避技術と回数があればいつかは倒せるはずだ。

自分から見て右に回避したイ級に狙いをつけて放つ——が、少し届かない。

イ級の主砲がよそに向いている隙に近づいて錨で殴る。

「うっ……あっ!？」

回避されて錨が海面を抉り、今までとは違って錨に振り回されてしまい、バランスを崩して  
しまう。

それを見逃してくれるはずも無く、直後に至近弾が迫ってくる。

「くっ……い！」

バランスを崩したまま艀装の出力を上げ、こけるようにしながら避ける。

疲れてる……早くしないと……

心の中に焦りを産みながら、全身の疲れを意識する。

燃料と弾薬にはまだ余裕があるが、全部尽きるまで体力が持つ自信はない。

だが一人でやれることは限られているため、先程までの行動を繰り返すしかない。魚雷の再装填を始めながら、すぐにバランスを取り直して回避行動を取る。

……なんで、こんなに難しいんだ……？

今まで一人で戦ったことは一度もないが、駆逐艦相手に手間取ってしまう理由が分からない。

砲撃も、雷撃も、回避も、隠れて練習したことは何度もあった。

艦種が違う軽巡や重巡なら、元々の力が圧倒的に違うから納得できる。

でも、イ級ごときに今の自分が勝てないわけがない。

そう——勝てないわけがない！

ガコン、という魚雷再装填完了の合図とほぼ同時に放つ。

六発の魚雷が水面に雷跡を作りながらイ級に向かい、自分も後に続く。

先程までと同じく口元の主砲に注意しつつ、魚雷に当たらないギリギリの速さで進む。

いつどちらに避けるか、無意識に焦りながら相手を凝視する。

残り距離が50mほどになったところで口らしき器官を開け、主砲がこちらに狙いを定めて

くる。

……勝った!

砲撃すれば隙が生まれるため、それを冷静に避けられれば今度は自分が叩き込める。もしそれを回避したとしても、魚雷は向こうが回避するであろう予想進路上に放つて  
いるため、

今すぐにも砲撃を中止して回避しなければ高確率で当たる。

単艦戦闘初勝利を確信しつつ、弾着時の振動で魚雷が誘爆しても避けられるよう、少し距離を

取って敵弾に備え——いや、違う。

あれは、砲撃ではなく『雷撃』だ。

口から、三発、四発、五発と次々に魚雷が打ち出され、的確に自分を追い込むような  
進路で

向かってくる。

距離が近ければ命中率が高くなると、自分でもわかっていたはずなのに。

急いで急旋回しようとしたが間に合わず、自分とイ級の魚雷が接触して水中で爆発を  
起こす。

高密度に放っていた周りの魚雷を巻き込んで誘爆していき、二発相当の水柱が何個も  
上がり、

近くにいた自分の視界が水で覆われてしまう。

まずい………！

自分の顔にかかる水しぶきを腕で防ぎながら、頭の中で様々な思考が渦巻く。

戦闘中にもっともしてはいけないことは、敵艦を見失うことだ。

いかに能力が優れていようと、死角からの攻撃に対処できるのは、それこそ武術を極めたような

者しかいない。

距離を取るのが正しい行動ではあるが、不規則な波を掴まずに航行すると転倒してしまいうため、

ある程度収まるまで大人しく待つしかない。

そう思い、イ級がいた方向を警戒しながらその場に留まる。

だが、少しだけ考えが足りなかったことを瞬時に悟った。

これだけ接近していて、イ級がこれを見逃してくれるはずがないと。

収まらない水柱を途中から遮り、黒い物体がこちらへ飛んでくる。

口らしきものを広げ、中には黒い穴が開いたような棒が見える。

それがイ級とその砲身だと気づくのに、時間は全く要らなかった。

逃げなければ——荒れている波の上ではまともに動けない。

ならばせめて反撃をと、無理やり艤装に命令を送り砲撃する。弾は、イ級の左下をかすりもせずには抜けた。

この10mもない超至近距離で、自分が外すなんて――

嘘……嘘だ、嘘だ……

突然、視界にある全てがゆっくり動き始める。

飛んでくるイ級も、視界の隅を白く塗りつぶす水柱も、全て。

その中で、自分の視線がイ級の砲身へと吸い寄せられる。

どこまでも続いていそうで全く底が見えず、それから自分に死を運んでくるのだと理解した

瞬間、全身が縮み上がる。

何かしなければと体を動かそうとするが、動かない。

体が鉛のように重く、自分の言うことを聞かない。

嫌だ！ 動け動け動け、動け！

足には逃げるように、左腕には錨で殴るよう滅茶苦茶に命令するが、体が別の意思で固めて

いるのではと錯覚するほど動かない。

ついに手から力が完全に抜け、錨が落ちた。

終わった——そう思うしか、自分に残された選択肢はなかった。

主砲も魚雷も再装填する余裕はない、今日見つけた近接武器である錨もない。

そう思うと何故か、視界に暁達の姿が映った。

楽しそうに自分を見ながら笑っている、眩しいほどの光景。

自分と手をつないだり、抱きしめたり抱きしめられたり、一緒に寝たり。

それが何かを考える暇もなく、ふっと皆の姿が消え、元のイ級が迫ってくる光景に戻る。

嫌だ……死にたくない……

暁たちを残して、自分が死ぬなんて嫌だ。

強く思うと、何故か勝手に体が動いた。

それはただの反射行動で自分の頭を庇うだけだったが、その場に立っているよりまし

なのかも

しれない。

そして飛んでくるイ級から火が見え、直後に覆いかぶされるように海中へと引きずり

こまれる。

歪んだ音が頭の中に響き、イ級だと思われる気持ち悪い感触が両腕を包む。

それだけで終わらず、水中でも泳いでいるのか後方へと勢いよく押されてしまう。

それが数秒続く内に、自分がまだ生きてることを実感でき、抗う勇気が出てきた。

このっ……！

自分の利き腕である左腕を、水流に負けないよう燃料を流し込みつつ振りかぶる。

素手で深海棲艦を傷つかせる事は出来ないが、艦娘としての力と水流の強さを最大限に利用

すれば、離れる位は出来るかもしれない。

そう感じて行動に起こしたのだが、背中と振りかぶった左腕に衝撃が生じ、ごぼごぼと口から

空気が漏れる。

イ級は止まらずに自分を押し流していくが、強烈な力で背部艤装が引つ張られてようやくイ級

から離れる。

体が、特に左腕が痛い水面への浮上を最優先し、脚部艤装の出力を上げて全身を浮上させる。

だが、またはや何かに引つ張られて上昇出来ない。

引つ張られた方向を見ると、錨が岩か何かに食い込んでいた。

やむを得ず背部艤装に命令を送り、錨を強制解除して再び海面を目指す。



ほどなくして水上へ浮上でき、視界が鮮明になる。

それと同時に左腕が激しく痛み、右手をあてが——えなかつた。

「っ!？」

右手首に、骨の芯から焼けるような鋭い痛みが走つた。

左腕の痛みを一瞬で上書きした激痛の元を見て、全身が恐怖に包まれた。

手首から先が、無くなつていた。

抉り取られたような傷口から血が少し吹き出し、痛みがより一層鮮明に脳へ伝わってくる。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い——

頭の中で、その言葉だけが連鎖し始める。

今まで大きな怪我は骨折ぐらいしかしたことがなく、その痛みとは比べ物にならない。

たかが手がなくなつただけで、こんなに痛いなんて——

身動き一つできずにただ痛みに耐えながら傷を見ていたが、明らかに出血量が多いことに

気づいた。

「ぐっ……ううっ……!」

何とか血を止めようと左手で掴もうとするが、触れる瞬間に怖くなって手を止めてしまった。

もしかしなくても、これ以上痛くなるのではないか、痛みで気がくるってしまわないか、

と漠然とだが意識してしまい、わなわなと手が震える。

そうして怖気づいているうちにも、手首からは血が絶え間なく溢れ出ていき、目の前で海水を

目指して滴り落ちていく。

多分、あと十分もすれば血が足りなくなり、人間のように死んでしまうだろう。

頭の片隅に残った微かな思考力が、そう自分に自覚させてくる。

このまま放つて死ぬか、痛みを我慢して生きるか。

自分が一人つきりなら死ぬほうを選んだかもしれない。

痛いのは嫌だし、さほど生きていたいとも思ったこともない。

でも、暁や雷、今も苦しんでいるであろう電のことを思うと、そちらは選べなかった。

守る、守って見せる——いつかそう自分自身に誓ったはずだ。

前世で守れなかった分、今度は自分が守ると決意したはずだ。

この世界で幸せになって自分が看取るまで、絶対に死なない——いつかの日を思い出

して、

生きる道を選ぶ。

手首を握り、動脈を中心に思い切り力を入れる。

同時に目の前が白くなるほどの痛みの波が、一気に頭に流れ込んできた。

「あああああ——！」

痛い、でも生きるためにはやるしかない。

そう思い傷口を凝視しながら歯を食いしばり、血が止まるのを待つ。

しかし、精一杯力を入れていのに出血は止まるところか衰えもしない。

「なんで……なんでこんなに痛いのに……」

こんなに痛い思いをしているのに、なぜ血が止まらないのかわからない。

両腕とも血まみれになって頑張っているのに、どうして。

骨が折れないように力を抜いていたが、そんな加減をしている場合ではなくなった。

骨にひびが入るほど強く握るが、ほんの気休め程度にしか出血量は減らず、ただ痛み

を増した

だけだった。

出血を止めるためには、これ以上の力を加えて握りこむしかない。

そうすれば、骨が砕けることはもちろん、周りの皮膚も巻き込んで引き裂くだろう。

だが、その考えは一瞬で捨てた。

自分を怖気づかせる原因なんて考えたくなかったし、自分は艦娘で、手に燃料を流せば華奢な腕

を潰すなど簡単だ。

生きていられるだけ、ましだと思わなくてはいけない。

「すう〜はあ〜……」

深呼吸して、少しだけ心を落ち着かせる。

何度か繰り返して、空気を思い切り吸って止め、左手に燃料を流して力を入れる。

バキツグチャ、といった生々しい音と共に、骨は砕け皮膚が避けて新たな鮮血が流れ  
出た。

「ッ——!?!」

痛い、なんて言葉では言い表せられない何かを感じた。

無いはずの右手までが痛み、神経を直接焼かれたような、そんな熱を感じた。  
傷口を睨み、早く止まれと呪いをかけるように握り続ける。

すると、呪いの効果かどうかかわからないが、皮膚からの出血量を合わせても元よりかなり少なくな

なった。

これで何とか……

涙目になりながら、心の中で胸をなでおろした。

だが、今なぜ痛い思いをしているのか、理由を思い出すと同時に戦慄した。

「まず——」

急いで周りを見渡すが、すでに遅かったと認識させられた。

左斜め後ろ、ちょうど自分たちの艦装では狙えない方向からイ級が迫ってきていた。

あの時から、主砲も魚雷も再装填していないし、錨だつて捨てて腕だつて使えない。

逃げるにしても、痛みをこらえるのに必死でギリギリ水面に立っているようなもの

で、無理やり

動こうとすると確実に転倒する。

精々できるのは、今すぐ右腕から手を離して腕を盾にするぐらいしかない。

でも、死なずに済むなら何だつてする。

その一心で、右腕を離して体の前で構える。

イ級の主砲が、まっすぐに自分の体を捉えてきた。

前はその奥に恐怖を感じたが、今は最低限の体勢を立て直せるほど恐怖を感じなかつ

た。

腕一本で生きられるなら安い——そう心の片隅で思いながら、砲撃が来るのを待つ

た。

腕に燃料を流し、いつでも受ける準備はできた。

『響——！』

後は向こうの砲撃を腕で受けきるだけという時に、しわがれた声が聞こえてきた。

それと同時に銃撃音が立て続けに聞こえ、何かが自分の右横を通り抜けてイ級に命中する。

その内の一つが主砲の中に入るのをかろうじて捉えた瞬間、爆発音とともにイ級の進行方向が

変わった。

「ギャギイイヤアアアア！」

金属の擦過音にも近い叫びをあげながら、自分の右横を通り抜けていく。

それを何もせずに見ていたが、状況を思い出し、主砲と魚雷の再装填を始めながらイ級に狙いを

定める。

急いで距離をとりつつ、まだかまだかと再装填完了の合図を待ち、ガコツ、と主砲からの合図が

出た。

瞬間に発射しようとするが、イ級に変化が起きて砲撃を止める。

もくもくと黒煙を上げて微動だにしないとせば、何故かそのまま沈み始める。

何が、あつたんだ……

呆然とイ級を見ている間にも沈んでいき、ついには完全に姿が見えなくなった。

少しばかりその場に突っ立っていたが、魚雷発射管からの合図で肩の力が抜けた。

それと連動するように頭からも血が抜け、波の音や島からの鳥の鳴き声が聞こえてくる。

「はあ、つはあ……」

左手をひぎについてえずくように呼吸すると、自分の心臓がものすごい速さで動いているのが分かった。

どくどくどく、とあり得ない速さで心臓が血液を送り出すと同時に、右腕にピリピリとした痛みが走る。

これだけ速ければ、少し押さえたくらいで血が止まらないのもうなずける。

暴れ続ける心臓をなだめようと深呼吸していると、車とはまた違うエンジン音が聞こえてきた。

ゆっくりと下げていた顔を上げると、一機の艦載機が水面すれすれの低空飛行でこちらに

近づいてきていた。

そのまま動かさず、荒い呼吸を繰り返しながら様子を見てみると、自分の近くに静かに着水する。

「工廠長……?」

すっかり存在を忘れていた人物を思い出し、足に力を入れ直して近づく。

「大丈夫か響!?」

艦載機のコックピット部分が開き、中からは焦った顔をした工廠長が出てきた。

「……ちよつと被弾した」

自分の言葉に工廠長は少し目を開き、体を観察し始めて右手首のところで流れる視線が

止まった。

「お前さん、手が……」

「心配、ないさ……これぐらい、もう慣れたよ……」

途中で詰まりながらも工廠長に伝えると、今度は顔を見つめてくる。

「……なんだい?」



「お前さんの怪我、血はどのくらい出たかの？」

「えつと……かなり、出たと思う」

「そうか。帰るぞ、響。お前さんは血が足りとらん。燃料なしじゃ立てもせん

じやろ」

言われてみれば、と自分の体の状態を確認する。

体中の筋肉は痛み、燃料で無理やり動かしている事は否定できない。

試しに左腕を燃料を使わずに動かしてみるが、指先がかろうじて曲げられるだけで力が一切

入らない。

「そうみたいだ……」

「とりあえず動くぞ。また敵さんが来ないとも限らんじやろ」

工廠長はコックピットに潜り込みながらそう言い、言い終わると同時にピシヤリと閉じながら

艦載機のエンジンを始動させる。

『わしが先導する。後についてきてくれ』

突然、艦載機から工廠長の声が聞こえてきた。

そうか……あれは工廠長だったのか……

どこからか自分を呼んだ正体がわかり、何故か少し嬉しくなった。優しくされたり、心配される事に慣れてないせいなのかもしれない。

「……ありがとう、工廠長」

『礼は後じゃ。行くぞ』

短く会話を切られ、艦載機は少しだけ水の上を走り再び空へ舞い上がった。

帰ったら、もう一度お礼を言おう。

太陽の光を跳ね返して輝く艦載機を追いかけながら、そう思った。

## 第20話 新米提督の悩み

首からボロボロのタオルをかけ、船渠の扉の横で壁に背中を付ける。

そのままずると体を滑らせ、片足を立てて座り込み、ため息を吐いた。

何もできてないな、私は……

十分ほど前、電を浴槽内で抱えていると、資材を持ってきた暁と雷が戻ってきた。

その後雷と交代し、暁と一緒に工廠へ艀装を取りに行き、今は雷たちが入っている浴槽を温めている。

いる。

結局自分にできたことは、電を運んで最低限の応急処置らしきことをしただけ。

これからは雷がサポートし、自分より頭の良い工廠長に傷が治るまで一任されるだろう。

横須賀で十何年も学んできたが、それは最新技術を使っているところで役に立つ知恵という

だけで、詰まる所は役に立てないただの置物だ。

自分がなりたかったのは、こんな非力で無力な提督じゃない。

「まだ遠いよ、父さん……」

父親代わりの教官に向けて、小さくつぶやいてみる。

こんな所でも、父なら的確な指示を出し、何かしら役に立てるだろう。

意気消沈しながら考えていると、どこからか『ブロロロロ』と聞きなれた音が聞こえてきた。

良く聞くと艦載機の音で、聞こえてくる音の大きさと移動速度から、工廠に帰ってきているようだ。

響のこと等を聞きに行くため腰を上げ、小走りで工廠に向かう。

少し息を荒げながら入り口から入ると、予想通り艦載機が戻ってきている所だった。

着陸地点へと足早に移動し、艦載機から降り始めた工廠長に話しかける。

「おかえりなさい。響が戦闘していたと思うのですが、どうでしたか？」

「うむ、それなんじゃが……見ての通りじゃ」

そう言うのと工廠長は遠くを指差し、つられてそちらを向く。

少し遅れて、『ゴツ、ゴツ』とコンクリートを金属で叩いたような鈍い音が聞こえてくる。

下りになっている場所から薄い青色の何かが見え、それが徐々に姿を現していき、響

だという

ことがわかる。

帰ってきてくれたことにほっと安心しようとしたが、全身が目に入った時、息を飲まされた。

「全身打撲『中』、左腕裂傷『小』、右手欠損、それに出血『大』。ほつといたら2〜3日

ぐらいで死ぬわい」

冷静に素晴らしいながら、工場長はヘルメットを脱ぎ、固まっている自分の横を過ぎて響の元へ

駆け寄る。

「艀装を全部外して、すぐにドックに行くぞ。提督、すまんが手伝ってくれ」

「あ、は、はい……」

工場長の一言で何とか我に返り、少しふらつきながら響に近づく。

服はボロボロで顔は病的に青白く、両腕は真っ赤に染まり右手があるはずの所からは床の

コンクリートが見える。

「司令官か……どうした、んだい……？」

「……かなり深手を負ったな」

「仕方な、いさ……私の、技量不足、だよ……」

響の声は、全く力の入っていない軽い声だった。

工廠長が艤装の解除を行っている最中に、自分の目で響の様子を見る。

左腕は腫れと切り傷がひどく、右手の傷口は見たところ握り潰して止血したようだが、出血は

少量だがまだ続いている。

顔は元々の白さからさらに白くなり、人形のような血の気がほとんどない顔になっている。

目の両端が垂れ下がっているのと唇が小刻みに震えている所から、かなり疲れて血を失っているのだろう。

「私のこんな、姿見ても、楽しくないだろう……?」

辛いはずなのに、笑顔を浮かべながら話しかけてきた。

声色から相当の力を振り絞っているのが伺え、何故か心が痛む。

「よし……提督、響を運んでやってくれ。燃料なしじゃもう歩けん」

言い終わると同時に響の背部艤装が落ち、工廠内に大きな音を響かせた。

すると響は気が抜けたのかふらふらし始め、倒れる前に体を持って支える。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫じゃ、ないかな……面倒、かけたね……っ！」

響は脚部艤装から足を外し、自分の体を使いながらも自力で立とうとする。

だが3歩と行かない内に膝が折れてバランスを崩し、もう一度支える。

「無理するな、治るものも治らなくなるぞ。私に任せろ」

「Мне, жалко……よろしく、頼むよ……」

そう言い終えない内に、限界だったのか体重を自分に預けてきた。

響の服にしがみついたままの工場長を右肩へ誘導し、ゆっくりと体を持ち上げて横向

きに

抱える。

「痛くなかったか？」

「体は、あんまり傷がない、からね……大丈夫だよ……」

また辛そうに響が笑みを浮かべ、自分の目を見つめてくる。

その顔を見たくなかったのか、勝手に顔はそっぽを向き、足は工場の出口の方へと動

きだした。

響の顔を見ずに歩いていると、工場長から小さく話しかけられる。

「……提督、戻れ。今は燃料で体がもつとるようなもんじゃ。先に補給させてからの方がいい

かもしれない」

「資源なら、島の探索中に見つけてある程度持つてきたので大丈夫です」

「なるほど。あと、右手の修復は明日以降にしたほうがいいじゃろう。血が足りなくなつて

しまうからな」

「ええ、わかっています」

響の傷口から落ちる血で床に血の点線を作りながら工場を出るが、工場長の口は止まらない。

「忘れておつたが、電はどうした？」

「30分ほど前に被弾し戦闘不能。現在は雷の介助付きで入渠しています」

「そんなにも前にか……遠くまで行つとつたのが仇になつたわい……」

肩の上で工場長は頭をかかえ、後悔のせいか唸り始める。

少しの間そのままだったが、何かを思い出したような声を小さく上げて話しかける。る。

「後で詳しく話すが、大体ここら辺の地形が分かった。ちなみにお前さんらにとって



はかなり

有益な情報付きじや」

「それって、まさか……?」

「お楽しみはもつと後じや。ほれ、もうすぐ着くぞ」

今すぐ有益な情報とやらを聞きたいが、工廠長の言う通り船渠がほとんど目の前だったため、

頭を切り替えて聞き出すのをやめる。

一度立ち止まって響を座らせ、息を吸って軽く叫ぶ。

「暁、ちよつと来てくれ!」

『わかったわ!』

すぐに遠くから暁の声が聞こえ、船渠近くの外へ繋がる出入口から姿を現した。

「司令官、どうしたの?」

「響が帰ってきたんだが、傷が深いんだ。入渠を手伝ってほしい」

自分の言葉を聞き、暁は不安そうな顔をした。

艦娘が一人で入渠できないということは、かなり大きな怪我をしているのと同意義であると暁も

理解しているからだろう。

「そ、そんなにひどいの……？　響はどこ？」

暁は自分が指さす前に響を見つけて駆け寄ろうとするが、それを手を上げて制止する。

「な、何……？」

「暁。響のことなんだが……戦闘中に右手が無くなった。血が足りないからあまり

無茶は

させないようにしてくれ」

暁を止めたのは、このことを説明して理解してもらうためだ。

いきなり今の響の状態を見てパニックにならないとも限らないため、あらかじめ頭に入れて

もらう必要があった。

「手が、無い……？」

「ああ。血が足りていないのも頭に入れておいてくれ」

そういつて手を降ろすと、ゆっくりと響に近づきお互いに目を合わせる。

「やあ、暁……食べ物、見つかった……？」

「まだ、だけど……手が無いってほんと……？」

「うん。ちよっと、ドジ踏んじゃって……」

響は話しながら、燃料を使ったのか軽々しく右腕を上げて暁に見せる。

傷口を見た暁は、口を押えて横を向く。

吐きそうといった様子ではないが、何かをこらえているような表情を浮かべる。

「ごめん……暁は、血が苦手、だったね……」

響は謝りながら右腕を降ろし、暁がそっぽを向いたまま口を開く。

「……司令官。入渠させていい?」

「もちろんだが、燃料の補給が先だ。資源は?」

「……脱衣所」

暁に資源の場所を聞いて脱衣所に行き、緑色のバケツから缶コーヒーサイズの燃料の

缶を5個

ほど持って廊下に出る。

暁の横を通って響に近づいてしゃがみ、缶のふたを開けて口元へ持っていく。

「飲めるか?」

「手伝って、くれるかい……?」

響の問いに頷き、缶のふちに口をつけて少しずつ流していく。

ある程度飲ませては缶を口から離して息をさせて、を時間をかけながらも繰り返し、

数分後には

5個の缶が全て空になった。

「どうだ？」

「少し、楽にはなった……けど、血が足りない、かな……」

「そうか。 暁、響の入渠を手伝ってくれ。 工場長もお願いします」

「うむ、任せろ」

無言で暁は響を抱え、工場長は軍服を伝つて降り、船渠の扉を開けて二人と入れる。

「すぐ戻るから、少し待つとつてくれ」

一言だけ言つて工場長は扉を閉め、自分だけが廊下に残された。

「……………」

扉の向こうで衣服がこすれる音以外、何も耳に届いてこない。

やっぱり、何もできてないな……

自分の不甲斐なさや無力さに、目頭が熱くなり悔しくなる。

手助けをしても、肝心のところは他の誰かが行う。

やはり人間には——自分にはこの程度が限界なのだろうか。

「強く、ならないと……」

固く拳を作りながら、自分自身に言い聞かせる。

他人の力になれるように強くなる——そう心に刻んだ。

## 第21話 入渠と響の思惑

ガラガラと扉を開け、布一枚を持って浴室に入る。

左では自分と同じように裸の暁に支えてもらい、右の足元では工廠長が歩いている。情けないと思いつつ歩いていると、浴槽内で電を支えている雷から声が飛んでくる。

「あ、響？ おかえ……」

最初は明るかった声だが、自分の姿を見ると同時に暗くなり失速した。

表情も声と同様に暗くなり、少しの間何も音がない時間が過ぎる。

「……その怪我、大丈夫なの？」

「入渠すれば、大丈夫……」

雷にそう返し、暁を頼りながらシャワーの前までいき、またもや手伝ってもらいながら体の汚れを落とす。

暁にタオルで優しくこすってもらってはいるが、傷があるところをこすられる度に声が漏れて

しまう。

「大丈夫、響？」

「ああ………続けて………」

右腕の傷以外を洗い終えて立ち上がり、唯一使える浴槽の所まで歩く。

雷は電と向かい合い、背中を浴室の内側へ向けるように抱えているため、痛々しい火傷の跡が

目に入る。

見たところ血はあまり出ていないようだが、傷の規模としては電の方が大きい。痛みだけで言えば、自分と同じかそれ以上だろう。

辛かったね、電……

心の中で電をねぎらい、近くにいたのであろう工場長へ声をかける。

「工場長、入ってもいい、かな……？」

「あく、もうちよい待ってくれ」

声が後ろから聞こえて首だけで振り返ると、長めの紐を2本ほど持つてきていた。

「雷、電を奥に移動させてくれ」

雷は工場長の指示に無言でうなずき、電をゆっくりと奥の方へ動かした。

すると一本だけ紐を持つていき、工場長は素早く壁際のパイプと電を結んで固定した。

「もういいぞ、雷」

「うん、ありがとう」

小さく礼を言いながら雷は浴槽から上がり、腕のストレッチを始める。

大方、交代せずにつつと電を浴槽内で支えていたのだろう。

「お疲れ、雷」

「う、うん。響もお疲れさま……」

自分の言葉に反応してくれたが、やはり目は右手の傷を見ていた。

「別に、死ぬわけじゃない……大丈夫」

雷に言葉をかけると、少し安心できたのか顔に余裕が出来たのがわかる。

何とか笑顔を作ってもう一押しし、視界の隅で手招きしている工場長の元へ向かう。

「……ありがとう、響」

「……Доброе, Пожелать (どういたしまして)」

脱衣所へ歩く雷と短く言葉を交わし、暁を頼りにしながら浴槽の目の前までたどり着

く。

「じゃ、ゆつくりと入れてくれ。右手は浸けずにな」

「うん。響、ちよつと我慢してね」

体に腕を回され、足が浴室の床から離れる。

もちろん持ち上げられる時に痛みはあったが、右手に比べれば無いも同然だった。

工廠長の指示通り、暁はゆつくりと自分の体を湯船に沈めていき、やがて肩まで浸る。すでに慣れた傷にしみる痛みと、寒い浴室内では十分な湯の温かさが右腕以外の全身を包む。

浴槽の壁にもたれかかり、手のない腕をタイル張りの床へ置くと、電と同じ紐を持った工廠長が

近づいてきた。

「じゃ縛るぞ。きつかったら言ってくれ」

自分が頷くのを確認すると、床にあった不自然な突起に紐を引っ掛け、あつという間に体が固定

された。

試しに全身の力を抜いてみると、やはり紐のおかげで沈まない。

「どうじゃっ？」

「い、感」

「そりやよかった。それじゃあわしは……おっと、忘れるところじゃった」

独り言を呟き、工廠長は船渠から繋がっている部屋へ入っていく。

何をするのだろうかと考えていると、拳銃のようなものを持って帰ってきた。



「何かあったらこいつを鳴らせ。引き金引いたら空砲が鳴るようになったら」

カチャリ、と自分の左手が届く範囲にそれを置き、また独り言をぶつぶつとつぶやいてから話しかけてくる。

「それじゃ、提督と話をしてくるわい。 暁、行くぞ」

工場長は暁に呼びかけると、浴室を出て行った。

「……暁？ 行かないのかい……？」

工場長が出て行った扉から視線をずらすと、暁が一点を見つめ続けていることに気づいた。

「その……早く、治るといいわね」

「いつか、治るさ……ほら、工場長が、待つてるよ……？」

「うん……頑張ってくれて、ありがとう」

それだけ言うと、自分の反応を待たず浴室から出て行ってしまった。

「……………」

浴室に、自分と電だけが残された。

聞こえてくるのは窓の外の小さな波の音と、扉の向こうの衣がすれる音だけ。

何もすることがなく、向かい合っている電の様子を見てみる。

背中では先ほど見た通りだろうが、他は入渠して時間が経っているのか傷一つない綺麗な肌になつてゐる。

そして、今は寝ている。

血の気がない顔だが、微かに寝息を立てながら浮かべるとても柔らかい表情が微笑ましい。

……帰りたくないな……

電の寝顔を見ながら、ふとそんなことを思った。

あの場所に帰れば、この顔が消えてなくなる。

司令官がいた横須賀でも、誰もいない何も無い無人島でもいい——あの人がいない、どこかへ

行きたい。

軍規違反になろうが構わない、いつか深海棲艦に沈められるとしても構わない。自分たち四人で幸せに生きていければ、それで——

……いや、何を考えて……!

自分の思考があらぬ方向へ行きそうになり、軽く頭を振つて考え直す。

先の事を考えても、今がどうしようもなければ意味がない。

今は、この傷を治すことだけを考えるべきだ。

「早く、治さないとね……電……電……」

半分自分に言い聞かせながら、寝ている電へ話しかける。

当然返事は帰って来ないが、何故か心が安らいだ。

体から何もかもが抜け落ちていく様な感覚に襲われ、同時に強烈な眠気が襲ってくる。

今は、休もう……

目を閉じ、真っ暗な闇の中へ落ちて行く。

湯の温かさで、自分の思考に包まれながら。

## 第22話 報告と暁の気持ち

「……い、提督。 どうした？」

工廠長の呼びかけに、考え事をしてきた頭を切り替えて上げる。

「いえ、少し考え事を」

「そうか。 待たせたな、そろそろ行かんか？」

「ええ。 提督室でいいですか？」

頷いた工廠長を手のひらに乗せ、いつの間にかいた暁と雷と一緒に提督室へ向かう。

そんなに遠くはないが、暁たちの間に会話がなく、雰囲気が悪いので話しかけてみる。

「雷、電は大丈夫か？」

「ええ。 最初よりも傷は小さくなってるわ」

「そうか……ずっと支えっぱなしで疲れただろ？ 後でマッサージしようか？ これで

も結構

得意なんだ」

「……………」

雷の返事がなく、不思議に思って顔を見てみる。

床をじっと見つめたまま歩き、両手をきつく握りしめている雷の顔は、少し青ざめていた。

「雷、大丈夫か？ 雷？」

「あ、いや……マツサージは、遠慮しておくわ……」

それだけを答えると、雷はまた床を見つめて黙々と歩き続ける。

少し心を痛ませながら、今度は暁に話しかけてみる。

「暁、足の調子はどうだ？」

「まだ痛むけど、大丈夫よ」

「痛む、か……後で様子を見させてくれ」

自分の言葉に暁が頷くと、廊下の先に『提督室』のプレートが見えてきた。

10秒もかからずに部屋に着き、全員がいる事を確認して中に入る。

工場長を机の上に降ろし、最後に入った雷が扉を閉めると、工場長はゆっくりと話し始める。

「あく、まあまず暁らに言っておくが、二人とも死にはせん。そこだけは安心しとくれ」

いきなり脈絡もなく話し始め、自分の頭がついていかずにきよんとしてしまいが、暁たちの

表情を見て納得した。

二人とも、暗い顔だったのが、工場長の言葉を聞いて幾分か明るくなっていた。

この事を見越して言ってくれたのか、と思っていると、工場長は咳払いをして話を続ける。

「じゃが、入渠が終わった後のことが問題じゃ。電は、傷は全部治るが血が足りん。

響も血が

足りんし、詳しいことは省くが、今はまだ左手は再生できん。二人ともいろいろと手伝って

やってくれ」

工場長の言葉に二人が頷くと、今度は小さな体を自分に向けて問いかけてくる。

「何か聞いておきたいことはあるか？ 無ければわしの話に移るが」

「今のところはないですね。二人は聞いておきたいことはあるか？」

二人は自分の問いに首を横に振ったため、工場長に身振りで話を促す。

「それじゃ、報告といこうかの。島の周りにすごい数とでかさの岩礁が山ほどある。

多分深海

棲艦らもそうそう入ってこれんはずじゃ。あとはここから……」

途中で言葉を切り、工場長は窓の方へ振り返って話を続ける。

「南4海里先に無人島が1つ、北北東10海里先に無人島が1つ。まったく、周りは何もありません。」

せん。つまらんかったのお……」

窓と扉を順に指さしながら言うと、やれやれと言った具合に両手を肩の高さまで上げながら首を

横に振る。

だがそれをほとんど意識せず、工廠長の発言に自分は驚いていた。

通常の艦載機は、風向きなどの条件が揃っても片道5海里が限界だ。

それ以上飛ばうと思えば、母艦に戻って補給をするか、艦載機自体をカスタマイズするしかない。

南と北北東はほぼ真逆の位置関係であり、単純計算して28海里も飛んだことになる。

鎮守府の反対側にいた響を助けに行った事も加味すれば、片道15海里——通常の艦載機の約

3倍。

食料を探しに島中を歩いている時に艦載機のプロペラ音は聞こえなかったため、一回

の補給も

無しで飛んだのだろう。

何者なんだ、この人……

個人の力、それもこんな孤島でここまで艦載機のカスタマイズができる事に、ただただ驚くこと

しかできない。

「おーい提督、話続けるぞー」

「……あ、はい、すみません」

工廠長の言葉で我に返り、再び集中して話を聞いていく。

「さつき岩礁がすごいって言ったじゃろ？ あに分じやと、響とドンパチ交わした奴が最後じゃ。

もう哨戒の必要はないぞ」

「でも、万が一岩礁を潜り抜けて襲ってきた場合はどうするんですか？」

「提督、心配しすぎじゃ。ここには襲われても他の鎮守府とのパイプも何もない。

襲われたら

襲われたでどつしり構えんかい、提督じゃろ」

工廠長の反論にぐうの音も出せず、おとなしく「……はい」としか答えられない。



「ともかくじや。響らが治つても哨戒せんでいいという事じや。 んじや次、お待ちかねの有益な情報じや」

「ねえ……それつて、まさか……」

暁が弱々しく言うつと、工廠長は小さく頷いて答える。

「ここから北西に30海里、単冠湾泊地鎮守府じや！ いやーよかつたの、これでおぬしら帰れるぞー！」

「ほ、本当ですか！ よかつたな二人とも、もうすぐ帰れるぞー！」

「え？ あ、うん、嬉しいわ……司令官も帰れるのね……」

帰れる可能性が出てきて高くなつた自分のテンションとは裏腹に、答えた暁と黙つている雷の表情が暗くなつた。

「……わし、なんかしたか？」

とまどつた表情で工廠長が質問してきたが、自分にもわからないため肩をすくめることしかできない。

ない。

しばらく工場長と二人の暗い表情を見つめ、何かを思いついた直後、静かに声が飛んでくる。

『提督、カウンセリングの経験は？』

『2年ほど。それなりに自信はあります』

飛んできた声の内容は予想通りで、工場長にのみ聞こえるように即答して頭を回転させる。

カウンセリング——20年以上も続く戦いの当初は必要とされなかった、艦娘のメンタルケアの方法の一つ。

艦娘のベースとなっているのは、第二次世界大戦時に活躍した軍艦の魂だ。

故に肉体はその入れ物に過ぎず、本人の状態は人間以上に心の状態や感情に左右されやすい。

実際に、戦いの中で精神が崩壊し『解体』された艦娘も少なからずいる。

それを防ぐために、今から15年ほど前に『カウンセリング制度』が実施された。

全ての鎮守府にカウンセラーの資格を持ったものを配備し、艦娘のメンタルケアを図るための

制度だ。

自分は16歳の時に資格を獲得し、以来2年ほど横須賀でカウンセラーの役割をしてきた。

その経験があれば暁たちのメンタルケアもできるとは思うが、今の状態では不安なことが多すぎ

るだろう。

響と雷の怪我、まだ1日とはいえ生活環境の変化によるストレス、全員の会話の反応からして

他人のコミュニケーションの緊張と疲れ。

さらに、昨日の響の反応から推測すると、鎮守府や提督に少なからず恐怖心を抱いている

だろう。

とりあえず、カウンセリングは響と雷の入渠が終わってからのにしたほうが良さそう

だ。  
『ま、2〜3日経ってからの方がいいじゃろうな。今は響らの治療が優先じゃ』

『ええ、そうですね』

工廠長も自分と同じ考えだった様で、思っていることを言われ、それに返事した。

「さて、これでわしの話は終わりじゃ。何か質問は？」

工場長が自分たちを見るが、誰も挙手や発言無く時間が過ぎる。

「よし、今日はもう終いじや。提督、何か言っておくことは？」

「特筆することは何も。これからは自由行動ですかね」

「ん。はあく、疲れたのおく」

場の雰囲気合わない気の抜けたような声を上げながら、工場長は机に寝転んだ。

自分もつられて気が抜け、壁にもたれかかりながら床に座り込む。

暁と雷は相変わらず暗い表情のまま、床を見つめて微動だにせず立ち続ける。

そのまま無言の状態が体感で1分ほど過ぎ、このまま寝ようかと思っていると、静かな部屋に声

が響き始める。

「さて、そろそろ動かんと。提督、二人を借りていいか？」

「暁は足が痛むそうなので、雷だけなら」

「そうか。雷、工場まで連れて行ってくれ。二人ともまたな」

呼びかけに無言で頷き、雷は工場長を連れて部屋から出ていく。

扉が閉まり立ち上がると、そわそわしていた暁を呼ぶ。

「暁。足の様子を見ようか」

手振りで暁を床に座らせ、近づいてしゃがんで右足首を見る。

患部は、無理をさせたせいか最初より赤く腫れていた。

歩けるようになったのは時間経過で関節の痛みが和らいだせいでろうが、痛み自体は最初の時

よりも大きいはずだ。

ほとんど取れかかっていたシャツの切れ端をもう一度結び直し、今後のことを伝える。

「腫れがまだ引いてないな。今日はもう足を使わないほうがいい」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

ぶつきらぼうに答えた暁に言葉を返し、座ったままどうしようか考える。

普通ならベッドに横にさせるが、この部屋には大仰な机と木製の椅子しかない。

考えていると、提督室から船渠の途中までの通路に部屋があることを思い出した。

それらの部屋にはベッドがあるかもしれないし、無くてもこの部屋よりはましだろう。

部屋から移動するため、暁の脇の下に手を入れて持ち上げる。

意外と軽く簡単に肩まで上がり、お互いに顔を見つめ合う形になる。

遅れて暁の顔が赤くなり始め、断りもなく持ち上げたことを後悔した。

「な、な何するのよいきなり！」

「い、いや、横になる場所がないから部屋を移動しようかな、と……」

「抱っこする必要ないじゃない！ 自分で歩くわよ！ 離して！」

足をめちやくちやに振りながら本気で抵抗され、脇に通していた手が外れて床へ落ちる。

落ちるといっても15cmあるかないかだが、足首を痛めている暁にはきつかったらしく、着地

するとそのまま床へ倒れこんだ。

「いつ、た……いた、い……！」

足首を抑えて悶絶している暁に近づき、肩に手を置いて話しかける。

「おい大丈夫か？ 歩けそうになかったから持ち上げたんだ。許してくれ」

「つ……！」

苦痛と羞恥が混ざった様な声を漏らし、暁は自分に見えないように顔を床へうずめた。

痛みが引いたのか足首から手を離すのを確認し、「……失礼するよ」と言つて再び持ち上げる。

しっかりと前に抱いている間も顔をそらし続け、一言も声を漏らさなかった。

片手で支えながら部屋を出て、船渠へ通じる廊下を歩く。

途中で部屋が見える度に入りますが、3つほど部屋を見ても寝具やその代わりになりそうなものはなかった。

無駄足だったかな、と思いつつ歩いていると、左肩が不自然に熱くなり始めた。

「ん……？」

顔を向けるが、暁の顔が乗っているせいでどうなっているのか見えない。

「なあ暁、私の肩おかしくないか？」

「えう……ぐすつ、えええ……」

問いかけに返ってきたのは、投げやりな言葉でも無言の首振りでもなく、小さなすすり泣き

だった。

「お、おい、いきなりどうした？」

「ちがつ、ぐすつ……うえええ、ちがう、もん……ああ……い！」

泣きながらも顔を見せたくないらしく、顔を肩にうずめてきて、更に熱が増した。帽子越しに頭を撫でながら、優しく話しかける。

「何でも言ってみろ。言うだけでも全然違うぞ？」

暁はぐすぐすと鼻をすすりながら、顔を肩に押し付けるようにして首を横に振つてくる。

「誰にも話さないよ。それなら、明日には忘れてもいい」

「いや、よ……こんな、ぐすつ……はず、かしい、もんつ……」

話を聞き出そうとしても拒否されたので、背中を撫でつつ残りも少なくなった部屋の  
中を覗いて  
いく。

4つ目5つ目と見ても目的のものは無く、残りは船渠に一番近い一部屋だけとなった。

大して望みもせずに入ると、探しているものがようやく見つかった。

ベッドが6つ、ちょうど一艦隊分の数があり、その1つに暁を降ろす。

「私は工廠長の所に行ってくる。横になって休んでいてくれ」

目元が赤く腫れた顔を見ながら言うが、返事はなく下を向いてしまう。

苦笑いしながらも工廠に行こうと歩くが、服の裾を引っ張られて歩みを止められた。

「……誰にも、話さないなら……言っても、いいけど」

先ほどまで嫌がっていたはずの暁からそんな言葉が出てきて心の中で少し驚くが、振り返って



視線の高さを合わせて話しかける。

「ぜひ聞かせてくれ。何があったんだ？」

「……私は、その……えっと……」

どう話していいのか迷っているらしく、下を向いて口を開いたり閉じたりさせる。急いで聞き出すようなことはせず、本人の中で区切りがつくまでじつと待つ。

ゆつくりと時間が流れていき、何分か経った頃にやつと口を開いてくれる。

「私、情けなかった……一番お姉ちゃんなのに、何もできなかった……。響も雷も、皆頑張った」

るのに、私だけ……怪我して、足引つ張って、邪魔しかできてなくて……！」

暁の顔から、涙がポタポタと落ちていく。

嗚咽を混ぜながらも、ゆつくりと心の内を自分に打ち明けてくれる。

「艦娘なのに……なのに、司令官に迷惑かけて、えうっ……頼ることしかできなくて、ぐすっ……」

情けなくて、恥ずかしくて……！ ああ、あああつ！」

咳を切ったように声を上げ始め、両手で顔を覆った。

話してくれた量は多いとは言えないが、暁の考えている事がわかった気がする。

何もできず迷惑ばかりかけている自分が憎く情けなく、大きな劣等感を抱いているの

だろう。

だが自分が思うに、それはただの勘違いだ。

「暁、顔を上げてくれ」

自分の思いを伝えるため、片手を掴んで半ば強制的に顔を上げさせる。

一切抵抗なく顔を上げてくれたため、両手を掴んで顔から離し、暁の目を見て話す。

「情けなくなんかないよ。今まで深海棲艦と戦って、色んな人や物を守ってくれただ

ろ？ 本来

は人間がそいつらを何とかしないとイケないのに、艦娘に頼ってばかりだ。情けな

いのは私の

方だよ。あくまで補助的な事しかできない、非力な存在だ」

「でも、戦ったのは、響たちで……私は、何も、えうっ……司令官に、ばっかり、ぐすっ

……！」

「今じゃなくて、単冠湾にいたときの話だ。 そうだな……なら、帰ってから頑張ってく

れ。

結果として私も助かることになる」

「え……？」

単冠湾の名前を出すと何故か泣き止み、じつと自分の目を見つめてきた。

暁の様子が少し変だと感じたが、構わず言葉が続けてみる。

「精一杯頼ってくれ。その代わり、私も暁を頼らせてくれ。な？」

暁と同じように目を見つめて言うのと、また涙が流れ始めた。

だが、今度は苦しそうな嗚咽を漏らさず、首を縦に振ってくれる。

「ありがと、司令官……私、頑張る、頑張るから……！」

暁とあつて、初めての明るい笑顔でそう言ってくれた。

「ああ。頼りにしてるよ」

笑顔を笑顔で返し、未だ流れている涙を指で拭う。

「ほら、もう泣くな。一人前のレディーは必要以上に泣かないぞ？」

「わ、わかっている……わかって、るわよ……うええ、うあああ！」

慰めたはずなのに、何故かまた泣き出してしまった。

理由がわからず内心あたふたするが、表には出さずできるだけ優しく話しかける。

「落ち着いて。横になろうか」

頭と体を支え、ゆっくりと泣きじやくる暁を横にする。

泣き終わるまでは一緒にいようかと思ひ、椅子を取ろうと曲げていた腰を伸ばす。

同時に頭と体を支えていた手を抜こうとするが、いきなり腕を取られて暁に覆いかぶさるような形になった。

「どうしたあかつ……き……？」

「行かないで……いかないでよおつ、しれいかんつ……！」

自分を引き倒した暁は、右腕にしがみついて泣いていた。

しかし今までのとは違い、何かに怯えるように体全体が震えている。

「……安心しろ。大丈夫、大丈夫」

訳が分からなかったが放つてはおけなかったため、左手で頭を撫でながら声をかける。

それと同時に足を伸ばし、遠くにある椅子を引き寄せて座る。

「しれえかん、あうつ、えぐつ……！」

いくら頭を撫でて、涙も嗚咽も止まる気配がない。

何があつたんだろうな……

いったい何が暁をこうしているのか、自分ではさっぱりわからない。

今自分にできることは、こうして傍に居続けることだけだろう。

暁の悲痛な声を聴きながら、ひたすら心を込めて頭を撫で続けた。

## 第23話 工廠長と雷の葛藤

「なあ、雷」

司令官と暁から別れ、工廠長を工廠まで運んでいると急に話しかけてきた。

「……………なに？」

「もつと笑えんのか？ ずっと暗い顔のまんまじゃ」

「……………」

工廠長に言われた通り、気が付けば自分はずっと暗い顔をしていた。

自覚はしているが、笑いたい気分じゃない。

何をすれば、何をしていいのかが全く分からない。

慣れない環境、見知らぬ男、初めての状況と頭の中がてんやわんやで、自分が何を考

えている

のかさえ分からなくなりそうだ。

そんな状態なのに笑えなんて、言っただけほしくない。

「……………ごめんなさい」

腹が立っているはずなのに、口から出てきたのは謝罪だった。

怒つても仕方ないからか、怒る相手は工場長ではないからか——それとも『慣れ』か。自分が謝つた理由を考えていると、工場長から話しかけられる。

「謝らんでええ。しかし、せめて提督の前では笑つたらどうじゃ？」

「……………」

『提督』と聞いて、ふと単冠湾の方の司令官が頭によぎつた。

まともに顔を見たことはほとんどないが、雰囲気やじやらじやらと数多の勲章を見に付けている

姿だけは忘れられない。

あんなもの、人間じゃない。

自分以外の全部をモノとしか見てない奴は、人間なんかじゃない。

『あんなの……人じゃ——っ!』

口から言葉が漏れた瞬間、強烈な吐き気が襲ってきた。

開いている手で口を押え、なんとか工場長を落とさずに身を折る。

「お、おい大丈夫か!？」

工場長の言葉に反応できず、ただ体の奥底から這い上がってくる何かを抑えることしか

できない。

何度か身をよじらせながら耐えていると次第に収まっていき、ほどなくして完全に吐き気は消えた。

「どうした雷、何かあったのか？」

「なんでもない……別に、なんでも……」

工廠長に話しながら立とうとするが、足に力が入らない。

がくがくと震えるばかりで、片膝を立てたまま先に進めない。

原因はわかっている。

ただ単に、体が司令官の存在に怯えているのだ。

あの人はいない、と何度言い聞かせても、体は脳からの指令を拒否し続ける。

やっぱり私、駄目だ……！

皆が傍にいないと、いつもこうだ。

誰かがすぐそこにおいて頼ってくれないと、自分は何もできない。

頼ってくれるなら、自分は何でも頑張れるし、何とでも戦える。

でも誰からも頼ってくれなかったら、漬物石未満に成り下がる。

それがたまらなく辛い、たまらなく悲しい、たまらなく情けない。

一つの存在に震え、助力がないと何もできない自分が嫌いになるほど憎い。

涙すら流さず自分を責めていると、頬に何かが触れる感じがした。

「ほら、何があったか知らんがしやきつとせんか」

さらにぺちぺちと何度か頬を叩かれ、やっと肩の上に移動した工場長がしたのだとわかった。

「疲れとるならそう言え。無理をすると余計な迷惑をかけるぞ」

自分の事情を知らないためか、少々の外れなことを言ってくる。

だがそれで自分の弱さが知られてないとわかり、逆にほっと安心した。

「大丈夫……まだ疲れてないわ」

工場長のおかげで少しだけ震えがおさまった足で立ち上がり、工場長を落とさないように

バランスを保ちながら工場へ向かう。

すぐに治まると思っていたが、しばらく歩いてもなかなか膝が笑いをやめてくれない。

「顔色が悪いが、大丈夫か？」

工場長が右肩から顔をのぞかせながら、心配そうに聞いてきた。

「足取りもおぼつかんし、休んだほうがええと思うぞ」

「平気よ、これぐらい。すぐに治るわ」



そう答えたはいいものの、この様子なら1時間あつても治るかどうかわからない。倒れないように踏ん張って歩き続け、工廠長と会話を続ける。

「提督に診てもらったらどうじゃ？ 例えば……抱きしめてもらうとか」

「……え？」

診てもらおうというのになぜ「例えば」が出てくるのか、そしてなぜ抱きしめられることになる

のか、と一瞬考えるが、すぐに頭の中ではその再現をし始める。

今朝の時とは逆で、自分が慰められるように抱き締められる。

悩みを全て打ち明けて、弱々しい自分もさげ出して、でも優しく認めてくれる。

……いや、ちがうちがう！ なんで男なんかとこんなこと……

一度否定しては見るが、妄想は止まるところを知らず、次々と情景を思い浮かばせて来る。

今度は自分が泣いてすがって、嫌な顔一つせずに受け入れてくれる。

泣き終わるまでずっと、頭を撫で続けてくれて――

「……わかりやすいなあ、雷よ」

「ふえっ!？」

突然話しかけられ、素っ頓狂な声を上げてしまった。

なんてことを言うんだ、といった意思を含めて睨むが、右肩の小さい生物は「はっはっは！」と

笑うばかりだ。

「わ、わかりやすいって何がよ！」

「お主もやっぱり女子おなごじゃなく、うむうむ」

「っ〜！ 馬鹿にして、もうっ！」

顔をほかの所へ向けて何も考えないようにするが、なぜかまたここの司令官の顔が浮かんでくる。

くる。

すっかり者で、深海棲艦に怖気づかず響たちを助けるほど心の強い人。

でも、自分の前でだけ見せた、弱々しいあの姿はなんだったのだろう。

強いのか弱いのか、さっぱりわからない。

泣いている司令官を撫でていた間、不覚にも思ってしまったことがある。

頼りたい、この人に尽くしたい、この人のために頑張りたいと、そう思ってしまった。

その時、今と同じように胸が苦しくなった。

できるはずがないとわかっているのに、諦めきれない。

矛盾した事を思うたびに、心が締め付けられる。

痛いのに、心地よい感情が上書きして支配していく。

おかしいと思っても、止められない。

この人といれば、みんな幸せに暮らせるかもしれない。

そんなこと、あるはずなのに――

「ふうん、ほほお、うむむ……ほお！ うむうむ！」

――などと考えていると工廠長の謎の唸り声で色々と中断させられた。

「……いきなりなによ」

「気は楽になったか？」

会話が成り立たず顔をしかめるが、すぐに工廠長の言わんとする事に気づいた。

さつきまで震えていた足が、いつからか普通に自分の体を運んでいる。

工廠長はずっと自分の顔を見つめて微笑んでいる所から、顔色も良くなってきているのだろう。

「考え事一つで気分も変わる。わかっていようでわかってない心の仕組みじゃ。

よく覚えといたほうがいいぞ」

「そうね……そうよね」

当たり前前のことを言われただけなのに、工廠長の言葉はとても重く感じた。

ただ何十年も生きてきただけじゃないんだな、と工廠長を見直してみる。

「いやしかし、想い人がおるのはいいことじゃな、まったく……」

「なっ、なんであのお、男が想い人になるの!?!」

見直したばかりだが、やはり口数が多いお爺さんのようだ。

いきなり想い人なんて言われて動揺するが、口数の多いお爺さんの不敵な笑みが自分を冷静に

させた。

「男? やはりお主、提督が——」

「違うわよ! なんてあつたばかりの人を好きにならなくちゃいけないの!?!」

「……『気になつとるのか』と聞こうとしたんじゃが……」

……………え?

言い返した言葉に返ってきたのは、意外な一言だった。

どうやら自分は、罨にはまった拳句さらに墓穴を掘ってしまったらしい。

どうしたら誤解が解けるのか、と頭が沸騰するほど回転させるが、きよとんとした工

廠長の表情

を見てみると自分が馬鹿馬鹿しく感じてきた。

一回深呼吸して落ち着き、ゆっくりと口を開く。

「……そう、気になるのよ。強いのに弱い所もあって、兵器の私たちにも優しくしてくれて。」

あんな人初めて見たから、すごく気になるの。好きとかじゃなくて、ただ気になるだけのの」

「ま、不思議な男ではあるな。雰囲気、人間のそれより艦娘に近い。名前が無いという

のも、戸籍上絶対にあり得ん。色々謎の多い奴じゃ」

工廠長の言う通り、司令官にはわからないことが多すぎる。

今まで名前が無いことにあまり違和感がなかったが、戸籍の面で考えると隠している  
としか思え

ない。

「……が、そんなことはどうでもいい。わからん事があっても、楽しくやっていけばええ。」

お主ももつと笑え。 な？」

先ほどの落ち着いた声から一変し、朗らかに問いかけてきた。

正しいことだが、心がまだ沈んだままで笑う気にはなれない。

でも、自分の都合で関係ない人まで気分を悪くさせるのは嫌だ。

そう思うと、勝手に顔が動いて笑顔を形作った。

「……そう、よね。笑わなくちゃだめよね！」

今まで、誰かの為だけに浮かべる笑顔は嫌いだった。

できれば自分も楽しみたいし、心から笑つてもみたいから、上辺だけの笑いは一番嫌いだ。

それでも、何故か今だけは、いつそ嬉しいほどにこの笑顔が好きになれた。

「似合ってるぞ、笑顔」

「どういたしまして！」

話し合っているうちに工廠にたどり着き、扉を開けて中に入る。

無数の装備や工具が無言で自分たちを出迎え、その中を昨日の場所に向かって歩いていく。

「さて、いろいろ作らんといけんからな。しっかり手伝つてくれ、雷」

「ええ、もちろん！ どんどん私に頼っていいのよ！」

初めて、自信を持って「頼っていい」と言えた。

頼られて見返りを返せる自信が、初めてできた。

「期待、しとるぞ？」

「——うん！」

自分の口から出た作り物の明るい声は、工場内に大きく反響した。

## 第24話 艦載機製作と入渠終了

「ねえ、これってここでもいいの？」

「そこ入れて止めといてくれ」

十分割された艦載機のエンジンを、工廠長の指示に従って機体へ収めていく。

作業を始めて何時間経ったかわからないが、明るかった外が夕焼けに変わるほどには  
続けて

いる。

現在は両翼を繋ぎ合わせ、製作の終わったエンジンを積んでいる所——ではあるが、  
その

エンジンが大きすぎて四苦八苦していたりする。

工廠長に「10個に分けるとから大丈夫じゃ」と言われて安心していたのを裏切るか  
のごとく、

一つ一つが自分の体を半分以上隠すほど大きかった。

燃料を浪費しないように本来の身体機能のみを使い、やっと全部を運び終えて分割さ  
れた



エンジンを繋ぎ合わせていく。

レンチを片手に新品の鉄と綺麗な油の匂いのする機体へ潜り込み、ギリギリと音を立てながら

ボルトを締めていく。

だが、ただ単に繋ぐだけと言っても簡単ではない。

ここが燃料の管で、こつちが油圧とかのだっけ……あ、あれ……？

ごちゃごちゃしていて、どことどこをくっ付ければいいのか、素人に毛が生えたような自分の頭

では判断できない。

一応設計図をもらってはいるが、専門用語に記号、おまけに手書きと、読むだけで目が痛く

なりそうなものを読んでもさっぱりだ。

「ほれ雷、何固まっとるんじや？」

「わからないのよ、複雑すぎて」

「ふむ、ちと難しかったかの」

エンジン間から這い上がってきた工廠長と少し話すと、また潜り込んで作業を始めた。

「雷、ちよいとエンジンつけてくれんか？」

「は〜い」

再び顔を見せた工廠長に指示され、つるつると滑る機体の上を通ってコクピットへ移動する。

よじ登ってコクピットを眺め、訳が分からずため息を吐く。

二座や三座といった艦載機は耳にしたことはあるが、この機体は何故か『七座』もあるのだ。

作成者曰く「一艦隊を空中投下できたらかつこええかなあ、なんての？」と言っていたが、

一駆逐艦である自分には到底理解できなかった。

一体工廠長は、船を空から落として何がしたいのだろうか。

様々な思いを馳せながら再度深くため息を吐き、工廠長が安全な場所に移動しているのを確認

し、装置を弄って始動させる。

プロペラはまだ付けていないため、一昔前の車のようなエンジン音が工廠中に響き渡る。

「ねえ、どうなの!？」

巨大な音の波にかき消されないよう、大声で工廠長に話しかける。少し間をあけて「大丈夫じゃ！」と返してこちらへ向かってきた。

「両翼も確認しとこうかの。こいつを適当に弄ってくれ」

工廠長に言われた通り、操縦桿と思われるレバーを上下左右に動かしてみる。

「へえ、こんな風に動くんだ……」

自分が動かせば、それに合わせて翼の一部分がガコガコと動く。

楽しくなり少し続けていると、今度は別の指示が飛んでくる。

「次はフラップじゃ。そこをつまみを」

指さされた所を見てみると、『上昇』『戦闘』『着陸』の三段階に分かれているつまみが

あった。

言われるがまま、つまみを『上昇』から『戦闘』まで動かす。

低く唸るように駆動し、先程動いた部分とは別の所が動いた。

少し感動しながら『着陸』に切り替え、動いたことを確認して元の『上昇』に戻す。

「順調じゃな。さて、日が暮れそうじゃし、今日はここまでにしようかの」

ひよこひよここと動きながらエンジンを切り、工廠長は大きく背伸びをした。

それにつられるように自分も体を伸ばし、座席にドスンと座り込む。

今日一日で、左翼、エンジン、座席の作成、エンジンと両翼の連結、動作確認と、か

なりの量の

作業をこなした。

自分が手伝ったとはいってもごく簡単な事しかしておらず、ほとんど工廠長が一人でやって

しまった。

作業が少ないにもかかわらず、全身に力を入れにくくなるほど疲れてしまった。

自分がこうなっているのに、手が一時も止まらなかつた工廠長はどれほど疲れているの

だろうか。

そんな疑問とは裏腹に、工廠長は元気そうな様子で話しかけてくる。

「ほれ、休むにはちと早いぞ。響らの入渠がそろそろ終わるころじゃ」

「それもそうね……つと」

気合いを入れ直して立ち上がり、もう一度体全体の筋肉を伸ばしてほぐす。先に降りた工廠長に続き、自分も降りて工廠長の手のひらへ乗せて歩く。

「後どのくらいで完成しそうなの？」

「ん、しつぽと銃座4つじゃな。明後日には終わるわい」

「ま、まだ人を乗せる気なの……？」

「迎撃装備も重要じゃろ?」

にこやかに答える工廠長を見て、「はあ……」とため息しか出てこない。

工廠長の飽くなき向上心はどこまでいくのだろう、と考えていると、素朴な疑問がわいてきた

ので遠慮なくぶつけてみる。

「思っただけど、今作ってるあれって艦載機よね?」

「もちろんじゃ。それが?」

「あの大きさに船に載せれるの?」

「……………あ」

口をポカンと開け、工廠長は冷や汗を流しながら固まってしまった。

「……………べ、別にそのまま持つてくわけじゃないし、矢か紙つぺらに変えりゃ問題ないはずじゃ、そうじゃろ? そうじゃろ雷!」

「誰に言い訳してるのよ。空母じゃないんだから分かる訳ないじゃない」

「う……………」

身を引きながら濁った声を出した後、あせあせと落ち着きなく手の上で動き始める。

ぶんぶん頭を振ったりのけぞったりして「ぬ、ぬおおく……………」と悶えている工廠長を見ている

と、声以外はまるで愛くるしい小動物を眺めているようで心が落ち着く。思えば、単冠湾にいる時はほとんど妖精たちと話していた気がする。

皆おもしろくて、気さくで、今の工場長みたいに子供っぽかったり、と話しているだけで楽しく思える。

艦娘は沈んだ軍艦の魂であるのに対して、妖精さんは一緒に沈んでいった人たちの思念の塊ではないかと言われている。

艦娘とは違って本人たちは自覚していないが、自分は事実だと思う。

そうでなければ、話が合い、よく理解してくれ、どことなく懐かしい感じる理由が見当たらない。

一時期は人間なんていらな思っていたが、今は胸の中に留めるだけにしている。実際に自分たちを指揮して国を『守らせて』いるのは、他でもない人間だ。

どこまで突き詰めても兵器である自分たちは、弱々しく吠えることも許されない。

ははっ、何考えてるんだろ、私……

勝手に頭の中で考えが脱線に脱線を重ねたようにそれていくことに、悪い癖だ、と自

虐気味に心

の中で笑う。

手の上では依然としてまだ工廠長は考え込んでいる最中で、暗くなっていたであろう自分の顔を

見られていないことにほっとした。

百八十度違う事を二人で考えているうちにいつの間にか進んでいたらしく、船渠の目の前まで

来ていることに気づき、扉を開けて脱衣所へ入る。

工廠長を降ろして服を脱ぎ始めると、先にてこてこと浴室の方へ歩いていく。

すぐに自分も体にタオルを巻いて続き、二人が入っている浴槽まで歩く。

「……………」

電は寝ていたが、響は起きて右手の傷口を見つめていた。

表情も変えず、何かを考え込んでいる顔をして微動だにしない。

「響。調子どう？」

話しかけながら近づくと、響は自分の存在に初めて気づいたように振り向いた。

「ああ、雷。もうここ以外は全部治ったよ」

手首から先のない腕を上げながら、いくらか血の気が戻ってきた顔で言葉を返してき

た。

いつもと近い響に戻ったことにほっとしながら、なんとなく会話を続ける。

「いつ治せるの、それ」

「さあね。司令官か工廠長に聞けばわかるんじゃないかな」

「そう……もう、そんなになるまで無茶しないでよ?」

「……できるだけ気を付けてみるよ」

静かに話している傍らで、工廠長は寝ている電を起こしにかかる。

「おーい、いなづまー」

呼びかけながらぺちぺちと頬を叩き、それに反応した電がゆつくりと目を開けた。

「……?」

「調子はどうじゃ?」

寝ぼけているのか数秒ほどぼーっとし、その後水中で背中に手を回して頷いた。

「そうかそうか。雷、ちよいと電を支えといてくれ」

工廠長の指示に一つ頭を上下させ、浴槽に入り電の両脇をもって支える。

入渠する前のがさがさの肌ではなく、見た目相応の若々しい弾力を持った肌の感触が

伝わって

くる。



何か話そうかと電の顔を見るが、まだ眠たいらしくこくりこくりと頭を揺らしていた。

電も暁同様、寝起きに弱いのだ。

可愛らしい行動を眺めていると、工廠長が縄をほどいて素早く片付ける。

「お主はどうじゃ、響」

「問題ない。できればこつちも治したかったかな」

「駄目じゃ。明日以降、様子を見てからな」

右腕を振りつつ響が問うが、工廠長は軽くあしらって縄をほどいた。

自由になって体を伸ばしている響の隣で、ぱんぱんと小さく手を鳴らして工廠長は声を出す。

「さて、お主ら上がるぞ。響、一人で上がれるか？」

「まあ、なんとか」

自分の答えに大きく頷き、工廠長は満足げな感じで脱衣所へ向かった。

それに続くように響が片手で起用に浴槽から上がり始め、電と一緒に自分もならう。

「ほら電、上がるわよ」

「はい……ふあ……」

寝ぼけている電の体を支えて上がり、響と一緒に脱衣所へ行く。

がらがらと扉を開けると、工廠長が小さい体で浴衣らしきものを用意していた。「どうしたの、それ」

「二人とも替えの服がないじゃろ。しばらくはこいつを着たらええ」

自分の質問に答えながらロツカーの籠の中から浴衣を引っ張り出し、二人分の用意を済ませた。

「Спасибо」  
スバサイバ

「え、んむつ？ なんじゃと？」

「ありがとう、だって。響はロシア艦でもあったから、癖で出ちやうのよ」

「は、はあ……」

響のいきなりのロシア語に困惑する工廠長を横目に、三人で服を着替えていく。

「……………」

「ああ、電は私がやるから待ってて」

未だ眠気から解放されない様子の電が浴衣の帯で遊び始めるのを制し、自分だけ普段の服を身に

まとい、電の着替えをする。

背中部分が大半無くなって焦げている服を脱がし、浴衣の腕を通させて帯へ手を伸ばす。

「ここまででは順調にできたが、肝心の帯をどうまくかわからないことに今更気づいた。あれ? えくつと……んん?」

「ばつ、ばつ、と慌ただしく帯を巻いてみようとするが、わからないものはわからない。左襟が上側だ。それだと死人になる」

頭を悩ませていると、背後で響の声が出た。

「反射的に振り返ると、帯まで完璧に締め終えた浴衣姿の響が立っていた。

「か、片手でよくできるわね……」

「掴めなくても押さえることはできるからね。ほら、帯貸して」

「言われた通りに帯を渡すと、襟を入れ替えて片手とは思えない速さで電に帯を巻いていく。」

「電、きつくないかい?」

「はい、なので、す……」

「帯の締め具合を聞くとさらにスピードが上がリ、30秒とかからず完璧な浴衣姿がその場にもう一つ増えた。」

「さて、と。これからどうするんだい、工場長」

「提督と話をする。寝る。以上!」

「簡潔にありがとう」

「……何かつつこんでくれんか？」

苦笑いしながら、工場長は小さい体で船渠の扉を開けた。

## 第25話 私情 そして工廠で

少し息苦しい暑さに、閉じていた目を開ける。

自分が何をしていたのか分からなかったが、体の下にある何かを理解すると同時に思  
い出した。

暁を部屋に入れて、横にして、しがみつかれて――

……寝た、か。

どのくらい寝ていたか分からない体を、暁から離れるために起こす。

横から覆いかぶさるように寝ていたせいで、顔から胸にかけてまでが汗をかくほど熱  
い。

「いっつつつ、腰が……」

椅子に座り、その椅子と同じ高さのベッドにうつぶせで寝ていたためか、腰にぴりぴ  
りと痛みが

走る。

左手で腰をさすりながら、未だ寝ている暁を見てみる。

自分の右手を両手で握りしめ、体を丸くしてすやすやと眠っている。

微笑ましい気持ちになり頭を撫でそうになるが、気持ちよく眠っているのを邪魔するわけにも

いかず、すんでのところで手を止める。

「ん〜……………あぁ〜」

猫よろしく背中を丸めながら伸びをし、どうしようかと考える。

暁を置いていくわけにはいかないが、かといつて連れて行くのに起こしてしまつては気分を悪く

させるだけだ。

何とか手だけでもどうにかできないかと思っていると、部屋の外から三人くらいの足音が

聞こえてきた。

これを逃すまいと、足をぴんと張って肩をつま先でノックする。

『何か変な音が聞こえてこなかったかな』

『こつちの部屋からじゃないかしら』

壁と扉を挟んで会話が聞こえ、少しして部屋に雷を先頭に響たちが入ってきた。

「あれ？ 司令官どうした……………の？」

不通に話しかけてくる雷に、自分の唇に手を当ててジエスチャーを送る。

不思議に自分を見つめてくるためにベッドの暁を指さすと、納得したのかうんうんと頷いてくれる。

「……それで、何してたんだい？」

後ろから顔を出した響が、声は小さく威圧感は大きく話しかけてきた。

「心配するな。足痛めてたから安静にさせたただけだ。何も変なこととはしてない」

「それにしても雰囲気は良さげじゃの〜」

ひよっこりと雷の肩から顔を出した工廠長にそう言われ、響からの眼光がさらに鋭くなつた。

視線の先はもちろんと表現すべきか、掴まれている右手だ。

「へえ……」

「……少し悩みを聞いたただけだ。工廠長も変な事言わないで下さい」

「ええじゃないか。わしも暇なんじゃ」

……………

何も反応できずただ時間が去り、なんとか響からの威圧はなくなつた。

後で工廠長に一つ言っておこうと思いなおし、固まった空気の中で口を開く。

「いま外はどうなってる？」

「そろそろ日が暮れそう。これから何すればいい?」

「そんな時間か……何もすることないし、自由行動かな。私としては睡眠をお勧めするが」

響の質問に提案を返すと、四人は同時に頷いた。

「あく提督さんよ、少しええかの? ちょいとわしらで話せんか?」

「……少しお待ちください」

工廠長にそう言つて体を暁の方へ向け、自分の腕を掴んでいる手を外しにかかる。起こさないようにゆっくりと力を込めていくと、素直に手が離れていく。

「ふう……じゃあ行きましょ——う!?!」

立ち上がろうとすると急に腕が引つ張られ、もう一度座る羽目になってしまった。

恐る恐る見てみると、外したはずの手が自分の右手の指に絡み、もう片方の手と一緒に胸に

抱かれていた。

引つ張られた時の有無を言わせない力や、動かそうとしても全く動かないところから、燃料を

使つてしまつているのだろう。

そのせいか絡んできた指に力が籠つていき、段々と指が曲がり始める。



「ちよ、ちよつと待った暁……っ！ 折れ、折れるっ……！」

「ん……！」

自分の指を無意識に破壊せんとしている本人は表情を歪め、さらに腕まで巻き込んでいく。

指と腕がみしみしと限界を訴え始め、約二年ぶりの骨折が目の前でちらつく――

「暁。 大丈夫、大丈夫……」

――と、いつの間にかベッドの向こうへ回っていた響が、怪我をした右腕で暁の頭を撫で

始める。

覆いかぶさるようにして体を密着させ、固く結ばれた自分と暁の手に空いていた手で触れ、包み

込む。

すると、不思議と暁の力が抜け、余裕のなかった手に二人のぬくもりが伝わってくる。

そのまま自分の代わりをするように響が自ら手を結び、暁と寄り添うようにベッドの上へ横に

なり、自分の手がやつと解放された。

「司令官、大丈夫か？」

「まあ、うん……随分と手馴れてるな。こういう事はよくするのか？」

「意外と傷つきやすいからね。落ち込んでるときは、こうでもしないと安心できないんだ、

暁は」

「……やつぱり、良い姉してるじゃないか」

風呂呂に入った時の会話を思い出しながら、半分独り言のように呟いてみる。

「そう、かな……感謝するよ」

少し考えるそぶりをみせた後、響は微笑みながらそう答えてくれた。

……何かあったような……

微かな疑問を感じ、首を傾けながら考える。

頭に引つかかっている何かを探るべく奮闘していると、「おい」という年老いた声がすべて思い

出させてくれた。

「ああ、すみません。工場でしたよね？」

「仲が良いことで何よりじゃ。さ、行くぞ」

仲が良い、と言われて少し優しく感じながら、雷の方から自分の左手へ工場長を移す。

「えっと……私暇だし、一緒に……」

「雷は疲れたじやろ。今日はもう休んどくれ」

「……わかったわ」

少し勇気を出して言ったような雷を、言葉の上では優しく、声色は厳しく工廠長は抑えつけた。

大人しく電と一緒にベッドに向かい始めるのを確認して、工廠長と二人で部屋から出る。

「さて、工廠に行つてくれんかの。見せたいものがあるんじや」

先ほどのからかうような声から一転して真面目な声色に戻り、その声の通りに工廠へ足を向ける。

特に話すこともないので、忘れないうちに手の上の小さな生き物に言っておくことにする。

「……私をからかうの、やめていただけませんか。肝が冷えます」

「すまんかったの。もう結婚も近いじやろう若者にあんなことしてな」

「……はい？」

話が突拍子過ぎて、思わず言葉が漏れた。

口調も声色も真面目そのもので、嘘や冗談を言っているようには思えない。

「お主もそろそろ結婚できる歳じゃろ？　好きな女子ぐらいおるんじやないか？」

「いませんよ、そんなの。　興味ないですし」

「……は？」

再度同じリズムで、今度は工廠長がぼかんと口を開けて固まる。

工廠長も相手の気持ちを読めるのは今までの行動でなんとなく理解できているため、自分の

言ったことが本当だというのが信じられないのだろう。

だが、興味がないのは事実だ。

「……独り身の方が楽と思つとるのかもしれんが、嫁の一人ぐらいはおつた方がええぞ。

前ここにおつた提督も、嫁がおつて助かつとつた様子じゃつたし」

「そうじゃないんです。　今まで、女性に興味を持ったことが無くて……」

「またまた冗談を。　初恋ぐらいあるじやろ？　人間はそういうもんじやと聞いておる」

「……根つからの軍人なんでしょうね、私は。　下心も抱いたこともないって父に言っ

たら、

おかしいと言われましたよ。　見合いもさせられたり告白もされたりしましたけど

……相手の

気持ちに伝えられるような気持ちが抱けないというか何というか、申し訳なくて全部断り  
ました」

「はっはっは！」

ちよつとした長話をするとう工廠長は黙り込んでしまったので、少し物思いにふける。  
下心もなければ、恋心もない。

それはカウンセラーの資格を取るために猛勉強していて、初めて人間としてありえないことだと  
気づいた。

普通の人間でありたかった自分は、申し訳ないと思いつつも金剛や赤城など周りの女性を意識

しようとしたが、たとえ裸を見てしまってもそういう気持ちは長続きしなかった。  
「……………そういうもんかのお……………」

「不自由はないし、欲が出て仕事に集中できない、みたいなことがなくてむしろ助かって  
ます」

「はっはっは！ 仕事熱心じゃのう！」

豪快に笑い飛ばしてくれたおかげで、少しだけ暗い気持ちが晴れた。

工廠長に感謝しながら歩いていると、昔を思い出していた時間が長かったのか、すぐ

に工廠まで

たどり着く。

重々しい扉を何とかこじ開け、中に入る。

「……でかい」

すぐさま目に飛び込んできたのは、優に人が何人も乗れるほどの機体だった。

ただ単にサイズが大きいだけかと外観を眺めてみるが、自分の知っているどの機体にも当て

はまらず、首を傾げながら尋ねてみる。

「……何なんですか、この機体」

「これは人員輸送機である。名前はまだない」

「真面目にお願いします」

「事実じゃししようがないじゃろ」

むすつと答え、工廠長は行けというように一点を指さす。

釈然としないもやもやとした気持ちを抱きながらもそこへ向かい、降ろせと体で表す工廠長を床へ

降ろす。

「確かこの辺じゃったような……」と言いながら何かを漁り始め、見つけた様子を見せた

工廠長は

一枚の紙を見せてくる。

細い線に数字が山ほど書き込まれているそれは、すぐそばにある機体の設計図だった。

細かいところは専門家ではないためさっぱりだが、大まかな外観ぐらいはわかる。

何度も何度も書き直しをした跡があるが、少しではなく別の物になるほど大幅に変えてある。

そして一番目立つのが大きさだ。

ただでさえ背丈の小さい妖精が一人で作るために書いたであろうこの設計図は、人間の自分でも

こうして普通に見えるほど大きい。

「元々普通に戦闘機を作ろうと思つとつたがな、暁らが来て気が変わった。何故じゃと思う?」

「……………考えたくはないですが、暁たちが帰投を嫌がつているからですか?」

一つ頷き、続けざまに工廠長は話を進めていく。

「何か問題があるんじゃないやろうが、多分わしらにはどうもできんはず。 なら、お主のおつ

た横須賀

まで連れて行つたほうがええじやろう」

「……いや、難しいと思いますよ。仮にできたとしても、その後戻される可能性もありますし、

教官……提督に迷惑がかかります」

工廠長の言つたことに、落ち着いて反論を述べる。

艦娘の異動には『異動申請及び大本営の許可』が必要で、半日は書き続けなければ終わらない

ほどの膨大な数の書類と、それを大本営がすべて厳正にチェックする時間が必要になる。

それらを見せしめし正当な理由なく艦娘本人以外が行えば、その者に対して殺人より重い罪が課せ

られてしまう。

これからの生活がある自分が行い捕まる、または教官がその責任を負うことになってしまえば、

社会的に生きていけなくなる。

「艦娘側が自分でやつたと言えればいいじやろう。こつから横須賀まで距離はあるし、強迫観念が



あつても大丈夫じゃと思うが」

「本人はいつどこからどう危害が及ぶか怯えているものです。あまり実用的ではないかと」

「うゝむ……ま、最終手段じゃな」

設計図を持ったまま首をひねり、話の終わりを告げるような声で締めくくった。

「ところで」と工廠長が話し始めるので、黙って耳を傾ける。

「これ飛ぶかの？ 単発は無理そうじゃから四つに増やしてはみたが」

「私に聞かないでくださいよ……素人ですけど、四つあれば十分じゃないんですか？ 似たような

飛行機見たことありますし」

「んゝ……」

自分の素人感満載の返答が気に食わなかったのか、設計図を握りしめ自分の目を見ながら唸って

くる。

「てつきりわしより賢いと思ったんじゃが……」

「私は新米とはいえ提督です。整備士じゃないんですよ……」

工廠長の勘違いに呆れつつ、改めて設計図を眺めてみる。

片翼に二つずつエンジンが詰め、艀装としては見たことのない多発機の形をしている。

ジェットとはいえ飛行機がこれぐらいで飛んでいるために大丈夫かなとは思うが、艀装が艀装な

ために心配になってきた。

「……ちなみにいつ頃完成しそうですか？」

「あと四日ぐらいかの。プロペラつけて、銃座つけて、テストして完成じゃ」

「ま、まだ席増やすんですか……」

「雷もお前さんも同じ事を……迎撃装備は重要じゃろ」

やれやれ、といった様子で首を横に振り、「質問はないかの？」という問いに頷くと設  
計図を

丸めて近くに投げた。

立っているのも疲れてきて、固いコンクリート張りの床へ腰を下ろす。  
鼻に空気がすうつと入り、古びた鉄と油の匂いが肺を満たしていく。

決して気持ちの良いものではないが、工場に入り浸っていた時間の長い自分を落ち着  
かせて

くれる、そんな匂い。

その懐かしい匂いが、ふと昔を思い出させて来る。

大破しながらも笑いかけてくれた金剛、妖精たちと熱心に話し合っていた赤城と加賀、練習で

『上手くいかない』と泣きそうな吹雪、それを慰める天龍と龍田。

他にもいろんな人との記憶が、一気に出てきて、涙が出そうになる。

大丈夫だろうか、心配かけてないだろうか。

そんな思いが、頭の中を段々と支配していく。

と、そんな時。

「……………ん!？」

工廠長が何かに反応し、壁際まで走っていく。

今までようなふざけるでも気楽にでもない、とても緊張した様子だ。

「……………どうしました?」

思い出漁りと皆の心配を止め、立ち上がって小走りで見詰ましながら問いかけてみる。

「……………何か来るぞ。もしかすると深海棲艦やもしれん」

「でも、もう来ないんじゃない?」

「誰も絶対に来んとは言つとらん」

いきなりとんでもない事を言い出した工廠長に驚きつつ、どうすればいいのか頭を巡

らせる。

深海棲艦が陸上に上がってきた時の対処の仕方は学んできたが、今はそれができるような状態

ではない。

できるとすれば暁ら艦娘による撃退だが、相手が何級かわからず、最悪返り討ちに合う可能性も

否定できない。

現代兵器で追い返すこともできず、頭に浮かぶものが全て潰えた。

どうする、どうする……!!

今までの設備が揃っていることが前提の考え方ができず、焦りばかりが出てくる。

頭を抱えて冷や汗を流し始めていると、壁が突然甲高く鳴り始めた。

映画でしたことのないマシンガンで金属を連射するような音が、鼓膜を盛大に叩く。

ただ心に抱くのは先の展開が気になる好奇心ではなく、殺されるといふひたすらに純粋な恐怖心だ。

耳をふさぐことしかできずにいると、左手が除けられ言葉が入ってくる。

「大丈夫じゃ。 駆逐軽巡の主砲なら簡単に弾き返る——」

と、ガギイツ、と鈍い音が聞こえ、壁が手前へ5cmほど膨らんだ。

「おい動け！ もう一発くるぞー！」

素早く工廠長が体重を乗せて首の周りを移動しつつ叫び、ほぼ同時に右へ走る。

数秒遅れてもう一度鈍い音が耳を劈き、壁が紙の様に破れて何かが工廠に飛び込み近くにある

艦載機を吹き飛ばす。

「おいほら、逃げるぞー！ 動け提督！ おいー！」

近くで工廠長が叫ぶが、動かない。

頭では動こうとしているのに、セメントに固められたように足が動かない。

考えが止まって、目が勝手にあいた壁の穴をじつと見つめる。

何かが入ってくるのが怖くて、その先どうなるのが怖くて。

何もできないでいると、重々しい足音が聞こえてきた。

二人ほどの音が、徐々に近づいてくる。

うるさく響く工廠長の声も聞こえなくなっていくって、逃げないといけないのに逃げられない。

やがて姿が見え、誰かがはつきりとする。

深海棲艦——戦艦ル級と夕級。

「……………」

「……コツチ」

ドスの利いた、しかしどこか美しい声が静かに響き、ゆっくりと自分へ体を向ける。足が、顔が、砲塔が、意識が、全て自分へ向けられる。

怖くて、すぎるように数年前に教官からもらった護身兼自殺用の拳銃へ手を伸ばし、下の軍服を

掴む。

ない、どこかで落とした、今更過ぎる。

無駄だと悟りつつも後ろへ逃げようとするが、足がもつれてその場で仰向けに倒れる。

反射的に受け身をとって頭を守ったが、そのまま気絶するか死んだ方がよかったのかも

しれない。

自分の力が足元にも及ばない相手に見下ろされる恐怖を、今初めて知った。

光の薄い目、芸術品と見紛うほどの白い肌、夜空より鮮やかで底なしに黒い砲塔。

ただただ恐怖の塊が自分を見ている。

なのに逃げられない、何もできない、何も考えられない。

もはや体の震えもなく畏怖の視線を送っていると、何故か——微笑んだ。

「……イタ。 ミツケタ」

優しく、子を慰める母のような声が、自分の耳へ届く。

そしてゆつくりと、夕級を前にして二人とも歩み寄ってくる。

時間がかかって心も落ち着いてきたが、動こうとする気は起きず、むしろ自分から近づきたくなかった。

さつきまで怖かったのに、不思議と懐かしかったから。

「サア……サア……」

手を伸ばし、誘ってくる。

目の前まで来て膝を折り、体を近づけてくる。

応えるように、自分も手を伸ばす。

体が惹かれるように、自然に。

「サア……サア……!」

互いに手が近づき、手を取り合う瞬間。

『イツシヨニ、キテ……!』

「……つ!?!」

突然言葉に何かが混じり、弾くように手を引く。

また恐怖が生まれ、座ったまま後ずさりする。

「……ナン、デ……？」

傷ついたような表情で、不気味な目を向けてくる。

視線から逃げるように、硬い床の上を後ろ向きに這っていく。

「ネエ……イツシヨ、ニ……」

「……っ……あっ……」

声を漏らしながら、追ってくる夕級から逃げる。

少し下がると何かにぶつかり、ガチャガチャといろんなものが周りに散らばり、追いつめられる。

ある、いる、怖い、逃げたい、逃げられない。

単語しか頭に回らず、心臓は壊れるほどに暴れ、息は過呼吸を通り越す勢いで繰り返す。

それでも体は動き、背後の物にめり込むかのように後退を続ける。

先ほど床に落ちた一つが右手に触れ、冷たさが脳を刺激する――

……？

撫でる感触が何かに似ている気がして、手をかぶせて形を確認して、驚いた。



拳銃が今、右手にある。

「イツシヨ……カエロ……」

夕級の動きは止まらない、だが自分の頭はそれより早く動き始めた。

上手くいけば逆転もできる、でも今じゃない。

待つて、もつと待つて、待つて——

「こつちじゃこんの化け物どもが————」

それと同時に工廠内に衝撃と、夕級の右腕に変化が起きた。

二の腕が奇妙に曲がつて骨らしき物が飛び出し、夕級の右腕は文字通り皮一枚で肩からぶら

下がる肉塊になった。

「アアアアアアアアアアアア！」

怒りとも苦しみとも取れる声を上げ、夕級は腕を押さえる事もなく衝撃が伝わつてきた方向へと

向く。

注意がそれた——今しかない。

「——っ！」

顔にかかる夕級の血などに構わず、拳銃を握りしめて顔に飛びかかる。

深海棲艦や艦娘は、燃料を使って全身の皮膚を装甲として扱うが、例外な部位が二つだけある。

それには人型になったものにしか共通しないが、人型になった故か『眼球』と『脳』は装甲化

できず、眼窩も現代兵器で打ち抜けるほど柔らかい。

そして人間と同じく、脳が損傷すれば簡単に死ぬ。

左眼に銃口を押し付け、思い切り引き金を引く。

眼球、眼窩、脳を一直線に打ち抜くように。

ドンツ、と鈍い音と今まで経験したことのない強烈な衝撃が、耳と右腕に伝わる。

初心者が撃つたように腕が見えない力に弾かれて跳ね上がり、同時に夕級が後ろへ倒れた。

「ギャアアア、グウツ、ガアアアアアア——」

左手で目を押さえ、全身を痙攣させながら床の上で苦しみ始める。

だが脳が傷ついたせいにか長く続かず、数秒もたたない内にただの死体に成り果てた。

「ア……アア……！」

夕級を殺した自分を見つめ、ル級は信じられないといった目で見てくる。

いつか見た、人殺しをした温厚だった息子を見る母のような、長年の信頼を裏切られたような、  
たような、

そんな目で。

と、そんな時——黒い棒が、ル級の左のこめかみに当てられた。

周りに風が吹くほどの空気の振動と共に、ル級の頭が消し飛ぶ。

司令塔を失った体は3mほど転がり、砂状の骨と脳漿が入り混じった血溜まりの中へ埋もれた。

「姉様、もう一隻中に！」

「わかってるわ！」

その声と共に、二人が姿を現し、先ほどの黒い棒が自分に向けられる。

「……………あなた、は……………」

自分の姿を見て、主砲の砲身である黒い棒を別方向に向けながら唾然と聞いてきた。

ル級の頭を消し飛ばした、白黒の袴のような着物を着た、よく似た二人がそこに立っていた。

## 第26話 対話と再会

よく似た二人が、自分を不思議な目で見ている。

「……………」

何も話せず時間が過ぎていくと、いきなり自分の膝がかくんと折れ、したたかに床を打った。

「……………」

原因は、力が抜けたというわけではない。

手に持っている、拳銃の重量が異常に増したためだ。

支えきれず握ったまま床へ落とした拳銃は、倒れて左手を潰しにかかってくる。

両手を使って全力で持ち上げようとしても、持ち上がらないどころか支えることすらできない。

「つあああああああ！」

他人が見ていることも気にせず、無様にへっぴり腰になりながら、左手を拳銃の下から抜こうとする。

する。

「だ、大丈夫ですか……?」

すると、ひよいと軽く左手の重石が宙に浮かび、圧迫から解放された。

目を追っていくと、さっきの内の一人の艦娘が片手で持ってくれていた。

「すみません、ありがとうございます」

痛む左手をさすりながら立ち、失礼のないように姿勢を正す。

「……姉様?」

後ろにいたもう一人が、不思議そうに姉を呼び掛けた。

その姉は、持った拳銃をじつと見つめていた。

「持ってみて」

「はい……って、何これ、艦装……!?!」

持ったと同時に表情が変わり、驚いた顔で自分を見つめてくる。

だが、自分はそれ以上に驚いていた。

艦装の中には非常に小さなものがあり、人間でも持てないことはないものもある。

しかし使うとなると話は変わり、艦娘にしか扱えない。

非力で身体の構造が根本的に違う人間には、使用は絶対には不可能のはずだ。

「……し、失礼ですが、あなた方はどこの所属でしょうか?」

聞かれるとまずい気がしたので、問われる前に問うことにした。

何がどうまずいのかは、自分でもわからないが。

「は、はい。単冠湾泊地鎮守府第一艦隊所属、扶桑型航空戦艦一番艦扶桑です」

「同じく二番艦、山城です」

話を切り替えられたことにほっとしながら、海軍式敬礼をして自己紹介をする。

「ありがとうございます。私は……提督見習いです。貴艦にお願いがありますが、

よろしい

でしょうか」

「え、ええ、いいですよ……ああ、ごめんなさい、少し待っててください」

「私が代わりに聞きましょう」

扶桑は耳に手を当てて何かをつぶやき始め、山城が前に出て話を聞く姿勢を作る。

恐らく、他の艦と連絡を取っているのだろう。

「それで、お願いとは何ですか？」

「はい。昨日、単冠湾泊地鎮守府所属の駆逐艦暁、響、雷、電の四隻が作戦中この島に漂着し、

私と共に行動しています。つきましては、四隻の母港への帰投と私の横須賀鎮守府への輸送を

お願いしたいのですが」

「……その、四隻は無事ですか？」

「生きてはいますが、私の勝手な指示により、響の右手を欠損させてしまいました。申し訳

ありません」

「頭を上げてください。……死んではいけないですよね？」

「はい。全員生きています」

止まるところなく一気に話し終えると、山城はとても安堵した表情を浮かべた。

「よかった……昨日から連絡がなくて、死んでしまったのかと……」

目に少し涙を浮かべ、山城はそれを拭いながらぼつりとつぶやいた。

その後ろでは工廠に空いた穴の外を見ながら、扶桑が何かに手を振っている。

さほど時間もたたずに、穴から三人が入ってくる。

簡素な顔が描かれ浮き輪をつけている砲塔らしきものを抱えている女の子と、剣を持った女性と

長刀を持った女性が一人ずつ。

その内、後から入ってきた二人の顔に見覚えがあった。

「……え……おいおい、本物か……!？」

「うふふふ……やっと見つけましたよ、生徒さん」

そう二人が交互につぶやくと、剣を持っている方が走り寄ってくる。軽巡洋艦天龍と龍田。

十何年と見てきた、懐かしい顔。

「天龍、さん……龍田さん……？」

自分の言葉を返す代わりなのか、天龍は正面から飛び込むように抱き着いてきた。

「本物だ……ああ、まじでよかった……！」

「ちよつと、天龍さん……！ 龍田さん、なんとかしてください……！」

他人がいるというのにお構いなしで抱き着いてきた天龍に抵抗しつつ、落ち着いて歩いてくる

龍田に助けを求める。

「ん……私も失礼しちゃおうかな」

だが落ち着いていたのは先ほどまでらしく、普段は触れることすらしないのに、天龍とまとめ

腕を回してくる。

「……もう離さないから。うふふふ……！」

「龍田さん、ちよつと怖いです……あといろいろ見られてますから離れてくれませんか」

「あと少しだけ……あく、やっぱりあの生徒さんだ、あははっ……！」



最後に少しだけ、息を飲むような声が聞こえた。

気になって龍田の顔を見てみると、目尻にごく小さな涙がうつすらと浮かんでいた。視線に気づかれ、それを避けるように体へ顔を押し付けてくる。

嬉しい気持ちと申し訳ない気持ちで、胸がいつぱいになる。

「おーおー、少し見ない間にいろいろ増えたの」

二人に心の中で感謝し続けていると、後ろからそんな声と足音が聞こえ、自分の真横に

止まった。

工廠長を手に乗せた雷を先頭にして、工廠長を含む暁たち全員が揃っている。

「全員連れてきたぞ。もつとも、音を聞きつけて自分らで来とつたようじゃが」

「ありがとうございます。あと、助かりました。感謝しきれませんね」

「なに、困ったときはなんとやらじゃ。まあそんなことより、おぬしにくつつ付いとる男  
女が気に

なるの」

その言葉と同時に、くつつ付いている二人がぴくつと反応し、ゆつくりと自分の体から離れる。

そして心なしか、天龍が少し怒っているように思えた。

「紹介します。横須賀鎮守府所属の天龍さんと龍田さんです」

「天龍、というと軽巡か……うむ？ お前さんから艦娘か？」

「そうだが、どうかしたか……！」

握りこんだこぶしをふるふると震わせながら、天龍が耐えきれないといった様子で工廠長に

近づく。

「お前は俺が男だと言いたいのか、ああ!？」

「い、いやそのじゃ、な、ちよいとボーイツシュに見えたというか何というか……」

「俺は女だ！ 艦娘だー！」

どうやら男に思われた事が気に食わなかったらしく、相当怒っているようだ。

昔からこうだったな、と思いつきながら、龍田と一緒に「まあまあ」となだめる。

「……ごほん。司令官、少しいいかな」

四人で騒がしくしていると、響の声が自分たちの落ち着きをくれた。

「ああ、すまない。それでどうした？」

天龍を工廠長から引き離しながら問うと、近くで叫ばれたりして涙目になっている雷を同じよう

に下がらせながら話してくる。

「あの三人は？」

「あの……？ ああ、単冠湾所属の扶桑さんたちだ」

「……話してきていいかな？」

「もちろん。皆で話してくるといい。工場長、こちらへ」

工場長が雷へ伸ばした手に移ると、四人とも全員扶桑たちの方へ小走りで近づいていく。

「……しかし、なんだな」と怒りを抑えた天龍が話を切り出す。

「死んだかと思つてなのに、ちゃんと生きてガキ四人と爺さんのお守りしてるとは思わなかつた

な」

「わしはお守りなぞされとらんぞ」

不満に工場長がうなり、天龍と目線を合わせてお互いに睨み合う。

その間を縫うように龍田が割り込み、意地悪をするかのように話し始める。

「天龍ちゃん、嘘はいけないわよ？ ねえねえ生徒さん。天竜ちゃんね、あなたは絶対生きてるってわんわん泣いちゃって——」

「——わーわー！ な何言つてんだ龍田!! い、いいか、泣いてないからな！ という

か、

そういうお前が泣いてただろうが！」

「だって、死んだかもしれないって聞いたら悲しくなるわよ。私、生徒さん大好きだもん」

「な……な……なあー!? お前、いきなり何言っつてんだよ!？」

さつきから叫んでばかりの天龍を見て苦笑していると、工場長が自分の手の上で寝転んで余裕の

ある声で天龍へ声をかける。

「ほほお、男みたいな奴なのに男が好きとはのう。意外じゃの〜」

「いや、そうじゃなくてな、好きじゃないというか嫌いじゃないというか、でも好きでいやいや

嫌いで……ああもうわかんねえよちくしよー!」

なかなか混沌とした話についていけず、今後の話をするためと自分に言い訳をして輪から

抜けて扶桑たちの方へ足を向ける。

「お主なかなかにもとるの」

「家族や友人としてですよ。男としては見られてません」

「嘘っぽいのお……」

何かを試すかのような台詞を無視し、話し合っている扶桑たちの元へ近づく。

「……で、いろいろとしてくれてね。と、本人が来たみたいだ」

仲良さげに話していた響に声を投げかけられ、首を傾げながら答える。

「本人？」

「いろいろ手助けしてくれた恩人だ、つて話してたんだ。扶桑さんがあまりにも気に

掛ける

から」

「……失礼ですが、私はあなたを信用しきれていません。ご理解願います」

扶桑が何かを探るような目をしながら口を開いた。

初対面ならこんなものか、と内心で苦笑しつつ返事を返す。

ただでさえ艷装を使う人間ときているため、口を利いてももらえるだけでも好待遇なの

かも

しれない。

「わかっていきます。山城さんにお伝えした事、お聞きになりましたか？」

「はい。山城が提督に問い合わせていますので、少々お待ちください」

扶桑の言葉に頷くと、意識するでもなく扶桑と目を合わせ続けてしまう。

目線が、顔、体、足と全身をくまなく舐めまわしていく。

「……人間、ですよね？」

「私自身はそう思っています」

「直接見たわけではないので断言できませんが、私にはこれを使って夕級を殺したように思えます」

「ます。納得のいく説明をしてもらえませんか」

声色が段々厳しくなり、暁たちを自分から庇うように移動する。

「とことん嫌われてるな、と思いつつ、納得のいく説明とやらを考える。」

「完全に嘘をでっちあげるとぼろが出そうで怖いが、そうでもしないと自分のしたこと  
を隠し通せ  
ない。」

「あまり時間を置くとさらに怪しまれそうなので、自分の心もとないアドリブ力を信じて嘘を告げる。」

「……まず臙装を持っていたというところですが、あれは火事場の馬鹿力というやつです。」

「死にたくなかったので、脳が勝手に枷を外してしまったようです」

「……………」

「次に、私は艦装を使っていません。使おうとはしましたが、私は人間なので使えませ  
ん

でした。 夕級に止めを刺したのはこの妖精さん、私たちは工廠長と呼んでいるこの  
方です。

「そうですね、工廠長？」

「…………お、おう！ 何とか、あいつに弾が残つとつたんでな」

手の上で呑気にぐだぐだしていた所に急に話を振られたようで、工廠長はびくりと反  
応して口を

開いた。

同時に指を刺した物を見ると、何かしらの器具で固定された戦艦用の主砲がある  
のが

わかる。

扶桑は頬に手を当てて、何にも目を合わせずに考え始めた。

そういう仕草がやっぱり艦娘も女の子なんだな、とどうでもいいことを思っ  
てしま  
う。

関係のないことを思ってしまうのは、なぜか局面に立たされた時だ。

「……そうですね。私の思い違いだったようですね。失礼しました」

「いえいえ。理解していただけたようで何よりです」

全身に伝わるほどの心臓の拍動を感じながら、何とか乗り切ったことを安堵する。

直に見られていないこともあり追及されないとはい思っていたが、やはり緊張するものは緊張する

ものだ。

「それはそうと、話を聞く限りこの子たちにかかなり尽くしていただいたようですね。

再び無礼の

お詫びと感謝を致します」

「感謝されるようなことは一つもしてません。それよりも、響さんの右手について申

し訳なく

思っています。すみませんでした」

「……いや、自分の力量が測れて良かった。別に気にしていない」

響に頭を下げると、少し驚いたような様子を見せた後、普段と変わらない調子に戻り

返事を

した。

大方立場上の理由とはいえ敬語で話されたからだろうが、すぐに切り替えられる辺り



が響らしい。

こんなことが思えるのも、今のうちだけか……

ふとそんなことを思い、名残惜しさから鼻を静かに鳴らした。

「提督が話が見たいそうです。どうぞ」

山城が近づいてきて、超小型インカムを渡してきた。

耳にはまる程度の大きさしかないそれを受け取り、骨に押し付けるようにしっかりと装着する。

「はい。変わりました」

『やあどうも。 単冠湾泊地鎮守府提督、日野育宏ひのいくひろ。 階級は元帥だ。 よろしくね』

なかなか凄みのある人と思っていたのとは裏腹に、爽やかな声をした青年の頭  
に響き

渡った。

## 第27話 違うようで似ている者

『やあどうも。 単冠湾泊地鎮守府提督、日野育宏。 階級は元帥だ。 よろしくね』

意外と若い声に驚いたが、階級の元帥というのにも驚いた。

現在は横須賀や佐世保を始めとする数多くの鎮守府があるが、提督の階級はそこまで高くない。

提督をしている元帥は横須賀の教官と今の単冠湾泊地の提督、そしてもう1人しかない  
聞いた。

まさかこんなところで、通信機越しとはいえ会話できるとは思わなかった。

『山城から話は聞いたよ。 とんだ災難だったね』

「ええ、まあ。 早速ですが、伝えてもらったお願いを聞いてもらってよろしいでしょうか？」

『そう急かすことはないだろう。 何があったか、話してもらっていいかな。 時間はたっぷり』

『あるからね』

「は、はあ……わかりました、では」

何かはぐらかされているような気がしたが、日野の言うとおりに今までに起こったことを話した。

自分の輸送中に襲撃を受けたこと、暁らと同じ島に流れ着き助けてもらったこと、妖精さんが

いたこと、哨戒中に響と電が怪我をしたこと、戦艦が二隻来て撃退したこと。

流石に細かいところや自分が夕級を殺したことは話さなかったが、大まかなことはわかった

ようで、話し終えたしばらくしても質問はなかった。

『で、暁たちは元気にしている、と。損害は響の右手のみ。なかなかよくしてくれたね。』

感謝するよ』

「いえ、感謝されるようなことは何も。暁ら自身の頑張りがあったからです。見知らぬ私の

指示もよく聞いてくれ、とても助かりました」

『……ふん。よく聞いた、ねえ……』

声がかくぐもり、先ほどの好印象な声が消えた。

何かを疑問に思うでもなく、関心するでもなく、ただ興味が完全になくなった声。

「どうかしましたか？」と聞いても、しばらくは返事がなく長つたらしかった。

『ん〜……あ、そうだ。ねえ、その四人引き取らない？』

長い沈黙の後に帰ってきた言葉は、一瞬では理解しづらい内容だった。

心に巨大な違和感を抱きながら、ほぼ反射で聞き返す。

「どういう、意味ですか……？」

『異動だよ。別に珍しいことじゃないだろ？ 私より君に懐いてしまったようだし

ね』

異動？ 別に？ 懐いて？

引つかかる言葉が多すぎて、頭の中でぐるぐる回り始める。

まず、どんな提督であれ、そうおいそれと『異動させる』とは言えない。

艦娘の異動には人件費や機密保持の点から数千万から数億という膨大な輸送費がかかり、移動先

の鎮守府周辺の住民から少なからず白い目を向けられることになる。

また異動の際の理由の内容によっては、大本営やほかの鎮守府からの評価が下がってしまう。

そして、異動が珍しいことではない、というのは半分が嘘だ。

確かに異動がよくあることだが、その大半の理由が重度の精神疾患で、異動先はほぼすべて

大本営だ。

今の暁たちに治療が必要なほどの精神疾患は見られず、このような状態の艦娘の異動は非常に

稀有だ。

極めつけは、最後の『懐いて』という部分。

元帥ともなれば、大本営、他の鎮守府、近隣住民、そしてなにより所属している艦娘からの評価

全てがほぼ最高であることが普通だ。

もちろん、艦娘たちが一番信頼しているのは自身を指示する提督で、そう簡単に他人を受け

入れることは、艦娘の本能的にあり得ない。

引つかかった部分を組み立てて理解しても、おかしなところだらけだ。

「理由は……正当な理由はどうするんですか？ 異動するに足るものがないように思われます」

が……」

『ああ、それね。別になんでもいいんだけど……気に食わないから、とか?』

「……は!?!」

今……何て言った……!?!

聞きなれない言葉を聞いて、思わず叫んでいた。

全員が自分に注目するのを避けるように離れつつ、声を無意識に荒げて聞き返す。

「気に食わないって、そう言ったんですか?」

『うん、それが? だって僕元帥だよ?』

「……あなた、それでも元帥ですか……!?!」

『そうだよ、僕は偉いんだ。だから多少の無理は通せる』

「私が言いたいのは、そういうことじゃ……」

胸が苦しくなり、吐き気がしてくる。

おかしい、この人はあり得ないほどおかしい。

自分だけがおかしくなったのかと錯覚するほど、異常だ。

『最初は暁から攻略しようとしたんだけど、なかなかガードが固くてね。僕が何

言っても拒否

ばっか。君ならすぐにモノにできるからあげるよ。幸せは共有しないとね』

「え……あ……」

何も言い返せない。

言うべき言葉が、言いたい言葉が見つからない。

『暁はまだいいほうだよ。問題は響だ、いや、参るよほんと。暁以上に面倒だ。』

軍事上の

命令は完璧にこなすんだけど、他はもう聞かないってレベルじゃないんだよ。あ、

雷と電は

全くの手つかずだから、そこは安心して構わないよ』

「……もうそのことはわかりました。一つお尋ねしてもいいでしょうか」

これ以上聞きたくなくて、体から湧き始めたものを飲み下しながら話を変えた。

あまりの気持ち悪さに、今までにないほどに心臓が暴れまくる。

『ああ、どうぞ』

「私たちがいる島に流れ着きたいきさつを暁たちから聞いたのですが、どうも腑に落ちないん

です。元帥とあろうあなたが、駆逐艦五隻でどうして出撃させたんですか？ 特段

に練度が

高いわけでもないのに、何故ですか？」

これは聞いておかなければならないと思った。

練度が高ければ、電が背後から撃たれたり、響がパニックを起こしたり戦闘中に右手を落とす

こともないはずだ。

元帥にもなれば、艦娘の練度を無視した出撃は絶対に避けるはず。

『……聞きたい？ さて、どこから話そうか……っ』

妙に余裕のある声で、最後に少しだけ息を飲んだ。

正直気にしていられないほどに答えが気になっていたのだが、小さく聞こえてくる音がそうさせなかった。

グチヨグチヨ、という濡れた音と、苦しそうな誰かの声。

たまたま気付く、なんてことがなければ、わからない小さな音。

ノイズかとも思ったが、それにしても音が鮮明で機械音もしない。

「……すみません、さつきから何か濡れているような音がしていますが……」

『ちよつと待ってくれ、もう少ししたら話す……すぐに飲まないでくれ、新人君に聞かせてやる』

からね』

最後は自分じゃない誰かに言い聞かせるようにして、ガタガタ、とインカムを置く音



が

聞こえる。

今のインカムは骨の振動を音にしているため、骨から離されるとほとんどの音が聞こえなく

なる。

少しして小さくがさがさと音が聞こえると、とても強く粘り気のある嚙下する音が伝わって

きた。

その後に『はあ……はあ……っ！』と届く声は、苦しそうでひどく艶かしかった。

『どうも……初めまして……あ、はあ……』

話しくそくに言葉を詰まらせながらも、喜びを感じさせる扇情的な音。

頭をぐるぐる回して状況を理解しようとしていると、結論に辿り着く前に日野が話し始めた。

『僕のお気に入りの音はすごいだろ？ 君なら暁たちに簡単にさせれるさ』

「あ、あの……言われている意味がよくわからないのですが……」

『直接は嫌いだからばかすけど……口でして貰ってたに決まってるじゃないか』

今の一言で、ようやく全て理解できた。

艦娘を性処理に使っており、その中で使えなかった暁らを自分に渡そうとしている。『人当たりのよさそうな青年』から『立場を利用する屑』に、自分の中での印象が変わった。

ひどく絶望するしかない。

艦娘を性処理に使う、という最低な行為を、目標であり憧れでもある元帥がやっていった。

事実が淡々と、脳に染み渡っていく。

『ああこれ、秘匿通信扱いだから何しやべっても平気だよ』と軽く言ってくる日野をよそに、

新しく湧いた疑問について考える。

艦娘に人権が与えられたりはしたが、本来は海軍、厳密には大本営が所有している『兵器』だ。

提督はそれを借りて戦っているだけに過ぎず、故に運用にあたっての責任も生じる。

性処理に使うとなれば、艦娘の許可が無ければ強姦罪、あつても無くても大本営の所有物に対

する器物破損等に該当し、特殊な許可があれば可能となる性交と違って少なくとも海軍から

永久追放され艦娘との接触を一切禁じられてしまう。

艦娘の人権を無視している行為が、自分の中で怒りを増やしているのがわかる。

「何やってるんですか……艦娘を、あなたは何だと思ってるんですか……!」

『何って言われても……強いて言うなら駒、かな。いくら人権が与えられたからって  
いっても、

紙では兵器扱いだしね。 そんなに怒らないでくれよ』

言っていることは正しい、でも納得できない。

今まで見てきた感情は、どれも本物で、人間との違いはほとんどない。

自分の経験が全て間違っているといわんばかりの言葉には、絶対に納得できない、し  
たくない。

「……なら、あなたが暁たちと一緒にいればいいじゃないですか。 戦力にはなるし、本  
人たちの

ストレスもあまりないと思いますよが」

腹に据えかねて、ついそんなことを言ってしまった。

自分の苛立ちが如実に表れているが、日野は気にせずに返してくる。

『君、僕がなんであいつらに無茶な出撃をさせたかわかるかい?』

「知りませんよ、そんなの」

『暁を手懐けようと思っただよ。　ちよつと強引にしようとしたら、響に殴られてね。　当たり』

前といえはそうなんだが、頭に來て島風に戦艦の所においてくるように指示してやつたらさ……

姉妹共々全員どつかに消えたつて聞くじゃないか！　心の底からせいせいしたよ、あつはつはは

はは……！』

勝手に、聞いてもないことをべらべらと話してくれた。

そして、自分の中の何かが壊れた。

理性がなくなる、糸が切れる、とはこのことを言うのだろうか。

「あんたは、艦娘をなんだと思っっているんだ！」

立場を忘れた。

「生きてるんだ！　誰かが好き勝手にできる私物じゃない！」

自分を忘れた。

「生まれ変わつて精一杯生きてるのに、気に入らないからつて勝手に殺すのか!？」

怒り以外、何もかも忘れた。

「性処理の道具なんかじゃないだよ！ 傷つけるだけのお前に、艦娘を引つ張っていく資格なんか  
ない！」

——こんなに怒ったのは、人生で初めてだ。

相手を罵るために怒ったのも、初めてだ。

骨が軋むほどインカムを耳に押し当てているのに気が付いたのは、血が頭から少し  
去った後に  
なつてだった。

『……新人なのにすごいね。 僕にこんな大口が叩けるのは君だけだよ』

あれだけの事を、まだ名前も知れ渡っていない新人に言われたにも関わらず、日野は  
怒るでも  
なく、ただ感心したように呟いた。

どのように話せばいいかわからず沈黙を装って困惑していると、日野がゆつくりと落  
ち着いて  
話し始める。

『一応言っておくけど、僕は全く怒っていない。むしろ、元帥の僕に怒鳴った勇気を褒

めて

あげたいくらいだ』

とことん見下しているような口調に再び腹が立つが、割り込む間もなく話は続いている。

『新人だから知らないだろうけど、単冠湾は北海道近海のほぼ全てを担っているんだ。

大湊の方

もたまに協力してくれるけど、基本的にこの辺りの統括はここ。太平洋、オホーツ

ク海、日本

海と大忙しだ。地位を振りかざしているようであまり好きじゃないが、横須賀の元

帥や大本営

のお偉いさんも口が出せないほど、僕は偉い』

「……………」

これは予想外だった。

他の元帥や大本営にも口が出せないとなれば、憲兵の視察も全くの無意味になる。

単冠湾で大人しくして、あまりにも大きな損失を国に与えない限り、受けるべき罰も

受けない

だろう。

元帥でもお偉いさんでも憲兵でもない自分なら、なおさら何もできない。

『まあ、そういうことだ。口で言うだけなら僕は何でも流してあげるけど、実力行使されると

ちよつと考えるから、そこは覚えておいてほしいな。……そういえば、6年前にここが日本中

で話題になったことがあつたな。覚えているかい?』

突然の問いかけに、幾分か冷えた頭で昔を思い出してみる。

6年前、12歳のころに、何があつただろうか。

日本中……単冠湾……たぶん——

「……単冠湾襲撃事故」

記憶から引つ張り上げた出来事は正しかったらしく、『そう、それだよ』と相槌を返された。

『あのときに当時の単冠湾の提督が指揮中に戦死してね。さつきの通り、北海道をほぼまるまる

守っていたここが崩れかけて、日本が荒れに荒れた。

そこで新しく就任したのが、当時16だった僕。異例だったけど、十分な知識があつたこと

と、何より前提督の息子だった事が幸いした。

昔話になるけど、父さんは優しかったんだ。艦娘からの支持はよく、近くにうるさい住民も

い

おらず、提督の誰もが羨む地位を確立した。でも、優しすぎたんだ……そのせいで、

島民の

半分と一緒に父さんは死んだ。

だからこうして厳しくしているのさ。僕に奉仕させて、絶対服従を誓わせ、思い通

りに動か

せる駒にする。最初は少佐だった僕が、こうするとすぐに元帥になったんだ。間

違つて

いるとは思わないし、失敗するまで君を含めて誰にも資格がないなんて言われたくな

い』

長つたらしい言葉の中に、確かに一理あると感じた。

成果を上げている点では、提督としては間違つてなく、むしろ正解に近いのだろう。

だが、人間としてや、艦娘のためにも、正しいとは絶対に思えないし、思いたくない。

『理解できない、といった感じかな？ 心がまともな人はみんなそう思うだろうさ』

「……なら、あなたは心がまともじゃないと？」



『こういう事にまつたく心が痛まないからね、自覚はしてるさ。でも、国を守れるのは、少な

からず常道から外れた、僕のような頭のイカれた奴だ。そして、守れるなら、僕はもつとイカ

れた奴になりたいね』

「それはあなたの勝手ですが、実際に守る人たちのことも考えてはどうですか」

『ん〜……』

別に怒るでもなく、自分のきつめに言った言葉を真に受けたように考え始めた。

いろいろ不思議だ、と思い始める。

艦娘にしている性暴力は、自分のためというよりも、国のためにしているといった意志が感じられた。

16歳で提督になるのに十分な知識があったということとは、自分のように生まれた時から生徒

だったか、幼いころに生徒になった、させられたぐらいしか思いつかない。

予想でしかないが、日野も自分と同じく『国を守るべきもの』と教え込まれただろう。もしそうならば、自分も根本的には日野と同じなのかもしれない。

過程が違うだけで、起きる結果は同じだから。

自分が目指しているものは、日野と同じことなのだろうか。

『昔を思い出すよ。僕も君みたいに思ってた時期があったからね。せめてもの情けで、少し

考えてみたよ』

考えから引きずり戻され、頭の中を切り替えるのに時間がかかる。

その時間を促すものと捉えられたのか、再びインカムから言葉が漏れる。

『島風を連れて行くといい。山城たちの近くにいる、連装砲を抱えている奴だ。暁らと仲が

良く、僕にも不満を抱いているから、ちょうどいいだろう。合わせて君にあげるよ。

大事に

使ってほしい』

返答に困る言葉だったが、つい先ほどまでの厳しい声色から優しいそれに変わったところが影響

したのか、自然と言葉を返していた。

自分と似ているという同情が絡んでいるのが、非常に悔しくはあるが。

「……わかりました。丁重に扱わせていただきます」

『そうか。 島風、聞いていたな?』

『……よろしく、新しい提督。 あと、連装砲ちやんだから』

島風と思われる女の子の声が、通信に割り込んで聞こえてきた。

通信がクロスしていたことに驚きつつも、挨拶を無意識にする。

「よろしくな、島風」

『……うん』

不愛想な返事を聞くと、日野は大きく息を吐いた。

『さて……一つ目のお願いは突っ撥ねたけど、二つ目は聞こうと思う。 明日辺りに輸

送船と護衛

部隊を送ろう。 それまで大丈夫?』

「ええ。 それでお願いします」

『うん、素直だね。 君はきつと、僕とは違った偉い提督になると思う』

何を今さら、と思ったが、言えなかった。

同情が、完全に心に沁みついてしまったようだ。

『それと、僕なりのアドバイスを一つだけ。 艦娘に甘くするな。 君自身のため、艦娘

のため、

絶対に忘れないことだ』

「あなたの考えは理解しがたいです……が、頭の片隅には入れておきます」

『それで十分さ……。僕なりに楽しかった。また会える日を楽しみにしてるよ』

その言葉を最後に、自分の返事を待たずに通信を切ってしまった。

言葉に形容できない気持ちになりながら、インカムを耳から外す。

「……なんじゃい、あいつ」

忘れていた、肩の上であぐらをかいていた工廠長がふてぶてしく口を開いた。

「訳ありなんじやろうが、感じ悪いの……お主もそう思わんか？」

「半々、ですかね……許せませんけど、仕方ないのかも、とは……思ったりしました」

「……負けず劣らず、お主も曲者じやな」

「人間なんて、程度の差はあれみんな曲者ですよ」

工廠長と軽口を叩きながらも、インカムを返しに再び工廠の奥に戻る。

不思議と全員が集まっけていて、戻ってきた自分に何とも言えない視線を向けていた。

少し戸惑いながらも、山城に近づいてインカムを差し出す。

「明日、この島に輸送船と護衛部隊を向けてもらえることになりました。日野元帥殿

に、私が

感謝していたと伝えてください」

「わかりました、伝えておきます。夜間哨戒に戻らないといけないので、これで失礼し

ます」

受け取ったインカムを耳にはめ、扶桑と共に外に出て行ってしまう。

それをその場にいる全員で見届け、見えなくなつたところで全員が自分を向いて発言を待ち

始めた。

頭をぼりぼり搔いて言葉をひねり出そうとするが、何を話せばいいか悩んでしまう。

「……それで、どうすればいいの?」

つい先ほど聞いた声が、静かに自分に自分に向けられた。

暁たちの陰に隠れていた島風が、顔だけを出して自分の発言を待っている。

「行かないのか?」

「ここに残れって言われたから」

「そうか。改めてよろしくな」

島風に手を伸ばすと、何故か近くにいた電が身を引いてしまう。

手を伸ばした相手も顔をしかめながら渋々といった感じに、連装砲ちゃんなるものから右手を

離して何とか握ってくれた。

「電、どうした?」

手を解きつつ電に問うと、両手を慌ただしくして顔の周りを示し始める。

何を言いたいのかわからず首を傾げていると、肩をとんとんと叩かれ耳打ちされる。

『顔に血が付いてんだよ。洗ってきた方がいいぜ』

天龍にそう言われて顔の周りを手でなぞると、少し厚い皮が被っているような感じがした。

なぞった手のひらには、固まりかけた赤黒い血がこびりついていた。

夕級の返り血を浴びた時に付いたのだろう。

「悪いな、島風、電……今日はもう寝よう。船渠の前のあの部屋を使うといい」

あまり見られたくないのもあり、話を早く切り上げ、暁たちにまとめて指示を出した。

何か言いたそうにしていたが、響が気を利かせたようにため息を吐きながら歩き始めるのを

見て、天龍と龍田以外が工廠から出ていく。

「……全部聞いたよ。やっぱりお人よしだなお前」

「生徒さん……司令官さんだもの、どこまでいってもお人よしよね〜」

二人して勝手に言ってくれるが、長い付き合いから褒め言葉だとすぐにわかる。

微笑を浮かべながら動こうとしたが、天龍の言葉に引つかかって聞き直してしまう。

「……………全部?」

「あのでつかいやつが、オープンモードで会話を全部聞かせてくれたんだ。まあ、一理あるっ

ちやあるような気もするが、何とも言えねえよな……」

「まあ、それは置いておいて。怒ってる時の司令官さん、とつてもかつこよかつたわ  
ゝ。惚れ

直しちやった」

「あ、あはは、そうですねか……」

何を考えているかわからない笑みを浮かべる龍田を見て、苦笑いが勝手に出る。

まだ話したいことはあるが、咳払いを一つして二人に話しかける。

「夕級とル級の死体の処理をお願いします。このまま放っておくわけにもいかないの  
で」

「そうじゃそうじゃ。はよう片づけてくれ」

「はくい。もつとお話したかったのにな」

龍田は軽く返事をしながら近くの夕級の方へ歩いていくが、天龍は工廠長を見つめた  
まま動か  
ない。

「さつきから気になってたが、なんだこの爺さん」

「元この工廠長じゃ。なんか文句あるか？」

「あつそ……お前も手伝えよ、話したいこともあるし」

そつけなく工廠長から顔を背けると、手で誘いながら龍田と同じく夕級へ向かい始める。

それに逆らわず、歩くごとにふわふわ揺れる紫苑色の髪を追う。

「……疲れてないか？」

「それはまあ。工廠を綺麗にしたら寝ますよ」

「無理して倒れんように。何も食ってないんじゃないかな」

「心遣いありがとうございます」

工廠長の優しい言葉に疲れを少し癒し、あまり気の進まない死体処理にかかった。



## 第28話 艦装の扱い方

静かに手を合わせ、彼女たちに祈る。

一人は自分が、もう一人は扶桑が殺した夕級とル級に。

暁らと別れた後、天龍と龍田と二人の体を片付けた。

艦装を外してもらい、片目の無い夕級と頭の無いル級を工廠に空けられた穴から外に運び、

並べて土葬した。

火葬もせず線香もリンも使わず申し訳ないが、今できることはこうして祈ることだけだ。

「何やつとるんじゃ」

瞑っていた目を開けて後ろを向くと、肩に工廠長を乗せた龍田が歩いてきていた。

「敵に手を合わせる軍人がおるか。頭でも打つたんじゃないんか？」

「前の優しい司令官さんでもしなかったのね。どうしたの？」

「頭なんて打つてませんよ。ただ……」

脳裏に染み付いたあの光景が浮かんでくる。

手を差し出して誘ってくる夕級、仲間を見るような眼をして、そして裏切られた表情をした。

ル級。

あれは敵じゃなかった。

あの時だけは、自分を殺す敵じゃなかった。

「……私に対する、敵意がありませんでした。私に、『来い』と誘っているようでした」

「どういうことじゃ？」

「わかりません。仲間になれということなのか、言葉通りの意味なのかさえ、まったく」

「むう……」

低くうなり、腕を組みつつ工廠長は考え込み始めた。

それを遮るように、龍田がいつもと同じふわふわとしたため息を吐く。

どこにいても変わらない龍田の存在に、心の痛みが少し和らいだ。

「何にしろ、司令官さんの判断は正しかったと思うわよ？ 連れていかれたところで、どうせ情報

を抜かれて捨てられるのがオチに決まってるわ」

さらりとえげつないところも変わってないな……

内心苦笑いをしていると、「は？」と工廠長が大きさに見えるほど反応した。

「近頃の奴らはそんなこともするのか？」

「ちか、ごころ……？」

まだ工廠長が何者なのか説明していなかった、と思い、龍田に語弊がないようにかいつまんで

説明する。

「——というわけでした、ここ十年の日本を知らないんですよ」

「へえ………なんか、骨董品みたいね」

「この小娘が……！」

あからさまに不満を抱いた声と態度で、工廠長はそれを龍田にぶつけた。

『あくあ……』という自分の心の声を置き去りにして、やはり龍田は反応して言い返す。

「一応15年生きてるのよ？ 船だった頃も合わせれば40年。 艦娘としても人間として

しても大人

なんだけどなあ〜」

「お主は一人で生きたことがあるか？ わしは18年の内10年一人で生きてきたわ

い。 他人の

力を借りて暮らしてきた15年なぞ比べもんにならんわ！」



合わない

ことを悟った。

下手をしなくても一晩中続きそうなので、強引に咳払いで割り込んで話しかける。

「それで、天龍さんは中ですか？」

「今床をお掃除してるはずよ。 ついでに顔洗って来たらどう？」

「そうさせてもらいます。二人とも、言い争いは程々にお願いますよ」

火の粉がかからないように工廠に戻りつつ言うが、後ろでまた二人の声が聞こえてくる。

連れて帰って大丈夫かな、と不安になりつつも、水で床を洗っているという天龍の元へ向かう。

穴を体が引つ掛からないように気を付けながらくぐると、龍田の言葉通りにホースから水を

出してどこからか持ってきたモップで床を洗っている天龍がいた。

「よお、遅かったじゃねえか」

「ちよつとありましたね。少し水をいただけますか」

「ん、ああ。ほらよ」

血濡れになった顔を指さしながら言うと、特に反応なくホースを自分に向けてくれ

る。

それに会釈して軽く礼をし、両手で水を溜めて顔を洗う。

血の皮がはがれ、顔に穴から入ってきた冷たい夜風が当たって心地いい。

「ほんつと、変わんねえよなお前」

「そうですか？ 数年前に比べれば、いろいろ変わりましたよ」

「違う違う。 氣い抜いたら顔が柔らかくなるところとかだよ」

天龍に指摘され、洗ったばかりの少し濡れている顔を触ってみるが、どういふことなのか

さっぱりわからない。

首を傾けながら悩んでいると、「わかんなくていいよ」と言われて素直に諦める。

「にしてもさ、何があったんだ？ ル級はともかく、夕級はどうなったんだ？ 片目と腕が潰れて

ただけで別に死にそうじゃなかったが」

「それは……」

急すぎる質問にたじろいでしまい、答えるべきかどうか迷う。

本当のことを話して相談したいとも思うし、黙って自分で抱え込むべきだとも思う。

例外なんてものじゃないから、よく考えなければいけない。

「……珍しく煮え切らないな」

「ええ、まあ……」

「私は話して欲しいな」

少し頭が浮くような声でした。

気が付けば龍田が戻ってきていて、工場長と共に話を聞いていた。

判断に迷って、唯一自分を知っている工場長へ目を向けてアドバイスを求める。

「ええんじゃないか？ 仲間じゃろ？」

「そんなあつさりと話していいんですかね……？」

「お主は他人の秘密は守れるが、自分の秘密は守れんと見た。 どうせ隠すだけ無駄

じゃ。 凶星

なら諦めて話せ」

即答ではあったが、工場長は至って真面目な顔つきをしている。

個人的にはあって数日しか経っていないのになぜ自分の特徴を言い当てられたのが気になるが、後に回して話すことにする。

凶星なものもあるが、どうせ戻ったら教官に言うつもりだった。

この二人に言っても、別に問題ないだろう。

「……私が艤装を使って殺したんです」

「……どっちもか？」

「夕級の方だけです。拳銃型の主砲を使いました」

「あれじゃな」

扶桑が箱の上に置いていったそれを工廠長が指さし、天龍が近づいて左手で掴む。

「……………」

それを様々な角度から眺めた後、おもむろに銃口を右手のひらに押し当て、止める間もなく

引き金を引いた。

ドンツ、という重厚な音と、ガギイツ、という手を撃つたとは思えない金属が潰れるような音が

工廠中に響き、天龍の右手が大きく弾かれた。

「て、んりゆうさん、大丈夫ですか……？」

いきなりの音に痛くなった耳を押さえつつ問う。

その代わりなのか、右手を自分たちに見せつけるように開いた。

「確かに臙装だ。あと、地味に痛え」

そういう天龍の右手には、少し潰れてはいるものの、明らかに普通の銃弾とは違うものが



転がっていた。

それを捨て、右手をぶらぶら振りながら戻ってくる。

「何してるんですかもう……」

天龍に近寄って、右手を開かせて様子を見る。

軽く手袋に凹みが見える程度だが、肝が冷えたのには間違いない。

「ちゃんと威力は殺したろ？ それに、こうやった方が手っ取り早い」

「それで、何か変わりはあったの？」

「いや、普通の駆逐が使うやつと同じだ、多分12だろうな。それで、重さも70キロ

ぐらいは

ある。お前が持てたり使えたってのが不思議すぎる」

「持てたのは火事場の馬鹿力だと思えます。ただ、撃てた理由がわかりません」

前例にも、人間が艤装を使えたことは一度もない。

使えるのは艦娘本人か、妖精さんが使う艤装整備用の器具を用いた場合のみというの

は、昨今の

海軍内では常識だ。

「そもそも本当に撃つたのか？ 爺さんが撃つたのがたまたま眼に入ったとかじゃなくて」

「いや、儂が使ったのは35.6cm連装砲じゃ。目に入る前にル級のように首から上がすつ

とぶわい」

「司令官さん、燃料飲んだり弾薬食べたりしたんじゃないかなあ？」

「あんなまずい物摂りませんよ」

「したんだあ……」

「十何年か程前にですが」

話が停滞してしまい、同じように場の空気も固まる。

実は自分は艦娘なんじゃないか、と頭の隅で思ったが、体の特徴はほぼ完全に男性で、艦娘には

船を女性と形容するように男性の個体は存在しない。

艦娘が男であることなんて、艤装を使うことと同じく、またはそれ以上にあり得ない。

自分は何だ、と体に問いかけ、答えが返ってくる時をこれほど熱望したことはない。

四人で口を開くことなく考え込んでいると、無駄に大きい工廠の扉が開く音がした。

『さっきの音は何だったんだい？』

直後に響く声が聞こえ、全員の視線が天龍の右手に吸い寄せられる。

「あつ……」

「天龍は小さく声を上げ、右手で頭を掻きつつ箱の上に艤装を置き、少し大きく息を吸った。」

「すまん、ただの試し撃ちだ。何でもないから戻って寝ろ。じゃねえと大きくなれねえぞ」

『分かった。皆も早めに寝た方がいい』

「俺たちももうすぐ寝る。心配すんな」

天龍の返事を聞いて戻ったのか、工廠の扉が閉まったのがかろうじて見えた。

「……この話終わりましたか。考えても意味なさそうですし」

「だな。……じゃ、さっさと掃除終わらせて寝るか」

半ば忘れていた掃除を思い出し、ホースに近づくと天龍を止める。

本来、天龍には関係ないことだ。

「私がやりますから、天龍さんは休んでてください。そもそも汚したのは私ですし」

「どうせ飲まず食わずでやってんだろ？ お前の方こそ休んでろ」

「いや、しかし……」

「……話したいことはまだあるからよ。手伝ってくれ」

「……はい」

少々もやもやした心持ちで手伝いをしようとする、後ろから肩を叩かれる。

「私は？」

龍田が、指で髪をいじりつつ、顔を目と鼻の先まで近づけて聞いてきた。

髪をいじるのはつまらない時の、顔を近づけてくるのはいらついている時の龍田の癖だ。

放っておかれた挙句、姉とばかり話している自分が気に食わなかったのかも知れない。

性格は似ても似つかないが、龍田は愛しているという表現がぴったりなほど天龍を気に掛けて

いて、表に出さないだけの寂しがり屋だ。

「あー……先に暁……さっきの駆逐艦たちと一緒に休んでいてください。 工廠長、場所は

わかりますか？」

「ドック前じゃろ？ それぐらいわかるわい」

「では案内をお願いします。 龍田さんもそれでいいですか？」

隠れたオーラに気圧されつつ、少し早口に言い終えた。

だが、問いかけに対する返事はなく、恐怖を感じさせる笑顔が段々と近づいてくる。

背中をのけぞって避けても、なおやめてくれない。

言いたくはないが、これを言わないと止めてくれないだろう。

「帰ったらマツサージしてあげますから……駄目、ですか？」

ぴたっ、と龍田の動きが止まった。

笑顔のまま「んっ……」と悩み始め、そのまま五秒が経過する。

趣味のようなものでマツサージをやっている、龍田は事あるごとに求めてくるほど気に入っている。

「これでも駄目か……？」

続く提案をしなければ、と龍田が喜びそうなものをリストアップしていく。

が、決定打に欠けるものしか浮かばず困り果てていると、龍田に先手を取られる。

「……仕方ないなあ。天龍ちゃん、あまり無茶させちゃだめよ」

と思ったのだが、意外とあっさりと機嫌が収まったようだ。

工場長と少し話をして艦装を外して置いた後、そのまますたと工場から出て行き、天龍と

二人残った。

「……相変わらずめんどくせえ奴だな。ほら、俺が磨くからホース持つてろ」

天龍の言葉で再び忘れかけていた掃除を思い出し、近寄って妖精さん用と思われる細

めのホース

を受け取る。

近くにあつたであろうモップを手に取つた天龍は、自分が水を撒くところから床を磨き始めた。

「お前がいなくなつてき、大変だつたんだよ」

「……そうですか」

「赤城と加賀は拗ねて部屋から出てこねえし、金剛と比叡は探させろつて提督に無茶言つて、榛名

は目が死んだ魚みたいになつて、霧島は色々鈍くなつて」

「は、はあ……」

静かに、だが勢いのある天龍の言葉に飲まれ、こんな事しか言えなかつた。

「木曾と夕張は勝手に探しに出て、吹雪は泣きまくつて塞ぎ込んでさ。まともだつたのは鳳翔と提督だけだつたよ」

自分がない数日の間に、横須賀は荒れに荒れていたようだ。

悲しんだり探してくれるのは嬉しいのだが、本来の任務をほぼ全員すつぽかしているところには

一言申しておきたい気分になる。

「……天龍さんや龍田さんはどうでしたか」

「心穏やかじゃねえよな。お前は俺にとつて弟子、龍田にとつて弟みたいなもんだからよ、何回

も探しに行つたさ。らしくもなく二人で痲癩起こしているろぶつ壊したり、探させろつて

提督にも殴り込んだよ」

うわあ、一番ひどい……

なんてものは心内に潜水艦のように深く潜める。

その代わりに悩みが急速浮上してきたため、流れで天龍に聞いてみる。

「あの、そんな状態で戦えましたか？ 最近では戦力が増していますが……」

横須賀の襲撃について、ふと疑問に思った。

ここ最近では、戦艦に空母は当たり前前、潜水艦まで混じつてくることも少なくな、各海域の

主力艦隊並までの戦力を深海棲艦は送つてきている。

一言で表せば戦意喪失ともいえる今の横須賀が、それらを跳ね除けることができたとは考え

にくい。

「ああ、いやそれなんだけどな……一隻も来なかったんだ。平和そのものだったよ」

「えっ？」

明かされた事実には、疑問符を浮かべることしかできなかつた。

今まで一日一回は来ていた襲撃が、自分がいなくなつた途端に止んだ。

何故かわからない。

偶然にしては、あまりにも不自然だ。

「何かしたんですか？」

「何もしてねえよ。何もかも今まで通りだ。お前も分かんねえだろうけど、こつち

も

わかんねえんだよ」

「嬉しいのは嬉しいんですけどね……急になると裏があるのかと気になります」

「まったくだ。次こつち頼む」

「はい」

水をまきつつ、答えが出ないとわかっけていても考えてみる。

主に考えられるのは、自分が横須賀から離れたこと。

深海棲艦は、ごく稀にはあるが人間を攫つていくこともある。



過去に三回、鎮守府を襲撃された時にその提督が攫われて情報を抜かれて利用されてしまい、

シーレーンが破壊されたり各鎮守府の防衛網の穴を突かれたりして、日本が混乱したことがある。

ただそれが目的なら、自分ではなく教官の方を狙うはずだ。

となると、深海棲艦を狙うに足る何かが自分にあるということになる。

知識——現状を大本営の懐事情まで知っている教官に勝るところはない。

頭脳——自分より二倍以上も生きている教官の方がよく切れるし優秀だ。

能力——艦隊指揮を深海棲艦出現当時から行っている教官が自分に劣るわけがない。

どれもこれも、自分を狙うきっかけになりそうもない。

だがその前に、深海棲艦に人の知識や能力を判断することができるとかどうかが謎だ。

何かがある。

自分に何があつて狙われているのか。

ただの偶然とは考えにくい、でもそれでしか説明がつかない。

わからない、どこまでもわからない。

「よし、終わりっつ」

少し息の上がつた天龍の声が聞こえ、意識が頭から現実へ一気に戻る。やはり、これに答えは見いだせなさそうだ。

諦めて肩を落とし、ホースをたどってこれまた小さい蛇口を捻って水を止める。

排水溝に流れる薄赤い水が流れる音を聞きながらホースを巻き、近くに置いて天龍の元に戻る。

「じゃあ寝ましようか」

「夜間哨戒がないってのはいいな。疲れずに済む」

「昔みたいに『疲れないと眠れないから訓練させろ』なんて言わないでくださいよ?」

「そんな馬鹿な頃の俺なんか忘れたよ。で、こいつはどこに置けばいいんだ?」

「龍田さんの隣にでも置いてください」

「おう」

天龍は艤装を外して龍田のものの隣に置くと、先導する自分についてくる。

おやすみなさい——

そう土の中に眠る二人に心で告げて、工廠の重々しい扉を開けた。

## 第29話 島風と連装砲ちゃん

「ここって鎮守府か？」

色あせた廊下を見て、天龍はそう呟いた。

常に未知に対して恐怖より好奇心が勝る天龍の両耳付近の電探が、暗がりの中びこびこと紫色の糸を描いて動く。

糸を描いて動く。

「元です。十年ほど前に全部移転になったそうですよ」

「十年か……ちようどお前が俺に剣の使い方を見せてくれたって言ってきた頃だな」

「そういえばそうですね。そうだ、帰ったら勝負しませんか？」

「いいぜ、乗った！ この前みたいな負け方しねえからな？」

「はいはい。激戦を期待しますよ」

その後は特筆することも無く、数分ほど歩いて部屋に着く。

中から話し声が聞こえず、もう寝ているだろうと思ひ控えめにノックする。

『はい、どうぞ』

龍田の返事を聞き、ゆっくり音を立てないように開く。

二人で中に入つてみると、意外なことに全員が起きていた。

四姉妹は島風を、島風は膝を抱えて下を、龍田はにこにこどこかを見ていて、まるで空気が

部屋にこびりついているようだ。

座つている位置も、島風が奥の角のベッド、四人は3×2あるベッドの島風との対角、龍田が

入り口付近にある椅子と、それぞれの立場が良く分かる構図だ。  
ウインウイン。

「ん？」

どこからか機械の駆動音が聞こえ辺りを見渡すが、動きそうな金属など何一つない。後ろにいた天龍だが、最初はわからない風にきよろきよろしていたが、見つけたらしく指差して

見るように促してきた。

促されるまま見てみると、そのままの意味で砲塔が動いていた。

赤白の浮き輪のようなものには、『ぜかまし』——『しまかぜ』と書かれてある。確か、島風が工廠で抱えていた連装砲ちゃんなるものだったはず。

それが右足の甲に乗つてふくらはぎをくいくい、と——

——連装砲が足に……!?

「うわあ!」

驚いて、足を連装砲ちゃんから離すように引く。

ウインウインウインウイン。

だが、かたくなに足にしがみつき、首もとい砲塔を振って離れない。

早く離れないと足が潰れる、と思った瞬間に足でぶら下げられている現実に気付き、荒ぶった心を落ち着けていく。

「排弾は済ませてあるし、司令も切つてあるから大丈夫ですよ」

壁に塗られたコンクリートのようなのっぺりとした説明が、島風から聞こえてきて、昔に学んだ

ことを思い出させる。

艦娘の艦装の中には、艦装自体が意志を持つて動く『自律型』がある。

その型の艦装は艦娘と性質が似ており、所有者が送る指令を切れば装甲への燃料の使用を停止

して完全な自律行動を始め、排弾をすれば重量は見た目相応にまでなくなる。

艦娘に関する様々な事柄の中でもメカニズムが九割九分九厘わかっていない、世界の

ブラック

ボックス的な存在、それが自律型艦装。

そんな不思議な艦装を両手で掴んでゆっくりと離し、床へ降ろす。

ウインウインウイン。

心配そうに、主の姿を見ては自分の姿を見てくる。

はぶられている主を助けてほしい、といったところだろうか。

艦装にお願いされるといふ初めての訳が分からない体験に頭を掻きながら、どうすれ

ばいいか

わからず悩む。

島風が暁たちを殺そうとしたのは事実だが、そう指示したのは日野だ。

本人は傷つけたくないと思っていようがいまいが、暁たちにとって自分たちを沈めよ

うとけし

かけてきたのは島風であることに変わりはない。

こう邪険に扱われても仕方ないことではあるのだが、それをこの連装砲に言っても納

得はして

くれないだろう。

ウイン……ウイン……

悲しげに謎の技術で表情を変え、必死に助けろとアピールしてくる。

いつまで経っても止めなさそうな姿に折れることにして、天龍を手招きして島風に近づく。

艦装を付けたままではただ燃料を浪費するだけだし、意味もなく起きていれば無駄に体力が無く

なっていくだけだ。

「島風。 艦装ぐらい外したらどうだ？」

「……………」

不機嫌そうに自分を見た後、頷いて主機と背中魚雷発射管を外して静かにベッドの隅に

置いた。

あまり機嫌がよくないため投げ捨てるのかと思つて天龍を呼んだが、杞憂だったようだ。

まとめて置いた後、外す前と同じ態勢を取り、もう一体の連装砲ちゃんを抱きしめる。

「寝たらどうだ？」

皆に睨まれるよりみただぞ、という言葉を隠して、島風に提案する。

「……………命令？」

表情一つ変えず、下から見上げているのにも関わらず上目遣いをせず、淡々と事実確認をする

ように聞いてきた。

軍艦だった頃の記憶をまだ引きずっているのだろうか。

「……そうだ」

「わかりました」

即答で了承し、連装砲ちやんを艀装の近くに置き、壁に顔を向けてすぐに横になった。行動が早いな、と思ったすぐ後、規則的に呼吸が繰り返され始める。

早いという次元ではなく異常だ、と感じた。

自分にしがみついていた方の連装砲ちやんももう一方の所まで走ってきて、艀装に二体とも寄り

かかって寝始める。

「みんなも寝よう。起きててもすることもないだろう」

そう曉らに言ってみるが、響が島風の向かいのベッドに行つて横になつただけで、他は誰も

動かず島風を見続ける。

「気持ちわかるけど、そう睨みつけることもないんじゃないかな。逆に島風の立場



になつて

考えれば、周りは敵や知らない人達だらけだ。何も手は出してこないよ」

「分かつてるわよ。でも……」

自分の言葉に、暁は口ごもる。

自分を姉妹もろとも裏切つた敵、という認識はなかなかぬぐえないのだろう。

むしろ、響のように何かしらで割り切れる方が珍しいはずだ。

どうするか、と悩んでいると、天龍が三人の前に出て話し始める。

「お前らが島風をどう思つてるか知らねえけどよ、何かして来たら俺がぶちのめしてやるぞ。」

安心しろつて」

「……………」

「なんだ、疑つてんのか？ これでも俺は軽巡だ、駆逐の一人や二人何てことねえよ」

豪快な天龍の言葉に三人は少し身を引いたが、多少なりは安心したようで体の力がわずかに

抜ける。

だが同時に疑問が出てきたようで、電が口を開けたり閉じたりしている。

「どうした？ 言いてえことはつきり言えよ？」

「あの、その……なん、で……」

「ああ？ 聞こえねえぞ？」

「だから、なんで……して……」

勢いのない電の言葉がさらに失速し、完全に口を閉じてしまった。

体をぶるぶるさせながら涙を浮かべてしまった電を、暁と雷が体で天龍から隠す。

初対面の相手にそのような高圧的な態度はいかがなものか、と「何だよお前ら……」と原因が

よくわかっていない天龍の良くも悪くも大雑把な性格にコメントし、電の言いたいであろ言う言葉を

代弁する。

「なんで会って間もないのに味方してくれるんですか？ ……こんな感じかな、電？」

姉二人に隠された電の頭が縦に動くのを見て、天龍に手で回答を促す。

「そりゃあ、こいつがお前らを信頼してるからだ。こいつはセメント五個も持てねえ程弱え

けど、頭はすげえ良い。そいつが心許してたら俺だつて同じようにするさ」

「艦娘基準で力を比べないでください」

途中の言葉に隠さず文句を言ったが、そう思われるほど信頼してくれていたことは嬉

しい。

天龍の説明を聞いて幾分か納得したらしく、三人の表情が少し和らいだ。

その後何も言わず、三人は一緒に横になって目を瞑った。

何とかいけたか、と天龍と目で喜び、寝るようにと手で指示する。

無言でそれに従い響と暁らの間のベッドに向かうのを見て、半ば外れていた龍田の元へ向かう。

案の定髪をいじっていたが、それには触れず囁くように話しかける。

「龍田さんもうござい」

「その前に。これは？」

龍田が右肩辺りを指差す先には、少々眠そうな工廠長の姿があった。

これ呼ばわりされて怒号が飛ぶかと思ったが、どうやら見た目以上に眠たいらしく何も返事を

返さなかった。

こんな状態の姿は一般的な妖精さんとなんら変わらず、非常に可愛らしい。

本人に言えば、それこそ寝ていても怒号が飛んできそうだ。

工廠長の体をやさしく持って机まで運び、同じく優しく横にする。

寝返りを繰り返して落ちないよう本を机のふちに置いておく。

「これで大丈夫です。さ、早く寝ましょう。お腹減っても、夜食なんてないですよ」  
龍田に振り返りそう言うが、首を傾げられてしまった。

「司令官さんは？」

「そこらへんで寝ますよ。何か勘違いされて気まずくなるのは御免ですからね」

「一つ空いてるわよ？」

「結構です」

壁際に座って寝ようと動くが、龍田に腕をつかまれて歩みを止められる。

「一緒に寝ましょう？ 私寒いの苦手なの」

「なら天龍さんと一緒に寝ればどうですか？ 私はこれぐらいならまだ大丈夫ですし」

「遠慮しなくてもいいのに」

「先ほども言いましたが、勘違いされるのは避けたいんですよ」

「もう、頑固なんだから……」

とても名残惜しそうに言われ、半ば強引に挿んできた手を引き離す。

自分に振り払われた龍田はと言うと、天龍のところに行って一緒に横になった。

すでに寝ていたらしく、起きているなら跳ね起きるであろう天龍に反応はない。

朝が大変だな、と思いつつ、壁伝いに背中をこすらせて座る。

工廠長を寝かせた机の引き出しに頭を預けて目を閉じる。

昼に暁と一緒に寝たはずだが、眠気はしっかりと感じた。

夕級を殺して、ル級の死骸を見て、日野と話して、単冠湾の実態を知って怒って、天龍と龍田と

再会して。

これだけのことが一晩で起こったから、疲れてしまうのは仕方ないのかもしれない。

悪夢を見そうだ……しつかりしないと……

朝に失態をさらさないようにしなければとも思いながら、体の力を抜いていく。

短時間で溜まった疲れは、瞬く間に意識を刈り取っていった。

## 第30話 三日目の朝

暗い、ここは暗い。

手足が、体が、顔が、何も動かない。

耳障りな低い機械音の連続が、今の世界の全てだ。

『どうだね、調子は』

世界にくぐもった男の声が入ってきた。

『内臓等を含め、人体形成は完了しています。普通の人間と大差ありません』

違う男の声だ。

『なら声も聞こえるのかな。いい子にしてたか？ お父さんだぞ』

お父さんとは、誰の事だろうか。

『産まれる前から親馬鹿全開ですか。奥さんいるんですよね？』

『子供はまだただけだな。血を分けた子供ってだけでかわいいもんだよ。プロジェクト

トの最初

みたいな反対は今はできないな、はは』

血を分けたとは、誰の事を言っているのだろうか。

『予定日はいつだ?』

『予定日って……ぷっ、ははっ……!』

『いいだろう別に。半分とはいえ人間だからな』

半分……人間……?

『はいはい。いつ出しても問題ないですが、念のため後一週間はそのままですね』

『一週間か……。じゃ、また来るよ』

そして、何も聞こえなくなる。

それから随分と間が空いた。

多分、言っていた一週間が過ぎたのだろう。

分厚いガラスのようなものが割れた音が、うるさく世界に木霊した。

『オギヤー! オギヤー!』

ああ、これは自分の声だ。

出してもないのに、喉が震える。

なんて、幼い声なんだろう。

「ヤット……アエ、タ……ヤット……!」

聞き覚えのある声だ。

誰だ。

忘れられないはずのこの声は、誰だ。  
その人に抱かれる。

暖かくて、とても懐かしい。

「お前、その子をどうする気だ!」

また、あの最初の男の声だ。

よく聞けば、こっちもまた知っているはずの声だ。

「ワタシ、ノ、コドモ……アナタノ、コドモ」

「だからどうした!」

「キテ……イツシヨ、ニ……。ニンゲン……? オトナ……? ニ、シヨウ」

「無理だ。私の子を置いていけ!」

カチャ。

「ダメ……ドウシテモ……?」

しばらく何も聞こえない。

自分を抱いた誰が動き、自分が誰かに渡される。

「マモツテ……リツパニ、シテ……。マタ、クル……ムカエニ、クル、カラ……」

「迎えに来る? どういうことだ、おい!」

「オネ、ガイ……お父さん」



抱かれた自分が、乱暴に揺れる。

ひたすら赤子のように泣き続ける自分の耳に、爆音が届いた。

何が鳴ったか気にする間もなく、音の響きに意識が埋没していった。

最後に薄くばやけて見えたものは、何だったのか。

不思議と手を伸ばし求めた、あの人は――

ゆっくりと、夢から目を覚ます。

とても、不思議な夢だった。

昨日は悪夢を見るのかと思っていたが、どうやら違ったようだ。

雷に慰めてもらった時のように失態を晒さなくて済んだが、後味は今日の方が悪い。

自分の単なる妄想なのか、はたまた実際に起こったものなのか。

出てきた人は誰だ、片言だったのは、勇ましく叫んでいたのは、主観になっていたのは。

何だ、普通の人間とは、半分人間とは、お父さんとは。

そんな疑問を、心に深く、夢は刻んでいった。

「うわあ龍田あああがあっ!?!」

いきなり耳を壊さんばかりの大声が部屋中に届き、ついで床が揺れた。暖かくなった壁と床から背中と腰を上げて見渡す。

全員がベッドから跳ね起きている中、その陰から一人の姿が生えてベッドに吠える。「なんでお前が一緒に寝てるんだよ!」

「ふわああ……なあに、天龍ちゃん……?」

答えも欠伸を隠しもせず、龍田はだらしなく古びたシーツに全身を擦り付ける。

「寝んな! 答えろ!」

「天龍ちゃんうるさい……私、寒いのに苦手なのにらへらの……」

「んぐぐ……んなもん我慢しろよ……なあ、お前からも何か言ってくれよ」

急に話を振られて少し困ってしまうが、両手を軽く上げて首を横に振ってどうにもならないと

いった意思を伝える。

「マジかよ……まあいいや。起こして悪かったなお前ら」

天龍は周りの皆に謝ると、龍田を放ってドアまで歩き、開けて外を確認する。

「輸送船、だったか? いつ来るんだ?」

「今日としか聞いてません。今どのくらいですか?」

「日が昇ったばかりだな。昼に来るにしてもまだ時間があるけどどうする?」

どうすると聞かれても、先ほどの質問以上に悩んでしまう。

このまともにも機能していない鎮守府では、本当にするべきことはない。

ただひたすらにのんびりとするしか時間を潰せないという結論に行きつくことは、もう必然とも

言えるだろう。

「自由行動ですかね。 することなんて何もありませんよ」

「だよな。 はあ……文句じゃねえけど、つまんねえ」

「まあ、同感です」

天龍に向けていた顔をベッドに向けて、龍田以外の全員が起きていることを確認して話しかける。

かける。

「何かしたいことはあるか？」

そう問いかけてみるが、誰も口を開こうとはしなかった。

頭をガリガリ搔いて昨日のことを思い出し、時間をあまりつぶせない行動に出ることにする。

「暁、右足出してみてくれ」

「え？ うん、いいけど」

ひよこつと暁の右足が出され、その足首に巻かれている包帯代わりのシャツを解く。かなり腫れは引いてきたようだが、若干踝の少し下の所には残っている。

「痛かったら言ってくれよ」

すねの中心から腫れている部分以外の下を触診していくが、暁に反応はない。

肝心の部分だがさすがにまだ痛いらしく、容赦なく「痛い」と言われてしまった。

しかし昨日は工場まで普通に歩いてきていたことから、歩けないほどではないのだからと判断

し、少し安心する。

「大分腫れは引いてるな。もうそろそろで治りきると思うけど、完全に痛みがなくなるまで

無理はしないように。あと、挫き癖が付きやすいから、歩くときとかは注意してくれ」

「……ありがとう」

小さく聞こえた暁の言葉に、少し驚いて顔を上げる。

「……何よ、おかしい?」

「い、いや、そういう訳じゃなくてだな……」

お礼を言ったことにはなく、ちゃんと気持ちが届いていたように聞こえたから驚

いたのだ。

一言で表すなら、とても女の子らしいお礼の言い方だった。

「お礼はちゃんとと言えるし……」

むすつとした態度にも、今までの上辺だけの反応とは違い、ちゃんとした人間らしさが出て

いる。

「分かってるよ。 どういたしまして」

もう巻く必要がないと判断してシャツの切れ端を机に置き、電にも話しかける。

「電は頭がくらくらするとか、体に力が入らないとか喉が痛いとかないか？」

「もう大丈夫なのです。 ありがとうございます」

「それはなにより。 でも一応、激しい運動は控えるようにな」

電の小さな礼に手で応えて、続いて響の元へ向かう。

「おはよう、司令官」

「ああ、おはよう。 右手の調子はどうだ？ 疼いたり痛くなったりしてないか？」

「そこまでじゃないけど、多少の違和感はするよ。 それにしても早く治したい。 意

外と不便

なんだ」

そう言いつつ差し出す腕を支え、まともに治療されていない怪我の様子を見る。

膿んでもなく、それほど黒ずんでいないところを見ると、流石艦娘だと言いたくなる。

響自身が『艦娘は風邪を引かない』と言ったように、感染症にもめっぽう強いための、心配

いらないだろう。

「まずまずだな。ちよつと立ってみてくれるか？」

自分の言葉に従ってベッドから降りて立ち、癖なのか手のない右手で髪を耳に掛けようとする。

気が付いて左手でする響を見て、言った通り不便なんだなと感じた。

「ふらついたりするか？」

「いや」

「体に力を入れたりしても大丈夫か？」

「……少し、眩暈がするかな」

「じゃあ無理せず安静にしておくように。ああそうだ、これ」

ずつとポケットに入ったままのりんごを差し出して、左手にしつかりと掴ませる。

ポケットが守ってくれたおかげか、汚れも返り血もない。

「少しでも栄養を取った方がいい。といっても、輸送船が来たら何か食べさせてもら

えると思う

けど」

「それまでの辛抱ということか。 あむ……」

小さくかじり始めるのを見て、することがなくなつてこの現状を打破してくれるかもしれない

期待を込めて工廠長の元に行くが、途中で響に呼び止められる。

「一口いかがかな？」

「怪我人から食べ物はいただけないよ。 まだ私は耐えられるしな。 それより他に分

けてやった

らどうだ？ 例えば、隣にいる島風とか」

「……………」

響は静かに横を向いて、同じく顔を上げて横を見た島風と目を合わせる。

そつと島風は目を伏せるが、響はりんごを片手に島風に近づく。

「どうだい、一口」

差し出されたりんごに見向きもせず、島風は口を開かない。

そのまま頑なに響が粘っていると、ようやく話し始める。

「一晩と朝ぐらい平気。 あなたの方がお腹空いてるでしょ」

「島風はよく食べるじゃないか。私の好意だと思つて受け取つてくれ」

「殺されかけた相手に好意つて、馬鹿じゃないの？」

「命令だつたんだろ？ 今の君はあんなことはしないはずだ。関係ないさ」

「……………」

また口を閉じてだんまりを始めるが、さほど時間もかからず島風はりんごをひつたくするように

受け取つて齧り、すぐに返した。

無表情に咀嚼する島風を見て、響は満足そうに微笑み、「引き止めて悪かった。

Спасибо」と

言つて寝ていたベッドに座つて再び食べ始めた。

手を軽く上げて礼の返事をして、机の上で胡坐をかき頭をぼりぼりと弄つて欠伸をかましている

妖精さんの所まで歩く。

「おはようございます、工廠長」

「あ〜……んう、おはようさん。朝っぱらから乳でかがうるそうて敵わんわい」

「悪かつたな性悪じしい」

「朝から剣呑な雰囲気にするのはやめてください」



乳でかと性悪じじいが睨み合い始めるのを手で遮って、言い争いを未然に防ぐ。

天龍と龍田は、ベクトルの方向は違うもののどちらも非常に口は達者なのだ。

もうこれ以上龍田の時と同じような居心地の悪い空気は感じたくない。

「朝から言い合う気はないわい。で、どうした？」

「何かしておきたいことかありますか？」

「そうじゃのう。ものの数分で終わることじゃが、工廠の片づけをしたいの。あと、

そのの

暁らの艦装のチェックじゃな。まさか捨てていくわけじゃあるまい？」

「そうですね。じゃあ準備にしますか」

工廠長の言葉で方針が決まり、手を二回鳴らして全員を自分に集中させる。

「これから工廠に行つて、輸送船乗船の準備をしよう。何か別のことをしたい人はい

るか？」

「異議なーし」

天龍の軽くおちやらけた声を合図に、ベッドで寝ている龍田以外の全員がそれぞれ動き始める。

「島風は主機と魚雷発射管持つて、ちゃんと連装砲ちゃんも連れて行つてくれ。ほら

龍田さん、

動きますよ」

「いやだあ、めんどくさ〜い……」

もごもごとシーツに顔を押し付けける龍田に、ドアへ歩き始めた響と島風を避けつつ近づく。

「いつ迎えが来るかわからないんですから、早めに準備しないと」

「ん〜……じゃあ抱っこ〜……」

龍田はシーツにしがみついたまま腕だけを伸ばして抱っこをせがんできた。

普通の業務の時はしっかりしているのに、休暇やそれに準じた状況だところうして人一倍だらし

なくなってしまう。

今はもう慣れていますが、昔は『こんな上司なんて嫌だ』と本気で思ったこともある。

そして今の自分は大きためらうことなく、龍田の腕をとって抱き上げた。

慣れとは、非常に恐ろしいものである。

「寒い〜……」

むにゅむにゅ、と本人自慢の胸が押し付けられる。

当然のように、龍田に恥ずかしがっている様子はない。

「いつも思うんですけど、龍田さんに恥じらいつてないんですか？」

「……? 揉みたいならいつでもいいわよ」

「そんなことしませんよ」

「だからよく。 恥ずかしがってたら人付き合ひなんてできないし。 それに、司令官

さんの事

大好きだもん」

「女性としての恥じらいは持つべきだと思いますよ」

「もう、つれないなあ……」

お互いに全くドキドキすることなく会話を終え、龍田が全身を密着させてくる。

何回か上下に揺すって落ちないように体制を整え、それから部屋を出て工廠に続く廊

下を歩く。

「……お前、何やってんだ?」

待つてくれていたらしい天龍は、龍田を抱いて歩く自分を見てそう言った。

言葉通りの意味ではなく、またお前かのようなニュアンスだ。

「見ての通り抱っこですよ。 龍田さんが起きようとしなかったの」

「かー、こんな妹を持って俺は悲しいぜ——」

ぶんつ、と風がなった。

天龍の言葉に反応した龍田が、首だけをひねって天龍を見たのだ。

あと、振り向きざまに長髪にピンタされて少し痛かった。

「それってどういう意味？ 天龍ちゃん？」

「……い、いや、待てよ」

「今度余計なことを言うと、今着てるお気に入りの紫色のフリフリしたブラジャーとパ  
ンツ、切り

刻むわよ」

「な、たつ……なあ!? 違うからな！ たまたま、本当にこれしかなくて着てるだけだから

な！ 勘違いすんなよな！」

話し相手が龍田から自分に変わり、妙にモジモジしながら叫ばれた。

これほどでなくとも、龍田にはぜひこの羞恥心を見習ってほしいところだ。

「……出撃時に凝った下着を身に付けていると、濡れたりちぎれたり破れたりして大変  
だって言い

ましたよね？ 帰ってから『ほつれたから直してくれ』なんて言っても直しませんよ」

先ほどの羞恥心の悩みを跳ね除けて、艦娘の世話をする立場から天龍に言った。

ある部分においては龍田より女性らしいかもしれないが、抜けてる点が多いのは天龍  
の方だ。

日本中の艦娘のトップレベルの実力者として、国民を守る者として、こういうところはしっかり

してほしい。

「……ごめん」

先ほどのうるさいまでの元気は失われ、しゅんと落ち込んだ天龍が小さく呟いた。

「はいはい。しよげてないで行きますよ」

あまりこの話を引きずるつもりはないため、軽く流して工廠の方へ歩いていく。

途中、角から一人見ていた響と合流して、肩を並べて一緒に向かう。

横目で見てみれば、響の肩にはしっかりと、忘れていた工廠長が座っていた。

「仲いいんだね」

「私が三歳の時からずっとだからな。良くないとやってられないよ」

「でも、さすがにそれはいきすぎじゃないかい？ 男と女として」

「もうこれが普通になっっているんだ、軽く見逃してくれ」

「……了解」

龍田を抱きかかえている様子に、苦笑いされてしまった。

先を歩いている三人も、振り返って自分たち、特に龍田を珍しい物を見ているとばかりに眺めて

いる。

他からすれば滅多にないことかもしれないが、自分たちにとっては準日常みたいなものだ。

「お前さんら……」

「なんですか？」

響の肩に乗っている工廠長が、真剣な表情で話しかけてきた。

「そんなのが平然とできるなら、早う結婚してしまえ。じれったい」

抱き着いている龍田の心臓が、一瞬だけ強く跳ねた。

「あれじゃ、カツコカリじゃったかの？ その天龍とまとめてしてしまえ。結ばれるわ強く」

なるわで一石二鳥じゃろ」

「駄目よ、お爺さん」

だんまりを決め込むかと思っていた龍田が、小さくもはっきりと言った。

「もちろん、できたら私も天龍ちゃんもいいけど、司令官さんは無理」

「俺!?! 俺もって言ったか!?!」

「黙ってて。私たちはただの上司と部下みたいな関係じゃないの。特定の一人をひ

いきする

なんてできないし、複数人同時なんてもつてのほか。でしょ？」

「そんなことはないじやろ。カツコカリなんじやし、他の国じゃ一夫多妻制もある。なんら

おかしいことはないじやろ。な？」

二人して、自分に確認を求めてくる。

龍田に自分が考えるケツコンカツコカリについて何も話したことはないが、ほとんど凶星だ。

工廠長の考え方も無い訳ではないが、ここは持論を展開させてもらおう。

「龍田さんの言う通りですよ。会社や何かではなく『軍』ですから。立場が同じ部下の内

限られた人だけをひいきするのは不公平ですから」

「生真面目じゃのお……」

「それに……仮だなんて、無責任だと思っんです。特に私みたいな人は、仮ですら結ばれる資格

なんて、ありませんから」

「……………」

自分の言葉がどういふことなのかわからなかったのか、工廠長は首を傾げる。

これらを説明するのは時間がかかるし、知る必要なんてどこにもない。それに、これから共に生活する上で、嫌でも徐々にわかってくるだろう。

「……ねえ、司令官」

顔だけを自分に向け、歩きながら暁が話しかけてきた。

「ん？　なんだ暁」

「そのカツコカリって何なの？」

少しだけ、言葉に詰まってしまふ。

別に恥ずかしい訳ではないが、説明するとなるとどうしても艦娘とは何なのかを厳密に伝えなく

てはならない。

そしてそれは艦娘本人に話していく内容だけでなく、『艦娘二開示スルベカラズ』と軍機にも

含まれている。

ここは、同じ艦娘でもある龍田に、当たり障りのない説明をお願いするべきだろう。

「……龍田さん、説明を」

「嫌」

即答で拒否されてしまった。



「天龍さんは……」

「俺も」

「工場長……」

「わしゃんな詳しいことは知らん」

見事に全員に断られてしまった。

そもそも、天龍と龍田は十分に説明できるはずなのだ。

ただ単に個人的な理由で言いたくないのか、自分が説明してあたふたするのを眺めて  
いたいただけ  
なのか。

前者の可能性も捨てきれないため、気は乗らないが説明していこう。

もちろん、艦娘の核心には触れずにだ。

「……ケツコンカッコカリというのは、提督と艦娘の文字通りの仮の結婚だ。法的な  
婚姻関係に

はならない。それと、どの艦娘にも練度上昇による基礎能力の向上には上限があ  
る。その

上限を引き上げるのがこのケツコンカッコカリ……簡単に言うところこんな感じだ」  
「それ以外で上限を上げる方法はあるの?」

「無いこともない。提督との……絆と言えばいいかな？　そういうのが結婚をする以上に深まれ

ば、何もせずに上がっていく艦娘もいる。ただ極稀で、普通はする必要がある」  
「……なんで、絆なの？」

聞かれると思った、だから話したくなかった。

暁は純粹に本心から知りたいと思っただけだ。

期待には応えたいが、軍機を破ったとしても今話すわけにはいかない。

ケツコンカツコカリも知らない、まだ艦娘になつてさほど経ってないであろう彼女たちの、自我

を奪うことはしてはいけない。

「……まだ暁には早い。もうちよつと時間がたつたら教えるよ」

「何よもう、子ども扱いしないでよ」

嘘をついた。

暁が聞こうとしたのは軍の艦娘を除く関係者にしか明かされない極秘情報だ。

謝る時は来ないし、教えることもないだろう。

「子ども扱いしてるわけじゃない。ちゃんとしたレディーになったら教えるよ」

「私はもうちゃんとしたレディーよ！」

「じゃあ……」

横から大人びた落ち着いた声が会話を遮った。

自分が耳を傾けるのを確認して、響はほくそ笑みながら話し始める。

「私なら構わないのかな。 暁より大人の女性ではあると思うけど」

「ひ、響……？」

暁が戸惑った顔をして響を見るが、さらりと毒を吐いた本人は今か今かと自分の返答を待つて

いる。

「確かに暁よりは大人びてはいるかもだが、まだ駄目だ。 それに、こんなところで話す

ような

ことでもない」

「ひう……」

「そうか、それは残念だ。 気長に待つとしよう」

潔く諦めてくれた響は、頬を赤くした半泣き状態の姉に何をすることもなく歩き続ける。

小さく「かわいいな」と言ったのが聞こえたのは、工廠長と自分だけだろう。

この表情を見るためだけに自分に問いたのかと勘繰るが、そんな訳はなく偶然だとい

う結論に

至った。

しかし、無表情の裏に底知れない喜びが垣間見えたのは気のせいだろうか。

「……………」

気が付くと、目尻に涙を浮かべた暁が睨んできていた。

先ほどの発言を思い返して、思いつきり失礼なことを言ってしまったことに気付いた。

妹に劣っていると言われて悔しかったのかもかもしれない。

思ったことを偽らずに言ってしまう、自分の仕込まれた良くも悪い癖だ。

「…………冗談さ。すまないね、レディーな私のお姉さん」

「…………ふん！」

響が追い打ちをかけ、恨みがこもった視線を自分と響へ刺した後、そつぽを向いてしまった。

おいおいと無慈悲に姉を怒らせた妹を見ると、わずかにはにかんで気分上々だ。

確信犯とは何とも恐ろしい。

真面目な性格の裏には、いたずら好きな顔が隠れているのだろう。

それか、少し変わった響なりの愛情表現かもしれない。

どちらにせよ、良い意味でも悪い意味でも愉快な性格をしているらしい。

『お主、実は腹黒いな?』

『可愛くて愛おしい私の姉だ。 少しちよつかいを出したくなるのは最早必然と言うべきじゃない』

かな?』

『お、おう……』

そんな二人のやり取りと雷と電が暁をなだめる姿を見聞きしながら、ほんの少し残った工場への道を歩く。

たどり着いて前にいた雷が扉を開けて、艤装をまとめて置いてある場所へ向かう。

「龍田さん、工場着きましたよ。 いい加減歩いてください」

「んくもう、冷たいなあ……」

自分にしがみついて楽をしていた龍田を降ろし、凝り固まった体をほぐしながら歩くと、目的の

場所にたどり着いた。

「さて、提督よ。 こいつはどう運ばええかのう?」

と、当たり前のように言ってくる工場長は、この工場が一番大きなものを指さした。

即ち、名称もない人員輸送機を。

「運べませんよ。置いていきます」

こちらを負けじと、そう当たり前のように言つてやる。

「……………」

常識が非常識になつたような顔を、数秒遅れで工場長は浮かべた。

運べないのは、火を見るよりも明らかだ。

人間用ならともかく、これは七座もありプロペラを四つも載せた『艦装』なのだから。

## 第31話 最後の工廠

「運ばんじやと!? もつかいよう考えてみい!」

怒りと驚きが混じった工廠長の声が、だだっ広い工廠に薄れていく。

いつもの状況なら自分が間違っていて工廠長が正しいところだが、今回だけは逆だ。「よく考えてください。これが人間用ならともかく艀装ですよ? いったい何もあると思ってる

んですか?」

「ぐ……で、でかい船ならこれぐらい載せれるじやろ!」

「ならもし小さければ? 下手するともっと重くて船底まで抜けるかもしれませんし、乗せる場所

によつては転覆したり前や後ろに跳ね上がつてそのまま沈みますよ。タイタニツクでもしたい

んですかあなたは」

「ぐぬぬぬ……!」

一方的にいらんでくるが、これは自分がどうこうできる問題ではない。

艦娘の存在が認知されてからすぐに、船舶や航空機の艤装化を国が図ったらしい。

だが燃料の継続的な供給が困難な事や単純に重量がありすぎて浮かべない飛ばない等様々な問題

があり、現在の移動・物資の輸送手段は昔からほとんど変わっていない。

輸送船となれば、当然人や物資が乗るためのものであり艤装ではない。

仮に運べたとしても、横須賀に収容するスペースも無く、解体されてそのまま資材行きは免れ

ないだろう。

結論として、ここに置いていくしかないのだ。

「どう私に言っても無理なものは無理なんです。きっぱり諦めて、皆の艤装を見てく

ださい」

「覚えとれよ……いつか烈風で貴様を叩き起こしちやるからな！」

小さい……

「小さい」

天龍が自分の気持ちを代弁するも、怒りで聞こえなかったのか工廠長は手当たり次第に艤装の

チエックを始めた。



「しっかし、なんだよこのほかでかい何かは」

「工廠長が趣味で作った艦載機らしいですよ」

「……艦載？ 何に載せる気なんだよ爺さん……」

もつともな質問に返答し驚かれていると、龍田が肩に顎を乗せてくる。

「ひま〜」

「分かつてますよ。ほら、工廠長に見てもらったら邪魔になら無いように、自分でわかる場所に

動かしてくださいよ」

「え〜。天龍ちゃんお願い〜」

「この怠け者……」

愚痴りつつも言われた通りに、チェックが済んだ二人分の艤装を持つてくる。

その間に龍田は、姉をパシらせておいた挙句、他人の体で当たり前のように暖を取っていた。

「ん〜、暖か〜い」

「こっちはそろそろ汗をかきそうなんですけれども」

背中に押し付けられる体は、最初は熱を奪っていたが、今はカイロのように体温を上げていく。

見慣れている天龍は何も反応せず、少々乱暴にがしやがしやと近くに艤装を置いた。「ガキが見てんぞ。もう少し抑えたらどうだ」

「私じゃなくて龍田さんに言ってください」

天龍に不満を言いつつも暁らを見てみると、することがないのか気になるのか全員が自分たちを

見ていた。

顔を向けた瞬間にばつが悪そうに暁と雷と電が一斉にわざとらしくそっぽを向く。

横目で見る三人以外の響と島風は、似た様子でじっと見つめてくる。

逆にこつちがばつが悪くなって目をそらしてしまい、体をくつつけてくる龍田の頭に手をかける。

かける。

理由もわからず極度に集中されるのは、少し苦手だ。

「龍田さん、暑いです。離れてください」

「あらく、思春期？」

「……………」

少々腹が立って、幾分か乱暴にして体を引き離す。

「やあん！ 今度は反抗期？ お姉さん困っちゃうなあ〜」

「空気ぐらい読みましようよ……」

「龍田、あんまりいじるなよ」

連装砲ちやんがウインウインとチェックされている傍らで少し普段とは違う会話をしている、

ちようど終わったらしい工廠長が戻ってくる。

「後は主機じゃな。そこから全員出て調子を確かめてきてくれ」

工廠長の指示に従い、それぞれがそれぞれのペースで準備をし始める。

島風が連装砲ちやんを二人連れて真っ先に出て行き、続いて響、後に暁ら三人、最後に天龍と

龍田が揃って海へ出ていく。

全員が出て行ったことで工廠長と二人残り、並んで座る。

点検前の怒りをぶつけられるかとも思い身構えるが、怒号は一切飛んでこない。

気まぎれになった空気をどう崩そうかと頭を回すが、何か思いつく前に向こうが話しかけて

くれる。

「……駄目かのお。 どうしても」

少し落ち込んだ、さっきまでとは大分違うトーンに、内心驚きつつ言葉を返す。

「……無理ですな。 仮に運んだとしても、横須賀におけるスペースはありません」  
「そうか……はあ、ワシの傑作が……」

「特別なものじゃなくても、烈風や流星改ぐらい弄らせてもらえenと思いますよ」  
「んむう、しかしのお……」

何か月も積み重ねた努力を無い物同然にされる気持ちはわからないでもない。

でもそれより、ここに残るといふ選択肢を出さなかつたことに、工場長の人肌恋しさを感じた。

少しでも心を通じ合つた人と離れずに済むとわかつて、勝手に、独りよがりにな堵する自分がいた。

「他の妖精と上手くやつていければええがのう。 気難しい奴らじゃなければいいんじゃないが、どう

なんじゃ？」

「大丈夫ですよ。 一緒にご飯食べたりゲームしたりするほど、気さくな人達ばかりです。 他所

から来ただけで邪険に扱つたりはしません」

「なら、ええがの。 長年一人じゃつた爺さんには少し不安に感じるの」

初めて見る弱弱しい工廠長と話をしていると、島風が一番に戻ってきた。

「よっこらしよ」と立つ工廠長は、吹っ切れたようでもいつもの様子に戻っていた。

乗せてあげようと差し伸べる手より先に、小さな体で島風に近づいていく。

「気になるところはないか？」

「ありません。連装砲ちゃんも大丈夫です」

「ならよし」

手を振る連装砲ちゃんに手を振り返しながら、工廠長は奥から次々と帰ってくる皆の所へ駆けていく。

いく。

じっくり見る暇は今までなかったが、こうしてみると島風は不思議な娘だ。

駆逐艦の娘にしては大きく、身長は目測で160cmはあり、主機のフォルムも違って近代寄り

で制御のしやすい舵付きだ。

駆逐艦というよりは、軽巡洋艦に近い体をしている。

服装も非常に軽く肌の露出も多く、史実における最速の駆逐艦であることを体現しているかの

ようだ。

連装砲ちやんという自律型の主砲を使っているのも、その速度を活かすためか、第二次世界大戦

中に島風にのみ搭載された五連装酸素魚雷の使用に集中できるようにするためなのだろうか。

「……何ですか？」

体を隅々まで眺めていると、島風は冷たく聞いてきた。

冷たいといっても無関心、やる気がないといった意味で、自分を軽蔑しているようではなかった。

なかった。

「気分を害したならすまない。ただ、容姿から軽巡のように見えてしまつてな」

「島風は最速の駆逐艦です。足の遅い軽巡とは違います」

「最速か。それは艦娘になつた今でも同じなのか？」

「もちろんです。スピードなら、誰にも負けません」

ガツン、と主機を床に壊れない程度にぶつけて鳴らしながら、迷いを少しも見せず言い切つた。

自信に満ち溢れていて、今までの引つ込み思案な印象とは正反対のそれを受けた。

先以上に不思議に思っていると、揃つて足を濡らした皆が戻ってくる。

「全員問題ないぜ」

「わかりました。それじゃあ、後は完全に自由行動ということだ」

自分の言葉を皮切りに、がちやがちやとそれぞれが艤装を置き始め、龍田がすぐに駆け寄って

きた。

「寒かったわ司令官さ〜ん、温めて〜」

「足を乾かしたらいいですよ」

案の定濡れた足から擦り付けてこようとするので、条件を付けて踏みとどまらせる。寒さに慣れてないせいもあるだろうが、それはこちらも同じだ。

不服と語る龍田の視線を浴びていると、脚を微妙にぶるぶるさせている天龍も寄ってくる。

「な、なんかせめてタオルとかねえか？ 流石にこの寒さに水はきついぜ……」

「そんなもんじゃないぞ。我慢せえ」

「くそお……」

工廠長の横やりを食らい、天龍は艦載機山積みの中へ背中を預けて座り込む。

そこで、ふと頭に何かが付いて掛かって工廠長を見てみる。

船渠に行った時、古びているといえタオルはあつたはずなのだが。

くつくつくと不敵な笑みに、してやったりの文字がありありと書かれているのがわかり、指摘

するのをやめた。

昨日で来た通風孔もあり今の工場には風が絶え間なく入り込んでいるため、すぐに乾くだろう。

耐えられないのであれば、上の軍服を貸すぐらいはしよう。

「司令官さん、寒い、寒いわ……」

噂をすれば影が差すというが、まさか頭の中で考えたことまで含まれるとは思わなかった。

そして今回はふざけている様子ではなく本当に震えている様子なので、貸さざるを得ない。

このことわざを考えた人に勝手に文句を浮かべつつ、思った通りに上着を抜いて龍田に

かぶせる。

少々寒いが、脚を濡らしている他の皆よりはましなため我慢だ。

「潮と血の匂いが混じってますけど、我慢してくださいよ」

「……ありがとう」



少しきよとんとした後に返事をして、天龍の隣まで移動して二人で使い始める。

「なんだこれ？」

「司令官さんから借りたの」

「そっか。ありがとな」

「いえいえ。お気になさらず」

手を振りつつそう返すと、天龍はいつそう背後の積んである艦載機の山にもたれかけて目を閉じる。

閉じる。

「さつき起きたばかりなのにまた寝るんですか？」

「起きてても何もすることないし、体動かしても食い物も水もない。寝るしかないだけ」

目を閉じまますう答えられ、「なるほど」としか言い返せない。

てつきり動き回るかと思っていたが、とんだ思い違いだったようだ。

寄り添って寝始める二人から目を離して、皆が出て戻ってきたハッチの外、海を見つめる。

光を反射して揺れる水面は、相変わらず綺麗だ。

ただこの先に人類共通の敵がいるとなれば、怖くも見える。

相対する考えを抱いていると、あの時のヲ級が頭にちらついた。

敵、なのかな……

あの光景を見ると、自分達が彼女達の敵なのではないのかと思えてしまう。

自分や周りに向けた目は、助けを求めるものではなかったのか。

自分達が戦うから、彼女達は自身を守るために戦っているのではないか。

「考えすぎかな……」

すぐに消え入る声で、思考を区切る。

いくら考えても、終わりのない無限ループに迷い込むだけだ。

この長年続く、さながら冷戦のような長い戦いが終わったところで、真実はわからないだろう。

そんなことを思うより、新しく移ったばかりの暁らの訓練メニューでも練る方が有意義だ。

暁たちも話し合っているし、島風も話しかけてくる様子はなく丁度いい。何から鍛えようかなと、輸送船が来るまでそう考えることにした。

## 第32話 旧鎮守府との別れ

暗闇の中で、誰かに肩を叩かれる。

「おい起きろ。来たぞ」

その声に反応して、閉じていた目を開ける。

下げていた頭を上げると、艀装を全て装備した天龍がいた。

いろいろと考えているうちに、いつのまにか寝てしまっていたようだ。

「ありがとうございます。輸送船ですか」

「ああ。そろそろボートが来るぞ」

体に掛けられていた服を片手に立ち、身に付けながら天龍に話しかける。

「暁たちは？」

「先に爺さんと一緒に行った」

「ボートはどの辺りに？」

「今龍田がすぐそこに誘導してる。お、あれだ」

ボタンを留めつつ天龍が指さす方を見てみると、小さいがこちらに向かっている龍田の後ろを

ボートが追ってきている。

歩きながら出来る限り身だしなみを整え、ハッチ近くの扉から出てボートが近づきやすい位置の

海岸まで歩く。

少ししてボートが限界まで近づいてきて、乗っている人が話しかけてくる。

「迎えの者です。 足元に気を付けてお乗りください」

「ありがとうございます」

ちゃんとした港や棧橋が無いために接岸せず、岸から2 mほど離れた場所でゆらゆら揺れる

ボートに乗ろうと海へ足を踏み出す。

この気候の中では極力避けたいとはいえ、濡れて冷たくなるのは仕方ない。

「よいしょっと」

「うおっ」

覚悟を決めて踏み出した足が海水に触れる一歩手前で、横にいた天龍に米俵の如く担がれて宙に

浮く。

そのまま主機を始動させてばしやばしやと水をまき散らしながら進み、ボートへ半ば

投げられる

ようにして乗せられる。

「ありがたいですけど、事前に何か言ってもらえませんか？」

「まあいいだろ別に。ほら、さっさ行かねえと来ちまうかもしねえぞ」

もつともな事を言つてさらつと流し、龍田にハンドサインを出して一緒に先行して行く。

「出します」

ボードのエンジンが回転し始め、少し先を行く二人の速度に合わせて航行し始める。

思いの外険しい、乗っているボートがよく入れたと思うような岩礁を潜り抜けると、ようやく

輸送船が見えてきた。

意外と小柄な船だが、右舷にきちんと艦娘が三人ずつ護衛している。

ある程度近づくと駆動式の橋のように船の一部が開き、自分たちを招く準備をしてくれる。

最終的に水上機母艦のスロープみたいな形となった場所へ入り込み、数日ぶりに揺れる床へ足を

付ける。

戻つてこれたと少し場違いに安堵の息を漏らしていると、船員が近づいてきた。

「お待ちしておりました。こちらへ」

「この二人は？」

「艀装解除後、同じ部屋へご案内させていただきま

「わかりました。天竜さん龍田さん、また後で」

「おう、すぐ行くからな」

2人に手を振り、船員に連れられて船の奥へ入つていく。

居住性の高そうな船内を見渡しながら、カツカツと無言で歩く。

階段を上り2〜3分ほど歩くと、来賓室のプレートがある部屋に着いた。

船員がノックし「失礼します」と言い扉を開くと、暁ら四人がいた。

「こちらの部屋でお待ちください。御用がありましたら、こちらの内戦の0番からお

伝え

ください」

「わかりました」

「準備が整い次第動き始めるので、揺れにご注意ください。では失礼します」

ぱたりと扉が閉じられ、余裕をもって10人は入れる部屋に残された。

島風以外の4人は座れそうなソファ―2つに2人ずつ座り、机に置かれている燃料や

ら弾薬やら

軽食をつまんでいた。

独りぼつんと部屋の角に椅子を置き連装砲ちゃんを抱く島風もいる。

しばしどうしていいかわからず揺れる床の上で微動だにせずにしていると、響が手招いて

くれた。

「そんなところに立つてないで、座って食べたらどうだい？」

「あ、ああ……じゃあ失礼して」

未経験の状況に少し声を上ずらせながら、座るスペースを作ってくれた響の隣に腰を下ろす。

軽食の内容は、一心不乱に工場長が齧りついている枝豆やファストフード店のものは少し違う

フライドポテト、串に刺してあるから揚げと、端的に言い表せばオードブルとなっている。

腹をすかせた体は我慢することなく暴れ始めたので、一番近くに合った枝豆を摘み、

口の中へ

飛ばす。

適度な塩加減が胃をさらに刺激し、飲み込む前に手当たり次第に手に掴んで口へ入れてしまう。

丸二日間封じ込めていた分の飢えが一気に来たようで、周りの全員が一瞬手を止めるほどだ。

「ほら、皆も食べて。 じゃないと私が食べつくすぞ」

手を止めて言うと、なぜか恐る恐ると言った様子で再び手を付け始める。

変わらず食べ続けているのは響と工場長だけだ。

「……島風、食べないのか？」

「いい。 お腹減ってない」

「そ、そうか……」

きつぱりとした言い方にたじろぐが空腹の波に飲まれることにして、子供の様にばくばくと食べ

進めていく。

最初は6人分ほどあつた量が自分だけで約三分の一を消してしまった頃、扉がノックされ開か

れる。

「失礼します。 こちらの部屋でお待ちください。 何か御用の際は内線の0番よりお



申し付け

を。 なお、もう少しで船が動き始めますので揺れにご注意ください。 それでは失礼します」

そう自分たち以外の誰かに言つて船員が出ていくと、入れ替わりで天龍と龍田が入つてくる。

「お、飯あるじゃん。 食つていいのかわ？」

「駄目だったら私は肉なんて握りしめてませんよ」

そう返事をする、天龍と龍田は暁と雷のそれぞれの隣に座り、近くの者から食べ始める。

「腹減つてたんだよなあ、助かるぜ」

「天龍ちゃん、口に入れたまましゃべらないの」

「はいはい。 どうしたお前ら、辛気くせえなあ。 もつと食べよ、な！」

暁と一方的に肩を組み、手がほとんど止まりかけている響以外の三人へ威勢よく声を飛ばした。

いきなり組まれた暁は迷惑そうに顔をしかめ、雷と電は少し遅れて苦笑いをする。

素面のはずなのに酔つ払つた年配のようなノリに、自分の顔も似たような反応を示す。

可哀想にとも思うが、慣れてもらうためにあえて何も言わないで億。

慣れてしまえば、かなり大きかった声に反応もせず寝転がりながら枝豆を齧る工廠長のような事

もできる。

それまでは話しかけられてもないのに手を止めて顔を上げた響のように驚いてしま  
うが、仕方の  
ないことだ。

「天龍ちゃん。 少し静かに」

「おう、悪い」

そう天龍が言うのと同時に床が細かく揺れ始め、見えない力に引つ張られる感覚がし  
た。

船が動き始めたのだ。

「お、動き出したな」

「天龍ちゃん楽しそうね」

「今まで俺がこいつ船と同じだったからな。 こんな滅多にないしわくわくするだろ。

な？」

「しないわ」

「お前らはするよな?」

「「……………あはは」」

部屋に入つて来てから妙に天龍のテンションが高かったのはそのせいらしい。

急に絡まれ乾いた笑いをする響以外の3人を懐かしい目で見ていると、机の上をごろごろと

工廠長が転がってくる。

「船が船に乗るなぞ、奇妙な光景じやのう」

「そんなことはないですよ。大発動艇や甲標的だつて、船に乗った船ですよ」

「それは小さい船じやろう。響はなんか思わんのか?」

話しかけられたことに反応し、響はしっかりと口の中のものを読み込んでから話し始める。

「……………特にないな。元が船とはいえ、今は人間に近いし」

そう答えてから枝豆を左手でつまんで食べようとする。

だが落としてしまい、右手で取ろうとするもそもそも無い手ではもちろん掴めず、床に落ち

転がっていく。

「……………はあ」

「不便だな、それ」

「……かなり」

溜息を吐いた響へ話しかけ、落ちた枝豆を広い近くのごみ箱に捨て、流れで内線の受話器を

取って0を押す。

ほんの2回ほどのコールで船員が対応し始めた。

『どうかしましたか?』

「艦娘が右手を欠損してしまして。バケツ一杯の水と燃料鋼材、あと造血剤をお願いできますか」

『艦種は』

「駆逐艦です」

『わかりました。すぐに手配しますので、数分お待ちください』  
受話器を置き、響の隣に戻って残り少ない食事を再開する。

「悪いね司令官。色々してもらって」

「発端は私だからな。気にしないでくれ」

「こいつはすげえから任せとけよ。自分で勝手に治すより早く治るぜ」

「たまの軽い怪我くらい自分で治してください」

「怪我したら見せろつったのは誰だよ……」

「これからは自分でお願いします」

天龍にそういったのは、治し方が効率的ではあったが資材的に非効率だったからだ。活発な性格故に怪我をするのはわかるが、日常的な怪我にまで高速修復材を使って傷を再生

しようとするのは、日ごろは寛容な教官も看過できなかつた。

この方が早いとか知ったことではない。

燃料も鋼材も高速修復材も、数多く蓄えているとはいえ無数にあるわけではない。

それに本来、これら資材に関連するものは国の所有物となつている。

大した理由もなく私的に使えば、提督側も艦娘側も減給や謹慎の対象にもなるため、何とかして

避けなければならなかつた。

「そういうえば暁の足も見ていたね。 医術に長けてはいるようだ」

「医術は大げさだ。 私にできるのは応急処置の範囲内だけだ」

「それでも治るんだから、やっぱり司令官さんはすごいわよね」

「お褒めにあずかり光栄です、龍田さん」

演技として胸に手を当てつつ返すと、天龍がツボにはまったのか軽く嘖き出した。つられたかのように雷も小さく笑ったが、はっとした顔をして口元を隠す。

体を強張らせて自分を見るが、横目で見ただけで気付いていないふりをしておく。

単冠湾にいた時に何があったかは何となく想像でき怖がる理由もわかるが、今はもう

#### 横須賀所属

の艦娘で、笑ったからと言って何かをするようなことはない。

これを言葉ではなく心で直接感じてもらうための、敢えてのふりだ。

「いきなりどうしたんですか天龍さん」

「い、いや……なんか堂に入っているのがな……!」

腹を抱えて、小さくくつくつと声を漏らす。

「おかしなツボじやのう」

「天龍ちゃんは変わり者なのよ。そっとしてあげて」

龍田がそう工廠長に言うのと、雷が少しシヨックを受けたような顔になってしまう。

まあまあと電が慰めるのを見て、今度は自分が「ふふつ……」と変わり者になった。

「もう、司令官さんもどうしたの?」

「いえ。私も変わり者なんだな、と」

「何それ、あはは!」

天龍から始まった笑いが伝染し、仏頂面だった暁や、傍観者の電や表情の堅い響も、程度の差は

あれ笑い出し、部屋の雰囲気<sup>が</sup>明るくなる。

そんな中、ちらりと無反応の島風の姿が見える。

気が弱いだけなら入りたそうなそぶりが少しは見えるのだが、島風のそれは拒否しているように

にも見える。

何があつて島風がこうなったのか、皆目見当もつかない。

一人笑いを小さくしながら見つめていると、気付いたのか島風は顔を上げた。

そして何かを話そうと小さな口が開きかけ——艦内に警報<sup>が</sup>鳴り始めた。

## 第33話 輸送船護衛艦隊

警報が鳴り始め、艦内が騒がしくなっていく。

一方で、よそ者の自分たちがいる部屋で騒がしくなっているのはごくわずかだ。

「静かにせえ、寝れんじやろが！」

「いえ、私に言われましても……」

「あわわ、敵さんなのです!？」

「大丈夫よ電、私がいるじゃない！」

「うう……あう……」

「長女が泣かないでくれ。司令官たちに示しがつかないだろう」

落ち着きはともかく、怒りと驚きと恐怖が入り混じる、少し收拾のつきそうにない部屋になった。

しまった。

警報がけたたましく鳴り動揺するのはわかるが、現れたというだけでまだ襲撃はされ  
ていない。

落ち着くように言おうと口を開くが、突然の揺れに閉じざるを得なくなった。



一発、腹に砲弾か何かを受けたようだ。

「奇襲か」

「そうね」

天龍姉妹がそう言っている間に、今度は逆、それも下の方から揺れが伝わってきた。揺れから推測するに、両舷から挟撃されているのだろう。

続けて何度か揺れ、船体が少し傾いた気がした。

ここまで攻撃を許すということは、かなり大きな隙を突かれたか、潜水艦の処理に手間取っているかのどちらか。

挟撃されていることもあり、立て直すには時間がかかりそうだ。

「なあ、俺らが行った方がいいんじゃないやねえの？ 襲われまくってんぞ」

「これだけ大きければ格好の的ですからね。……少し掛け合ってみます」

再び内線の受話器を手に取り、0を押して出るのを待つ。

流石にすぐには出られないようで、5回目のコールの途中でようやく声が聞こえてきた。

『はい、どのようなご用件でしょうか』

声の主は落ち着いているようだが、その向こう側からは慌ただしい音が漏れている。

「現在の状況が芳しくないかと思ひまして。こちらから軽巡洋艦二隻を援護に向かわせようかと」

思うのですが」

『……折り返し連絡いたしますので少しお待ちください』

そう口早に言われ、返事をする間もなく通話を切られた。

自分が受話器を置くのを見て、天龍が立ち上がり近寄ってきた。

「で？」

「少し待て、と。折り返しの電話が来ますよ」

そう答えると、天龍は非常に面倒くさそうな顔をして壁に背を預けた。

戦闘狂っぽいところがあるため、戦いたいという気持ちが心の中で渦巻いているのだろう。

以前にも必要ないのにもかかわらず勝手に追撃して勝手に大破して帰ってきたことがあった。

それでも笑顔で『全部片付けてきたぜ！』とガッツポーズを決められたときは苦笑いで迎えた

ものだ。

非常時にも関わらずのんびりと昔を思い出していると、言葉通りすぐに電話が鳴り始

めた。

「はい」

『艦長の米沢です。そちらの艦娘に協力していただけるとお聞きしましたが、よろしいの』

ですか?』

やけに渋い、とても貫禄のある声が聞こえてきた。

こうしたかなり年上に敬語を使われるのは今でも違和感を覚えるが、輸送艦の船長といえど提督

の方が見習いであつても立場が上であるため気にすることではない。

それでももやもやはするのだが、そんな感情を隅に置き頭を切り替えて話を始める。

「ええ。それで、敵艦隊の構成は?」

『現在把握しているのは、右舷側に潜水艦1もしくは2、重巡1、左舷側に戦艦1、軽空母2

です。どちらもこのままでは……』

「空母ですか……少し失礼します。天龍さん、持ってきた装備は?」

「15. 2が1基、三連装酸素魚雷1基、爆雷8個。龍田も一緒だ」

確認のために聞いてみるが、やはり空母相手には少々分が悪い装備だ。

この二人だけであればこれらでも十分だが、船を護衛するとなると追加でいくつか必要になる。

「こちらの装備が不足しています。機銃をいくつか貸し与えていただければ助かるのですが」

『構いません、あるものであれば好きなように使ってください。他には何か?』

「大丈夫です。ではすぐに向かわせます」

『船尾にハッチがあります。よろしくお願いします』

ガチャツ、と焦るように通話が終了した。

つられるように自分も受話器を下ろしつつ、二人に指示を出す。

「右舷に潜水艦1・2重巡1、左舷に戦艦1軽空母2。右は龍田、左は天龍があたれ。

船尾

ハッチにて対空装備を受け取り装備したのち出撃。護衛艦隊の指揮下に入れ」

「了解」

早口で指示すると、即答した後すぐに部屋を出て行った。

これで何とかなるかと思つたが、後ろから意外な声が聞こえてくる。

「私たちも行った方がいいんじゃないかい?」

振り返ってみると、響が立ち上がって今にも行こうとしているところだった。

「駄目だ。みんな一気にいくと命令が通らない。それに服も手もない状態で行かせることはできない」

片手で抑えつつ言うと、響は視線を着ている浴衣に落とし、続いて肩も落とした。艦娘の制服は特殊なもので、ただの衣類とは非常に異なる。

どれだけ高い威力の砲弾を喰らおうと、一度だけダメージをほぼ完全に防ぐ防護服のようなものだ。

強大な攻撃を受けた後は服としての機能すら果たさなくなるが、不意打ちを防ぐために、それが

無ければ安易に戦わせるわけにはいかない。

「そうか……」と呟き座る響に続くように自分も腰を掛ける。

「ごんごんと衝撃が伝わるたびにびくびくと暁の肩が揺れ、耐えきれなくなつたように口が開かれた。

開かれた。

「ねえ、司令官……沈んだりしないの……？」

「昔じゃないんだ。そう簡単に沈みはしないよ」

「ということとは、昔は簡単に沈んだね？」

横から割り込むように響が問いかけてきた。

暁とは対照的に、おびえた様子は一切見えない。

黙り込んでしまうよりはいいかと思ひ、少しだけ話してみることにする。

「そう。特に2010年代は既存の船をそのまま使ってたからな。今でこそ新世代の強化

セラミックやら対深海棲艦用の衝撃吸収材なんかをふんだんに使っているが、昔の船は奴らに

とっては紙同然だよ」

「今でもそうじゃないのかい？ 現代兵器で対抗できないから私たちがいる訳だろう？」

「今は直接当たらなければ損傷の少ない。当たっても本物の砲よりごく小さなものだし、魚雷の

爆発も威力はあっても大きさはそこまでじゃない。……動力部に当たってしまったら別

だけどな。一発でアウトだ」

「……脆いんだね」

「人も物もそんなもんだ。それに、その脆さを守るために響たちがいる」

「……そうだね」

なんだか予想しない方へ話が転がり、先程とは違った暗めの空気になってしまった。原因である自分が何とかしなければとも思うが、まだ会ってあまり時間の経っていないみんなと

どう話せばいいかわからない。

真顔で考え込んでも何も思い付かず、段々と居心地が悪くなる。

そのとき、扉が2回ノックされ、少し肩の荷が下りた。

「はい」

『資材等をお持ちしました』

席を立ち扉を開けると、まだ若い青年が立っていた。

若いといっても、どう見ても18の自分より上であることに間違いはなさそうだが。

青年が差し出してきた2つのバケツの中には、燃料と鋼材、それと水が別になって入っていた。

量も十分だと確認し2つ共を受けとると、海軍に入ったばかりなのか少し堅い敬礼をし、「失礼

します」と言って足早に青年は駆けていった。

艦娘を除くとこの艦で自分が一番若いだろうなと思いつつ、足で扉を閉め再び席に着く。

水の入ったバケツに燃料と鋼材をある程度混ぜ、響の右側に置いて話しかける。

「30分かそこらで治ると思う。足りなくなったら自分で足してくれ」

「悪いね。 Спасибо」

ついでに足元の方に資材を入れたバケツを置いて、なんとなく響が右手を浸けるのを眺める。

「……………」

ふと、延長線上にいる島風と目が合った。

今まで向けられたことの無い視線に、不思議な感覚が全身を包む。

何をするでもない、興味の無い、関心の無い目をしている。

本当にたまたま見ている方向に自分がいるような、その自分すら風景の一部であるかのような

変な感じだ。

そして、なんの前触れもなくそっぽを向き、やっと自分も目を離れた。

見れば見るほど不思議な娘だ、と今後のことを考えると頭を抱えてしまいそうになっていると、



連装砲ちゃんが足元へやってきていた。

ウインウイン。

……………。

困惑しながら抱き抱えてひぎへ置くと、腕のようなもので体に抱きついてくる。嬉しそうに砲身を振っているため、しばらく置いておこう。

それにしても……

無機質な体を撫でつつ、別のことへ思考を向ける。

天龍たちは大丈夫だろうか。

何度も船団護衛をさせてはいるが、他の艦娘たちと即座に密な連携がとれるだろうか。

他の鎮守府の軽巡に比べればはるかに練度は高いが、戦艦相手は流石に厳しい。撃退まではいってほしい所だが、はたして――

「オラオラ！ そっち行くんじゃないやねえ！」

缶に機装した機銃で、輸送船に近付こうとした爆撃機を二機まとめて墜とす。

『天龍さん、だっけ？ 戦艦の砲撃が激しすぎて対空どころじゃないんだけど！』

インカムから護衛艦隊旗艦の川内の泣きが聞こえてきた。

後部ハッチで機銃を受け取りながら状況報告を聞いてわかったのは、護衛艦隊の練度が軒並み

低いことだった。

本来なら司令官の指示通りに具申して指揮下に置いてもらおうところだが、着任したてで旗艦の

経験がなくどうすればいいのかわからないらしい。

一応形として何をすればいいのか聞いてはみたが、「何がしたいか」と馬鹿げた言葉を返して

きたので、一時的に指揮を預かることになった。

ハッチに向かっていている間に戦況が一気に変わったのか、右舷側が潜水艦相手に壊滅寸前になって

いた。

龍田は対潜が得意なため心配はなく、そちらが片付くまで耐えようと思っていたのだが。

練度低すぎてそれどころじゃないぞクソが！

護衛艦隊は皆、川内と同じレベルで練度が軒並み低かった。

大方、新人の実地訓練といったところか。

「俺が全部押さえる！ お前ら空母沈むまで鳥墜としとけ！ 一機も当てさせんなよ！」

『えっ、そんな無恥——』

返事を待たずに缶の出力をあげ、すまし顔で砲撃を続ける戦艦へ突っ込んでいく。

軽巡駆逐だらけで練度の低い護衛艦隊に対空と回避の両立は難しいだろうし、空母の艦載機切れ

を待っていたのではこちらの誰かが沈みかねない。

一番脅威なのは戦艦だが、対抗できるのは自分しかない。

正直一人で相手をするのは文字通りに骨が折れそうだが、龍田が来るまで持ちこたえて見せる

自信はある。

まずは戦艦の気を引くところからだ。

機銃で顔を狙い、視界を奪いつつ突進する。

真正面から突っ込んでいく自分に対し副砲で撃ってくるが、狙いは甘い。

一切蛇行することなく10mまで近づき、主機の出力を一気に全開にし——跳ぶ。

同時に機銃を止め、空中で艀装である刀を振りかぶる。

海水の動きか気配かで空中にいることがばれてしまい身構えられてしまった。

だが、撃つには少し遅い。

「ツ——ラアツ！」

刀をちからにものを言わせて振り回し、ガギインと鈍い音をたて、右手に持っているタワ—

シールドに砲が付いたような主砲に当たる。

大してダメージがあるわけでもなく、落下の勢いで膝まで海に沈んだ自分にもう左手の砲が向けられた。

しかしそれを認知する前に海中から主機を吹かせながら足払いをかけ、重い主砲を撃たせること

なく海面へ転がす。

仕上げて倒れた体を踏み台にして、軽空母がいる方向へクラウチングスタート。

これで、戦艦はこちらに注意を向けざるを得ないだろう。

缶の両脇についている主砲を、進路上の軽空母の艦載機を発着艦させている口へ向けて撃つ。

すでに体の両側につけている副砲を向けていたが、見事に初撃が命中して体制が崩れ、撃つて

くる雰囲気が消えた。

当たるとは思っていなかったが、この好機を逃さず全速力で突っ込み、頭と胴体を二分する。

まずは一隻。

『天龍さん後ろ！』

「よそ見すんな！」

まだなよなよしい声をしている川内を叱咤すると同時に回避行動をとる。

一度海中に沈めたとはいえ殺したわけではなく、後ろから浮上した戦艦が狙ってくるのは予想

済みだ。

そして予想通り、先までいた場所へ狂いなく大型の砲弾が降り、水しぶきを浴びせられた。

横目で見るともう一隻の軽空母は自分へ砲を向けており、近くを飛んでいる艦載機は全て自分を

狙っていた。

——上等！

こんなものハンデでもなんでもない。

むしろこれが狙いであり、1人でこんなに相手できて嬉しい限りだ。

戦艦の砲を常に気にかけてながら、周りに群がってきた敵機を機銃で墜としていく。

フィギュアスケートのステップのように不規則な動きで翻弄しながら海の藻屑にしていくが、

戦艦の第二射が近くに着弾し、少々不安定だった足を取られた。

「うおっ……っ！」

回避行動はとりつつ体勢を建て直す、その頃には爆撃機は直上、雷撃はかなりの密度で5射線

は向かってきていた。

「ああくそー！」

急降下爆撃をすれすれで後ろにかわしつつ、設定震度を水面ギリギリにして爆雷を3個ほど魚雷

に向けて投げる。

魚雷のすぐ手前に落ちた爆雷はすぐに起爆し、真ん中の3本を誘爆させた。

その隙間をすぐに抜きたいのは山々ではあるが、戦艦を忘れるわけにはいかない。

行くと見せかけてフェイントをかけてやると、戦艦は正直に偏差射撃をしてくれる。

それをすっかり確認したあと、水柱に突っ込み海水をばっしやり浴びながら、今度こ

そ魚雷の網

を抜ける。

戦闘機がちまちま12・7mmだか20mmだかの機関砲の雨を降らせてくるが、目に入らない

限りどうということはない。

数で攻める気になったのか、戦艦の砲撃間隔が短くなり、今まで輸送船を襲っていた残りの

艦載機共もちちらに向かい始めた。

こうなると少し厳しい。

せめてあと1人はこちらに欲しいところだ。

『天龍ちゃん、そっちはどう?』

緊張の糸が切れそうになる緩い声が聞こえてきた。

強張った顎を無理矢理動かし、唯一無二の相棒に話しかける。

「ふっ……砲弾と、爆弾と、魚雷に囲まれてるが、どうした?」

『だいぶ息が上がってるじゃない。めずらしいこともあるのね』

「戦艦と、空母相手に1人で、してみろよ!」

『じゃあ今から天龍ちゃんと2人でしようかしら。待っててね』

勝手にかけて勝手に切った龍田の言葉に、少しだけ顔がほぐれた。

1人するのも乙なものだが、やっぱり龍田がいないとしつくりこない。

2人だけで暴れるなんて、何年ぶりだろうか。

「おい川内！」

『な、なんですか……？』

「もうちよいしたら、怖え姉ちゃんが、こっち来るからよ！ そしたら、お前ら何もせず

見とけ！」

『でも、その人も軽巡じゃ……』

「いいから、黙って——」

言葉の途中で、視界の端にいた戦艦の頭から黒煙が上がった。

龍田が来た。

「俺たちの技盗んどけ！　いくぞ龍田！」

『は〜い』

戦艦を気にする必要がなくなり、一切の躊躇なく軽空母に突進していく。

驚いたように艦載機が編隊を崩しながらも爆弾や魚雷を手当たり次第に落としてく

るが、そんな

状態で放ったものが当たるわけがない。



体当たりをしてくる2、3機を主砲と機銃で叩き落とし、渾身の居合い切りを喰らわせる。

「おっ——しゃあ！」

格納庫ごと頭を横に真つ二つにし、勢いそのまま戦艦の背後へ回り込むように航路を取る。

撃破時に爆風を受けたが、装甲化のお陰で目が乾く以外に支障はない。

回り込みつつ、この戦闘で初めての魚雷を放つ。

三射線が広がることなく太い一射線となり、龍田が足止めしている戦艦へ向かう。背後から迫る魚雷に気づく様子もなく、龍田に翻弄されるばかりだ。

近づいて、近づいて。

「龍田！」

叫ぶと同時に戦艦へ真つ直ぐ両舷一杯で突っ込む。

龍田は自分でいう刀にあたる長刀を強く戦艦の足へ叩きつけて動きを止めて離れた。

何かに気がついたらしい戦艦は、周りを見て自分の放った魚雷に気づくが、回避が間に合う距離

ではない。

ドゴン、と空気が揺れ、3本分の巨大な水柱が現れた。

幾分かダメージは入っただろうが、戦艦を沈めるにはまだ足りない。刀を右腰に当て、重心を低くして構える。

水柱が消えると、戦艦は左半身がほとんど吹き飛んでいた。

『やあー！』

離れていた龍田が再び距離を詰めてわざとらしく声を出し、右腕と残りの主砲を盾に使わせた。

どうやら、とどめはゆずってくれるらしい。

激しく水しぶきを立てながら近づくと自分に、鋭い眼光を向けてくる。

恨みや憎しみがこもったその目を何回見てきただろうか。

その目をそらさず見つめる。

自分もこいつも、元は船の魂だ。

成った形が違えば仲間だったかもしれない。

だから、最大の敬意を込めて殺す。

じゃあな——

一撃で、痛みを与えないよう首をはねた。

海に落ちる目は、いつもより輝き、遠くを見ていた。

「おつかれさまでした」

部屋に戻ってきた天龍と龍田は、どこも怪我をしていないようだった。

「あー、かつたりいったらありやしねえ」

「戦艦相手によく無事でしたね」

「空母のせいで危なかったよ。制空権取れてねえってきついわ」

「でもかつこよかつたわよ。私、ちゃくと見てたから」

早速自分のとなりに腰掛け、頭を肩に乗せながら呟いた。

髪が海水でべとべとに濡れているが、今ぐらいいはしたいようにさせてあげよう。

「見てたってお前、潜水艦はどうしたんだよ」

「そんなの1分で終わったわよ。弱くて拍子抜けしちゃったわ」

「なら早く来いよ。あれでもギリギリだったんだぞ」

「天龍ちゃんが詰みかけるなんて珍しかったから……つい」

「この……司令官、なんか言ってるよ」

天龍があきれたように自分へ話を振ってくる。

いつも同じようなパターンで天龍がしてやられるため、姉としての自覚を持つてと言

たいところ

だが、ぐつと堪えるしかない。

工廠長と真正面から言い合うところをみてもわかる通り、龍田とは口で勝てたことは滅多に

ない。

少なくとも、日常会話では全敗している。

「天龍さんが詰む……見てみたかったかもしれないね」

「おい！」

だからいつも龍田に乗っかり天龍に恨みを買われてしまうのだ。

いつもの二人との流れに、暁たちがぼかんと見つめている。

「……龍田さんとはあまり口喧嘩しない方がいい」

「そうね」

自分の忠告の後、見ていた四つの頭が同時に二回頷く。

どこか真剣さが混じっていたように見えたのは、たぶん水も滴る怖い女が隣にいたからだろう。

本人には自白剤を飲まされても絶対に言えないが。

肩にかかる重みがずれ、膝の上へ乾きかけの髪が乗ってきた。

急いで膝の上から退けようとする連装砲ちゃんを抱き抱え、自分を見ることなく眩く。

「ちよつと貸してくださいね。眠くなっちゃった……」

そう言うところちらが何も言う暇もなくすぐに目を伏せてしまった。

こうしてまじまじと見る機会が無かったからか、よく見ると龍田の目元には薄く隈ができて

いる。

「まったく、自分勝手だよなあ……俺も寝るわ」

「はい」

つられるように天龍もそういい、そのまま壁に頭をもたれさせて寝始める。

もしかしてと思つて見てみると、天龍も龍田と同程度の不自然な影ができていた。

嬉しさを感じる反面、何をやっているんだかとも思つてしまう。

守るべきものは自分ではなく国民なのに、と善意を踏みにじるように感じるのは自分がひねくれ

ているからか。

「……何かあつたら起こしてくれ」

隣の響にそういい、二人の後を追うように自分も目を閉じる。

今は何も考えずに寝ていたい、そんな気分だったからだ。

## 第34話 一難去つてまた一難

「ガー……ガー……」

天龍のいびき以外、静かな部屋。

そんな中で、第六駆逐隊次女の自分は暇を持て余している。

あの人の元から離れられたのは幸いだ、やる事が一つもないというのはこれこれです。辛い。

姉妹達も何も話さず、自分をちらちら見てくるばかりだ。

性格上自分が引つ張ってきたというのはあるが、頼るなら長女だろう。

その長女が一番不安そうだから仕方の無いことかもしれないが。

………

ちゃぽちゃぽ、と浸けた右手で中の水を混ぜる。

艦娘というのには不思議なもので、鋼材と燃料を混ぜて薄めて皮膚から摂取すれば、ど

んな怪我

でも跡形もなく直ってしまう。

人間なら義手を着けてしまうような自分の手も、親指は完全に、他の指も根本まで再

生して

いる。

少しふらふらしてきたような気がした。

司令官が机に置いた増血剤を手に取り、半分くらい残っているコップの水と一緒に飲む。

微かに血の味がするような錠剤は、食道を転がる感触を残し胃で霧散した。

「……………」

ああ、本当に暇だ……

バケツを引っくり返してしまいう気がして寝れないし、話すにしても話題がないし、もうどう

すればいいかわからない。

船……船、か……

物思いにでもふけるとしよう。

『響』は一体何なのか。

艦娘は船だった頃の記憶があるらしいが、まだ自分は朧気としたものしかない。

覚えているのは『響』と『Верный』という名前、暁型姉妹であること、終戦後にソビエト連邦

に渡ったこと。

それと、皆消えたこと。

一緒に海を走った船はたくさんいた気がするが、終戦後は何隻だったか。

これ以上思い出そうとすると、頭にもやががかかってその先が一切見えなくなってしまう。

夢を忘れたような感覚に似ている。

自分の事を知らないというのはとても歯痒いものだ。

文献には載っているらしいが真面目に読む暇が今まで無かった。

横須賀では知れたりするのだろうか。

「あなた」

考えが一区切りついたのを見計らったかのように、今まで口を開かなかった島風が自分を  
分を見て

いた。

「……私？」

一つ小さく頷き、続く言葉を口にする。

「その男の事、どう思ってるの？」

「……悪い人、ではないと思ってる」



「……そう」

それだけか、と突っ込みたくなるような短さで会話が終わってしまった。もう話すことはないというのが、俯いた後の全身から伝わってくる。

『馬鹿』

陰っていることもあつて確実にそうだと断言できないが、わずかに動いた口はそういつている

ように思えた。

またあの男と同じように騙されているとでも言いたいのだろうか。

その時はどうする。

自分に対して問いかけ、返事を待つ。

答えはすぐに返ってきた。

殺して、自分も死ぬ。

この人を信じられなかったら、もう何も望みはない。

いくら人じゃないからといっても、次が限界だ。

これ以上、今まで『響』に、『暁』『雷』『電』に関わった全ての人達を冒流されるのは

絶対

嫌だ。

それに、こんな人まで裏の顔を持つていたら、もう誰も信じられない世界にいるのと同義である

気がする。

次が最後。

「……ひ、響、どうしたの？」

暁がとても心配そうな声で話しかけてきた。

いつのまにか下を向いていた顔を上げると、こちらがそっくり言葉を返したくなるような怯えた

表情をしている。

「何だい？」

「……すごく、怖い顔、してたから……大丈夫か、な……って……っ」

ただ理由を聞いただけなのに、なぜか涙をぼろぼろこぼし始めてしまった。

自分の顔はそんなに恐いのだろうか。

「……大丈夫さ。それに、暁には関係ないことだよ」

「……えぐっ」

これで何回目になるか振り返り、優に2桁はいつているだろうかと自覚する。

表情筋が固いのか元から薄気味悪いのかはわからないが、顔を見た人からは大体『怖い

顔』と

言われる。

この体になって半年と経っていないが、顔だけで暁や電を泣かせたのは両手の指では足りない。

雷のような性格が羨ましい限りだ。

「……はあ」

泣かせても取り繕えない自分の不甲斐なさど苛立ちが混ざり、胸の中がごちゃごちゃとしてくる。

優しくあげたいのに、なかなか行動に移せない。

やっぱり、姉には向いてないなあ……

あの風呂場では立派なんだと言われたが、どうも自分ではそうは思えない。

今のように四人の中で一人だけ外れていると感じたのは泣かせた数以上だ。

雷が暁をあやしなから送ってくる視線は、腹を砲弾で吹き飛ばされるよりも心が痛む。

現実逃避をしたくはなるが、もう一度考えに沈むのも雰囲氣的にし辛い。

ただじつとしておくことしかできず、天龍のいびきを聞き続けるしかなかった。

うるさく、サイレンが鳴っている。

目を開けようとしても、ただただ闇。

誰かに抱かれて聞こえるのは波と風。

変化が訪れるまで数分かった。

「はあはあ……大丈夫か、おい！」

声に反応して、自分を抱いたまま誰かは振り向いた。

「あ、あぁ……」

聞いたことある声だ。

これは……夢？

「お前……その子、取り返したのか。 はは……よく、それでできたな？」

「……あ、あぁ、あぁ。 まあ、いろいろ、運が良かった」

「そりや良かった。 この子がいいや、プロジェクトはまだ進む」

やけに柔らかい手が自分の頭を揺らしてくる。

夢の中のはずなのに、やけに懐かしい。

「じゃいこう。 この子に栄養与えなきゃな」

「あぁ」

鉄屑を踏む音と共に自分達も動き出す。

しかし、数歩ほど進むと自分を抱いている誰かは足を止めた。  
振り返り、耳に小さく声が届く。

「ごめんな……な——でき——」

自然に目覚めたということは、取り立てて急ぐことは何もなかったらしい。

ゆっくり目を開けてみると、寝る前とほとんど変わらない光景があった。

腕を伸ばして寝ている間に固まった筋肉をほぐしていると、目の前に水の入ったコップが差し  
出された。

「飲むかい？」

隣の響が右手にコップを持って自分を見ている。

流れで「ありがとう」と受け取った後に気付き、水を飲み干してから話しかける。

「手、治ったみたいだな」

「数時間くらい前にね。不思議なものだよ」

ひらひらと見せてくれる手は、怪我など一度もしたことがないような綺麗な肌を取り戻し、平然

と手首にくっ付いている。

置いてあつた造血剤も自分で飲んだようでも錠か減つていた。

「どのくらい寝てたかな」

「5時間ぐらいじゃないかな。ちなみに今は8時だよ」

響の言葉通り、部屋の壁に掛けてあるデジタル時計は20:00を表示している。

単冠湾から横須賀までは日本を半分ほど縦に移動することになり、大方明日の正午までには着くだろう。

だろう。

……そうか、帰るのか。

今になって、完全に別れを告げたはずの場所に戻ることを自覚した。

新たな鎮守府に着任した後では滅多と離れることがない。

横須賀から出ていくときには今生の別れのように護衛の人以外に言葉を交わしたこ

とが鮮明に

蘇ってくる。

無性に恥ずかしくなってきたり心臓が少し早く動き始めた。

「……今日は泊まりだな」

「……そうか」

話すことも無くなり、どちらとも黙り込んでしまう。

何か話すことはないかと頭の中を探すが、見つかるものはどれも今話すことではないものばかり。

訳の分からない緊張がさらに後押しして胸の鼓動は間隔を狭めていく。

面白味も何も何もないが、当たり障りのないことを言おうと思つたのは沈黙が30秒ほど続いた後だった。

「響は寝なかつたのか？」

「バケツをひっくり返しそうだったし、それに……」

白い髪が部屋の入り口付近を向くのでそれにならうと、がさつな女性がいびきをかきながら床で

寝ていた。

言うことを聞かない血液ポンプのせいで気付かなかつたが、よくよく聞けばかなりうるさい。

一度気にしてしまえば相当眠くならないと夢には逃がしてもらえない大きさだ。

そうだ、忘れてた……

天龍は元からいびきをかきやすい体質だった。

龍田から苦情が入り適した枕を使わせるとすぐになくなったが、今はもちろん枕があるわけがない。

やれやれと思い、龍田の頭をゆつくりと除け、軍服を脱ぎながら天龍に近づく。だらけて大の字になった天龍の体を横向きにして、軽く畳んで頭の下に入れる。

すると先ほどまでのうるさいいびきは、耳がさみしくなるほどに消えた。

いびきをかくメカニズムさえ知って対処すればこんなものだ。

「……何をしたんだい？」

不思議そうに聞いてくるので、少しうれしく思いながら答えることにする。

人に説明するのが好きというのもあるが、気軽に聞いてくれたのが大きい。

「……天龍さんは、体が疲れて寝ているときに緩んだ舌が喉に落ち込む舌根沈下が起きている。」

いびきが起きる原因は様々だけど、その時に空気を無理矢理吸ったり吐いたりしようとして、

喉の粘膜がぶるぶる震えて音が出るからだ」

「ほう……」

興味津々といった感じで聞き入ってくれる。



「健気な生徒みたいに思えて、教え甲斐を感じながら話を続ける。

「で、この肉体的疲労が原因のいびきは寝る姿勢を変えればすぐに解決する。低い枕を使えば

寝返りが打ちやすくなって横向きに寝れるようになるし、舌根沈下も解消されるって寸法だ。

ぶつちやけていえば首の下に物を入れて顎を上げさせるだけでもいい」

「人工呼吸と同じ……なのかい？」

「ああ。なんだ、知ってたのか」

「まあ……詳しいんだね、司令官は……」

左手で髪をいじりながら小さめの声で響は答えた。

龍田と同じ行動で少し背筋が凍るが、どうやら感情は違うらしい。

まだ響の事を知らないため詳しくはわからないが、苛立つてはいないようだ。

じつと顔を見つめて表情から読み取ろうとするが、表情が今は無に等しく判断ができない。

「……少し、トイレに」

本心からとは思えなかったが、そう言つて響は部屋に備え付けのトイレに行こうと立ち上がる。

「あつ……!」

小さく声を上げ、左手で股を、右腕で胸を素早く隠した。

初めて響のこんな俊敏な動きを見た気がする。

勝手な思い込みだが、響はそこまで動じるようには思えなかつたため、少し意外に感じた。

その後わたわたしして帯を拾おうともしないので、代わりに自分が拾おうと席を立つ。距離を詰めようとするのでと段々と離れていき、不思議に思いつつも拾い上げて話しかける。

「……結ぼうか?」

「いや、自分で……」

そう言葉ではいつてくるものの、左手を離すと股間を隠している浴衣が重力に引かれてめくれ

そうになり、再び同じ位置に手を置いてしまう。

「……お願ひするよ」

「……ああ」

帯の長さを調節し、下着を見ないように気を付けようと思いつつながら近づく。

しかしというべきか、距離を詰めれば詰めるほどに響の顔は自分からそれていき、焦

りが浮かび

始めていく。

「下着を、付けてないんだ。 だから……あまり、見ないでほしい……」

どうしたと聞く前に、自分の思考でも読んだのかこの状況に対する答えを話してくれ  
た。

その言葉に逆らうつもりはなかったが、驚いてはだけて見える素肌に目を向けてし  
まった。

いくら腕で隠しているとはいえ響の細腕ではブラジャーは隠しきれないはずだが、確  
かにそれ

らしきものは一片も見えない。

同じく丸見えの右腰も衣服の類は一切なく、腰骨が薄く見えている。

どうりでここまで慌てているわけだ。

「……その、下着はどうしたんだ？」

「あそこにいる時に、もう着れなくなったから……捨ててきたんだ」

「……そうか」

机の上に帯を置いて、邪魔にならない外へ出ようと扉へ向かう。

「ちよつと外の空気を吸ってくる」

「……悪いね」

「気にしないでくれ。外に出たいのは本当だ」

会話もそこそこにして、少し重い扉を開けて廊下へ出る。

後ろ手に閉め、外に出られる所はないか探してみるが、ここから見える範囲にはないようだ。

道順に覚えつつ適当にぶらついてみると、そんなに時間もかからず外通路へ出られる扉を

見つけた。

なんとなく回りをきよろきよろ見て誰もいないことを確認して、部屋よりも重く頑丈な扉を外側

へ開ける。

「うっ、げほっげほっ……」

予想以上に急激な風が吹いていて一瞬肺が圧迫されて咳き込んでしまう。少ししてなんとか息を整え、ようやく落ち着いて外を見ることができた。

つい先日までは寒くてこんな所にいられたものではないが、南下したからか慣れたのか今は心地

よく感じる。

手すりというよりも壁に近いような物に手をかけ、辺りをぐるっと見渡す。

右舷側に日本があるらしく、かなり遠いがかろうじて人々の明かりが目につく。

船の少し後方にぼっかり穴が開いたように闇があり、あれが本州と北海道の間だろう。

明日の早朝までには東京湾に戻れそうだ。

「ふう……やっぱ海はいいな」

昨日なんかは野山を文字通り駆けずり回ったものだが、やはり自分は海が一番楽だ。

一日たりとも海から離れたことがないため当然といえば当然かもしれないが。

……海か……

昔、深海棲艦が出現する前は、日本は海洋資源が豊富だったらしい。

魚を食べるなんてことは日常で、寿司も一皿100円の時があったようだ。

しかし、深海棲艦が出てきてからは、漁船が海をうろつくわけにはいかないわけで、あらゆる魚

は贅沢品になってしまい天然物は養殖の20倍以上のプレミアものになることも今ではある。

特にクジラは、一頭が数十億から大きいものになれば兆になることもあり、自分の度肝を抜か

された。

今では水族館以外で海の魚を見ることは、命を捨てる覚悟があるなら別だが、艦娘に護衛され

ながら沖に出るか同様に釣り以外の方法はない。

それも燃料かかさんだり貿易船の護衛の方に回されるためそう頻繁にできることはない。

その点、自分は鎮守府の防衛システムを背中にのんびり釣りを楽しめたため、かなり恵まれて

いるといつていいだろう。

そういえばそろそろか……

確か数週間後に横須賀鎮守府主催で、付近の住民を集めて釣り大会をするはずだ。

艦娘の護衛付きで安心してできるといふことで、例年自分と教官を抜いた定員の20名は一瞬で

埋まってしまう。

海が変わるまで釣り名人だったというおじいさんがいたが、今回も戦えると思うと嬉しくなる。

前回は最後の最後で大物を引き当てられて逆転負けしたが、次は勝ってみせたい。

——と考えていたその時。

「こちら貴様ア！ 何してんだアツ!?」

「ひゃい!?!」

何とも恐ろしい声でどなりつけられ、情けない声をあげつつ全身をすくまされた。

足が出ないように下が壁になっている手すりに密着していたこともあり、急に曲がった足を止め

られる訳もなく、したたかに右膝を打ち付け日本語では表現不可能な悲鳴をあげてしまふ。

びりびりする足で必死に踏ん張っていると、いきなり右から胸ぐらを掴まれる。

大柄のシャツ一枚の男が、目玉が飛び出そうな勢いで自分を怒鳴り始める。

どうやら、自分を部下か誰かと勘違いしているようだ。

「暗えからつて堂々とさぼってんじゃねえぞペーペーのクソガキ!」

「ちよ、ちよつと待つてくください! 私には横須賀鎮守府の者です!」

「なんだお前、提督だつて言いてえのか?」

うんうん、と2回頷いて、服をつかんで男に見せつける。

大佐の階級章を見せれば誤解は解けるだろう。

「軍服来てますし、階級も大佐です! わかつてもらえますか?」

「……シャツ掴んで何してえんだ？」

……ん？

そう思ったとき、すぐに答えは見つかった。

——天龍さんの枕にしたままだ……！

シャツ一枚で夜の海を若干にやけながら眺めている絵は、誰がどうみてもサボっているようにしか見えない。

どうりで、こうして怒られるわけだ。

「……お前、提督の軍服盗もうとしたのか？ いやしたんだろキサマア!? ああ!？」

やばい、思考がおかしな方へ向かっている……!?

そうとう頭が固い人なのか、自分に一言も言わせる間もなく、まるで今にも血が吹き出しそうな顔で怒号を飛ばしてくる。

「遊びでもしちやいけねえことぐらいわかんذار！ お前を命がけで守ってくれてる人のもんで

仕事逃げようとか脳ミソ腐ってんのかアア!？」

その守ってる人です、なんて言える雰囲気は物理的にも精神的にも存在しているわけ



もなく、

ただ「申し訳ありません！」と演技するしかなかった。

早く誰でもいいから助けてほしい。

「チツ……まあいい、この事は黙ってやる。 来い！ 俺がみっちりしごいてやる！」

「はいー！」

のつしのつしと歩き自分が出た扉から船内に戻り、当然部屋とは別の方へ向かう。

せめて自分に耐えられるしごきならいいなと願うことしか、今の状況は許してくれない

よう

だった。

## 第35話 偶然か必然か

どうしてこうなったんだ、と気を落としながら、目の前の大きな背中を追う。ダッシュで逃げるか、自分を知る他の誰かが偶然通りかかるのを待つて誤解を解くか。

いや、下手に逃げると絶対迷う……今夜だし……

策を考えては没にしていると、自分の方を向かずに話しかけてくる。

「お前、名前は」

一瞬、頭の回転が止まったような気がした。

今まで名前なんていらなと思うていたが、このような場では必要になることを忘れていた。

配属される前に、確かに仮名を交付してもらったはずだ。

「おいどうした。名前は」

「え、いやあの、すみません。人と話すのが少し苦手で……」

まさか名前がないというのを正直にいうわけにはいかないだろう。

必死に記憶を探って、短い文字列を思い出す。

「……小鳥遊。小鳥遊です」

「所属は」

「あー、えっ……と」

投げかけられた問いに、すぐに答えることができない。

提督業はそこそこやってきているものの、それ以外の仕事、ましてや輸送船の船員などしたことはない。

そもそも乗ったこと自体がほとんどないため適当なことをいうことすらできず、泣く泣く「忘れました……」ということになった。

その直後、目の前の壁が立ち止まり、こちらを振り向いて鋭い視線を向けてくる。

「ほう……そんな頭でよくこの船に乗れたな……」

声は小さいが、目でこの大男の感情がよく伝わってくる。

まだ頬をひっぱたかれた方がましだと思える威圧感に、肩を縮ませる他なかった。

時間の感覚を失ったのかとてつもなく長い間固まっていると感じ始めた頃ようやく再び前を向いて歩き始めてくれた。

「自分の仕事すら忘れる奴がここに来るな。お前みたいなのが他を殺すことになる仕事だ。単冠に戻ったら辞めて会社員にでもなつてろ」

言いたいことは分かるし正論ではあるが、そうじゃないと口出しをしたくなる。

代わりに「はい」と言い換えて送ってみるが、残念ながら気持ちには伝わらなかつたよ  
うで、ひたすら無言で歩き続けた。

もはや道順など覚えていられないほど船内を歩いていると、『食堂』とプレートがか  
かつた部屋へ男が入っていく。

真つ白な机と椅子がずらつと何列も並んでいる隣を奥に向かって進み、関係者用と思  
われる扉を開く。

「待て。こゝいつを着ろ」

その直前、顔の前にぬつと白い何かを差し出される。

「はい」と返事をして手に取り広げてみると、清潔そうな調理着だった。

言われた通りにそれを来て、今度こそ部屋の中に入る。

大型のコンロ、鍋、大量の皿、食料庫と書かれた重そうな扉が見えるここは厨房のよ  
うだ。

ガチャンガチャンと聞こえる音に混じってプラスチックの皿同士がぶつかるのも聞  
こえる。

その後ろで調理着を忌避とが数人ほど、ひっきりなしに皿を同じ場所に立て掛けてい  
る。

「よし、全員注目！」

大きく手を鳴らしながら大男がそう言うのと、厨房にいる人全員の視線が集まる。

中には不思議そうに自分の姿を見る人もいるが、それは短い間だった。

「どこの奴かは知らんが、庫の時間に外をほつつき歩いてたこの馬鹿をしばらく預かることにした。人手が足りないようならこいつを使え。いいな」

「「は、い」」

意外と多くの人がいるようで、見えているよりも多くの声が厨房中から上がる。

それを聞いた男はかつかつと食料庫とは別の奥の部屋へ向かい部屋に入ると、全員が大なり小なり視線を崩したりして場の空気が少しなごむ。

仕事を再開する人もいるが、何人かは物珍しそうに目を輝かせながらこちらへ近づいてくる。

まあ、海軍の船で規律を守らないやつは珍しいだろう。

本来は守る側の立場ではないことで泣きたくなるが、今は近づいてくる人に意識を向ける。

「運がなかったなあんだ。他の奴ならまだしもうちの料理長に見つかるなんて」

スポーツでもやっているのか、少々体つきの良い、料理長という男よりかは一回り小さい男が話しかけてきた。

「ええ……ほんと、運がなかったとしか」

実際、運がなかったただけだろう。

必然だなんて言われたら、心が折れてしまいそうだ。

「それでもない。運はあった。不幸中の幸いというやつだ」

こちらへ来ていた人の内の一人、大きさは料理長と並び、やたら筋肉質な体をした少し色が黒い男が話しかけてきた。

先ほどののはスポーツ系だったが、こちらはボディービル系といった感じだろうか。

南米やブラジル出身かと思われるその男は、無表情でこちらを見つめている。

「運があった、とは？」

「普段、部外者はここに入れない。お前は運が良い」

「……なるほど、理解しました」

「よし」

ぼん、と肩に大きな手を乗せてくる。

どう反応すればいいかわからずおろおろしかけるが、すぐに手を引つ込め笑顔を浮かべるため自分も習ってみる。

「運が良いとはいったが、決まりを破ることはよくない。この意味がわかるか」

「ええ、ちゃんと」

「よし。話が早い。お前は良いやつだ」

先ほどと同じ動作を繰り返しながら、笑顔を浮かべる男はそう言ってくれた。

言動が独特だが、悪い人ではなさそうだ。

「めずらしいなゼン。お前があっさり気に入るなんて」

「……今回の件を抜きにして、芯がしっかりしている。体も鍛えてある。見込みのある男だ」

鍛えてある、ということバに少し疑問を抱いた。

確かに武道っぽいなにかを毎日してはいたが、筋力は普通の成人男性と変わらないくらいだ。

貧弱でも強靱でもない自分の腕を見ると、ゼンという男がそれに答えるように話し始める。

「姿勢だ。常に構えを解かないのは、相当鍛えている証だ。筋力を高めることだけが鍛えることではない」

「……ゼンさんは何か格闘技でも？」

「……少し。だが、実戦向けだ」

少し茶を濁されてしまった。

実戦向けということは、どこかで戦いを経験しているのだろう。

失礼なことをしたなど自分を戒めつつ頭を下げる。

「気にしないでいい。ゼンだ」

「小田切優。いずれは提督になってハーレムを築くのが夢だ！」

一人かなり不純な心を持っているようだったが、二人が握手を求めるのでそれに応える。

「小鳥遊です。よろしく」

もうすでに自分達だけの空気が出来上がってしまったているのか、見に来ていた人たちはそれぞれの場所に戻りつつあった。

単に仕事が残っているからかもしれないが。

「……で、お前は何で捕まったんだ？」

「夜風に当たりたくて、つい外に……」

「あの人、料理長のくせに見回りまでするからな。ま、今度からは気を付けろよ」

「はい」

「仕事はどうする」

「俺たちと同じで良いんじゃないやね？ 他は十分回るだろうし。じゃ限定新人よ、床掃除だ。」

「こつち来な」

手招きされるままに小田切についていく。

ビシバシしごくというのは言葉の綾だったのだろう。



そのことにほっとしつつ、渡されたモップで床を掃除していくことにした。  
あの人にしごかれるより、こちらの方が精神的にも体力的にも楽だ。

「……………」

うるさかった天龍のいびきが消えて一時間。

同時に司令官がいなくなつてからと同じ時間も流れているわけだ。

あまりにも長過ぎやしないだろうか。

夜風に当たりたいのが本音だつたとしても、こんなにも長く当たるものでは無さそうだが。

少し探してみよう。

「ちよつとごめんね……………」

体に寄りかかっている連装砲ちゃんをおこさないようにゆつくりと横にし、音をたてないようそりそりと部屋を抜け出す。

船が揺れる音以外耳には届かず、窓の外は真つ暗で本当にそうなのかはわからない海と奥に光る人工的な灯りがぼうつとぼつと見えるだけの空間。

こういう孤独を感じられる場所は嫌いではないが、目的を果たす方を優先させる。

…………どつちに行つたんだろう。

右か左か。

一応どちらも見渡すが、同じ景色が左右対称になっただけで、求めるものではないが代わり映えしない。

勘で右を選び、道順を覚えながら外へ繋がる道を探す。

歩きづらいスリッパをペタペタ鳴らしながら進んでいく。

似たような光景ばかりで頭がくらくらしそうだ。

もしかして、前の自分もこんな感じだったのだろうか。

そうこうしている内に、近くの窓の外に通路のようなものが見えた。

仮に自分を通っている道が司令官と同じであればあそこに行くだろう。

少ししたか今戸に背伸びしながら窓に顔をつけ、おおよその位置を把握してその場所へ向かう。

多少の曲がり道があり、覚えられるか不安になりながらも、いかにも外に繋がっている、重そうな扉が視界に入る。

ドアノブの役目をしているであろう鉄の棒に手を伸ばし、ためしに回してみる。

しかし、若干ぐらぐらするだけで回る気配はない。

ググ、と軋む音が自分を嘲笑っているようだ。

こんなに固くする必要はあるのかと思いつつも、今度は両手で回してみる。

やっとゆっくり回り始め、限界まで回しきったところで内側へ引いてみるが開かない。

外に開くのかと押してみると、わずかに開く手応えがあった。

隙間から風を受けながら徐々に開いていくと、約半日ぶりの潮風を全身に受けることになった。

部屋の辛気くさい空気より、やはり自分にはこちらの方が性に合っている気がする。

……少しくらいならいいかな。

少し背伸びをしないと、板のような手すりの向こうの海が見えないため、近くにある外階段を数段昇って座る。

こうやって落ち着いて夜の海を見るのはいつぶりだろうか。

特定の考えにとらわれずに、風邪に吹かれながら何かを眺めるのは予想以上に良いものだったらしい。

ただ、こんな気持ちに浸るのはここまで。

ここにいないとなると、司令官はどこに行ったのか。

自分とは反対の方に行つたのか、船内で迷子になったのか。

あの人は迷子になるような人じゃないと思うけどな……

いろいろ可能性を模索していると、後ろ、回段ノ上から誰かが降りてくる。

「貴様誰だ！」

ドスの効いた声で話しかけられ、若干驚きつつも振り替える。

自分の二倍はあるんじゃないかというような男が、階段の上で仁王立ちをしていた。正直にいつて、威圧感の塊だ。

「……響」

「聞こえんぞ！」

面倒くさいなあ、と思いながらも、男に近づいて少し大きめの声で言い返す。

「響。艦娘だつて言ったんだ」

「艦娘……」

脳内が点になって固まっていそうな顔をしたあと、男は強張らせていた顔を緩めた。

「……ああ、申し訳ない。くらがりだったもので、よくわからなかった」

「誤解が解けたようでは何よりだよ」

この浴衣が見えないかなあと少し不思議に思ったが、無理矢理絡まれることは回避できたのでよしとしよう。

丁度良い、質問を試みよう。

「あなたはよくこの辺りを見回ってるのかい？」

「夜だけですけど、まあ」

「どこかで若い男を見なかったかい？　上がシャツで下が軍服、なんて変な格好をした。夜風に当たってってくるって言ったきり帰ってこないんだ」

「……………」

少し驚いたような顔をして、顎に手を添えて考え込むような仕草をする。

早く返事が来ないか、案外様になっっている格好をした大男を見続けること10秒くらい。

「…………たぶん、食堂の厨房で掃除をしているかと」

「…………は？」

予想外のことすぎて、つい真顔のまま聞き返してしまった。

夜風に当たりに行ったら厨房で掃除…………？　船員でもないのに…………

「名前は小鳥遊、ですよね？」

更には訳のわからない名前まででてきた。

なるほど、司令官の名前は小鳥遊というらしい。

隠すほどでもないのに、なぜ黙っていたのか。

たぶん同一人物だと思うので、ここは一つ嘘をついておく。

「そっだよ」

「…………申し訳ありません。実は私の責任でして」

挙げ句の果てにはこんな訳のわからないことを良い始めた。

司令官はいったい何をしでかしたというのか。

「……詳しく聞かせてくれないかな」

そう口に出した声は、自分でもあきれほど間拔けな声だったと思う。

## 第36話 下っ端体験

雑用を命じられて早2時間。今は変なマスクをかぶってただだつ広い冷凍庫の中を掃除している。

気温はマイナス15度と、あまり長居はしたくない場所だ。マスクをかぶっている理由としては、肺の中の水分が凍るからだそうだ。

それでも肺に入ってくる空気は結構冷たいのだが。

「おう、やってんな」

後ろから小田切の声が聞こえた。振り返ってみると、自分と同じくマスクをかぶった寒そうな青年が立っている。

「そろそろ切り上げようぜ。時間も時間だしな」

「はい」

モップや洗剤など掃除道具一式を持ち、小田切と一緒に冷凍庫を後にする。案外邪魔だったマスクを脱いで既定の場所に直し、厨房へと戻っていく。

途中でゼンとも合流し、体の違いをひしひしと隣に感じながら歩いていく。

「なあ小鳥遊」

「はい、なんででしょう」

あまり口を開かないゼンから話しかけられた。会って少ししか経っていないが、自分から話しかけるようなタイプには見えなかったので少々意外だ。

「あんた、提督じゃないだろうな」

「は？」

話しかけられてもない小田切も自分と同じ反応を返した。小田切も驚いているようだが、凶星を突かれた自分のほうがもっと驚いている。

「提督と艦娘を航路中に拾ったと風のうわさで聞いた。何となくそうなのかと思うのだが」

「いや、そんなの……あるのか？」

二人からそれぞれ違う視線を向けられる。少し困惑するが、とりあえず返事はしないといけない。

「……だとしたらどうです？」

「前々から軍人らしい歩き方だと思っていた。やはりか」

「え、なに？ 決定づけるの？ そうと決まったわけじゃないだろう？」

ゼンは察したらしいが、小田切は若干混乱しているようだ。ゼンが呆れたようにため息をつき、自分の下半身を指さした。



「見た目は似ているが服が違う。恐らく軍服だろう。なぜ上がないのかはわからないが」

「……マジ？」

「マジ、と言つて信じるかどうかはお任せします」

そう言ったきり、二人とも何も話さなくなってしまった。こちらからも何を話しかけていいのかわからないので非常に気まずい。

厨房を通り過ぎるが、自分がどうすればいいのかわからないのでとりあえずついていくことにする。

部屋が並んでいる場所まで来たところで、ようやく小田切が話しかけてくれた。

「……とりあえず、俺たちの部屋、まで行きましょう、か？」

話しかけてくれるのはありがたいが、口調も態度もいろいろとおかしくなっていた。

「いきなりどうしたんですか？」

「いやだつて……ねえ？」

小田切がゼンに助けを求めるように言うと、腕を組みなおして口を開き始めた。

「立場が違えばそれに伴つて態度を変えるのは当然のこと。俺たちは下にいるわけだから、小田切の態度も当然のこと」

「いや、まあ、そうなんでしょうけど……ん……」

「とりあえず入ろう。ここで立ち話をするよりはましだ」

そう仕切られ、ゼンに続いて『小田切』『ゼン』と書かれた部屋へ入る。

中はかなりきれいで、ベッドが部屋の奥の角に二つ、個人用と思われるスペースがある。部屋の中心には市販されているような、大きくもなく小さくもない正方形の折り畳み式の机が置いてある。

「座ってくれ」と促され、絨毯が敷かれた床に座り改めて部屋を見渡す。

ゼンのベッドはかなり物が少なく、本が数冊とトランプらしき玩具のみ。小田切のほうは整ってはいいるが物が多く、ちらほら見えるものの中には2次元3次元問わず可愛い女の子の雑誌や写真がある。

その中に中々に見過ごせないものが見えた気がして、降ろしたばかりの腰を上げて近づいてみる。

写真立てに飾られていた一番目立つ写真は、小田切の隣に見慣れた誰かが仁王立ちしていた。

「いや、あのそれは……」

「……………」

写真立てから外して裏面を見ると、『横須賀 金剛』と書かれてあった。やはり見間違いではなかったようだ。

しかし、今回写真を手に取ったのはこれだけが理由ではない。

「……海軍規定、ご存知ですよね？」

艦娘の個人情報を持してはならない。例えそれが外見のみが写った写真であろうと例外ではない。

横須賀鎮守府では定期的に一般人の人に対して見学会なるものを開いているが、原則写真、動画撮影は禁止だ。もつとも、今回の小田切の写真もそうだろうが、一部の艦娘は自らカメラを持ち写真を撮って現像、配り歩く軍規違反の塊のような者もいるが。他の所は知らないが、横須賀では契約書を書かせた上で条件付きの許可という形で撮らせている。

艦娘は、同じ艦船の魂なら全く同じ姿形をしている。身長、足のサイズからスリーサイズ、髪や瞳の色、指紋にいたるまで全てが同じだ。DNA鑑定をしても、一致率は99%以上と本人だと認識されてしまう。

軍を退役した後のことも踏まえ、艦娘の個人情報の一切は世間一般には隠されている。もつとも最近の鎮守府付近では腐りかけているが、これを暴くことは重罪だと日本では認知されているはずだが。

「ええまあ、知ってはいるんですけどね、でも金剛さん、こちらの艦娘の方から誘ってもらって、決して俺が撮ってもいいかなんて聞いてないですよ」

「ええ、わかつてますよ」

え、という顔をして自分を見る二人に、そのまま話を続ける。そんなに驚くことだろうかとも思ったが、気にしないことにした。

「私は横須賀鎮守府で育った者です。もしかしたら、あなたと会ったことがあるかもしれませんね」

そう話すと、小田切はぼかんとした顔で呆然とし始める。

その後目を白黒させ、10秒ぐらいしてようやく口を開いた。ゼンは見た目通りの沈黙を貫き自分をじっと見つめている。何を思っているのか全くわからない不思議な人だ。

「……えつと……横鎮の提督って、もうちよつと歳が上だったような……」

「ああ。多分私の父です。まあ義理のですけど」

今度は「え……？」といったまま固まってしまった。体は固まっても疑問は尽きないようで、「え？ え？ え？」と機械的に繰り返し始める。それを見かねたのか、次はゼンが話しかけてくる。

「二人いるのか、提督が」

「父兼教官ですね。私はなつたばかりです。今回こうして乗船しているのは訳ありません」

「ふむ……」

ゼンはそう呟き、目を閉じて何か考え事を始めた。

小田切が固まりゼンが動かない。誰一人話さない固い空気が部屋を満たす。流石にこのままでは自分が耐えられないので、何とか話題をそらすことにする。

「それにしても、結構艦娘の写真がありますね」

小田切の枕元には、たまに目にする人気アイドルやアニメ調のかわいい女の子の画像を現像したようなものがあるが、群を抜いて艦娘の写真が多い。

「……ちや、ちやうんです」

「別にどこかに突き出そうって訳じゃないですよ。流出さえしなければです」

「してないしてない！ そんなの絶対しないってー」

そう叫ぶ小田切の顔は、どことなく怒っているようにも見えた。この様子なら大丈夫だろう。

再び多くある艦娘の写真に目を落とす。駆逐艦から戦艦、潜水艦や補給艦などの特殊艦まで様々だ。几帳面なのか、裏面には艦娘の名前と撮ったところであろう鎮守府名がほぼ必ず記載されている。

全国各地、中にはラバウルのものまであった。一体小田切は艦娘にどんな思いがあるのだろう。

「小田切さんは、何でこんなに艦娘の写真を？」

聞くと、少し悩んだが、何かを懐かしむような顔をして話し始めてくれた。

「俺がこの仕事をしてる理由でもあるんですけどね。まだ小学校の頃だったかな……単冠湾で起きた事知ってます？」

「ええ。半壊した話ですよね」

「そうそう。その時俺は島の反対に住んでたんですけど、友達となんか鎮守府見に行こうって話になって。でその時ほんとバカで、中に忍び込んだんですよ。なんか倉庫っぽいところにいた時に襲われて……」

そこからの小田切の話は生々しかった。逃げ場もなく慌ただしくその場所に入ったりする人に隠れていると、破壊され、深海棲艦が目の前に現れた。足にしがみついていた艦娘を目の前で踏み殺され、目線が向いて殺されそうになった。

その時、一人の艦娘が深海棲艦に殴りかかった。詳しく覚えてないが、激戦だったことは覚えている。拳が文字通り砕けて血だらけになりながらも救ってくれた艦娘の姿はとて美しかった。

「……その後、普通に高校とか行っただんですけど、何かこう忘れられなくて。憧れっついうんですかね。普通の人がアイドルとかの写真を集めるみたいな感じなんですかね。仕事にしたのは、えっと……恩返しっていったらいいのかな……」

初めて話をした時には少し軽そうな印象を受けたが、中々に真面目な人のようで、小田切の人物像を改めさせられた。

「……いつも『可愛いから』とか言つてなかったか」

「おいバカ！」

やはり小田切は小田切のようだ。がっくりしてしまいそうだが、どことなく安心した気もする。

「でも、先ほどの話は本当なんですよね？」

「ええまあ。本当は鎮守府で働きたいんですけどね……」

頭を掻きながら、残念そうに小田切はうつむいた。何か声をかけてあげたいとは思つたが、最初から小田切の目指すところにいる自分がどんな言葉をかけられるだろうか。

どう話すべきかわからないでいると、部屋のドアがコンコンとノックされた。

『私だ』

外からずんぐりした、威厳のある声が聞こえてきた。それを聞いた瞬間、部屋の空気が少し張りつめる。料理長だ。

「はい、今出ます！」

小田切が先ほどまでのうなだれた状態とは一変して、俊敏にドアに向かって開いた。その間に、座っていた自分とゼンは自然と立ち上がる。

ドアを開くと、予想通り見慣れない巨体が現れた。だが、それだけではない。

「……どこで油を売ってるんだい、司令官」

後ろからひよつこりと、いつもより小さく見える響がそこにいた。どことなく不機嫌そうなのは気のせいかな。

それはともかく、どう返していいかもわからずただ呆然とするしかない。どうしてここに響がいるのだろうか。

「……どうしたんだい？」

「いや、なんでも。何してるんだ？」

「風に当たったまま何時間も帰ってこない上官を探しに来たんだ」

普段通りに話してはいるが、どこかに苛立ちを感じる。誰かに探すように言われて渋々探していたのか、はたまたここに来るまでの間に何かがあったか。理由はわからないが、ここまでぶつきらぼうに感じるといのは相当不機嫌なように感じる。

「えつと……どちら様で？」

小田切がそうつぶやくと、響は軽く料理長を押しつけて部屋に入ってきた。

「誰に見えるかい？」

「……艦娘」

困惑しながらも小田切が答えると、響は少し頬を緩ませたあと、落胆するように肩を



落とした。間違いではないのにどうということだろうか。

「響だよ。特III型駆逐艦二番艦」

「ああ、暁型の……ヴェールヌイ？」

「中々に物知りだね。私としてはうれしい限りだ」

そう言い切り、ぐつと顔を自分に向けて話し始める。途中から機嫌が良さそうに見えるのに、途端に冷たい顔になった。原因は自分にあるのかと思うと悲しくなる。

「ほら、司令官。座ってないで部屋に戻ろう」

「……そ、そうだな」

急かされるように言われ、少し急いで立ち上がる。その間に、料理長が小田切とゼンに話しかけていた。

「会話で分かっただろうが、小鳥遊は提督だ。お前ら、今までの無礼すっかり謝っとけ」

え、という顔をしたのは小田切。だが、内心自分も同じなもので無理もない。ゼンは深く息を吐いて、反省しているようにも落胆しているようにも見えるように肩を落とした。恐らく後者だとは思うが。

「……どうも、すみませんでした」

「悪かった。多数の無礼、許してほしい」

「いや……いいですよ、お二人とも」

顔を上げた二人と目が合い、珍しくゼンも同時に苦笑いした。お互い、何かと苦勞をしそうだ。

「私もすみませんでした。確認も取らずに申し訳ありません」

「いえいえ……」

出会ったときにその意識を持ってほしかつたな、などとは口が裂けても言えず。

この空気をどうしようかと思っていると、無言で響が裾を引っ張ってくるので、連れられて部屋の外に出る。状況的に脱却できるのはいいが、流石にこのままでは気まずい。

「小田切さん、ゼンさん」

料理長に睨みを聞かされている二人に声をかけると、笑顔を浮かべて自分を見る。

「お互い、頑張りましょう」

「……はい！」

「うむ」

そう答えた二人の顔を見ると、自分も少し頬が緩んだ。

## 第37話 垣間見た考え方

小田切、ゼンと別れて早数分。元の部屋に戻るべく歩いているであろう廊下は、ごうんごうん重い音が鳴り響いている。誰も話さずどうも空気が重苦しいので、前々から思っていた疑問を響に聞いてみる。

「一つ聞きたいんだが」

「何だい？」

普段のセリフはそのままに機嫌を悪くしたような口調に言葉が詰まってしまう。初めて話すタイプの人で中々に掴めない。

「……なんで響がここに居るんだ？」

少し言葉に詰まりつつも聞いてみると、響は自分のほうを見ずに口を開き始めた。

怒りを買っているように見えて、少し怖い。

「それは私が聞きたいことでもあるね。いや、知ってはいるんだけど」

「全ては私の勘違いが生んだことです。申し訳ありません」

響に続いて話し始めたのは、一切歩調を崩さない料理長だ。壁のような背中はそのま  
まに、初めて一緒に歩いた時とは口調と態度ががらりと変わった。

短時間にこれほど変わってしまったと違和感が拭いようもないが、致し方ない。

「まあ……よく似てますしね。私と似た格好をしている方も何人か見かけましたし」

「返す言葉もございません」

「思い込みが激しいのは良くないことだと、私は思うな」

「……はい」

響が料理長に追い打ちをかけるような言葉をかける。しかも不満をあまり隠さない、初めて聞くような口調だった。

「司令官はどんな風に間違われたんだい？」

しかし普段の感情をあまり見せない話し方で話しかけられ、調子を崩されるような感覚を抱きながら答える。

「えっと、外階段で夜風にあたっていたら怒鳴られたな。まあ、間違われるのも仕方ない状況だった」

「私も同じような場所だったんだけど。私を間違えるのはどうなのかな」

響が憤っている理由が何となくわかった気がした。どうやら、何か物事を決めつけがちな考えが気に入らないらしい。

自分が当てはまっているようで心が痛い。これから上手く付き合っていくのが難しくなりそうだ。

「何かを決めつけるのは仕事でも良くないと思うな。改善するべきだと私は思う」

「おい響、失礼だぞ」

「いえ、私も自覚はしているのです。善処はしているのですが、どうにも直しづらく。申し訳ありませんでした」

必要以上に責めるような響を咎めはしたが、責められる本人がそう言うのではどうしようもない。

雰囲気若干悪くなり、静かに淡々と料理長についていく。

段々と見慣れたような場所になり、自分が見つかつた場所を過ぎ、ようやく元の部屋に戻つてきた。約10分ぐらいだつただろうが、個人的にはかなり長く感じた。

「こちらです。夜も遅いですので、今夜はよくお休みになつてください。失礼します」

そう言い、何度見ても同じように歩いて料理長は去つていった。

完全に姿も足音も認識できなくなったところで、何となく響と目が合った。

「……こういう船に女性は乗つたりするのかい？」

「乗らない、こともない。私の知っている範囲でだが」

「私みたいな、見た目が子供な人も？」

「……まあ、見間違えることはあるさ」

あまり話に付き合っているといつまでたつても部屋に入れなさそうなので、短めに

切つて部屋に入ることにする。

ドアノブを捻り、手前側に引いて開ける。そしてまず最初に目に入ってきたのは、女性とは思えないようなだらしない格好で寝ている天龍の姿だった。幸いいびきはかいていないようだが、この姿を彼が見たならどう思うだろうか。

「おかえりなさい。遅かったわね〜」

そんなに広くもない部屋の奥から、ゆらゆら手を揺らしている龍田の声が聞こえてきた。規則正しい生活を心がけているという龍田がこの時間に起きていているというのは少し珍しい。

「いろいろありまして。寝付けないんですか?」

「ん〜、やつぱりソファードと寝づらくて。横になるのも落ちそうだから」

とそういつた途端、鈍い音と共に「あゝう!」と苦し気な声が聞こえてきた。近づいてみると、暁が床にうずくまって右側頭部を両手で押さえていた。

いくら体が小さいとはいえ、雷と一緒に横になれば落ちるのも無理はないだろう。

「ね〜?」

「ねー、じゃないですよ。暁、大丈夫か?」

「えう……あ……」

呼びかけに答えるようにこちらを向いた暁は涙目になっていた。自分が居ることに

気づくと、少しの間呆然とした後、目じりに溜まった涙を服の裾で拭ってそっぽを向いてしまった。

「おいおい……頭痛くないか?」

「いい、痛くないわよ!」

何だか小さい子供を相手にしているようで少し頬が緩む。しかし響の視線がこちらに向いている気がしたので、笑みを消して唇を真一文字に結ぶ。寒気がしたのは気のせい。

どうしようかと悩んでいると、部屋の隅に取っ手らしき物が見えた。近づいて開けてみると、望み通りのものがあつた。もしくはそれ以上かもしれない。

「暁。小さいけど布団と毛布があるぞ。使ったらどうだ?」

何も反応を示さずにソファに座りなおしていたが、しばらくして「……うん」と頷いた。

一人が限界の布団を敷き、その上に毛布を置いて暁に目を配る。今度は無言で頷き、布団へ入っていった。

あるだけ敷いていき、雷や電を起こしては布団へ導く。どちらも寝ぼけ眼で返事をし、布団へ入るとすぐさま眠っていった。学校のキャンプや何かの宿泊のようだ。経験したことはないのだが。

天龍も起こそうと努力はするが、一向に起きない。仕方ないので布団の上までごろごろ転がして、その上に毛布を掛けることにした。女性にすることではないとわかってはいるが、これ以外の方法が思いつかなかつた。

「龍田さんもどうぞで」

「……………んん？　そうね……………ふあ……………」

龍田も相当疲れているようで、珍しく口を開いてあくびをしながら布団へ潜っていき、ものの数秒で眠りに入ってしまった。ありがとうございます、と胸中で呟き、島風に勧めてみる。

「島風、座ったままじゃ寝にくいだろ？」

「……………」

無言のまま何も反応を示すことなく布団へ潜る。相変わらず何を考えているのかわからない不思議な子だ。

胸中で苦笑いしながら、最後に響に勧めようとしたところで言葉が止まってしまった。

「使いなよ、司令官」

残りの布団が一つしかない。確かに人数は多かったが、もう一枚ぐらいあってもいいじゃないかと思うのはおかしくないと思いたい。響に使えと言われはしたが、流石にす



んなり受け入れるわけにはいかない。

「いや、響が使うといい。私は必要ないよ」

「……私は暁と二人で寝るさ。司令官が体を壊したらだめじゃないか」

言いは分はごもつともだが、浴衣一枚などという薄い服の子をそこらへんで寝かせるのは良心が許してくれない。二人で寝ると言っても、いくら体が小さいとはいえ二人同時には少々無理なサイズだ。どちらかがはみ出るか、または両方が半分ずつはみ出るようになるだろう。現に天龍や龍田も若干足がはみ出ており、響もそれはわかつてるはずだ。

「……………」

お互い何も言えずただただ時間が過ぎ去っていく。どうしようかと思っていると、響と同時に大きなあくびをかましてしまう。早く寝かせて自分も寝たいところだ。

「……狭いけど一緒に寝るかい？」

「いやいや……しようとしても無理じゃないか？」

なんともキツイ一言をいただいた。一緒に寝るなんて着任したての吹雪としかしたことがない。むしろ、だ。

「それにその……嫌じゃないか？」

「譲らないならこうするしかないだろう？」 嫌だなんて感情は関係ない。もしさせたい

なら命令すればいいじゃないか。私は逆らわないさ」

「命令どうこうって話じゃなくてな……」

自分は倫理観だとか、女として男と一緒に寝ることがどうという話を聞いたはずなのだが、予想内ではあつたがかなり外れかけた返答をもらった。生粋の軍人ともなるとこういった考えに寄つてしまうのだろうか。

「……ふう。響、布団で寝ろ。命令だ」

なら今回はその考えに従うとしよう。今後物事の考え方を変えていく必要があるなと強く胸に刻んでおく。

「了解」

間髪入れず響が自分の言葉に返し、布団に入りすぐに目を閉じた。こんな軍の上官と部下のような関係は望んでないが、今のところは我慢するとしよう。

部屋の隅に移動して、膝を抱えて横になる。体にかけるものがないと少しつらいことを今身をもって知った。やはり無理やりにも響を布団で寝かせたのは正解だ。自分は軍服を着てこれなのだから、薄い浴衣ならなおさらだ。

「司令官」

「なんだ？」

目を閉じたはずの響から声が聞こえてきた。流石にこの短時間では眠りにつくのは

難しいか。

「役得、とは思わなかったのかい？」

「……何が言いたいんだ？」

「……やはり私には女としての魅力がないのかな」

普段の生活を送っていたならおかしな人だと思っただろうが。日野の存在を知った今ではその言葉の意味が理解できた。どう言葉を返すべきか最適解は見いだせないが、できるだけの返答はしよう。

「そういうことじゃない。ただ……」

「ただ？」

「……。そういう風な関係は、私は望んでない」

「……嘘のように聞こえるけど、司令官のことだ。信じるさ」

「ありがとう」

今の自分にはこれが精一杯だった。うまく響の中で解釈してくれていることを祈って、今日はもう寝るとしよう。

皆に会うのが楽しみだ。